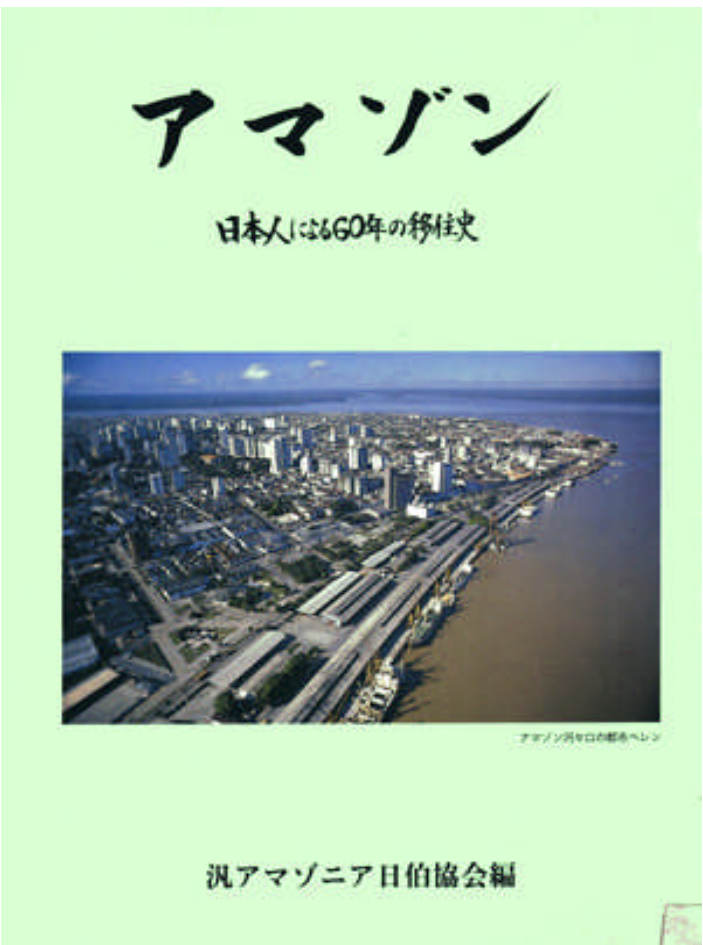


アマゾン

日本人による60年の移住史

アマゾンニア日伯協会編



表紙はベレン埠頭

目次

第 1 部

表紙題字・渡辺悦子

グラビア

特集・あの頃の思い出

戦後の農業移住者と接木トマト……………	北川勲	1 2
失敗だったグアマ植民地……………	井上勝	2 1
入植当時の思い出……………	大江牧夫	2 6
私と南拓……………	真根井孝門	3 3
エステーボ島の青春……………	安井宇宙	3 6
一九五二年の大洪水……………	原田清子	4 7
南拓入植一回生の私……………	加藤武	5 5
私の家族たち……………	橋口静代	5 8
インドより移植されたシュート……………	辻小平	6 3
狩猟に生き甲斐を求めていた私……………	藤橋隆也	7 4
アマゾン・カントリークラブ		
その生い立ちと現況……………	北島義弘	7 9

折紙と私……………	山極徳太郎	83
あの頃のマスコミ人……………	五艘晋	87
野球大会のこと……………	本田利秋	92
あの日、あの頃、平賀練吉夫妻……………	渡田利秋	97
あの人、この人……………	本木健一郎	100
掘り体験記……………	高野繁広	113
胡椒の黄金時代……………	押切正三	121

アマゾンの日本人移住前史……………	堤剛夫	125
汎アマゾン日伯協会創立の頃……………	丸岡義夫	138
アマゾン日伯援護協会略史……………	大嶽一	145

第 二 部

グラビア特集 (撮影・近岡ミゲール)

そして六十年の歳月が流れた	
グラビア・六十年祭々典の記録	157
六十年祭々典までの想い出……………	佐藤平治

祝辞

外務大臣：・・・・・・・・中山 太郎

31

国際協力事業団総裁：・・・・・・・・柳谷 謙介

ブラジル日本国大使館特命全権大使・賀陽 治憲 45

在ベレン日本国総領事：・・・・・・・・大川 忠治

JICAベレン事務所長：・・・・・・・・上園 義房

アマゾンア協会名誉会長：・・・・・・・・中西 健次

アマゾンア協会会長：・・・・・・・・川口 勲

アマゾンア協会副会長：・・・・・・・・田中 竜夫

アマゾン地域各州における邦人移住地の現況

ロライマ州編 161

パラ州編 171

ベレン市内 171

コツケイロ移住地 176

タパナン移住地 178

アナニンデウア移住地 182

ベネピーデスとモエマ移住地 184

サンタ・イザベル、サント・アントニオ移住地 186

カスタニヤール移住地 191

グアマー植民地 197

アバエテツバ移住地 199

アカラ移住地	200
イガラツペアスー移住地	203
サンタ・マリア移住地	205
ノーバ・チンポテウア移住地	
カピタン・ポツソ移住地	
カバネマ移住地	
トメアスー移住地	214
第二トメアスー移住地	
サンタレン移住地	233
モンテアレグレ移住地	239
アルタミーラ移住地	245
ロンドニア州編	252
トレーゼ・デ・セッテンプロ移住地	
アリケメスとジー・パラナ移住地	
マラニョン州編	261
サンルイス周辺の移住地	265
その他の地域	
ピアウイ州編アマパー州編	270
アクレ州編	283
アマゾナス州編	299

マナウス市周辺の移住地	299
ベラビスタ移住地	306
エフィゼニオ・デ・サーレス移住地	309
カシヨエイラ・グランデ移住地	312
アマゾン河上流・中流地域	313

第三部

グラビア特集（撮影・近岡ミゲール）	340
-------------------	-----

アマゾンとは

夜明け・アマゾン河・アマゾン河流域・アマゾンの人々・ 動物たちと植物・アマゾンの研究・先住者たち・鉱物資源・ アマゾンの日本人	
---	--

特集・アマゾンの未来

アマゾン農業を反省して	佐藤清美	343
変貌	仁科雅夫	351
出稼ぎ体験から覗いた日本の現状とアマゾンの将来性		
	草刈幸也	361
今世紀末に胡椒の大相場が到来する	瀬古興平	364

出稼ぎによって救われた私……………	安藤 純	391
アマゾン奥地からの視点……………	橋口 和正	393
その環境と文化……………	小川 芳男	401
アマゾンとは……………		409

編集後記座談会……………	五艘 晋 堤 剛太	461
--------------	-----------	-----

結びの辞……………	林 丈一	467
-----------	------	-----

(付)アマゾンの日本人移住六十年史

471

グラビア

そして六十年の歳月が流れた



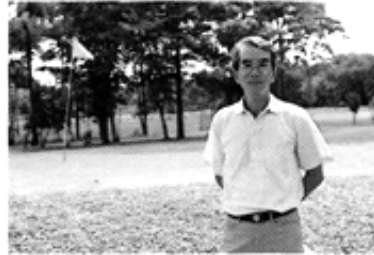
汎アマゾン日伯協会林 丈一会长



アマゾン病院・生田勇治院长



アルマンド・沢田弁護士



アマゾンカントリー北島会长



ガソリンポスト経営山家代表



佐々木真会计士



長島ジュリア法務官



援護協会・岡元 明弘会長



大学教授・滝田勝仁



稲垣 ビン子歯科医



商 業・山本 陽三



町田 嘉三空手六段



小山 次男弁護士





企業家・清水 恒孝社長



日系商工会議所山田会頭



パイロット堤アウグスチニオ



太陽クラブ・武田 司平代表



検査士・小山 エウザ



造園業・山中 正二



電気修理・富岡 一也



不動産業・高野 武広



生花・酒井 豊華師匠



電話公社技師・草苺 誠



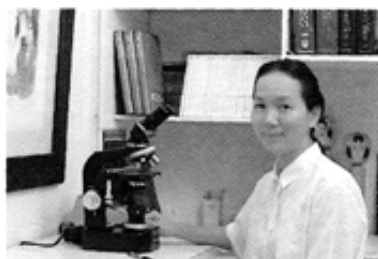
大蔵省・大橋 パウデマール



州々議員・永野 テオドロ



日本舞踊・花柳龍駒師匠



細胞診・堤 美穂子



アマゾン開発庁・山ノ内アレシャンドレ



琴の会グループ



産婦人科医・伊東 澄男



歌手新海 パウロ



日伯援護協会役員



水産加工業・早川 鉄三



建築技師・辻 アダモ



ミス・コロニアバラー立岩タチアナ



汎アマゾン日伯協会役員



茶道の会



前・州商工鉱局長・山田フェルナンド



画家・安井 宇宙



医師・小笠原 ヨシエ



カメラマン・近岡 ミゲール



商社員・瀬古 興平



レストラン業・筒井 茂利



大学教授・小林 カメリーナ

戦後の農業移住者と接木トマト

アルタミラ郡在住

北川 勲



北川 勲さん

♪ベレン・ベレンと移民は進む

ベレンいよいか住みよいか

誰かが冗談に歌ったように、一九五〇年後半にアマゾン奥地の殖民地を脱耕した、戦後に日本から移住して来た農業移住者が、首都ベレンを目指して続々と押し寄せた時代があった。

理由はいろいろとあったであろうが、アマゾンに移住して来た夢が、最初の入植地で無残に破れ絶望の中で生きながらためにとった必死の行動であったことは間違いない。わずかな

携行資金に沢山の子供を抱えた、家長たちの悲壮な決意が思い出されてくる。

しかも、目指すベレンに確たるあてがあるわけではなかった。

ただベレンは、大きな都会でその近郊には野菜作りの日本人たちが住んでいる、その人達のところまでたどり着けば！
こんなはかない願いに縋てを賭けていたのである。

その頃、広いベレン近郊には戦前のトメアス移住地からの脱耕者たちが数十戸点在していて、胡椒栽培でトメアスに劣らない収入をあげていた。

その人達は「同病相憐れむ」の気持ちから戦後移住者たちの脱耕者を拾って、よく面倒を見てくれていたので、その周辺には自然に多数の日本人が住み着いて行った。

ベレンを目指してたどり着いた人達は、これらの先住者の中から同じ船で海を渡ってきた同船者や同県人とか、或るいは知己を頼るしかなかったのである。

先住者と云っても、やつと落ち着いたばかりで、他人の世話など出来る身分でない人達ばかりであったが、この場合は頼る方も頼られる方も真剣であった。

みんなで相談し、奔走して何とか落ち着く場所を作り合っていた。こうしてコッケイロからサントイザベル・カスターニャール・カバネマに至るブラガンサ道路沿線の日本人は倍になり、三倍になり十倍にもなり、至るところで日本人の姿

が見られるようになって来た。

しかし、この戦後移住者たちの懐は一樣に淋しく、ドンダリの背比べであつた。

時計を売り自転車を売り、ミシンまで換金して、土地を求め又は生計費の足しにしたものが多かつたのである。

そして一日も早く野菜を植えて生活費を稼がねばならなかつた。

アマゾンでは、玉葱と馬鈴薯以外の野菜は、みな出来たので日本から持ってきていた種子は役立つた。

ただ、トマトと茄子は初めは順調に育つが、身が太る頃から青枯病に侵され全滅するのであつた。

青枯病はベレン近郊全域に存在していて、トマトの栽培を拒んでいた。ただ、原始林を伐採して山焼きが完全だつたところに雨期を待つて、トマトを植えると青枯病にかからず収穫出来ることがあつて、ベレンの市場に姿を見せるトマトは、この原始林トマトで量も少なく、期間も短かつたが価格は牛肉と同値だと云われていた。

ところが不思議かつ幸運なことにちょうどこの頃、接木で青枯病を免れる栽培法が出現し、急速に日本人の間に広がりだし、この頃にベレン近郊に奥地から出てきた人達は最初からトマトを栽培することが出来たのである。

アマゾンには、ジュルベーパーバと呼ばれる一群の茄子科植物が自生している。幹・茎の裏表ともに鋭い刺が生えていて、住

民が嫌う植物であつたが青枯病には完全免疫であつた。

この中のジュアと呼ばれるやや小型で茄子に似た葉をした品種がトマトの砧木に適していた。

成木になると房状の白い花が咲き、熟れると小指の先ほどの真つ赤になる実がついた。

この種子を蒔いて苗を育て、畑に定植して砧木とし、別に養成したトマトの先端を接ぐのである。

赤道直下の烈日高温の日中に接ぐことは出来ないので、涼しくなった夕方から始めランプを灯した夜間作業となり、蚊の襲撃に悩まされながら、徹夜することもあつた。我々は現地の住民を雇って労力を補つたが、このトマトの接木作業だけは家族で行い現地の労働者に接がせたと云う話は聞いたことがなかった。

その位、神聖で厳肅と云つても良いほど緊張の作業であつた。

刃物を使うものも、糸で縛る者も一心同体となつて、一本一本を神に祈るつもりで接いで行つた。

翌朝になると、トマトは一行に不動の姿勢で立っているが、太陽が昇り気温が上がってくると、次第に萎れて頭を下げていき、しまいには哀れにも曲がり始めてしまう。我々はこれを「最敬礼した」と称してガツカリしたものである。

翌朝、畑をみると夜の間に水気を吸つたトマトは、元氣を取りもどし中にはチャンと立っているものもある。

「やれやれ助かった。」と喜ぶと日中になると又「最敬礼」してしまふ。こんな一喜一憂の日々を経過して殆どのトマトは立ち上がってくる。その時の嬉しさは筆舌に尽くせないものであつた。

接木が活着してトマトの成長が始まると忙しくなる。支柱を立てて縛らねばならない。頭をチョン切られたジュアは怒つて一斉に芽を吹いてくる、これを除かないとトマトは育たない、接木部が太つてくると、時機を失せず縛つた糸を取り除かないと皮に食い込んでしまふ。

毎週必ず薬剤散布をして病虫害を防ぎ、肥料を施し、除草し、剪定して通風を良くする、乾季は灌水し、雨季は排水をする。一方では、新しい畑を開墾し苗を育て植えて、接木をせねばならない。

かくして年中無休、日曜も祭日もない忙しい野菜作りの生活が始まつていくのである。トマトに限らず何の野菜でも同じことであるが、一度この生活に入つてしまふとなかなか脱出することが出来なくなってくる。

自転車操業と云う言葉があるが、野菜作りは全くの自転車操業であつた。自転車操業でも、これが日本であれば冬が来て、否応なしに休むことになるが、アマゾンでは冬が来ないので休む機会がないのである。

生活に少しゆとりの出来た者でも、戦前移住者の豊かな生活をみて早く追い付かねばと、これまた休むわけにはいかな

いのであった。

こうして戦後の移住者たちは農繁期が何年も続くような過酷とも云える生活を、自ら作り上げてしまい遂には悲鳴をあげてしまうのである。

トマトが牛肉と同値だと云う話は聞いていたが、我々にとっては神話にすぎなかった。

大勢の日本人移住者たちが、接木栽培を始めたのでトマトの量は次第に増加して、遂には市場の野菜売りの台はトマトで赤く彩られるようになって来た。

当然、値段は下がりだし消費は伸びて行った。すべての野菜も同様に、戦後移住者たちが大勢で生産するので値はさがり消費は急増して来た。

いままで野菜を食べなかった一般市民が食べ出すようになり、市民の食生活を豊かにし、栄養を改善させてきたのは、戦後移住者たちの功績と思う。

ベレン近郊に流入して来た我々は野菜栽培によって一応救われ、自分の土地を持つ自作農となりアマゾン移住の第一目的は達したのであるが、この生活を一年二年と続けているうちに、野菜作りは忙しいわりに収入の上がない仕事で、この暑い熱帯では到底長続きしない職業であることを体験的に悟ってくる。

そして永年作物である胡椒栽培を皆夢見ていた。野菜を作りつつも畑の一角には胡椒樹を植えて何時かは胡椒園に転換

する気構えでいたのである。

こうして野菜栽培に見切りをつけ胡椒の増植、または他の例えば養鶏などへ力を入れ始めた。

こうした我々の方向転換を大いに助けたのはブラジル銀行の農業融資であった。

繰り返して述べるが、ベレン近郊に住む日本人は、その殆どが日本政府の出先機関によってアマゾン各地に造成され、導入された各植民地からの脱耕者であった。

日本式に云えば脱走者である。

その脱走者が沢山集まって同類の戦前移住者たちの指導で、案外立派な仕事をするようになったとしても、政府の出先機関はこれを誉めたり資金的援助などすることは、脱耕奨励につながる恐れがあるのでためらわれたものと思う。

この時、ブラジル銀行は脱耕云々は関係なく、融資を受ける資格さえ整えば、検査員がその農場を実地検分し、合格となれば必要資金を融資してくれたのである。脱耕で後ろ盾を失って、心細い我々に思いがけない沢山の資金を安い金利で長期間貸してもらい「外国人の我々に、どうしてこんなに気前よく貸してくれるのだらう。」と不思議に思ったものである。

こうして野菜作りの方向転換は徐々に進みつつあった。この時その転進に一層拍車をかけることが起きた。それは政府が新首都ブラジリアと並行して建設中であったベレン・ブラ

ジリア国道が開通したことであつた。それまでベレンと南伯との交通輸送手段は飛行機と汽船しかなく不便ではあつたが、それなりに安定していたベレンの経済はこの開通によつて大変化を起こすのであるが、それはさておき、野菜作りの日本人の受けた衝撃は大きかつた。

その頃、ベレンの農産物市場は濁流漂うアマゾン河の岸壁上にあつて陸路と水路から運ばれてくる農産物は総てここで取引されていた。卸売りと小売りを兼ねた存在であつた。各地の日本人生産者が皆ここに集まるので、毎朝日本人が溢れるほどいて商売の他に、社交や情報交換の場にもなつていた。

この市場に突然サンパウロ産の野菜が姿を現したのである。それは眼を見張るほど立派な品であつた。トマトと云えば接木トマトにも時には巨きくて色艶見事な実が出来るが、サンパウロ産のトマトは全部がそれであつた。甘藍ではアマゾン産はぶかぶかの葉を被つた軽い球であつたが、サンパウロ産は外葉一枚めくるとピカピカ光る堅い球で目方はアマゾン産の倍もあつた。品質でも量でも到底太刀打ち出来る相手ではなかつた。

この話を聞いて納得出来ず真偽を確かめに田舎から出てきた頑固者も一見して事態を了解せざるを得なかつた。「これは大変」と打ちのめされて帰り、事業轉換に一層馬力をかけるほかなかつたのである。一九六〇年代後半の野菜作りは市

場を南伯産に奪われながら、胡椒へまたは養鶏その他の途へと必死に転進を計った時代であつた。

沢山の種類の野菜の中には、葉物のように現地産の方が有利なものもあつてサンパウロ産と共存しているものもあつたが、トマトの場合は適地大栽培で生産された南伯産に、接木トマトが対抗出来るはずがなく次第に姿を消してゆき、遂に消滅してしまつたのである。

いまや、ジュアを砧木にしたトマトを栽培する人は一人もいないのみか、今後も現れることはないであろう。けれどもかつての日、日本から未知の国にやつて来てトマトの接木に一家の浮沈をかけた数年の苦闘と、それによつて今日を得た事実を、私達戦後移住者は決して忘れないであろう。

接木トマトよ！　有難う！

失敗だったグアマ植民地

カスタンニャール郡在住

井上 勝



井上 勝さん

三〇年も昔のことで、働きざかりを移住に賭け、アマゾン河の支流になるグアマ河の河岸に出来たグアマ植民地に送られていく移住船「ぶらじる丸」の船内生活から想い出を綴っていたい。

石の上にも三年と云うが、湿地帯農業を手がかりの開拓に盲進した頃のことを充分に表現出来ないので、百五十世帯も送り出された大植民地が何故失敗に終わったのか、その原因を書いてみたい。

家内はグアマ植民地の募集条件が最高だからそれ行こうと先発隊の婦人旗手のつもりでいた。

日本では七反百姓であった者が二十五町歩の地主になれば、立地条件を利用すれば大百姓を営むことも出来るし、必要な営農資金も二十人分を携行しているので成功の見通したがわずと考えている家内であった。

「始めから寺を取る坊主はいない」の諺の通り、私は大財閥とか大地主になれるとは思っていない。

立地条件が良好であれば人の心も物も豊かになれ、理想郷を建設することも出来る。

郷土では後継者たちが私からの吉報を待っている、十分に調査しつつ一年かけて試金石の役を果たして呼び寄せれば集団でやってくるだろう。

船内生活での同志達は座談会を開いて営農の計画を立てたりしている。

日本一の米作りで有名な氏はグアマ河が肥料を運んでくるので無肥料で稲作が栄えることは、天の恵みだと云っている。

三ヶ月間で自然の水田となり雑草も害虫も根絶するし、その面積も広大なので世界一の米作りになれると話している。乳牛を飼っていた経験者は常夏の国だから、年中緑草が繁っているので乾草づくりやサイロの必要がないからよいと述べている。

果樹の経験があるものは、狭い土地では主要食糧づくりに面積をとられて作られないが移住地では充分に植えつけたいと話している。

元県会議員は、移住地と消費都市との交通開発を唱えていた。

元町長・公務員・警察官・大工鍛冶屋だった者がグアマ植

民地を望んでやって来たのは、素晴らしい植民地になる可能性に惚れたからである。

「グアマへ、グアマへと心が急ぐグアマはいよいよか、住みよいか」麦と兵隊の替え歌が流れてくる。

清々と流れるアマゾン河は中支の揚子江に似ていた。遂に上陸ブラジルの土を踏んだ。

移住者たちは板囲いの收容所に入りスクールをさける、その後にはガマ蛙が鳴いていた。

そのあと、耕地割りも住宅も建っていないことを知り、自分のあいだ臭い板の間で住むのだと聞いてたちまち動揺し女子供も騒ぎだした。

すでに先に来ていた第一次入植者たちは河の畔に足高の家を建てて住んでいる。濁水の中で洗濯をしている。

第二次入植の人達も河畔の仮舎に住んでいる。その人達に「耕地の奥の高台に住家を建てていますか？」と聞けば「奥に行くほど河底が低いのです。今いるところが一番河底が高いのですよ、だから脱耕者が絶えません」の話を聞いて「それは詐欺だ、しまった。」

到着早々の騒ぎに海協連（注：海外協会連合会の略称で海外移住の募集・選考・輸送などをしていた政府の外郭団体）から宣撫に来たが、耕地が水に浸る低湿地ばかりとは偽りにも程がある。

いくら怒っても泣いても日本には送り返してくれない。詐欺にかかった己の愚かさに泣いた。そして家族の者を慰めるのに精一杯であつた。一旦送り込んだ移住者の運命は袋の中のねずみに等しい。自分たちを人質とした主は湿地帯である。

泥水をすすり、手足を泥に汚しての生活が始まるのであつた。

餓死をさせないように食糧の配給があり何もせずじつと逃げ出すことを考えていた者も確かにいた。

日本金十萬円の営農資金を月一萬円ずつしか引き出せないので、その資金で脱耕するとしても一年先の話である。

自分は逃げ出せないように金の鎖でつながれていた。それは二十人分の営農資金であつた。

伐採されたところは焼けていない、隣のひとは石油を二十缶もぶっかけて寄焼きと整地を始めたのが米作地であるが計算なしの整地は雨季の増水に追いかけられているからであつた。

来年度の飯米は自分で作るべしの指示にしたがつて、大木が横倒しになっている間に伸びた稲の苗を原始的な方法で一日一人二畝位肩まで水中に入れて植えていく、これが米作移住の初歩とは情けなかつた。

出来ばえは倒伏するほどであるのに、二年目は雑草に埋まつてしまい鼠と小鳥の餌になつていった。

収穫は穂済みをする、集めて棒で叩いて落とし、吹いてくる風で選別していった。これでは稲作の保有量だけで営農にはならぬことを悟った。

グアマ河の増水は耕地に浸水し作物を枯らし、表土は流失して赤土壌が露出していった。

グアマ河は恐ろしい、移住者たちを呑んで行った、年々墓標が増えていく、遺族の嘆きは脱耕につながる。

河運の交通路が絶対に必要になって来る、但し小舟での往来は決死であつた、私も何度か遭難して死線を越えた体験があつた。

グアマ河を制しなければ、グアマ植民地は制されない。わが営農資金で機械船を購入し、二百家族になろうとしている移住者たちの足を持つとうとして同志をつのり船は見つけて来ても、その資金は海協連に凍結されているのである。

政治屋経験の出番となり、貨客運賃に困っていた船主からの貸与交渉が始まった。

安定はよくないが四噸積みの機械船の貸与が決まり、グアマ植民地からベレン港までの航行が始まった。

私の推測ではあるが、海協連が私の資金を流用しているようにしか思えなかった。

早く出してくれと頼んでも出してくれずに、しばらくして郷土の開拓課長よりの公文書で「移住者としての節度を保ち、云々」によるお叱りであつた。

以後、請求は止めて湿地帯農業の試作研究を続け、ゴム二千本・カカオ四千本・ウルク九千本を植付け、その肥培管理に務めグアマ植民地のモデル農場として見学者や視察団の来訪者が見え始めた。その当時がグアマ植民地の最盛期であったと思う。

適地適策であつたキャベツは乾季作であつたがそれぞれの生活を支え、脱耕資金となつて行つた。

入植当時の思い出

グアマ植民地在住

大江 牧 夫

とにかく若かつた。

移住と云う重苦しい雰囲気にはほど遠く、他の県に行くような気持ちだった。



失敗したっていいじゃないか、まだ若いんだからやり直せ

ばいいんだからと云う安易な若さがあつた。

仕事に対しても人から使われると云うことに、何だか反駁がありどうせ生きるなら自分の力を試してみようと云う自由があり、良く云えば海外飛躍が移住と云う形をとつたのかも知れない。

入植したところはグアマ河岸にある植民地、朝夕河を眺め新婚ホヤホヤの五組がずらーと並んで入った。

私達五組は、日本出発二ヶ月前に当時の安孫子山形県知事ご夫妻の媒酌により、山形新聞・山形放送局の鐘や太鼓の鳴り物入りでブラジル移住合同結婚式と云う、当時の移住に対する啓蒙運動の一つとして宣伝を務めたことで結婚費用は安くあがつてしまった。

ブラジルに来て、見るもの聞くもの食べるもの、すべてが珍しく学生時代に生物学教室に入っていたので、アマゾンに於ける動植物の生態をみるにつけ胸の踊る楽しさがあつた。そんな訳で入植時にも郷愁の念にかられたなどと云うことは一度もなかった。

上陸して本当ならすぐ自分の耕地に入るべきところだろうが、募集要項と話が違い、耕地が出来てなく家も建っていない、やむ得ず二ヶ月程共同生活をした。

最初に出された食事たるや何処から持ってきたか知らないが、強烈な臭みのある干し肉であつた。ほとんどの人が食べられなかった。

共同生活中に共同で道作り、橋作りそして伐採までやった。

予定の耕地の伐採が終わったのでくじ引きで耕地を決め、本当の入植をしたが家がない。

私の耕地には先住ブラジル人の残していった家とは云えな
いが、それに近い掘っ立て小屋があつたのでそれに入ること
にした。

みんなは先ず家作りからと密林に入り、まっすぐの良いと
思つて運び出してくる材木は半年とは持たない代物ばかり。

無理もない初めてみるアマゾンの原始林、どれがよいか分
かるはずがない。傑作だつたのはアサイ（椰子科の植物）の
幹を屋根の長さに切り、幹を半分に割つて芯をとり、それを
裏表に組み合わせて屋根をふいた作品があつた。

原住民の多くの家を見ているがあゝの屋根だけは始めて、さ
すが日本人の目のつけ所が違ふと感心していたら一年もた
なかつた。

耕地は乾季はよいが雨季ともなると水浸し、ところによつ
ては大きな沼が出来てしまう。なにしろ海拔〇メートル、大
潮ともなれば河からの流水でまったく海に変貌。

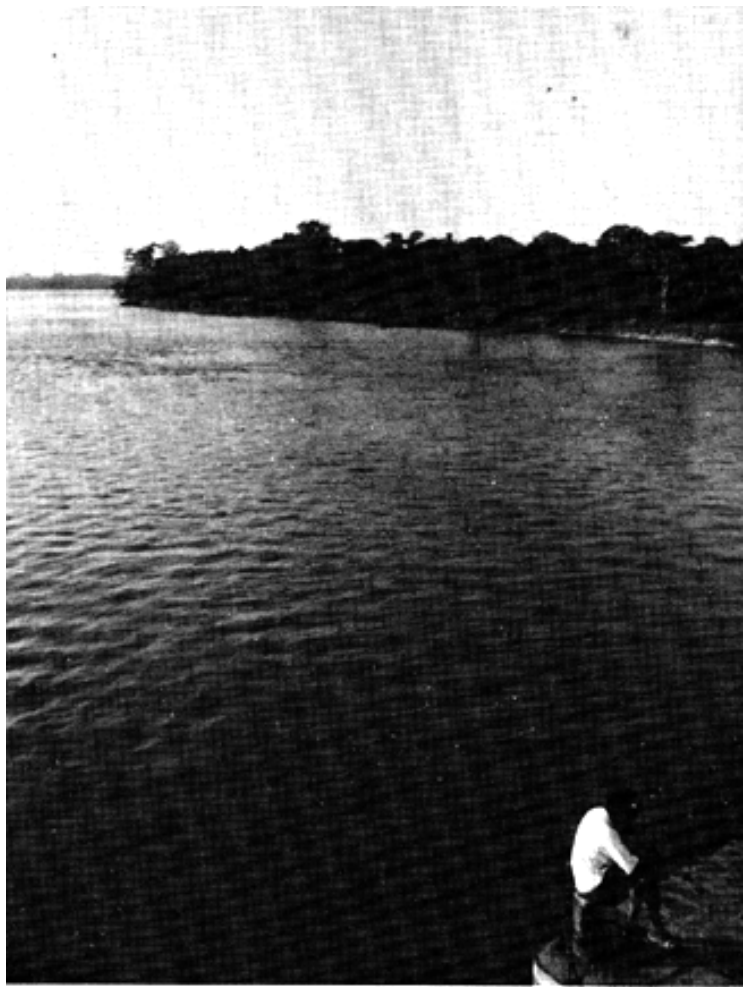
朝起きたら土間に置いてた草履や下駄がない、良く見ると
遠くの方に散らばっている。夜中に上つてきた潮が運んでし
まっている。

たまには蛇まで潮は運んでくる、いい休み場所と思つてか

入口にトグロを巻いている。上げ潮の時間は分かっているの
で鉄砲に弾をつめて待っている。

最初は家の周りが整地されてなかったのでよく蛇の来訪が
あった。

私の掘っ立て小屋は屋根が板葺きだったので蛇も住み心地
がよかったのか、屋根からの来訪も時々あった。それには鉄
砲が一番よくどんな奴でも首がとんでしまう。



川岸に広がっていたグアマー移住地

一、二年と経つうちにこれでは駄目だと脱耕者が相次いだ。
入植してから来た日本政府の移住地調査団、そして米作不
適地の発言、棄民扱いされた移住者たちは動揺し脱耕に拍車
をかけた。

夜中に隣近所にも知らせず単独で帆船を雇い、潮の流れを

利用しての脱出、本当の夜逃げである。

IN C R A（農地改革院）も夜通し監視人を置いてたよ
うだが何せ広い河幅で、そう簡単に見つかるはずがない。と
うとうIN C R Aよりパスポートを没収されると云う事件ま
で発展した。

特に想い出深いと云えば、入植者達の心のすさんだ時期
だった。

出ていく者は出ていき、七十家族だったベルナンブーコ地
区は十二家族となり、その多くが四〇代や五〇代で満州から
の引揚者が多かった。

思い通りにならない営農と人生の焦りもあったのだろう、
寄合いがあればピンガを飲み、必ず喧嘩があつた。これが実
社会かとびつくりした。

これら勇壮で元気の良かった人達は、みんな第三の移住地
に入植するためにいってしまった。

いまは彼等先輩の霊に対し安らかに眠れと祈るのみ。

祝辞

外務大臣

中山 太郎

国際協力事業団総裁

柳谷 謙介

在ブラジル日本国大使館特命全権大使 賀陽 治憲

在ベレン日本国総領事

大川 忠治

JICAベレン事務所長

上園 義房

アマゾンニア協会名誉会長

中西 健次

アマゾンニア協会会長

川口 勲

アマゾンニア協会副会長

田中 竜太

アマゾン日本人移住六〇周年記念誌発刊に寄せて

アマゾン日本人移住六〇周年に当たり、記念事業の一つとして「アマゾン日本人移住六〇年史」が第刊の運びとなりました。

先人の足跡を記録にとどめ、これを後世に伝える上で誠に意義深い事業であり、慶賀に堪えません。

一九二九年九月、四三家族一八九名の方々が入植されて以来移住者の方々は、幾多の困難を乗り越え、原始林を拓き、新作物を導入定着させ、アマゾン地域に新たな産業を開き、地域産業の振興と経済の発展に大きく貢献してこられて

した。

そして、今日では、ブラジル国の良き市民としてしつかりと社会に根を下し、日本人への信頼と声価を高めているばかりでなく、日本とブラジルの友好親善の絆となっておられることに対し、心から敬意を表するものであります。

近年、地域規模の環境破壊がさまざまな視点から議論されており、アマゾン川流域の農業開発と森林保全の関係も世界の注目を集めております。入植以来、移住者の皆様が、熱帯雨林地帯における、より合理的な農業の形成を目指し努力された結果、カカオ、ゴム、オイルパーム等を基幹作物とした森林形態を待つ環境保全的農業が確立され、経済的にも安定しつつありますことは喜ばしい限りであります。

こうした成果は、自然環境と調和のとれた農業の実践者としてアマゾン地域で先駆的な役割を果たしておられる皆様の努力の賜であると同時に、われわれ人類にとってかけがえない自然環境の維持に対する骨組と高く評価されるものであります。

地球環境の保全は、これからの国際社会が解決していかねばならない最重要課題のひとつであり、移住者の皆様のこの面におけるより一層のご努力をお願いし、記念誌発行に寄せる言葉といたします。

国際協力事業団

総 裁 柳 谷 謙 介

私と南拓

ベレン在住

真根井 孝門（たかと）

私がベレン市の南拓、正確にはコンパニヤ・ニッポニカ・デ・プランタソン・デ・ブラジルに赴任して来たのは一九三七年九月末であつた。



真根井孝門氏

神戸港から西廻りで七月初旬に出港四十三日を費やしてリオ・デ・ジャネイロ着、入国手続きに一週間ほど手間取りブラジル船イタキセ号に乗換え、さらに二週間を費やして九月末にベレン市に到着した。

南拓移民は前年に打ち切られており、南拓関係渡航者のしんがりであつた。

トメアスーに南拓移民が入植したのは一九二九年からだ
が、その前の年に星野修氏などの先発隊が測量・耕地割りな
どの仕事を始めていた。

会社の最初の農業方針はカカオ栽培であつたが色々の事情

でそれをやめたので、必然的に事業縮小となった。

植民事業には膨大な経費がかかるので何とかせねばと云うので商事面に力を入れざるを得なかった。

トメアスーから毎週四百キロから多い時には六百キロ位の白米が出荷されてくるのでベレン市場だけではさばききれずにマナウスとリオの市場に輸出した。

一等米のモンテ・フジ（富士山印）はリオ穀物市場に登録されているほどであった。

また木材もノルデステ方面にトメアスーの製材所からの製品を輸出した。

国外輸出は外国船による運賃が高く採算あわず日本向けのみであった。日本船は移民を運ぶ命令航路であったので運賃が非常に安く、例えば噸当り運賃が五ドルの時に外国船は三〇ドルもしていた。

日本向け輸出品はベレン港から原木・ゴム・皮革・コパイーバ油などで、レシーフェ港やフォルタレーザ港からは綿花・とうもろこし・カルナウーバなどを輸出した。

ベレンには二ヶ月に一回日本船が寄港し、二日間しかベレンに滞留しないので我々は二十四時間不眠で働いたものだった。また在ベレンの邦人にとっては日本食の材料を日本船からわけてもらうのが楽しみであった。

「和氣の寮」の想い出。

戦局が進んでブラジルも参戦したので我々は適性国民となつてしまった。

仕事もなくなりブラブラしているうちに南拓の独身社員三人の星野修・庄野巖美・真根井孝門はスパイの疑いで警察に拘留されてしまった。

その時に邦人焼討ち事件が起こり、その結果ベレン邦人の大部分がトメアスーに移された。

我々もその時一緒にトメアスーに移されることになる。

その時、移住地の支配人であつた戸田子郎氏の処に転がり込んでお世話になつた。

当時、戸田氏も会社の事務所がCETAに取り上げられたので農業で身を立てるべく準備中であつたので、我々南拓社員も仲間に入れてもらうことになり、その後に庄野氏と親しかつた森川春一とその関係で武田武志・成瀬義治も参加し、南拓側・戸田子郎・平賀練吉・村田利八・庄野巖美・真根井五人と前述の三人、他に戸田氏の関係で土山岩吉氏も一緒に暮らした。

当時、これらの人々が集まる処を「和氣の寮」と名付けられたのは近辺に住む加藤友治氏であつた。

奥地からトメアスーへ用達に出かけた人々が帰路に立ち寄り賑やかであつた。あの頃を回想すると戸田氏を始め、いろんな人達の援助を受けて深く感謝している。

ちなみに「和氣の寮」での共同生活は三年間続いたあと

解散した。

エステーボ島の青春

ベレン在住 安井宇宙

パリンチンス市の上流およそ八〇キロ、オンサ群島の西端に位置する長さ約三キロ、幅最広部で一キロの細長い三角形のバルゼア（アマゾン河の中、または沿岸に発達した新沖積土の河床で、乾燥期には高台地の草原や森林と変わりないが、雨期に河水が浸水する土地）の島がある。

こうして探し出した適地の中からエステーボ島とその下流三キロほど離れたマリーニョ島が選ばれた。



安井宇宙氏



当時のジュッタ栽培

いろいろな点で植民地の厄介者とされている独身者達が二組に別れて、それぞれの島に入植した。

野鳥は野に放たれたのだ。

エステーボ島組は宮地茂・平石定吉・石黒叅吉・安井宇宙・薬師神光雄・藤島正徳であった。

年長でもあり高拓で助手をつとめていた藤島がリーダー格に治まった。

これが決まると一九三七年の米作は移転資金を作る目的があるので、唯の米作ではなくなった。

励まなければならない。

しかし昼はやはり暑いので安井のようなものは、暗い周囲の原生林の影に怯えながら夜の畑で頑張った。

年長の宮地・平石は働き者である。各一コント五百ミルレース、普段から労働成績の良くない石黒・安井、薬師神は各五百ミルレースを出してジュート作りの資金にした。

しかしこれだけでは満足とは云えないので、口減らしの意味で人の方を減らすことも必要だと云う理屈も立てた。

一九三七年八月、米の収穫もすつかり終わって、五人は三年間住みなれた風光明媚だが貧乏で退屈きわまる、ワアイクラッパ湖畔（支流のラモス水道をパリンチンスから四〇キロほど入った処にある湖で彼等の最初の入植地）の植民地を去った。

藤島一人、ラモス水道の中にあるフォルモーザ島の尾山の

家に身を寄せて、ジュート作りの技術を習っていた。

植民地には多年性の苗木が三年間に育っていたが、みな無欲であつたのか惜しげもなく捨ててしまつた。

持ち物も消費し誰もが大同小異トランク一個の財産で、着のみのままの状態になっていた。

反対に胸の中は自由の空気が一杯で張りさけるようになっていた。

横浜を出る時と同じように希望で破れるように膨らんでいた。

安井は人減らしと云つて一年前にマナウスに行つた山崎太郎の誘いを受けて、活然の気を養うことにしていた。平石が後で同調した。

残りの三人はこれをパリンチンス港で見送つた。

彼等はジュート作りに身を投ずる前に三年間身にしみついた原始人暮らしの垢を、すっかり洗い流しておかねばならないと思つていた。

ジュート作りの前途が生やさしいものではないと感じとつていた。

マナウスの落着く先は、山崎の出でいった後の英国人経営のマナウス・ハーバー会社（社長は英国領事）の別荘番の家で、安井が別荘番となり平石は安井の居候となつた。

平石はアマゾニア産業の支店の米を街の商店に卸して歩いた。

当時、米の消費量はほとんどなかったので、大切な靴を減らすばかりで面白みもなく、その年を越したら島に帰ってしまつた。

安井はポリビアの日本人商人に挑発されて、七月に労働契約が済み次第アンデス越えを夢想して、わずかな給料の中から旅費を作つたが、実現にかかる頃悪性マラリヤにとりつかれ薬代その他でマデイラ河を遡る夢は消えてしまつた。

あきらめて島に帰るためにビラ・アマゾニアに立ち寄り静養した。

島には石黒と山崎の二人しかいなかった。

ビラ・アマゾニアにいた薬師神と一緒に島に帰つた。

島では去年の椰子ぶきの家がすっかり痛んでしまつていた。

今度は島で一番高台に土壁と椰子ぶきの家を建てていゝところであつた。

そして、その材木をとつた処で石黒は悪性マラリヤを背負い込んで治らず自分で注射をしながら苦しんでいた。

話を前にもどす。

パリンチンスで安井と平石を送つた石黒、宮地の二人のうち石黒はしばらく街で保養したあと、尾山の処を引き払つて来た藤島とビラ・アマゾニアで合流して入植の準備を整えてから島に行つた。

島はすでに浸水が干上がり高地と少しも変わらない森林が現れていた。

しばらく岸边や林相を見てから上陸地を決めて引き船と別れた。

それからは、島の一番幅の広い下端に二十町歩を開いた。島の中央に大きな湖があることも分かったので、そこで魚を獲ることもおぼえた。

やがて播種も終わって年が暮れる頃、雨期がやって来てジュートは勢良く育って行つた。

年が明けて一九三八年を迎えた頃はジュートの丈は一メートルになろうとしていた。

その様なある日、突然畑の中に水が増えて来たので、始めは雨水と思っている内に増水は勢いついてくるばかりで、いつの間にかジュートの丈を越すほどになり畑の半分は池のようになつてしまった。雨期が去ると島は潜水艦が浮上するように河の表面に出て来た。

収穫がすっかり終わると会社との精算に藤島、宮地、平石、薬師神がビラ・アマゾニアに下つた。

半分のジュートを水に流してしまつても、精算すると資本金は倍になっていた。

但しそれは自分たちの奮闘努力を労働賃金に計上していない為であつた。

しかし利益過大と判断した会社は、最初の話し合いを守ら

ず土地代金一コント也を一度に差し引いてしまった。

手には僅かな現金しか残らなかった。

開拓者に無情な、開拓事業に無理解な仕打ちとして皆の心に不満が広がって行つた。

こんなことがいろいろと積重なり、やがて国土とあがめられた日本高等柘植学校校長上塚司の理想主義とアマゾニア産業株式会社社長上塚司の資本主義の矛盾に高拓生達は不信感を抱いて行くようになっていく。

宮地、平石は、そのまま帰らず新しい土地を求めて行つてしまった。

藤島は隣のマリーニヨ島の星原貞治と組んでサラクーラと云う土地に移転して行つた。

土曜日ごとに何処かで催される住民の貧弱なダンス会で、わずかにうさばらしをする生活が始まつた。

年長者の間に感情的な病いが出始めたのが分散を早めて行つた。

島には二十才そこそこの薬師神、山崎、石黒、安井が残つた。

会社の信用は薄くなって行つた。

四人を乗せた島は、永遠に果てることもないと思うような単調な航海、いや生活が始まつて行つた。

仕事を終わるとピンガ（砂糖キビ蒸留酒）をひっかける。紫赤に変わっていく残照の河畔で水浴する。

暗いランプの下で食事をする。

外は蚊群の世界である。

眠くなるまでピंगाを飲み続ける。

何のニュースも入って来ない家の中の薄暗い空間をコウモリが飛び廻る。

重労働とマラリヤで痛めつけられ消耗した体力にも、性欲だけは残されていた。

その精力をピंगाが殺していく、もったいない事である。食糧は豊富であつた。

乾燥期にアマゾン河が残して行つた大きな湖が島の中央に二つある。その中に魚が雨期が来るまで無くなることはない。

土曜日になると近隣のダンス会に出かけることは、かかさなかつた。

毎月一回交替で街に雑貨を仕入れに行くのが、文明世界の空気を吸える唯一の最上の楽しみであつた。

しかし四人では年三回しか出られない、若者たちにとっては収穫が終わつたあとは文明世界が恋しくなる。

それにマラリヤ菌も潜伏しているようだ、離れ島の生活にあきあきしてくる。

島から沖を眺めていてもカヌー一艘通らない、まれに対岸に線のように横たわる森の影の中に、目をこらさねば見過ごしてしまふかの様にマナウス行きの外洋船の影を見ることがあ

る。

御飯たきを募集すると、独身島の名にひかれて街からラバリーガと呼ばれる独身女性がやってくるがすぐに逃げ出していく。

ある年の季節風の強い乾燥期の昼間で女手もない時であった。

炊事当番のわずかなすきに火が出て、椰子ぶきの家はたちまちに燃え尽きてしまった。

三人が駆けつけた時には、当番が命がけで出した各人一個ずつのトランクとピングの大瓶とギターが寂しげに放り出されてあった。

皆それぞれ後始末のために島を出て行ったあと安井だけが残った（労働者の小屋を仮小屋にして皆の帰りをまっていた。

焼け跡の家の壁土の穴に、アマゾンで一番美味なピチュー亀を放り込んであったのを思い出した。

毎日その丸焼きを一人で賞味していた。

ピングは大瓶一杯あるので心配いらない。

問題は夜であった。

小屋の中に板を敷いて寝るのだがそれに火蟻が上がってくる。

熟睡していると耳の中に入りこむ、出ていくまで大変なる我慢が要求される。

やがて皆んなが帰ってきて新しい生活が始まり出した。

一九四〇年七月、全島を伐り開いて島を去る日までその小屋で過してきた。

その頃にはパラ州境に二千町歩の土地を購入してあつて、新しい希望を胸に抱えていた。

今、島の主は誰か知らない。

年を経た島の上端から大きな洲が発達して柳の森で被われていた昔の面影は無い。

乾燥期なので牛が放牧されている。

群島の水道を下がるガイオーラ船（アマゾン河の船、鳥かごを想わせる型からその名が付いた。）の甲板上で、これを眺めている人々の中から、この辺の島の開拓者は俺だと云う老残の高拓生の声があつた。

若いブラジル人の船客たちが感にたえた顔付きで、その話に聞き入っていた。

祝 辞

在ブラジル日本国大使館

特命全権大使 賀陽 治憲

このたび「アマゾン日本人移住六十周年」記念誌が発刊されますことは、とりわけ意義深く、またコロニアの皆様一言ご挨拶申し述べる機会を得ましたことは、私の心から欣幸とするところであります。

今般ベレン、トメアスーおよびマナウス各地に於いて催されました「アマゾン日本人移住六十年祭」に際し、私も名誉総裁としてお招きにあずかりまことに光栄に存じました。

東京に於ける中南米大会会議等の外交要務のため、この祝典に参加が叶いませんでした。各地総領事が晴れの舞台として夫々参列し、その報告に接し感激した次第です。

右報告によりますと各地に於いて催されました記念行事は、コロニアの皆様方の熱意と努力によつて、またパラ州知事及び州当局の絶大なるご支援とわが総領事館の協力と相まつて、すべて順調に進み、日伯議員連盟議事団を始め各地からの慶祝使節団多数をお迎えして、厳粛のうちにも盛大にとり行われたことと拝承し、まことに喜びに耐えない次第であります。

さて、アマゾン地域へのわが同胞の移住については、ペルー国に移住した契約移民がアマゾン地域でのゴム景気のさなかにペルー高原を横切り、アンデスを超えて転住して来られたのが嚆矢となり、

その後移住が始まった一九二九年のアカラー移住地（現在のトメアスー移住地）への入植を本格的な起源とするものであり、以来本年をもつて六十年に至ったことは誠に感慨の深いところであります。

特にアマゾン地域への入植は既成耕地への入植と異なり、当時世界に於ては、アマゾンの開発は不可能とまでいわれていた巨大な大自然に調和しつつ、ブラジルに初めてジュート麻と胡椒の二大産業をもたらし、当国の経済発展に大きく貢献したことはブラジルの農業史上誇るべき歴史的事実として確立されているところであります。

また、今日ではブラジル政府のアマゾン開発計画に基づいた西部アマゾン地域は、自由貿易港に指定されて、一大工業団地が達成され、百万都市が完成しております。この工業団地に日本の企業、商社が進出する過程においては、移住者の二、三世のご活躍が高く評価されており、この国の経済発展に二度ならず三度までも大きな足跡を残されていることは、アマゾン日本人移住者の六十年にわたるたゆまざる努力と開拓精神の発露として敬仰される次第であります。

茲に本書の刊行をお祝いするとともに、この機会に物故されたアマゾン開拓の先駆者の方々のご冥福をお祈り申上げる次第であります。また、移住者の皆様方のご健康と一層のご活躍を祈念してご祝辞といたします。

一九五三年の大洪水

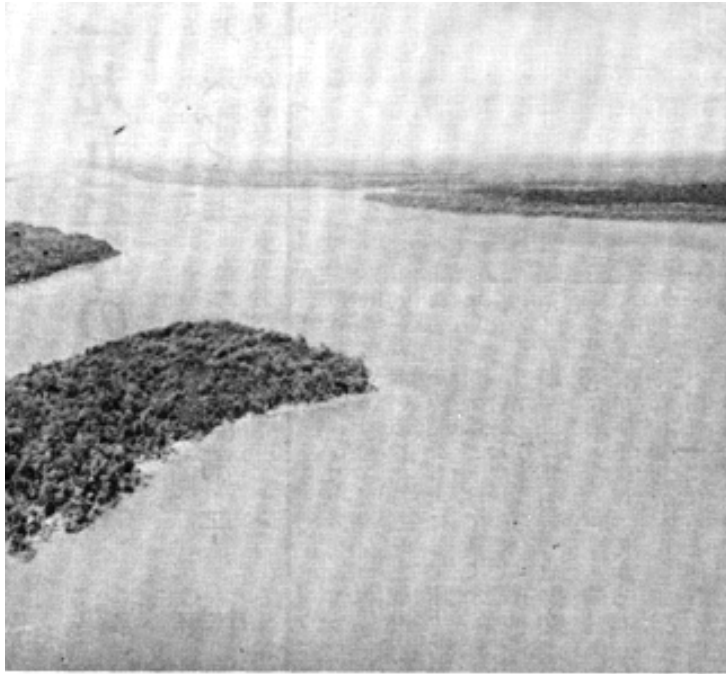
ベレン在住 原田清子

アマゾン河は何年毎かに洪水を起こす。

私は三〇年余りアマゾン河岸に住んで、いまだに印象に残っていて忘れがたいのは一九五三年の大洪水である。



原田清子さん



滔々と流れるアマゾン大河fotoミゲール近岡

バルゼア地帯（増水期に浸水する川岸の土地）には例年なれば水没しない土地が処々にあるので住民は川岸に近い、高い所を選んで家を建てて住んでいた。

私達はジュート（黄麻、印度麻）増産の為、一九四〇年にアマゾナス州からパラ州オリシミナ郡に移り、大江に面したボートと云う所を購入した。

家を建てる時、一九二二年に洪水があつたことを土地の人に聞きその話を参考にして床下を八〇センチほど上げて建てた。

洪水の跡は立木に残るのであるが、二〇年も経つとわからなくなる。

ボートに移ってから七、八年は平穩に過ぎた。

四九年になると四月、五月の河水の増えが今までより多く、私達がバルゼアに住むようになって初めての洪水に会う。

河水は床下すれすれまで増えて炊事場は一段低くなつていたので水に覆われてしまった。

初めて経験する洪水ではあつたがジュートを流すこともなく、被害は家の周りに植えてあつた果樹を失つた程度で済んだ。

移つてすぐ植えたレモシ、ゴヤバ、グラビオーラ等はすでに幾度も実を結び、マンゴーもその前年から成り始めていたのが、水が引き始めると次々に枯れて行つた。

アマゾン河は一年が増水期と減水期とに分かれこれを繰り返す。

場所によって多少の差はあつても大体十二月に入ると徐々

に河水が増え始め、五月末に最高となり六月に入ると徐々に引き始める。

私達が住んでいたオリシミナ郡（河口から九〇〇キロ余り上流）のあたりの最高と最低の水位の差は通常の年で約六メートルであつた。

これは主人は物好きで岸にメートルを刻んだ棒を立て、朝晩観測しグラフに記入した十余年の記録の結果である。

バルゼアに住む住民の貧しい者は、殆どが椰子ぶき、椰子壁の掘立小屋で土間の生活、どの家にも舟はあるが家具と名の付くようなものはなく、一九四〇年代の彼等の生活は鍋釜は自家製の土器、食事の道具やマンジョーカ粉の製造には木をくりぬいた鉢などを用い、クイヤの木の実（サッカーボール程の実、瓢箪の一種）の大きなものは、上に小さな穴を開けて中身を取ってきれいにし水汲み用とし、小さなものは半分に割って皿や物入れに使っていた。

釣り道具はどの家にもあり、ピラルクー（鱗のある淡水の最大魚）やペーシ・ボーイ（牛魚）を捕る銚や、減水期に使う投網などがある。まれには銃を持っている者もいた。

銃は散弾で猿やオンサ（斑点のある豹）カピバーラ、（水豚）などの猟に使う。

猿は食料にし、オンサやカピバーラは皮を剥いで売り、肉は食料にする。

家によつては古い年代物のミシンを持っていた。下糸を入

れるボビンが舟型で動かすと前後に動く、昔アマゾンに起こったゴム景気の時の遺品である。

殆どの家がこれも古い小さいつづらのような木のトランクを持っていて、その中に祭用の衣服や大事な物をしまっておく。

日常の衣類は部屋の隅に網をはってそれに掛けて置く。

家の近くにマンジョーカの収穫小屋がある。

小さい子供は裸で跣足、大人も日常は跣足の生活である。マンジョーカを植えて主食とし、魚をとり家の周りにバナナを植え、河水が引いて土地が乾き始める八月になると、一斉にトウモロコシ、南瓜、西瓜や豆などを植えこれを街に売って必要品を買う。

一番近いオリシミナの街でさえどんなに急いでも往復二日の舟旅、増水期には近道が出来て、大分楽になる。

洪水がなければ、マンジョーカやバナナの収穫が増えて生活がうるおい、現金収入の少ない彼等にとってジュートの仕事の出現は大きな恵みであった。

大洪水のあった一九五三年は河水の増え方が例年より激しく、六月に入っても水勢は衰えを見せず処所にあったバルゼアの高い土地もすっかり水没、住民は太い木を伐ってそれを幾段にも組み、その上に板を並べマロンバ生活（水上に住む）を始めた。

水が増えるに従い高くし、遂に床が竈と同じ高さになり、

座って煮炊きをし食事も皿洗いも座ってすまし、軒が低く
なつて這つて出入りする家もあつた。

家畜も勿論マロンバ生活である。

鶏や豚、山羊などは簡単であつたが牛となると始末が悪い。
ある程度の牛を持っている者は洪水の有無にかかわりな
く、河水が牧場近くまで増えてくるとテーラ・フィルメ（ア
マゾン河の両岸にある洪水にも浸水されない高地）の牧場に
移す。

アマゾン地方は放牧であつて乾燥期（減水期）には牛をバ
ルゼアに移し若草を食べさせる。

一〇頭や二〇頭の少ない牛の持主は高地に牧場を持つ資力が
ないから河水が常より増えれば、マロンバを造りその上で牛
を飼う、私達もまだ高地の牧場は持つていなかった。

太い大きな木を幾十本も伐り、それを幾段にも組み、その
上にイタウーバ板（舟などを造るに用いる）を並べ固定して
牛を乗せる。

前面の水の中に柵を設け、その中に刈つた草を投げ入れ牛
を下して食べさす、食べ終わるのを待つてマロンバに追い上
げる。

この上り下りの階段が牛の重みと動きで度々壊れて苦労
する。

また水がどんどん増えてくると浮力でマロンバが弛む、造
り直しは水が深くなっているだけに実に大仕事であつた。

わずか数十頭の牛の為に、毎日毎日が水との戦いであった。

人を雇い毎日草を刈らせる、小型の舟は一人で大型は二人で刈る。

草刈り人夫は未明に起きて川岸に生えているカントラーナ（薄に似ていて葉に細かい毛があり、河岸の水の中で増え広がる）を刈り、夜が明けてくる頃満載した草をマロンバに運ぶ、柵の中に投げ終わるのを待つて牛を水に降ろす。

洪水が長引くにつれピラニヤが集まってくる。

子牛を持つ雌牛の乳首を食い切るのである。

牛が草を食べながら後足で水を蹴り出したらそれはピラニヤが寄って来たのである。

コールターを布に包み柵の柱の処々に沈めたが大した効果はなかった。

河水が引き若草が生え牛の肥える十二月になると牛買いがやってくる。涙を飲んで売るより他なかった。

このように毎日水と戦っていたある日、大型の舟で草刈りをしていた二人の若者が草を投げ終え舟が流れぬように茂みに寄せて洗っていると、スクリジュー（水蛇）が襲って来た。

幸いにして二人とも勇敢であつたからこれを仕留めて、半時間後にはジュート小屋まで持ち帰った。

長々と横たえられたスクリジューを彼等が歩測すると二五歩あつて胴の太さは大人の太股はどあつた。

私達は勿論、労働者も近隣の者も初めてみる大蛇であつた。

もし若者が一人であつたなら又おじけづいてしまったなら到底助からなかつたであろう。

洪水の年は決まつてスクリジューが出てきて鶏や豚、時には子牛も襲う、腹を裂くと油が沢山あつて近辺の女たちは争つてこの油をとつた、切り傷の妙薬である。

この年、草刈りは五月に始まり八月半ばまで続いた。

洪水で土の現れるのが遅れ、そのうえ水は引いても土地がぬかつてマロンバ生活をした牛は弱つていたので、ぬかるみにはまつたまま死ぬことがある。

又この時期に牛が歩き回ると生えてくる草を駄目にする。そのため水が引いてからも暫くは牛を集めておき刈り草を与えるのである。

この年、牛を大半失いジュートは流し、その上に出費ばかりかさんで、その前年にサンタレン市（パラ州第二の都市）の学校に長男を入学させていたが止むなく退学させざるを得なかつた。

ブラジル人でこの洪水に財産を使い果たし、その果てに持ち牛を全部死なせてしまつて気が変になつてしまつた人もあつた。

この洪水はニュースになつて世界にも伝えられ、被害が甚

大であつたため政府は被害に応じて見舞金を出した。

主人も被害を申請していたので呼び出しを受け、六〇キロ程下流のオビドス市まで受取りに行つたが、その頃はまだカヌーを漕ぐ旅であつたから漕ぎ手を一人連れて結局三日がかりの旅となり、受取つた僅少の金は旅の費用に消えてしまつた。

戦後日本人のアマゾン移住が再開され、その第一回ジュート移民は不幸にもこの大洪水の年であつた為、日毎にふくれあがつて地を浸し、滔々と何者をも押し流す勢で幾倍にも広がつた大河と、慣れぬ水上生活、想像を絶した潜水時のジュートの仕事に恐れをなして殆どの人々が他に移つて行つてしまつた。

ジュートの収穫は刈つて水に漬け約二週間置くと、皮質が柔らかになり繊維を採つて洗うのであるが、この年は水に浸っている間に河水がどんどん増えて深くなり、その上濁流の置いていく泥に埋まり簡単に引き上げることが出来なくなり、潜りの上手な者が綱をもつて潜り、沈んでいるジュートを縛つて引き上げて洗うと云う困難な仕事になつたのである。

洪水後に建てた家は床下を一・五メートルにし立って歩けた。

この洪水から幾年か経つて私達はようやくテーラ・ファイルメに牧場を持つことが出来た。

その後、子供たちの教育の為にベレン市に移り住んで田舎には牧夫の家族だけが残っている。

七〇年代になって度々洪水が起り、中には五三年にも劣らぬ洪水に見舞われたそうであるが噂に聞くのみであった。

南拓入植二回生の私

ベレン在住 加藤 武

私達の家族は一九二九年十二月にトメアスに入植しました。

父・加藤忠彦、母・はま、八人兄弟の内、七人が男で女一人の家族で、私は六男で当時満五才の子供でした。

入植した処は、トメアス波止場から真っ直ぐに一本道を十キロ位行くと十字路に出ます。

その十字路をさらに真っ直ぐに行くとブレウ地区に行き、左に行くとアハイヤ街道、私達は右に行ったマリキッタ街道の奥の方でした。

原始林の中の一本道を進んでいくと道端の一角を切り開いた場所に四軒の住宅が現れ、その先に行くとまた四軒の住宅があり、このように四軒ずつの入植者達の住宅が点々と原始林の一本道に点在しておりました。

私達の家族は、田村、渡辺、林田さん達と一緒に四軒の家に入りアマゾンでの生活が始まりました。夜になると家の軒先まで垂れ下がる原始林の枝にガアリーバと云う黒くて大きな夜鳴き猿が群をなしてぶらさがり一晩中咆哮を始め、恐くて眠れない夜が続いたことを子供心に覚えています。

ガアリーバ猿たちは人間を見たことがないらしく全然恐がらないのには驚きました。

またマリキッタ街道には豹や鹿が多く現れていました。

十字路の近くに入植した人の奥さんが「日本に帰りたい、帰りたい。」と毎日泣きだしてとうとうその家族は日本に引き上げてしまいました。

その空き家になった処に私達の家族はマリキッタの奥から引っ越してまいりました。



開拓当時の移住者住居

その時の隣人たちは、庄司、我妻、相沢さんと云う人達でした。

その頃、密林の中にある原住民（カボクロ）の家になにか買物を頼まれて一人で出かけたことがありました。

日本人を見たことがないカボクロ達は非常に親切にしてくれて、オウムとか子猿やなまけものの子（プリギッサ）などを、お土産にくれました。

これらの動物たちを抱えて家に帰る途中で道に迷ってしまった事が非常に印象に残っております。

トメアスに入ってから一年位してから大人達が夜に鉄砲を持ち出して大騒ぎがありました。

米騒動とかで、私の親父も扇動者の一員だったみたいであり、それが原因だったかどうか知りませんが一九三二年にトメアスを出ることになり、ベレンからズーツと離れたマラカナンと云う所に移転しました。

ここはまったくの原始社会みたいな場所でした。

生活必需物資は、すべて物々交換でした。

原住民のカボクロ達は非常に人がよく、女が非常に多く女十人に男は二人位の割合でした。

彼等が栽培しているものは、マンジョーカ芋とか、麻（ウワシーマ）でした。

それらの作物を石油、石鹼、砂糖、塩などと交換して貨幣はほとんど通用しませんでした。

二ヶ月ほどいたけど、これではどうにもならないので、それからカパネマに移っていきました。

カパネマにはすでに市原、梅田、野口、辻、田中さんなどが農業をやっておられました。

主に米、落花生、フエジョン豆、トウモロコシ、綿などを栽培しましたが、大家族を抱えて父は焦っていたのでしよう、収穫した作物を換金しても、次の作物の植付けで消えてしまうくり返しに、何とか方法を変えねばならないと考えたようで、ある日ベレンに出かけて家族全員が働いて報酬を貰える場所を見つけて帰って采ました。

早速荷造りをしてベレンへ引っ越しの準備を始めました。

田中さんの家で送別会をして下さり、その晩頭が痛いからと云って早目に帰宅し、休むとそのまま永眠してしまいました。

私の家族たち

ベレン在住

橋口静代

父、橋口伝四郎と母みなは、私を連れて三人で未知の国によりよい生活を探して、一九二四年十月五日にハワイ丸で神戸港をあとにしました。



橋口静代さん

当時の日本では、毎日のように広いブラジルには、いくらでも広い土地があり、働き甲斐があるところだと、ラジオ・新聞などで報道されていたのを覚えています。

リオのフロレス島に希望を抱いて到着したのは十二月四日であり五日後の九日にサントス港に着き、モジアナ線の汽車でサランギ駅まで行き、トラックに乗替えてベラビスタ農場のコーヒー園に到着しました。

ここで二年間の契約を済ませ友人の紹介で、同じサンパウロ州のナクルマ農場に行くことになりました。

この農場の支配人であった宮田さんがブラジル語を教えて下さる。

一九二九年の八月に同県人の福原医師に誘われ、パラ州ベレン市にやってまいりました。

ベレンではコンパニア・ニッポニカの寮に二週間ほど泊まり、建設中であつた移民収容所の完成を待っていました。

医師であつた父伝四郎は、コンパニア・ニッポニカ社長の

福原八郎さんの任命で移民収容所長を務めることになりました。

一九三〇年にブラジルで革命が起こり、革命軍の勝利によりゼツリオ・バルガスが臨時大統領となって、パラ州知事にはマガリヤンエス・バラックが任命されて采ました。

マガリヤンエス・バラックとは家族の友人となり、よく収容所に訪問して頂きました。

当時、州警察長官はアベウ・シエルモン、教育長官マリオ・シエルモン、そのほかバラックの同志としてラメイラ・ビテンクール、イスマエリーノ・デ・カストロ等の人々が日本人移民に貢献した人達だと思っています。

ある日、独立を決心した父は土地を捜し始めました。

幸いイコアラシーに手頃な土地が見つかったので、1500レースで地主ジョアキン氏より買い求めました。

そして家族三人で野菜栽培を始めました。同時に家も買いました。

一九三三年三月に妹のビトリア・アンジョが誕生し、故郷の長崎県佐世保市にも出生届が出され彼女は二重国籍となります。

その頃、私は森たかしさんと知合いになり友人となりました。

一九四〇年に父は椰子の実をとりに行く途中、三〇メートル程の古井戸に落ちトタンなどがあつたため、左腕に深いキ

ズを負ってしまったのです。

ベレンの救急病院に運ばれましたが、キズは思った以上に深く仕事が出来なくなりました。

それからは生活が苦しくなり母と私での労働が始まりました。

母と私が市場に野菜を売りに行く途中に母は病気になり、一九四一年十一月に亡くなりました。

一九四二年八月一八日夕刊を買いに出かけたビトリアがとんで帰って来て「大変！大変！家を焼かれる」と叫んできた。話を聞くと、新聞売りから「早く家に帰って隠れるように、見つかるかと殺されるかもしれない。」と云われて来た。

電気の明かりを消して間もなくすると、野菜畑の覆いをしである椰子の葉に火が付けられていました。考える暇もなく裏山に皆でかくれたのです。美しい満月の夜であったことを覚えています。

しばらくすると誰かが丸太ン棒を振り回してきました。もう少して私の頭にあたるところでした。棒が蔓に絡み付いてしまったのです。生きた心地がしませんでした。

数分してから警察が駆けつけ私達を助け出し、警察署に連れて行き暴動がおさまるまでの三日間、私達を保護してくれました。

警察に避難してきた人達は日本人ばかりでなく、フランス人、ドイツ人、イタリア人などでした。

それからブラジルと戦っていた国々の国民は、トメアスーの収容所に送られることになるのですが、私達家族と森たかしさんだけは、バラック知事の取り計らいでそのまま同じ処に住み続けることを許されました。

当時六十二才であつた父への友人としての思いやりではなかつたかと思います。

父は一九五四年に亡くなり、それから一人でビトリアを育てました。

一九五七年に当時奥様を亡くされていた木田と結婚し、主人は七八年に他界しました。

現在は健康で幸な老後をビトリアの家族と過ごしています。

（注・ブラジル語でタイプされた 記録を編集部で翻訳しました）

インドより移植されたジュート

サントレン在住 辻 小平



辻小平氏夫妻近影



ジュートの父・尾山良太氏

アマゾンでジュートの新種（尾山種）が発見されたのは一九三六年のことである。実際には一九三四年に発見されたのであるが正式に新品種と確認されたのは一九三六年であった。

アマゾンニア産業研究所は、アマゾンニア州政府より譲渡された百万町歩の原生林に一大植民地を建設することを前提とした、予備調査及びその植民地の指導的中堅人材の養成を目的として、東京とアマゾナス州パリンチンス郡に相前後して設立された。

予備調査の中でも特に重要な仕事は植民地の主幹作物として予定しているジュートについて、現地に於て試作し、その成否を決定することであつた。

ジュートはそれまでブラジルでは栽培されておらず、果たしてアマゾンの低湿地帯に育成するか否かは未知数であつた。

そこで研究所は日本及びインドで入手した四種類の種子を現地に送り、さらに鹿児島高等農林出身の荒木衛門を派遣して研究所内の低地及び高台地とラーモス河のフォルモーザ島（研究所より一〇キロ上流）の三ヶ所に一九三一年十二月から三二年三月までの間に前後八回の植付けを行った。

その結果は幹茎の成長一五〇から一九〇センチで止まり、幹茎の根本の直径一センチ半位にすぎず到底計画栽培には適さないことが判明した。

しかし繊維の品質に於てはインド産に劣らないことも分かった。

研究所の東京本部は現地支配人の栗津金六の退職により生じたビラ・アマゾンニアの混乱を收拾し、併せてジュートの最

終的な試作研究をする為に、本部主事の辻小太郎を現地に派遣することに決定した。

辻小太郎は一九三三年一月神戸港出帆のサントス丸で妻および実弟の小平同伴にて、ブラジルに向ったのである。

「セイロン島での種子積込み」途中、船がインドのセイロン島に寄港した際に在カルカッタ総領事館と三井物産の協力により、四種類の計六〇キロのジュート種子を大型トランクに詰めて船に積み込んだ。

当時ジュート種子の国外積出しは厳禁されていたが、トランクの蓋が日の丸の国旗で覆われていたので無検査で積込みに成功した。

辻兄弟は船のデッキに立って黒人の荷役が頭にトランクを載せてタラップを登って来るのをハラハラしながら見つめていた。

誠に危険な芸当であった。

「尾山種の発見」

現地に到着した小太郎は総力を結集して最後の試作をすることとなり高拓第一、二、三期生と家族移民一〇家族をアンジラ河口の模範植民地に集め、隣接せる低湿地三〇町歩を一四四に区分して一人に一区を担当させて、インドより持ち込んだ六〇キロの種子を蒔付けさせた。

しかし最後の希望が賭けられたこの試作の結果は極めて不

良であつた。

ところが全然の失敗ではなかつたのである、と云うのは家族区に入植した尾山良太は耕地内に他のジュートと異なる二本の新品種があることを発見した。

或るいは他の区画内にも、この種のジュートがあつたかもしれないが、高拓生達は早くから見切りをつけて試作地を放棄してしまい新種を見つけることが出来なかつたのではないかと思う。

しかし尾山は年齢的にも成熟していたので自区の新種に目をつけ、極めて注意深くその成長を見守っていた。

このジュートは他のものが二メートル位で成長が止まってしまうなかにあつてグングン伸び続け、三ヶ月で三メートル、四ヶ月で五メートル近くに成長した。

尾山にあつた一本は河水の増加による土砂崩れにより、一夜の内になくなつていた。

しかし他の一本は順調に花を咲かせ実を結んだので尾山は一握りの種子を採集することに成功した。

よつて研究所は翌三十四年にアンジラ河口の低湿地に尾山の採集した僅かな種子を蒔いて三〇キロに増殖、その半分を尾山良太に他の半分を家族移民の中内義正に分与し、なお毎月一定の給料を支払い土地を無償で提供して新品種の増産を計つたのである。

一九三五年に尾山は家族全員を引き連れてフオルモーズ島

に移りジュート栽培に専念することになり約五町歩に播いて、中内はビラ・アマゾニアの低湿地に約四町歩栽培した。

その頃、私は両氏に食糧を補給する仕事を分担していたので毎週一回ジュート園に足を運んでいたのであるが、特に中内の耕地は私の住宅に近かったので毎日のように訪れ、若いジュートが目に見えるように伸びる素晴らしい成長力に圧倒され、恍惚と見とれていたことを思い出す。

この年の試験栽培で尾山は五トン、中内は四トンの良質の繊維を収穫した。

新品種は発見者の名を冠して「尾山種」と命名された。

「ジュート産業の発展」

一九三七年に研究所は、これら両名の第一次製品中より六〇俵（二七七〇キロ）をベレン市のマルチンス・ジョルジ商会宛に発送したが、同社のベルセランサ製麻工場で試織した結果、インド産の繊維に勝るとも劣らない良質であることが証明され今後の買い付けを保証してくれたのであった。

第二次積み出しは六一七七キロであった。日本人の生産したアマゾン・ジュートが世界市場に売出された最初であった。

この時の売値はベレン着キロで一ミル四〇〇レースであったが、当時の労働賃金は一日二ミルであったから労賃の七〇パーセントと云う高値であった。

いかにジュート栽培が有利であつたかを推察することが出来る。

この好結果は高拓生及び一般入植者を刺激して一九三七年六月以降高台地の農場を捨てて、ジュート栽培に転向するもの二九家族に達し、研究所が購入したアマゾン大江に散在する島々や江岸の低湿地に入植して、それぞれ栽培に従事し良好な成績を上げ翌一九三八年には総計六〇トンの繊維を生産した。

この好成績は一九三九年五月二十日リオ市の有力新聞「ジオルナル・ド・ブラジル」紙上において大々的に報道紹介された他、連邦通商審議会に於てもアマゾン・ジュートの成功を称えたのである。

こうして高拓生の大部分はジュート栽培に進出した他、旧アマゾン興業のマウエス入植者やペルー下りの日本人、またモンテ・アレグレ郡の旧南拓入植者達も加わりその栽培地域はアマゾナス州のソリモンエス河下流から、パラ州のモンテ・アレグレ郡まで大小支流の浸水低湿地帯に広がり、延々三千キロの大江岸に燎原の火の様な勢いで普及するに至つたのである。

「衰退していくジュート」

当時のジュート産業の発展を数字をもつて追ってみると

一九三七年

八トン

一九三八年	六〇トン
一九三九年	一七八トン
一九四〇年	三二〇トン
一九四一年	一、一〇〇トン
一九四二年	三、〇〇〇トン
一九四三年	五、五四三トン
一九四五年	六、八八二トン
一九五〇年	一三、九二八トン
一九五三年	二〇、七二五トン
一九六〇年	三七、八九一トン
一九六五年	六一、五八五トン
一九七〇年	四三、〇〇〇トン
一九七三年	六六、三六〇トン
一九七四年	一六、〇〇〇トン
一九七五年	三七、一四三トン
一九七六年	三八、七六四トン
一九七七年	三五、〇二二トン
一九七八年	二七、一九五トン
一九八〇年	四五、〇〇〇トン
一九八一年	五九、八〇〇トン
一九八二年	二五、〇〇〇トン
一九八四年	四九、八〇〇トン
一九八七年	一九、四三〇トン
一九八九年	二二、二八二トン

一九四一年ブラジルは対日宣戦布告を行う。

一九五三年アマゾン河が世紀の大洪水に見舞われる。

一九八五年アマゾン河の増水は五三年の洪水を五〇センチ上回る超大洪水であった。

一九八七年は連邦政府に採種契約に必要な予算がなく種子不足に陥り、栽培面積が減少した。

以上の統計で見るとおり、ジュート繊維の生産量は最初の三〇年間に驚異的な増産を続け、一九六五年には早くも国内需要を満たすまでに達したが、当時のジュート栽培が如何に有利な職業であったかを物語っていると思う。

しかし、その増産も一九七三年の六六、〇〇〇トンをピークにして漸減し、現在はわずか二万トン前後と云う斜陽産業に転落してしまった。

せつかく日本人が莫大な犠牲を払って作り上げたきたブラジルのドル箱産業が、こうも早く衰過したのであろうか、その原因を採ってみたい。

「異常天候と日本人の撤退」

アマゾン地域の気象は一九五〇年くらいまでは、至って順調に運行され河水の増減の時期や、雨季と乾季の変化も毎年大差なく繰り替えされてきた。

従ってジュート栽培者達もそれに応じて始めから大体の計画を立てて遂行することが可能であった。

ところが、一九五三年の世紀の大洪水を境にして天候異変

が起り、播種するべき時期になつても降雨がなく種子をまくのが二ヶ月近くも遅れたり、また降雨がないにもかかわらず河水がぐんぐん上昇して播種後二ヶ月位の成育中のジュート畑が水没して、一キロの収穫も無かつたと云う事態が毎年のように発生して栽培者は大きな損害を被るようになって来た。

特に日本人栽培者は大面積を経営していた為に、その損害額も大きく今まで数年間の栽培で得た貯蓄もその穴埋めに使ひ果たす人も多かつた。

ジュートの栽培は低湿地帯に限定されているので播種から収穫まで、すべてが天然の気象条件に支配されており、近年のように安定性のない気象では大規模栽培者には非常に危険な賭仕事であつた。

そのうえ現地労働者が自立して自分のジュート園を持つようになつたので人手不足となり、日本人栽培者は経営不可能となつて他の職業に転向するものが続出、一九七〇年頃には全員と云つてよいはど日本人の栽培者は姿を消していた。

従つて繊維の生産量も一九五〇年頃の爆発的な増加現象から一転して漸減の一途をたどるようになってきた。

「現地人栽培者の不徳行為」

アマゾン地域に散在して各種物産を栽培している現地住民（カボクロ）の中には、人間社会に一番大切な道德心に欠けて

いるものがあり、そうした人間には自己の生産物に責任を感じ、出来るだけ良い産物を出荷しようとする意欲がない、働かずには沢山の報酬を手にしようとする。

彼等の出荷してくるジュートは外側は立派だが、内側には湿った繊維を混ぜて重量を増やそうとしたり、石や木片を混ぜたりする。

特に悪質なのはビニールの袋に五キロ位の粘土を詰めて梱包の中に潜せることもある。

それは少しでも梱包の重量を増やそうと思うカボクロ達の悲願であり、その行為を悪いと思っていない処に問題がある。

こうした悪質行為を除くには各買付工場で格付検査を厳重にすればよいのであるが、毎日百トン前後の繊維を受取る場合にその全部を開けることは、場所や労働者および時間の関係で到底不可能に近い難事である。

尚一層の難問題はアマゾン全域の工場で検査を施行すれば問題はないが、もし検査をしない工場があった場合には、検査をする工場に売手は寄りつかなくなることになる。

以上のように格付検査は非常に難しい問題を抱えている。私の会社でもいろいろ検討したり同業者と協定をしたり、また連邦政府に協力を要請したのであるが、決定的な成果も上げ得ず現在も生産者の悪徳行為は野放しにされている。

これら栽培者達の破廉恥行為は繊維の質の低下を来し、初

期の日本人によって生産されたものとは雲泥の差で、製麻会社では一九六〇年後半よりアマゾン産の繊維を嫌悪するようになって来た。

南伯の製麻工場の経営者は大資本家が多く政府要人にも大きな影響力を持っており、国内にジュートのストックが充分にあるにもかかわらずインドより毎年二、三万トンの輸入許可を取得して国産ジュートの消費を極力押さえている。

その結果、国産の市場は圧迫され著しい値段の下落を招き栽培費も償却できない不良作物になりさがったのである。

「化纖の圧迫による需要減退」

第二次世界大戦後から世界的な化学繊維の普及により、ジュート市場は圧迫され一九六〇年後半には国内における穀物類の包装はすべて化学繊維に移って行った。

こうした消費市場の後退もアマゾン・ジュート産業の斜陽現象の一因であることに間違いない。

以上三つの原因により日本人が移植しブラジルの経済界およびアマゾン河流域に生存する貧農社会に、輝かしい貢献を与えた新産業もわずか五〇年にして斜陽産業に転落してしまつたのである。

将来いつの日か、ジュートが復活し化纖を駆逐し、アマゾン河流域に散在する数万戸の貧農達が昔日の恵まれた生活を

取り戻すことが出来れば、我々ジュート産業の移植にたずさわった者にとってこのうえもない喜びである。

狩猟に生き甲斐を求めていた私

トメアス在住 藤 橋 隆 也



藤 橋 隆 也 氏

私が初めて鉄砲の実弾をブツ放したのは、たしか九つか十の時であつた。

父と母は鉄砲の管理が厳しくて絶対に家の者にも誰にも貸した事がなかった。

その日、父は組合に出かけ家には母しかいなかった。

私は庭先きの高い木の頂上に鷹が止まっているのを見つけた。

母に何度も鉄砲を撃たしてくれと頼んだが、頑として母は拒否した。

それでも私はどうしてもあの鷹を撃ちたかった。

私はしつこく母に頼んだ。

さすがに母は根負けして、鷹の止まっている木のすぐ手前にある樹木の葉を、ちぎって戻ってきたら鉄砲を貸すと約束してくれた。

母にすれば、鷹のそばまで息子を近付けさせれば、なんぼ鷹でも飛び去るだろうとの判断だったと思う。

私にすれば必死の行動であつた。それこそ猫のように物音を立てずにその樹に近付き、静かに葉をちぎると母のところに戻り渡した。母子の約束である。

母は仕方なしに鉄砲と実弾を一発くれた。

鷹はまだ飛びたっていなかった。慎重に標準を定めて引き金を引た。弾は不発であつた。

母にもう一発催促した。

二発目の弾は見事に鷹を撃ち落としていた。

それからは私の人生に狩猟が大きな生き甲斐となつて身体の中にしみ込んで行くことになる。

過去三十数年間、狩猟に明け暮れ、その合間に生活のために働く習慣がついてしまった。

今まで射止めた獲物は豹（オンサ）、鹿、猪（ケシヤード）、山豚（カチトゥー）、猿、貌（アンタ）、パツカ、タトゥー、コチア等数知れないほどとなる。

大蛇では長さ五メートル、胴の直径二〇センチ位のがあつ

た。

愛用の銃はイタリア製のベリット二十四番の散弾銃。

アマゾンの大ジャングルに踏み込んで恐ろしいのは、豹でもなければ蛇でもない。

突然襲ってくる大風、落雷をとまなう豪雨の時である。

風で落雷で大木が倒れる音が豪雨の中に轟き、一本の大木が連鎖反応で周囲の木々をなぎ倒し始める時である。

行き場がなくなり、何処にいても不安で本当に泣きたくなってくる。

狩猟の方法として大きく分けて四通りがある。

一つは待ち撃ちと称する方法である。

原始林のなかを昼間のうちに歩いて木の花や実が落ちている場所を探し出す。

獲物が好みそうな花や実が落ちている場所を見つけると、その近くの格好の二本の立木を探し、その間にハンモックを四メートル位の高さに吊し、ハンモックの中で銃を構えながら見下ろし、夜中に獲物が近付くのを辛抱強く待つ。

もう一つの方法は、密林の中に獲物が歩き廻りそうな場所を見つけると、昼間のうちに道を作って置くことである。

幅五〇センチ位の道には落ち葉一枚ないようにきれいに掃除しておく。

夜、その道で獲物を待ち受ける。その近くに獲物たちが近付く時には落ち葉の上を歩く音が聞こえるが、私が自分の

作った道を歩く時には落ち葉一枚ないので足音がしない。

こうして獲物を射程内に引きつけてブツ放す。

以上の二つは乾燥期に行う猟である。



オンサはアマゾンの代表的な動物

乾期と雨期の両方に通用するのは犬を使う方法である。

雨期の場合は仕掛け鉄砲を使う。数え切れないほど密林に入りながら、一度だけ迷ったことがある。やはり狩猟のベテランの二人で山に入り、いつものように昼間から歩いて行く道に印をつけ始めた。磁石を手にして方角を定めながら歩いて行くと、自分らが印をつけて来たもとの道に戻ってしまふ。また磁石を見ながら歩いて行くと同じ所に出てしまふ。何回やっても同じようなことが起こった。

日本では狸に化かされると云われるらしいが、この時だけは二人ともさすがに気持ち悪くなり、明るい内に引き上げたことがある。

狩猟している時に言葉で表現出来ない嬉しさは、獲物の足

音が近づいてくる時である。

心臓がドキドキしてきて髪の毛が逆立ってくる緊張感はい分だけしかわからない気持ちであろう。

反対に悲しい時がある。

夕方の六時頃から蟬が鳴き出しこんな時は獲物も動かない。

静寂の中に蟬の鳴き声だけが響き渡る。

何で俺一人が、こんな所でこんな格好してジーとしていなければならぬのかと、恐ろしい孤独感に襲われ悲しくなってくる。

獲物たちの住む密林の存在が年々と遠ざかっていく今日、私の生きがいである狩猟の出来る機会も段々と遠のき始めた今日、この頃である。

（注・本人の口述を編集部でまとめました。）

アマゾン・カントリークラブ

その生い立ちと現況

ベレン在住 北島義弘



北島義弘 会長

1970年代のブラジルは、経済的にも政治的にも最も充実した時代で、豊富な外資導入によるアマゾン総合開発計画が、トランスアマゾニカ道路、マナウス・ゾーナフランカ、ツクルイ水力発電所、ジャリ・プロジェクト、カラジヤス開発等々、目白押しの状態で始められた時期でした。

このような時期におけるベレンの日系人たちの生活は仕事面においてはまことに充実したものでしたが、娯楽面におけるオプシオンが少なく、男達のほとんどが暇さえあれば麻雀卓を囲み、女子供にはなはだ評判の悪いものでした。

アマゾン太郎として知られた、故山崎太郎氏宅に集まっていた仲間たちを中心とした麻雀の月例会が始まったのもその時期で、毎月河口旅館や安武旅館などで楽しくパイを打っていました。

思い出すままに当時のメンバーの名前を挙げてみますと、

菊池、福島、北島、横倉、須藤、高野、岩永、松浦、稲津、森、陣内、谷口、橋口、大嶽そして親分の山崎と云った面々でありました。

一方、当時の三井物産ベレン支店には、そうそうたるメンバーが揃っていて、現地採用社員仲間でナイトクラブの経営を行い氣勢を上げていたのですが、前述の麻雀仲間と同じく女子供に評判悪く、すぐに手放す羽目になったようです。

この、はなはだ女子供に評判悪く家族から総スカンくつていた二つのグループの面々が、大いに反省をして被害者同志（加害者？）が堅く手を握り合い考えついたことが、ベレン近郊に土地を買って、そこにプールを作り、プールサイドに小屋を建てることによって家族のものは水遊び、男達は小屋の中で麻雀、これぞ一石二鳥と小躍りして喜んだと云う話、これが現在の我がアマゾン・カントリークラブ創立の原点であつたとは、いかにも単純で締まらない話ですが、事実是小説よりも奇なりとか、これは事実です。

男たちが偉かつたのは、この後の行動がすばやかだったことと、将来への確固たるビジョンを持ち続け、単なる同好会の域から脱して「在留邦人、日系人のための総合スポーツセンターの建設」と云う日系社会のニーズを捕らえたちゃんとした組織にしたことです。

1975年8月15日、創立会員25名により創立総会を行い正式な登録が成されました。

初代会長山崎太郎、副会長大嶽一でスタートし、子供用プール、サロンの建設に次いで5ホールのゴルフコースが、会員の手弁当や州道路局、エイダイ木材などからの土木機械無償貸与の協力を得て完成された頃、アマゾンアルミ・プロジェクトが始まり、アルブラス建設要因として日本から100余名の技術者たちが来ることになり、彼等の息抜き場所としての9ホールのゴルフ場完成資金の一部にと、アマゾンアルミ関係者より2万ドルの寄付を受け、さらに充実した施設が完成されました。



アマゾンカントリークラブ風景

1985年、トメアスー出身の学生たちを中心に17年間も活動してきた二世クラブ「ジュベントス」との話し合いにより、日系社会の力を集中する効果を求めている両クラブの合併が提唱され、約2年間にも渡る交渉の結果、「ジュベントス

ス・クラブ」の発展的解消による当クラブへの吸収合併が成立、日系社会にスポーツ面での統合が行われたのでした。

二世たちがクラブ運営に参加するようになってからのクラブ活動は大きく変わり、野球場、サッカーコート、バレーボールコート、セミオリンピックプールなどが次々に完成され、現在テニスコートの建設が計画されており、日系人の為の総合スポーツセンターとしての完成に一步一步確実な歩みをしているのはか、文化面でもミス・コロニア東洋の美の祭典、サンジョアン祭り、演劇祭なども二世達が中心となつて開催されております。

一世層の高齢化が進み、二、三世との断絶が心配されている時、率先して二、三世層の育成と交流の場を造り上げた結果、現在会員数350名、戦前戦後の移住者、二世、三世、日本からの出向者のほか、ブラジル、ポルトガル、イギリス人まで含めたユニークなクラブとして、地域社会に認められるまでに発展できたことは、ひとえに、会員各位の協力と関係者の暖かい励ましの賜物であると感謝しております。

折紙と私

山極 徳太郎

今から一三年前、私が満六十才の時に、昔習った折り紙を思いだしベレンの街頭で無料折紙講習会を実施した。

日系の人達よりブラジル人の方が多く、男も女も中年老年の方も私の折り上げる一枚の紙が、見る見るうちに花、ニワトリ、象、自動車と千差万別に変化していくのをみて、にわかには黒山の人だかりとなり、用意していた幾くたばかの折り紙もなくなり講習会を終えて我が家に帰ってきた。

私にとって非常に充実した日となった。

折り紙によって人の集まりが出来、その場で和氣藹々となり、考えながら皆が楽しく真剣に折り上げていく場面を見たとき、私はやってよかったなあーと思った。

大人と子供、男と女、自分の家と隣の家、ブラジル人と外人等、私達の結び付きは何から何まで合理化されて来た今日、どこかで風穴があいているようで、心と心の暖かい触れ合いと云ったものが段々少なくなっていくような気がしてなりません。

紙一枚で人の心がなごみ、心の結び付きが出来、そしてそれがひいては親子の絆や友情等の人間関係にも夢や笑いを折り込む結果になり、暖かい信頼関係が結ばれて行くことを念じていました。

そんな時、はからずもベレン総領事館より「ご都合よければ、ご足労願えませんか。」との連絡を受けて、何事かとおそるおそる出かけた所、高野領事さん竹内領事さんのお二人から、このたび日本文化活動の一端として、日本の伝統である折紙講習会を開きたいのですが一つご無理願えませんかとのことで、私のような者で良ければお力になりましょうと約束した。総領事館主催によるベレン第一回折紙講習会が開かれ、受講者百名にたいして申込者数、百三十五名予想外の成績で一ヶ月間の折紙講習は終わり、今年で一三年間続き今後もある限り協力したいと思っております。



山極氏と折紙展示会

北伯日本語普及センター

理 事 会

理 事 長

丸 岡 義 夫

日伯協会副会長

第一副理事長

増 山 秀 海

日伯日語講座

第二副理事長

山 瀬 檜 雄

カスクニアール校

常務理事

藤 野 章

コツケイロ校

会計理事

大 槻 富貴子

サントアイザベル・サントアン

トニオ

理 事

小 山 次 男

パラー大学教授

〃

新 井 範 明

トメアスー校

〃

小 野 昌 子

カピタンポッソ校

〃

丸 岡 邦 子

コツケイロ校

〃

松 浦 直 子

伯新学園

〃

丸 岡 す み 子

西部アマゾン校

監査役会

第二監査理事

小 川 浩 史

アドベンチスタ校

第一監査理事

渡 辺 悦 子

ベレン校

執行機関

研究部長

小川浩史

〃

副部長

高松志都

〃

副部長

松浦直子

調 査 部 長

丸岡邦子

〃

副部長

小野昌子

教材開発部長

丸岡すみ子

” 副部長

佐々木 敬雄

青年教師育成部長

山瀬 檣雄

” 副部長

葛尾 あゆみ

” 副部長

畠山 由美

広報部長

早川 和歌子

” 副部長

兵藤 砂江子

教員養成所

所長

増山 秀海

副所長

小川 浩史

所員

山瀬 檣雄

”

松浦 直子

”

丸岡 邦子

北伯日本語普及センターの主な事業

◎北伯地域に即した日本語指導法の研究と教材の開発

◎日本語教員の資質向上のための教育講座の実施

◎北伯日本語教員養成所の付設と日本語指導教員の養成

◎日本語教育に関する諸調査の実施

◎関係団体・外部機関の委託業務の推進

あの頃のマスコミ人

コケイロ在住

五 艘

晋



五 艘 晋 さん

日本から来るマスコミの連中が日本に帰って発言するレポートの最後に「そしてこれらアマゾンの日本人達は、故国日本に帰れる日を夢見ているのである。」などと締めくくる作品がアチコチに見受けられる時期があった。

相手の心情を自分の物差しだけで計ってそれで問題を解決してしまう人種と、知らない間に相手の分析対象にされたことも知らない人種との差は何処から来るのか考えてみた。

おそらく啓蒙主義の国に育てられて来た人々と、自由の空気を吸わされてしまった人々との間に派生してきた価値観の相違ではないかと思う。一度自由の空気を吸い込んでしまうと更に限りなく自由を求めるようになって来る。

そしてその自由は、外面と内面の両面に亘って広がっていくので、社会の空気を意識しながら、或いは世間の常識とかしきたりに拘束されて育てられて来た人々とは、人生に対す

る視野の角度がどうしてもくい違つて来ることになる。

服装や肩書きや風格や人種や紹介者や物質などで、相手を選別する習慣がついてしまった人々と、誰でもが一人の人間として対等に対応し、会話が進むにつれて自分の人間レベルに合った友人を、それとなく選び出していく精神に重きをおく人々の社会とは自ずと人間としての住みごごちが違つてくることになる。

しかも、この自由さを内面的にも外面的にも思い切り拡大していける、アマゾンと云う大自然の環境が更に拍車をかける。

人々は自分の意思で、ここに住んでいる限り、人類の文明をタイムマシンに乗らずとも自由に往来することが出来る舞台が、いつでも誰にでも用意されているのである。

遠い昔の狩猟文明時代に行きたければ、カヌーを漕いでアマゾン河の支流をさかのぼり、大小の滝をわたっていけば、原始林の中で狩りをしたり魚を釣ったり野生の果物をとったりして、人生そのものがレジャーの連続であるような生活を望もうとすれば出来るし、農耕文明に戻りたければ田舎で素朴でのどかな自給自足の生活もまた可能となり、工業文明に身をゆだねたければ都市の中で生活していけばよい。

人それぞれが自分の育ってきた環境から何かを学び取り、各々が異なる価値観を持ち、それを決して他人に強要することもなく、相手の価値観を尊重しながら自分と同じレベルの

友人を求めて、森の中で、河船の中で、畑の中で、都会のバーで、道端での会話が始まっていく。

そしてここに住んでいる限り全員がブラジル語を話せるものと思つて話しかけてくる。

彼等は真剣に友達を探しているのである。

たまたまブラジル語が話せないことが分かった時に初めて「外国人だな」と理解してくれる。

半ズボンでゴム草履をつつかけて、バスに乗つて都市の豪華な銀行にいき支店長を訪ねて商談するなど日常の風景になつてゐる。

いろいろの文明が交差する人達が行き来している社会では、服装やら外見より中身が大事になつてくる。

それだけ中身を一瞬観察する能力もお互いが磨いていくことになる。

啓蒙主義の人々にとっては、ここには彼等の教えられたことのない異質なシステムが存在しており、肩書きがないと周囲の人々をひきつけられない習慣にならされた人々にとっては、そのパーソナリティーを問われる恐ろしい ” 試練の道場 ” になつて来る。

それほど自由の空気と云うものは、個人の欲求にあらゆる選択の余地が与えられる快適さがある反面、人間そのものの魅力や実力がためされてくる社会でもある。

お互いが尊敬出来て、好感をもつと強力な友人関係が発生

してくる。

義理とか恩とかで結ばれるタテ社会の関係でなく、同類意識になり必要な時には手を差しのべてくれ、この友人関係はあらゆる社会システムの中でクモの巣のように広がり始めていき、社会的ルールがあるにもかかわらず個人の行動に相応な自由が許されていくことになる。

「カボクロ」と称される原住民がいる。

昔から親子代々と住み着いていた土地者で、年々都会の人口増加と共に農村に追い立てられていく人々である。

他国から来た多くの人達は使用人としてカボクロ達を雇う機会が非常に多く。

そしてこれらの人種を通じてこの国の国民性とか印象などを植えつけられていく。

そして知らずの内にカボクロが全ブラジル人を代表した国民性として頭の中に入っていく。

その為にその観察は恐ろしく貧しいものに変化していく。更に「カボクロは怠け者だ、ずるがしこい。」となってくる。

そのカボクロ達を使用して酷使して搾取しゴマカシして来た側の論理は隠されてくる。

カボクロの世界は団結心が強く信義をもち、正直で特殊の情報網を持っている。

彼等が道義に反する時には相手がそれなりの行為を強要してくるからであり、彼等の価値観も知らない人種にとっては

彼等を嫌悪させている自身の言動さえ気がつかないことが余りに多すぎるからである。

元来、情報と云うものは人間の内部に拡大していく精神の問題にかかわっているにもかかわらず、情報時代の先端に位置すると自称する多くのマスコミの連中が往来しながら、いまだに大蛇やらピラニヤ等にしか興味なく、テレビの取材班に至っては「やらせ」の専門家ばかりで、アマゾンに居住している原住民は勿論、その同邦の本質さえ見抜けないとなると、これらマスコミ人のパーソナリティーが未だ醸成されていないのか、或るいは彼等の作品を評価する読者層や視聴者層に問題があるのであろうか。

もしも、両方に問題があるとするなら情報産業の先端を負する人達の進路は、とんでもない迷路に飛び込んでしまったのではないだろうか。

「そしてこれらアマゾンの日本人達は、故国日本に帰れる日を夢見ているのである。」と彼等の結論は同じように続いていき、あたかもアマゾンの密林の中で道を失った探検隊のような存在となり、それを遠くから眺めていた原住民が「ほら、あれほど注意したのに」と舌うちする風景が目に見え始める。

野球大会のこと

ベレン在住 本 田 利 秋

当地、北伯において野球が組織的に考えられ、行動されたのはトメアス移住地の初期に鎌田謙、戸田子郎両氏の指導と尽力によってトメアス移住地内の若者を集めてグラウンドや野球用具などを自分たちで作り、区対抗の大会などを開き、その技を競いあつたのを始めとするようであります。

その流れが連綿として続き、第二次世界大戦後の移住再開と共に続々と野球の好きな若者たちが海を渡ってやって来て各移住地に溢れ出してきた。

そこで戸田子郎氏の呼びかけで永野敬士、阿部昇、日高寅夫、沢田照夫、村上弘氏等の尽力でその行動範囲を北伯に広げるべしとの事で、一九五七年ここに北伯野球連盟が生まれることになった。

当時、ベレン近郊に居住されておられた鎌田、池谷、河口氏が動き、また移住に直接携わっていた海協連ベレン支部にベレン近郊の青年たちのまとめを頼んだ。

そして第一回北伯野球選手権大会がトメアス球場で一九五七年十一月に開催された。

その後、コケイロ、トメアス、カスタンヤール、サントイザベルと各球場をまわり、今日に至っている。
ちなみに当時の役員を紹介する。

会 長 ・ 辻小太郎
副会長 ・ 戸田子郎、阿部 昇
常任理事 ・ 沢田照夫、村田利秋
会計理事 ・ 向井田、村上 弘
理 事 ・ 永野敬士、日高寅夫
河内信一、河口義雄



田中角栄旗が届いた。右端より本田利秋、
内野領事、増沢総領事、越知、山内、野口、
安井の皆様

当時は戦後の開拓初期と云う事もあり、参加する各選手
にも野武士的な生きのよい若者が多くいて 各試合とも随分
とエキサイトしたものであった。

今でもすぐに目に浮かんでくるトメアスの平川、大屋、古元、岡元、宮内、上杉選手たち。

ベレン近郊の高倉兄弟、長島、菊田、丹治選手と、いずれも当時の大会で活躍した名選手たちであり、この他にも数多くの大会参加選手の方々が現在のコロニアの各方面でリーダーとして活躍されておられます。

五九年の第三回大会は、日本人のアマゾン入植三〇周年の記念行事の一つとして組入れられたこともあつて、盛大な大会となつた。

時の総理大臣、岸信介より優勝旗の寄贈があり、千葉三郎特使より本大会で優勝したコケイロ・チームの菊田選手へ手渡された。

そんなこともあつてコロニアの野球熱は益々燃え上がつて行つた。

六〇年にはサンパウロで行われた念願の全ブラジル野球選手権大会への初出場を果たした。

第五回大会には、遠くマナウスからの参加があり良く頑張り三位の成績をとり、やんやの喝采を浴び大会の役員もその成功に感激したものである。

そして次の第六回ではマラニョン・チーム、モンテアレグレ・チームからも参加があり、名実共に北伯の大会までに発展したことは当初の目的とした北伯にある各コロニアの融和と親睦が野球を通じて達成されたことは、関係者一同喜びを

感じたものであった。

それにしても、六八年頃に役員として入って来られた五艘氏たちの発案で、球場の改修費捻出に当時としては珍しかったモダンダンス一行や手品師等と呼ばひ興行をするとかで、初めて入場料を頂いてカルナバルのバイレをやるとか、次々といろいろの事を手掛けていき、大過なく次の役員に資金が渡されて行ったこと。

五艘氏ほか記録の平賀、石田の両先輩、石垣、松崎の各氏、また球場の改修の度に無報酬でやって頂いた稲垣ラウロ氏、コケイロ球場の土地を提供して頂いた長谷川さん、近くに住んでおられた小沼、河内兄弟各氏の善意によって初めて出来たものであり、心から感謝するものであり、やがて来る球連創立四〇周年に向けて頑張っておられる現役員の方々へコロナあげてのご支援をお願いいたします。

アマゾン病院医師スタッフ

CORPO CLÍNICO-HOSPITAL AMAZONIA

麻酔科・Anestesiologia

池田 幹彦 Dr. Wakihiro Ikeda
Dr. Rosa Maria da Silva Beltrão

循環器外科・Angiologia e Cirurgia Vascular

Dr. Francisco Pedro Azevedo de Oliveira

心臓内科・Cardiologia

Dra. Rosa Maria da Costa Oikawa

小児心臓内科・Cardiologia Pediátrica

岩坂 ルリ Dra. Lury Iwasaka

首頸部外科・Cirurgia de Cabeça e Pescoço

Dr. José Wlter de Castro Moura

一般外科・Cirurgia Geral

越智 健 Dr. Henrique Takeshi Ito
八十島エジソン Dr. Edson Yuzuru Yasojima

整形外科・Cirurgia Plástica

Dr. Alonso Pena Aymoré
生田 勇治 Dr. Yuji Ikuta

胸部外科・Cirurgia Torácica

仁和ウイエルソン Dr. Wilson Yoshimitsu Niwa

一般内科・Clínica Médica

及川 定一 Dr. Teiichi Oikawa
Dra. Rosa da Costa Oikawa
阿部クラウジア Dra. Claudia Sayuri Abe
Dr. Francisco Laurindo de Souza

皮膚科・Dermatologia

戸田エレナ Dra. Helena Savada Toda

内分泌科・Endocrinologia

及川 定一 Dr. Teiichi Oikawa

消化器内科・Gastroenterologia

越智 健 Dr. Henrique Takeshi Ito
岩下 裕子 Dra. Eliza Hiroko Iwashita
八十島エジソン Dr. Edson Yuzuru Yasojima

産婦人科・Ginecologia e Obstetrícia

伊東 澄夫 Dr. Ito Sumio
河村 和子 Dra. Kazuko Kawamura
武藤 和憲 Dr. Akinori Muto

循環器・Hematologia

Dr. Regina Gloria Ferreira da Souza

微小外科・Microcirurgia

生田 勇治 Dr. Yuji Ikuta

腎臓科・Nefrologia

阿部クラウジア Dra. Claudia Sayuri Abe

脳神経科・Neurologia e Neurocirurgia

Dr. Arnaldo Gama da Rocha
八巻 孝夫 Dr. José Takao Yamaki

眼科・Oftalmologia

星野 太郎 Dr. Taro Hoshino
Dra. Eliana Nazaré Magalhães Modesto

整形外科・Ortopedia e Traumatologia

小山 拓雄 Dr. Takuo Koyama
守屋 浩三 Dr. Kozo Moriya
小山さとし Dr. Paulo Satoshi Koyama

耳鼻咽喉科・Otorrinolaringologia

Dr. José Walter de Castro Moura
大沼バウロ Dr. Paulo Akira Onuma

小児科・Pediatria

Dra. Kezia Magalhães Ikuta
八十島ロジニャ Dra. Rozinha Wicco Kudo Yasojima
岩坂 ルリ Dra. Lury Iwasaka

肛門科・Proctologia

Dr. José Getulio de Lima

放射線科・Radiologia

横山アルツォー Dr. Arthur Hirokazu Yokoyama

泌尿器科・Urologia

Dr. Walter Pimentel Gonçalves
本田アルフレッド Dr. Alfredo Takeru Honda

一般検査・Análises Clínicas(Laboratório)

小山エルザ Dra. Elza Koyama
Dr. Luiz Otavio Fonseca
江川ソニア Dra. Sonia Egawa
Dra. Ana Lúcia Moraes

集中治療室・UTI(Intensivista)

Dr. Francisco Laurindo de Souza

当直医・Plantonista (Emergência)

柳橋アルシー Dr. Aicy Tokizo Yanaguibashi

超音波検査・Ultra-Sonografia

笹本 キヨ Dr. Kiyo Sasamoto

病理・Anatomia-Patologia

Dr. Rainero Maroja Filho

アマゾン病院十字路分院・Hospital de Quatro-Bocas

一般内科・Clínica Médica

産婦人科・Ginecologia e Obstetrícia
五十嵐シャビエル・Dr. Francisco Xavier Igarashi

一般内科及び外科・Clínica Médica Cirurgia Geral

大橋 清 Dr. Cláudio Kiyoshi Ohashi

平賀練吉ご夫妻

ベレン在住

渡辺悦子



渡辺悦子さん

元旦や はや萌え初めし

花胡椒

枯川

住み古りて雨漏りあとや

雨季明けぬ

枯川

子なくて母の日静か

猫ひざに

枯川

名も知らぬ薦からまりて

老住まふ

枯川

破れ垣 秋花漫然

老夫婦

枯川

コロナを支えられた平賀先生の輝くご生涯につきましては、すでにあまりにも世に知られておりますが、私が触れました数多いご趣味の中での、特に強く心に残りますすご生活の一面を二、三挙げまして改めて偉大な先生を偲んでみたいと

思います。

冒頭に揚げました遺句からは、先生の質素で静かなご生活ぶりが窺うことができますが、そのご生涯はコロニアを桃源郷となさりたいという高い次元の信念を貫いておられました。

古いお話で恐縮ですが、トメアス波止場に居を構えておられた頃は、連日のお客で絶え間ない接待に明け暮れされ、お宿を自由に開放されておりましたため、それは毎晩のように賑やかな夜となったものでした。

時にはピアノの音、ギターの音色が私どもの家にまでとどいて単調な日々をなぐさめていただいたものです。

時折りご夫妻で合唱される歌声までもが……………。

「シュールベルトの小夜曲」が殊にお好きなようでして、これは平賀先生亡きあと、ラジオから流れるこの曲に奥様は悲しみをこらえきれず泣き出されたこともあるという思い出の曲でございます。

そして一度歌が出始めますと世界の民謡が、日本の民謡が堰を切れたように夜の更けるまで続くのでした。

逗留されていたお客の中には有名な政治家あり、学者あり、外交官、作家、俳優、画家等を問わず入れ替わり出入りしておりましたが、どなたに対しても同じような気配りをされておりました。

絵画もお好きで、ご自身絵筆をとられておりましたが、そ

れはもう理詰めの理路整然とした構図、トーン、明暗が決まっております。

強い光の入り込む窓辺に一つの素焼きの壺をおかれただけの画材ではありましたが、茶色系で調えた落ち着いた作品。今、どなたのお手もとにありますものやら……。

また単調な移住地の日常のこととて、住民との夜の一刻の楽しみに、広い居間を開放されて麻雀となることもありました。

その度ごとに夫人は、大変さを喜びに変えられて、せつせとおにぎりづくりをされるのでした。

他の人のために心を砕かれたことは先生も夫人も意を同じくしておられ、これも理想郷とするための堅いご意思であつたろうと思われます。

大きな宇宙の流れに沿った人生観をもって「人間はすべて兄弟、和をもつて全うすべし」と遺言されて終わられました。が、やはり高貴な精神を一貫された偉大なお方でありますことは、接しられた方全ての同感とするところではないでしようか。

あの人、この人

アナニンデウア在住 本木 健一郎



本木健一郎夫妻（前列）と服部達太郎夫妻（元南拓社員）

「福原八郎のこと」

私は大正七年五月一日に神戸市須磨にあつた福原八郎宅の隣家で生まれた。

父、本木七郎の実兄であつた福原は、幼児期に福原家に養子に出されていた。

福原は東京高商を出て鐘紡に入社、武藤山治社長に選ばれてアメリカに留学し綿の栽培や紡績事業等の調査をしていた。

当時、ロックフェラー財団で黄熱病を勉強していた野口英世とか留学中であつた後年真珠王となる御木本などと親交を結ぶ。

帰国後も鐘紡で精勤し重役となる。

一九二六年に福原がブラジルに出発する時に私は八才であつた。

須磨の家で私を抱き上げて別れのほほずりをしてくれた。

母のオルガンで「螢の光」を弾いていたのを思い出す。

福原はブラジルに行った後、毎年十一月になるとカスタニャ・ド・パラ（ブラジル・ナッツ）を私あてに必ず送ってくれたことを思い出す。

一九三五年にブラジルから引揚げるまで何回か帰国しており、帰国する度に私を抱き上げてくれた。

南拓の事業がおもわしくなく精神的に参つて来ているので、父の七郎に自分のそばに来てくれとの福原からの手紙で、父は渡伯を決意する。

一九三四年に大阪商船「あらびあ丸」の移住者監督として乗込んだ父・七郎は移住者百八〇余名を無事届けたあと、ブラジルに残り福原のいるベレンに着き、福原の仕事を手伝うことになる。

父からの呼寄せで私が十七才の時に母と姉と弟二人で日本を出発したのは一九三五年であつた。

私達の乗った「あふりか丸」がリオの港に着いた時、南拓事業の縮小で傷心の福原は日本への帰途につく所であり、同じ岸壁に福原の乗る「りお・で・じゃねいろ丸」が横付けに

されており、福原が私達を出迎えに岸壁に立っていた。

リオからベレン港まで私達家族は「りお・で・じゃねいろ丸」に乗替えて福原と一緒に過ごした。

福原は私達に、自分はトメアスの皆さんに嫌われて追い出されて出て来たような状態で、この航海はあんまり楽しい旅ではない、と話していた。

船医からは、福原の精神状態が不安定だから甲板の一人歩きはさせないように、と注意があつた。

その為、私と母はたえず福原の行動を見守っていたが、一度は甲板を走りデッキから海に身を投げようとしたことがあつた。

船の中でカスタニャールの事業も資金がないため中止したことも話してくれた。

パラ州での事業が、それほど深刻化しているとは思ってもみなかった。

七月三日にベレンに着いて、これが福原との最後の別れとなる。

その後、ベレンやカスタニャールを歩いて福原の残した事業や交友関係の深さを知るようになる。

「父・本木七郎のこと」

父は東京高等商船学校を明治四十年に卒業するが、学生時代から英語、ドイツ語が達者であつた為に卒業前の明治三十

四、五年頃、当時海軍がアメリカから購入した潜航艇第二号から第六号までの組立作業を井手中佐（のちに少将になる）指揮のもとに参加していた。

卒業と同時に海軍予備機関少尉となり大阪商船に入社する。

初めての航海が「あめりか丸」でサン・フランシスコに向かった。

到着三日前にサン・フランシスコ大地震が起こり、港に船が入った時には街はアチコチ燃えていた。

サン・フランシスコ以外に運ぶ貨物も、本社の許可をとり救助物資として降ろし、船をハワイに向けて運行し、ハワイから更に救援物資をサン・フランシスコに運ぶ。

当時のサン・フランシスコ港湾局長より感謝状を貰う。

二回目の航海が「笠戸丸」で台湾に航海する。

兄、福原の要請でブラジルに渡る時には「あらびあ丸」の移住者監督として乗船し、乗船者二十八家族百八〇余名一同から感謝状を貰う。

リオで下船し福原のいるベレンに向かう時、当時ブラジルの一商船であったコステイラ船会社のイタイテ号に乗船する。

船長はブラジルに帰化していたイギリス海軍将官であったパーヒ・アレッドであった。



木本七郎が監督官として乗ったあらび丸

彼は一九一六年頃、英国艦隊の潜水艦長など務め北海で暴れていたらしいが、ブラジルがイギリスの船を購入したために、その船を持って来るためにブラジルと往来している内に、ベレンに住み着き帰化してブラジル商人の娘と結婚する。

父が彼の船に乗船する前に、大阪商船のベレン代理店であったブース船会社からの連絡で、父の前歴をパーヒ船長は知っていた。

父がイタイテ号に乗船すると船長は父に一等船客の待遇を与え、ベレンまでの航海中は船長・機関長・事務長・船医と一緒に食事をしながらの旅をしてきた。

ベレンに降りてからも父とパーヒとの交友は続き、パーヒはカスタニヤールにいる父に砂糖、コーヒー、チョコレートなどを届けてくれた。

又、戦時中になると貴重品が仲々入手しにくくなった時でも、人を介して主にベレンにあったパルメーラ菓子会社などを通じて届けてくれていた。

パーヒ夫婦の娘フツチは、自分も娘時代から知っていたが、のちの州知事、上院議員ジャルバス・パッサリーニヨ夫人となった為にジャルバスとも親交を深めて行く。

「平賀練吉・清子ご夫婦のこと」

神戸の須磨の家にいるときに、ご夫婦が訪ねてこられたことを覚えている。

但し、すでに結婚されておられたのかどうかは記憶にない。

福原家は来客の出入りが多く外国人などにも交際が広かったので家族全員が英語、フランス語などを話していた。

清子夫人は英語が達者であった。またピアノ、琴なども習われていた。

私の子供の頃をよく知っていたのは、平賀さんより清子夫人の方だと思う。

「前田光世のこと」

背の低い人で、体格がよかった。

「夕食を御馳走するから来い」と連絡があると、これは又説教されるな、と覚悟したものだった。

メイ夫人はいつも親切にしてくれて、邦人焼討ち事件で日本人が移民収容所に收容され、トメアスに移送される間、メイ夫人は友人達の車を借りては知人の間を走り回って日本人の子供たちに、服や靴や日用品をかき集めては差し入れをしていた。

「片岡治義のこと」

一、笠戸丸

片岡さんは笠戸丸でブラジルに移住して来たブラジル移民第一回生である。

叔父にあたる北米から来た西原清東さんに誘われて、サンパウロからパラ州カスタニヤールにやって来ていた。

父が「あんたは笠戸丸の、どの船室に寝ていたのかね」と聞いたそうである。

あんまり父が船内に詳しいのでよく聞いてみたら、笠戸丸の機関長として台湾まで航海していたことがわかった。

笠戸丸はロシアの病院船として造られたので普通の移民船より船室がゆったりしていたらしい。

二、西原清東と本郷勇の大喧嘩

私が片岡さんから聞いた話である。

本郷さんは中南米の金鉱を探して歩いていた人で前田光世さんを頼ってベレンにやって来た。

前田さんは本郷さんの前歴を出させないで測量師として南拓に採用した。

本郷さんがカスタンヤールの南拓農場に来た時に、カスタンヤールには北米カルフォルニアの水田王と云われる高知県出身の西原さんと云う人がいて、大規模の米作指導をしていた。

西原さんが水田王として偉そうな顔をしていたのに腹を立てたのが本郷さん（片岡さんは本郷さんをホラ吹きと云って嫌っていた）「水田王などと偉そうな顔しているが、日本の百姓はみんな水田をやっている。水田の面積が大きいか小さいかの差だけじゃないか」と喧嘩を吹っつけた。

二人は始め竹棒をもって殴りあったが、途中で角材に替えての大喧嘩となり血だらけの鬭争になったらしい。

この話しが伝わり、二人は追い出され西原さんはサンタ・イザベルに行き、そのあと息子のいるカルフォルニアに帰って行く。

本郷さんはエントロカメントに行く。

三、西原さんの息子

一九四三年の終わり頃、カスタンヤールの上空をアメリカ空軍の爆撃機編隊が飛んで来たことがある。

父に聞いたら機種は Mustang だと云う。

ベレン空港に降り立った隊長は水田王・西原清東さんの息

子であつた。

ジープにアメリカ国旗を立てて二世ばかりのアメリカ空軍
将校四人が乗り込んで、カスタニヤールの片岡さんを訪れ
た。

その時の通訳には父が立合つた。

一行は片岡さんをジープに乗せるとベレンに連れて行き、
グラント・ホテルで食事をしたあと、又カスタニヤールまで
送っていき、そのあと編隊機を連れてカスタニヤールの上空
で旋回したあと、ナタール空港で給油してアフリカに向かっ
て飛び立って行つた。

カスタニヤールの住民達は仰天したらしい。

日本人の顔をした軍人がアメリカ国旗をもつて街に入り、
片岡を連れだして又帰つてきた。

一体、何事が起こつたのかと思つたらしい。

「戦争前後の頃の人々」

福原八郎は、その壮大な事業を展開していく為にベレン政
界の情報を必要としていた。

その為にマリオ・マガリヤンエスとその弟であるミルト
ン・マガリヤンエスを秘書として使っていた。

私が福原と別れる時に、福原は二人を紹介してくれてよろ
しく頼むと伝言していった。

しかし、政界の反対派の情報も必要なため、双方の情報を

掴みながら付き合わせて福原は独自の分析をしていた。

その反対派の情報をとるのに特別秘書としてテオドロ・コスタ・パルメイラを使っていた。

彼はアラゴアス州出身でベレンの判事であると共に、フォーリヤ・ド・ノルチ新聞社（現在のオ・リベラルの前身）にも籍を置いていた。

彼と福原との接触は人目につかない夜とか、明け方の時間であつたらしい。

それほど彼と福原の関係は人々に知られなかった。

そうゆう関係があつたために私はベレンでは、テオドロの家に寝泊りしていた。

テオドロの家にはいろいろの人間が出入りしていた。

又、新聞社からのニュースが入ってくるので、世界の情勢、日本の動き、ブラジルの状態なども他人より豊富に知っていた。

戦争が近づいて来た頃、テオドロが私に「日本の動きがおかしくなつて来た。何故なら最近になり日本領事館から朝から晩まで煙が立っている。今まで煙など出たこともない所から出ていると云うことは、重要書類を燃やしているからだ自分たちは判断している」と云ってくれた。

更に当時ベレンに居られたアマゾン産業の九十九（つくも）さんが来られて「日本とブラジルの間がおかしくなりそうだから、お父さんに云って銀行預金など全部降ろしておい

た方がよいと伝えてくれ」と云つてくれた。

一九四一年の暮れに戦争が始まり、翌年の二月頃にクルサーの沖でイギリスの七千噸級の貨物船「スコッチ・スター」がドイツの潜水艦に魚雷を二発くらつて沈められた事件が起こつた。

船の積荷であつたスコッチウイスキーの箱を担いで、カスタニヤールの父の所にカボクロが売りに来たことがある。

父は金が無いからと云つて断つた。

父はそのニュースを聞いて「どうもおかしい、貨物船を沈めるのに大切な魚雷は一発しか使わないはずだ。何故なら潜水艦は敵国の船の設計図を全部持っている。どこに魚雷をブチ込めば沈むか全部知っている。一発で穴を開ければあとは海水が流れ込んで自然に沈んで行くことになる。このニュースはどこかおかしい」と話していた。

テオドロからの忠告で我々日本人が危ないとのことでカスタニヤールに引き揚げる。

七月二十五日にベレンの留置所に父と二人で入れられた。

その時、すでに留置されていた日本人が十九人いた。

我々を入れて二十一名となる。

その中には山田義雄、野原丈児、野原敬太郎、木下又一、高島将元、市原、千葉さんなどが居られた。

数日後、海軍から調査にきて父が海軍士官であつた為、一般人と一緒に収容するなど国際法に違反すると云うことで、

私は父の通訳と云う理由で親子は釈放された。

あとで聞くと当時のカスタニャール郡長であつたマシミーノ・ポルピーノが州知事にかけあつて、「本木はカスタニャールで米や野菜を作つて我々に供給してくれている、本人がいないと畠がどんどんダメになつていくから早く畠に帰すようにしてくれ」と懇願してくれたことがわかつた。

又、パーヒ・アレッド氏から海軍に連絡があつたことも分かつた。

その後、しばらくしてベレンの街で邦人焼討ち事件が発生してそのニュースがカスタニャールの私達のところにも伝えられて来た。

街中の人間がブラジル国旗を立て「日本人を殺せ！ ドイツ人を殺せ！ イタリア人を殺せ！」と騒ぎだしたらしい。その事件のために留置されていた日本人や外国人はトメアスに移されたと聞き及ぶ。

弟の本木省也が学校で勉強していたら、その騒ぎが起こり青くなつていた時に先生が危ないから学校をしばらく休むようにと、翌日午前五時の汽車でカスタニャールまで弟を連れてきてくれた。

後日談になるが、この騒ぎを扇動したのはテオドロ家に入りしていたJと云う若手政治家で、彼は一九三一年の革命軍に参加して牢屋にぶち込まれた経験のある革新派で「自分はコンデ・コマの弟子でもあり、日本人には好感を持つてお

り、かえってアメリカの方が嫌いだ、しかし党の方針や自分の政治的立場を鮮明にしたかった為に行動を起こしたに過ぎない」と弁護していた。

「山田義雄のこと」

私がベレンで野菜売りをしていた頃、山田さんはタパナンで野菜作りをしていた。

野菜を売るためには良く買ってくれる所は何処にでも顔を出した。

その一つに博打場があつた。

私が博打場に入出入りしている噂が広がり、山田さんが心配してやって来た。

「健ちゃん、博打はいけないよ昔から博打で儲かるのは博打屋だけだと云うじゃないか」私は黙っていた。

私が初めて車を買った時、山田さんの作っている野菜を朝早く出かけて市場まで運んであげたことがあつた。

「矢野武雄のこと」

高拓の第一回生、パリンチンスからベレンに出てくる。

柔道が滅法に強かった。

当時、興行界のボスはコンデ・コマ（前田光世）の弟子でもあつたポチ・フェルナンドであつた。

矢野はポチと契約して公園の特設リングで「トツパ・

トウッド」(なんでも来い)と称する試合を興行した。

連日満員で試合は矢野の勝ち放しが続いた。

段々観客が減り、興行を盛り上げる為に矢野はポチより負けるように八百長を示唆されたらしい。

その頃、矢野はちよくちよく私の店にアサイを飲みに来ていた。

「俺は絶対にわざと負けるなど出来ない」と云っていた。

そのうちベレンからいなくなり、風の便りで北東伯の方で柔道道場を開いて有名になった話を聞いた。

(注・本人の口述を編集部でまとめたものです。)

金堀り体験記

ベレン在住 高野 繁 広



高野 繁 広 氏

金(きん)は、アマゾン一帯広範に亘って散在しているみ

たいである。

但し場所によって多いか少ないか、採算に合う量か合わない量かの相違であるみたいだ。

その採算も掘る人の気分次第になってくる。

金脈は不思議なことに、高低はあるけど直線に走っている。

ガリンペイロ（金掘人）達の話では南北につら抜いていると云う。

金掘りには大体二通りの方法がある。

バハンコと称する陸上で採取するやり方で、エンジンと削岩機を持ち込んで金脈に添って岩石や土を割り砕いて、粉々にして水と一緒に樋に流していく、その樋にはジュート布の下に毛布を張って、その上を流していく、出て来た砂金は毛布に刺さっていく。

その毛布をはずして粉石鹼をつけて洗うと砂金と砂鉄などが一緒に出てくる。

それをバツティア（鉄で出来た傘みたいな丸い容器）に移して水銀を混ぜて、水の中で手でかき混ぜながら比重選別を行う。

それを取り出して厚手の木綿布に包んで絞ると金と水銀だけが残る。

それをまたバツティアに移してガスバーナーで焼くと、水銀は蒸発して金だけが残る。

水銀汚染と騒がれているが、バッテリーで選別する際、素手でかき混ぜる時にすでに汚染してしまうことになる。更にそのとき河にたれ流されていく。

ガスバーナーで水銀が蒸発する時には、気体となった水銀を吸い込んでいくことになる。

更にガリンペイロ達と周辺の住民は毎日河の水を飲み、河の中で水浴していく。



金を採掘するガリンペイロ達FO TOミゲール近岡

誰かが金を高く買う限り、生きて行くためには、それしか

方法がない。

バハンコの場合、報酬は日給で支払う。金が出てもなくとも毎日払っていく。

当時、一日一グラムあれば五く六人雇えた。

一日一〇グラム平均とれないと面白くない。

この時は、マラニョン州の方で掘っていた。

もう一つの方法は、シュッパデイラと云う水上で採取するやり方である。

船の上に五〇く六〇馬力のエンジンと水揚ポンプを装置し、吸口六インチ位のホースを使って水深二〇メートルほどの河底から砂金のありそうな砂を船の上に吸い揚げる方法である。

金脈のありそうな河には、潜水夫達の気の合った同志が三人位のグループを組んだアチコチに待機している。

それらと交渉して雇うことになる。

一人が潜水している間に残りは船上で休養したり、一人はコンプレッサーで空気を潜水している仲間に補給していかねばならない。

一分でも空気を止めたら死んでしまう。気のおけない仲間とは絶対にグループを組めなくなる。

金が大量に出ると昼夜交替しながら潜水していくことになる。

船からはポエタと云う錨の代用とする石をゆわいたロープを繋ぎ、その石を掘ろうとする河底に置く。

潜水するときには、そのロープを伝わって石のある河底に行き、ホースで吸い揚げる。

砂ばかり吸わせるとホースがつまるので水との配合が潜水夫の技術になってくる。

潜水服や潜水用具は、日本製をマナウスなどから買ってきて用意しなければならない。

ブラジル製は故障が多いので彼等は絶対に使わない。

吸い揚げた砂と水は船上でバハンコと同じ工程となる。

彼等への報酬は採れた金のパーセントとなる。

水量が少なくて流れが緩やかな場合は二〇パーセント、水量が増えてくると流れも急流になり危険度がともない三〇パーセントになってくる。

私はマデイラ河で九ヶ月シュツパデイラをしていた。

ボリビアの国境近くまで遡ったことがある。

マデイラ河に三千位の船が浮いていると云われていたが、全部を見たわけではないが一千位は間違いなく浮かんでいた。

一船に五、六人は乗っているから船上だけで五千人、両岸の陸上には商人、女郎、麻薬売人、殺し屋あらゆる人間が集まって来て、小さな町が出来上がって行く。

人々は毎日ラジオで金の相場を聞いているので、取引相場はそれに基づいて毎日動いて行く。

ここにはあらゆる人種が集まり正にインターナショナルの様相を呈してくる。

面白いのはガリンペイロには、ドイツ人、日本人が割りに多いことで、日本人の「斎田さん」と云うのはガリンペイロ間では有名である。一匹狼で金掘りと金買いの両方をやっていた。

小型飛行機のテコテコを買い、昨年是一年間で七五キロ採ったと話していた。

金買いは中近東の人間が多い。

突風と豪雨が来た日には船が流され、空気を送っているホースがからまったり切れたりして必ず死人が出た。

死体は近くの岸辺の原始林に添った道端に夜ぶんなげておく。

翌朝それを警察が片付けていく。

一度、夜道を歩いていたら二つの死体につまずいたことがあった。

彼等の情報伝達は恐ろしく早く広範に広がっていく。一回だけ一日に四〇〇グラム採れたことがある。

その日は昼夜に亘って潜水していたから、周りのガリンペイロ達がそれを見ていて、翌朝にはワァーと大勢が寄つ

て来て採り始めたのでどうにもならなかった。

十月か十一月の南半球が夏場に入る頃になると、アンデスの氷が溶けてマデイラ河に流れ込む時期がある。一晩で何メートルも水位が高くなり水温が下がってくる。

島の上に何台も停っていたテコテコが夜中にブンブン音がするので翌朝みると、島が水にうまつて消えていた。

恐らく夜中に情報を受けたパイロット達があわてて避難して行つたに違いない。

一週間に七キロ採つたと云うブラジル人と知り合つた。

採つたところに案内してもらつたが、激流が流れ込んで落下していく滝の落ちる手前であつた。

船を岸辺の大木にゆわいつけて、ポエタには二〇〇キロ位の石をゆわいて錨にしたが、激流のためにその石さえ動いたと話していた。

潜水夫は片手でしか作業が出来ず、五〇パーセントの報酬で契約したが、一週間で七人の潜水夫が激流に流され死んで行つたとの事。

彼等潜水夫たちは、全員が麻薬を常習していた。

しかし多量に常用すると潜水出来なくなること知っている。

やはり恐怖心を押さえる為ではないかと思う。

マラリアには八回かかった。マラリアは二種あつてビ

ボックスと云うのは高熱が出るだけだが、ファシスと云うのは時間の観念がなくなり、周囲の風景がグルグル廻り出してくる症状となる。

両方一緒になると重症になる。

マラリアも段階があつてプラスーとか二とかは軽症の方で、三になると重症、四は生命が危なくなってくる。

しかし、みんな三ぐらいまでは現場で頑張っている。

私も両方かかつて、四つんばいになってタクシーに乗り込み入院したことがある。

病院は全員無料で完治してくれるが、いつまでも入院していると金（きん）を盗まれるので途中で病院を逃げ出してくる。

飛行機から見下ろすと、緑一面に見える大アマゾンの樹海の中では、こうゆう世界も展開していることを知ってもらいたかった。

胡椒の黄金時代

トメアスー在住 押切 正三

私が山形県尾花沢市からトメアスーに移住してきたのは一九五五年（昭和三十年）の年であつた。

丁度終戦から十年目の頃である。

当時、山形の郷土ではラジオが全戸に普及し始めた頃であつた。

田畑の動力は牛や馬であり、外出は自転車であつた。

日給が二五〇円から二八〇円の時代であつた。一ドルが三六三円と記憶している。



氏 正 切 押

それがアマゾンの都市ベレンに着いて、更に河船で一昼夜もかかり深閑とした密林に囲まれるアマゾン河支流を朔つてやつとたどり着いた、日本からみれば地球の果てのように感じたトメアスー村では、日本人の各家庭がトラックやトラクターを所有しており、乗用車は一台か家族の多

いところでは二台を持ち、自家発電装置を備え冷蔵庫はガスか石油であつたがどの家庭にも一台か二台あり、一六ミリ映写機を所有し、腕時計はローレックスの金時計をはめ、まさにカネが唸っている黄金境であつた。

一ドルが三八クルゼイロスで一クルゼイロスで約一〇円の価値があつた。

胡椒の相場が一キロ一七〇クルゼイロスであつた。たしか六屯積のトラックが一台九〇・〇〇〇クルゼイロスしていたと思う。一屯の胡椒でトラックが約二台近く買えたことになる。

いま考えてみれば、まさに無茶苦茶の時代であつた。遠くサンパウロから、トメアスの噂を聞きつけたいろいろな商人が飛行機に乗って売込みに来ていた。

勿論ベレンの商人も入れ替わり立ち替わり来ていた。ある商人と話をしていたら、トメアスでは同じ品物なら値段を高くしないと売れないと云うことも云っていた。

労働者の賃金が日本人の成人が日給四〇クルゼイロス、女子三〇クルゼイロス、未成年二〇クルゼイロス、ブラジル人労働者が一六から一七クルゼイロスであつた。

手のひらに乗せた胡椒の粒で労働者一人を一日使えたわけである。

サンパウロに遊びに出かけた連中が料亭青柳を借り切つて



押切他男農場の初代苗。

中央・小山明子さん（白井牧之助氏の息女）



「黄金期の胡椒乾燥風景」

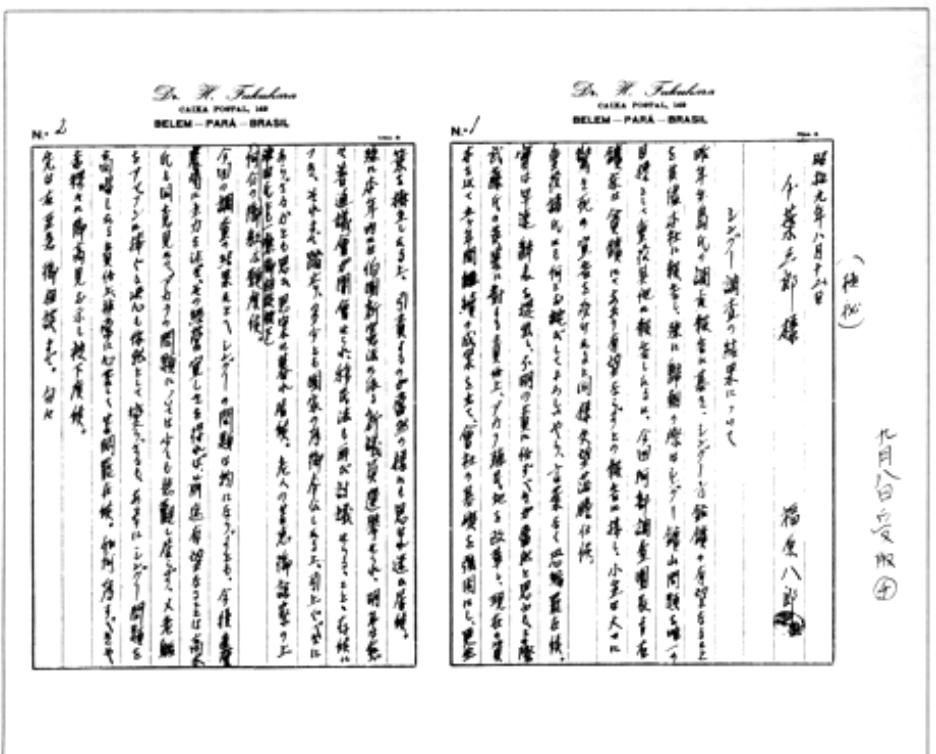
ドンチャン騒ぎをしたとの話も聞いた。

胡椒一キロの生産原価など、誰に聞いてもわからなかった。ともかく肥料など何でも買って畑に入れば、収穫が増えると云うことで細かい計算など誰も関心持たなかった。

私なりに計算を始めてみた。

支柱代から始まり、穴掘り、植付け、除草、施肥、収穫等あらゆる支出を経費として計上した結果一キロ当り二五クルゼイロスの原価になったことを覚えている。

福原八郎の手紙



(写真説明)

福原八郎より千葉三郎（衆議院議員）宛の手紙、シングレー河流域の鉛鉱が有望だと本社へ報告したが、日本から調査に来たその結果で、モノにならない事が判明。「小生は大いに驚き死の宣告を受けたると同様失望落胆仕候」とそのりが記されている。
書状中に阿部調査団長と記されているのは三菱鉱業の阿部技師で杉山技師とともに一九三四年（昭和九年）にシングレー河流域の鉱物調査を行っていた。

『アマゾン日本人移住前史』

堤 剛 太



堤 剛 太 氏

ペルー下り川本イトさんの話

アンデスの山脈を越えてペルーからブラジル国へと入国して来た日本人達が、アマゾン地方に古くから居住していた。

これらの人達を通称「ペルー下り」と呼んでいる。

アマゾンへの日本人移住は公式には一九二九年からであるが「ペルー下り」の人達は、これより二十数年は以前にアマゾンに住みついており、これらペルー下りの人達が入った一九〇〇年代の初めを、アマゾンに最初に居住した日本人と記録してよいと思われる。

居住したと断ったのは、もっとそれ以前の一九九〇年（明治二三）にアマゾンを通過した日本人がいるからである。

竹沢萬次と云う人で「シルコ・インペリアル・ジャポネーヌ（日本帝国サーカス）」と言う名のサーカス団を引連れ、マナウスで興行を行なっている。

この竹沢と言う人は四国出身の士族の子であつたらしい

が、軽業師としてフランスに渡り、その後リオにやって来、ドン・ペドロ二世のもとで皇帝の護衛官相手に武術を教えたと言う。

一八八九年に起きた共和革命により皇帝が退位し竹沢は職を失ったが、昔とった杵柄で宮殿に出入りしていた芸人達をさそいサーカス一座を結成し、アマゾナスからウルグアイ、アルゼンチンまで興行をして回っている。

アマゾンに足を踏み入れた最初の日本人はこの竹沢萬次であらう。

最近日本で刊行された本の中に「ペルー下り」の事が記されてあった。

「アマゾンのゴム景気の噂を聞き、次々と移住者達がペルーを離れて行った」と簡単にペルー下りの理由が記されてあったが、ちよつと違ふのだ。

日本人移住者達が移住地を逃亡したのは、耕地での待遇がひどかった事と、マラリアや腸チフスにばたばたと倒れ不安だった事からのものである。

ペルー国に入った日本人移住者は一八九九年（明治三二）第一回移民として七九〇名が上陸しているが、一年後には百四十三名が病氣などで死亡している。僅か一年で十八%の死亡率である。

逃亡先としてゴム景気に湧くアマゾンの噂を耳にし、アンデスを越えた人々がいた、これが「ペルー下り」のゆえんで

ある。

当時のアクレ直轄地は、特にペルー下りの人達の溜り場みたいになっており百人を越す日本人がすでに住んでいたと云う。ブラジル国内で恐らく最後の生存者と思われるペルー下りの川本イトさんがベレン郊外のタパナン地区に住んでいた。六年前に初めてイトさんの許を訪れ、ペルー下りの生の証言を聞く事ができた。

イトさんは老人性白内障を患っており視力はほとんどなく、終日をベットの上で過ごしていた。

イトさんの年齢は当時九一歳、記憶力は抜群で夫の清八さんとペルーを逃亡してベレンへ辿りつくまでの七年間の流転の日々をよく覚えていた。



「川本イトさんのペルー下りの記憶は鮮明であった」

清八さんとイトさん夫妻がペルーの耕地を離れる動機と

なつたのは、二歳の長男がバナナを揚げる煮たぎった油の入った鍋に、誤つて落ちて死亡すると云う事故からである。イトさんらがアンデスを越えた一九一九年頃はペルー下りのルートができており、アンデスの山のふもとには日本人の宿屋まであつたという。

金を出せば馬に乗つて山脈を越える事もできた。

川本さん夫妻は、まずボリビアへと降りて行つた。

ボリビア国の日本人移住者はやはりペルー下りの人達がパイオニアのようで、一九〇八年頃から住みつき始めている。

日本人のゴム園で暫く働くが、この後ブラジル側へと移りアクレのシャプリーそこからまたアマゾナスの首都マナウスそして最後の地パラ州のベレンへと一九二六年頃辿り着いている。アマゾンへの日本人移住が開始される三年前であつた。

この頃、ベレンの町には日本人の先住者達がすでに居た。宮城県人の高橋庄介、福岡県人の江口保治、西原吉助、アメリカから流れついた本郷勇、この他玄場松一や岩永只次、変わったところでコンデ・コマこと前田光世も居た。

(このコンデ・コマについては別稿で詳細を記している。)

ベレンの町に日本人が最初に居住したのは一九一六年の高橋庄介である。高橋もペルー下りであつた。

もつとも居住者でなく一時的な滞在者となると一九二一年の岡本専太郎の名をあげたい。

岡本は一九〇九年に日本から英国へ渡航し、一九一二年に英国のリバプール港からブラジルへと渡つて来ている。マナウスに到着後ベレンにやって来、ここで暫く船大工やペンキ塗りの手伝いをしていた。

ベレンで半年程滞在した後、リオ、サンパウロ市、バウル、ドアルチーナ、マリリア、そして再びサンパウロ市へと戻り晩年は悠々自適の生活を送っている。

余談となるが、一九五二年のヘルシンキ・オリンピック水泳一五〇〇メートル自由型で水泳ではブラジル初のメダリスト（三位）となった岡本哲夫は専太郎の四男である。

岡本の様に、ヨーロッパからアマゾンへと入つて来た若者達は他にも居た。後に成功者として記録にとどまれば、ピツクアップすることも可能である。

渋谷駒平という人も岡本等の仲間である。岡本と同じ年に英国からマナウスに到着、マナウスで英国系の倉庫会社へ入った所、岡本とバツタリ出合わした。

岡本はマナウスを経てベレンへと行き、渋谷はリオへと移る。

リオを経てサンパウロのソロカバナ線沿いの土地を購入し農業、商業で成功を治めている。

岡本、渋谷等の話しでは英国リバプール港の近くに、日本人経営の旅館があり常時四十数名の日本人青年がゴロゴロとしており、主に北米への密航を策していたと言う。岡本、渋

谷以外にもマナウスを目指した放浪の若者達が居たと言うが、これらの日本青年の記録を調べるのは、もう不可能である。

話しはイトさんへと戻るが同じペルー下りの縁で高橋庄助の働いていたカステロ・ブランコ街にあった菓子屋を川本さん夫妻は頼って行き、そこへ住み着く事ができた。

ベレンでの生活が落ち着いてきた頃、夫妻は現在の“ウーナ”地域付近の土地を購入し野菜作りを始めた。パラーにおける野菜作りの第一号である。



「イトさんの住居と息子と孫」

夫の清八さんは、一九三九年にイトさんと六人の子供達を残して五十三歳の若さで死亡している。

イトさんはハワイ移住者の子である。幼児期に両親に連れられハワイへ渡り少女時代に日本に帰国、そして川本清八さんと結婚しペルーへと移住している。

イトさんは実に数奇な人生を送っている。しかし驚くほど強執な精神である。イトさんは一九九一年九月十七日九十五歳という高齢で生涯の幕を閉じた。

両親と共に送ったハワイ移住時代、清八さんとのペルー移住、その後の流転、清八さん死後の生活との闘い、イトさんの九十五年の人生を想うと心から「ご苦労様でした」と頭が下がってしまう。

イトさんと出合った事で、私は一つだけイトさんを喜ばせた出来事がある。

実はイトさんの三男ルイの娘クリビアが、乳児期にコンデ・コマ家の養女となっている事をイトさんの口から聞いた。

この話を聞いた数ヶ月後にコンデ・コマの調査でそのクリビアさん宅を訪れた事がある。

イトさんの事をクリビアさんに問い合わせてみると「おばあちゃんの事は聞いた事はあるが、まだ会ったことはありません」との答えだった。私は是非おばあちゃんに会う様ちよつとお節介をした。

それからまた何ヶ月か時が過ぎクリビアさんに出合った。「おばあちゃんの所へ行きましたか」

「はい、初めて会いました。おばあちゃんが泣いていました」
このクリビアさんの言葉に私も思わずジーンと来てしまった。

アマゾンに眠る柔道王

コンデ・コマ

アマゾンの日本人移住史中、最も特異な存在の人物といえ
ばコンデ・コマであろう。

講道館柔道七段の、この柔道家の本名は前田光世。世界を
武者修行した後、ベレンでその一生を終えたロマンの男で
あった。

コンデ・コマが最初にベレンへやってきたのは、一九一五
年（大正四年）。一九〇五年に講道館の命を受け柔道普及のた
めにアメリカへ渡って以来、丁度十年目の年であった。

前田光世は、一八七八年（明治十一）青森県中津軽郡船沢
村で出生している。（初代の横綱若乃花も中津軽郡の出身）。
親が命名した名は『栄世』であったが、その後成人して『光
世』に改名している。

前田は、少年時代より剛力で六〇キロの米俵を二俵軽々と
かつぎあげていたという。村の人々は前田少年はきつと相撲
取りになるとひそかに期待していた。

一八九六年十七才の年に前田は東京に出、早稲田中学から
東京専門学校（現早稲田大学）へと進んだ。

十九才の折、相撲ならぬ柔道の道を志し講道館へと入門した。

二十四才時には早くも三段に昇格。当時の昇進試験はかなり厳しく講道館で三段以上の高段者は指を数える程度の数であつた。

前田の実力は館の中でもずば抜けており、空気投げのあの三船久蔵十段ですら当時は、小僧っ子扱いで齒もたたなかつた程である。

前田は、これより前の二十一才の年に同郷の古川タカと結婚しているが、翌年離婚した。

一九〇六年、この年前田の一生の運命を変える出来事がある。

講道館が、米国よりの要請を受け柔道普及のために三名の高段者を同国へ派遣することとなり、前田がその一員に選ばれたのである。このメンバーは、講道館の四天王の一人富田常次郎六段（姿三四郎の著者・富田常雄の父）に前田四段、佐竹信四郎四段であつた。

一行は、ルーズベルト大統領の前で親善試合を行ったり、陸軍士官学校での指導等を終え帰国することとなった。

しかし帰国したのは、富田常次郎六段のみであつた。前田と佐竹はニューヨークに残り柔道の道場を開けたが、講道館流の稽古では入門者がついて行ける筈もない。

道場はすぐ閉鎖された。

この後、両名は食って行く為と腕試しを兼ねて、賞金をかけた公開試合を行った。

ボクサーやレスラーなどとリングの上で闘うのである。前田の身長は百六十四センチ、体重七十キロ、これに対し百八十センチ、百六十キロの巨漢レスラーがある日挑戦してきた。

前田四段は、なんなくこのレスラーをねじ伏せてしまった。信じられない様な光景を目にした観客は熱狂した。一夜の内に前田の名は、ニューヨーク中に知れ渡ってしまった。この後、前田、佐竹のコンビは闘いの場を求めヨーロッパから中南米を歴訪、一千回にもものぼる格闘の全てに勝利を上げている。

キューバからホンジュラスへ入り南下し。パナマ、エクアドルを通りアルゼンチン、パラグアイからブラジルへと入国したのは、一九一四年十一月十四日の日である。

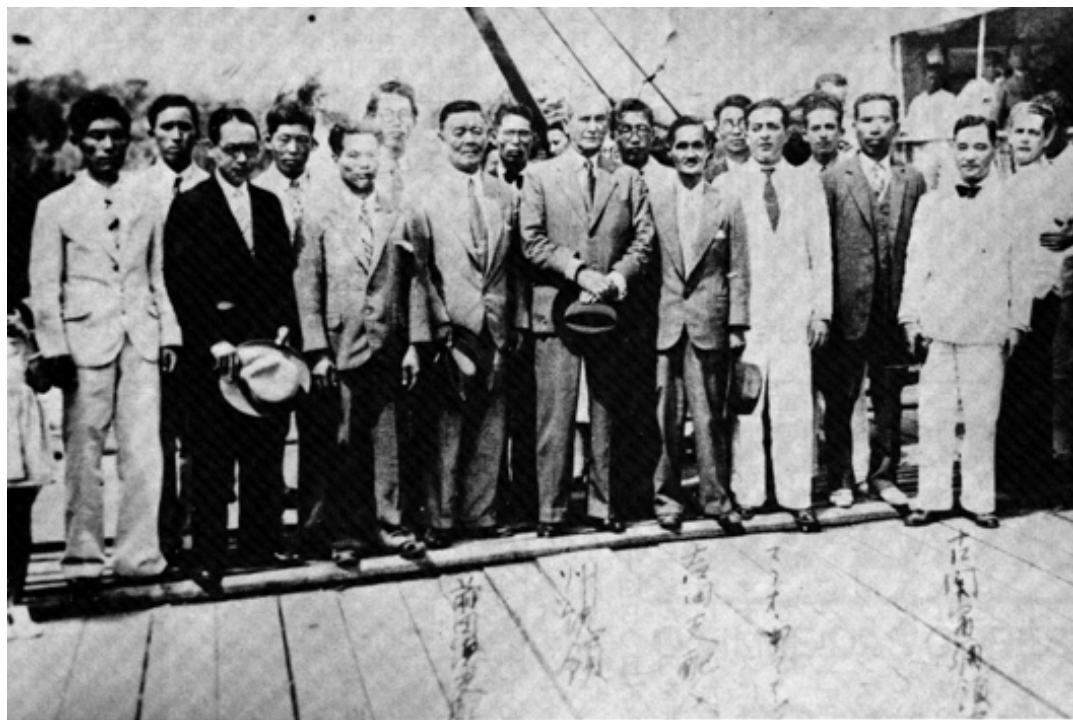
この後、ブラジル国内を北上しベレンの町へと辿り着いたのが一九一五年。翌年マナウスに赴き、再びベレンに戻つて来た。

前田はベレンに一九二一年まで居住した。この間フランス名誉領事の娘オルガと結婚している。

（日本の籍には入っていない。）オルガが病没した事から、前田はベレンを離れ、旅に出る事となった。

一九二一年、古巣のニューヨークへ戻りそこからキューバ、

メキシコ、かつての古戦場の跡を辿って行った。
一年後、前田は三度びベレンの町へと戻って来た。前田に
とってベレンの町は、安らぎの地であつた様だ。
一九二二年、看護婦デージー・メイ・イーリスと知り合い正
式に結婚する。



ジョゼ・マルセル州総領（中央）と並ぶコンデ・コマ（左横）右端に古関領事代理

この時から死亡するまでの十九年間、世界をまたにかけて
活躍したコンデ・コマこと前田光世は、すっかりアマゾンの
一都市の人間として、この町へ定着、一九二九年から始まる

日本人移住者の大きな力となり移住事業へ新たな闘いを挑んだ。

特に開拓初期のアカラー植民地（現在のトメアスー）は過酷な条件下、農作物の不振が続き、移住者が唯一のよりどころであつた南拓も混乱をきわめており、コンデ・コマはこれらの人々の相談相手としてまた精神的な柱として大きな役割を当時果たしている。

コンデ・コマに実際に世話になつた当時の人々の証言を聞くと、コンデ・コマは単に腕っぷしが強いだけの武道家ではなく、意外とこまやかな愛情を持ち合わせた心豊かな紳士だつたようである。

それだけにコンデの名が今だもつて人々に語り継がれているゆえんである。

前田がブラジルへ入国した年が第一次世界大戦勃発、そして死亡した一九四一年は、奇しくも第二次世界大戦が始まつた年、前田は開戦の十日前の十一月二十八日その波乱万丈の一生を終えた。

ところでコンデ・コマ（高麗伯爵）の名称の由来は何だったのか興味をひかれるところである。

幾つかの説があるので紹介したい。

△メキシコで三千ドルの賭け勝負に勝ち、雷名を轟かせコンデ・コマの闘技爵名をもらった。

△スペインで名を高め、スペイン国王よりコンデ（伯爵）の

称号を受けこれに、日韓併合（一九一〇年）を記念しコマ（高麗）の名を自分でつけた。

△スペインで巡業中、対戦する相手が「前田」と知ると誰も挑戦してこないのに困り「これは困る、それにこの頃不景気で困るわ」と言っている内に、「前田 コマル」となった。

これでは語呂が悪いので「前田コマ」となり、そこへスペイン人の知人が、前田の強さはコンデに値すると尊称をつけこの「コンデ・コマ」が一躍ヨーロッパ中へ広がった。

このいずれの説が正しいのか前田が生存中に親交のあった幾人かの老移住者に問い合わせて見たが、皆はつきりとした回答はなかった。

このコンデ・コマの名は、それだけ当時の人々から自然に慕われていた呼名であったのだろう。

海外人間模様

ニースレター

アマゾンに眠る柔道家

日本の名広めた前田7段


「前田の柔道場を手にしたアフリカ人」

転戦の末 安住の地

現地で道場、厚い人望


前田下段の柔道場と安住の地

コンデ・コマは今でも時折日本のマスコミにぎわす。

汎アマゾン日伯協会創立の頃

コッケイロ在住

丸岡 義夫



丸岡 義夫 氏

汎アマゾン日伯協会の設立は1958年（昭和三十三年）七月一日、辻小太郎らにより、ベレン総領事館会議室に於て各入植地代表者六十六名が参集して、創立総会が開催され辻小太郎を初代会長として設立された。

これは戦後移住が再開されてより五年目の事である。

その目的は、全アマゾン在住邦人を打って一丸とする組織の協会にして、日本の十一倍に当るアマゾン地域に約七千人の日本人移住者とその子弟が散在し、各地に形成された日本人会を統合団結する事で、その融和と日伯親善、子弟教育、文化、経済の発展を図ろうと云う一大構想であった。

更に各地方の世話役が選ばれて評議員会も組織されたが、これは一堂に会することは不可能であったことだろう。

ベレンには、1952年よりパラ―日本人会（長谷川貞雄会長）という親睦団体が活動していたが一大団結の主旨に賛同し、汎アマゾン日伯協会設立後、1960年一月十七日

に解散した。

（創立会員）

名誉会長・福岡 総領事

名誉副会長・広瀬 副領事

会長・辻 小太郎

第一副会長・長谷川 貞雄

第二副会長・平賀 練吉

第一常任・星野 修

第二常任・越知 栄

第一会計・向井田 枝

第二会計・江村 良造

理事・佐藤 宜正

理事・山田 義雄

理事・山ノ内 登

理事・古田 純三

理事・小川 鎌一

理事・玄場 松一

理事・大橋 敏男

理事・市原津南三

監査役・大嶽 一

監査役・本木 七郎

監査役・笠原 三雄

監査補・

相沢 玄治

監査補・

五十嵐 明

監査補・

白井 丈貴

評議員会長・

山ノ内 登

評議員副会長・古田 純三

幹事・

江口 精

幹事・

鈴木一郎

幹事・

小川 鎌一

創立総会では、アマゾン移住三十周年祭を翌年十一月十五日に開催することが決議された他、記念事業として会館建設が決議された。



建築委員の笠原・江村・辻会長・技師・戸田

一九五九年四月十日には、皇太子殿下御成婚記念としてパ

ンアマゾンニア会報創刊号が謄写版刷りで発行された。

この巻頭で当時の福岡総領事は「共同団結してこそ事がなる。一人一人の力では何時かは崩れる。ここに於てアマゾン在住邦人及び日系人中の先覚者によつて、今まで困難視されていた団結の端緒が開かれ、いよいよ発展した汎アマゾンニア日伯協会こそ、実に在住邦人及び日系人の自分のものであり、又、この団体によつてこそアマゾン地域の日伯両国の親睦増進、融和と共同発展が出来る土台が築かれるに至つたものと考ええる。」と、一方ならぬ協会設立の喜びと期待にあふれた挨拶を載せている。

この団結の意義は、混迷を深める今日にこそ益々必要事であらう。

緑の地獄と云われた未開の地を安全の地へと、困難辛苦と多くの先輩の犠牲の上に開拓が進められ新産業が次々と興された。

その一里塚から汎アマゾンニア日伯協会が産声を挙げ、その団結を固めて文化的に精神的にコロニアの拠りどころとなつていった。

日本側では、上塚司氏を会長とした「アマゾン会」が、アマゾン関係の名士四十六名で発足した。

又、会館建設募金も始められ、この年七月には日本政府、岸首相の訪伯を機として藤山外務大臣より二〇〇万円が建設資金の一部として下付された。この後、建設用地をノーベ・デ・

ジャネイロに購入が決定、一九五九年十一月十五日、アマゾン移住三十周年記念祭が盛大に挙行され、その式典の中で会館建設定礎式が行われた。

アマゾン移住三十周年を
記念して建設された日伯
会館



日本政府に会館建設補助金の申請をしていたが、一千二百万円の助成が内定したのが明けて一月、しかしながら当初の予算計画の半分であり、建設規模の変更を余儀なくされた。

一九六〇年二月十一日、会館建設委員会結成、三月には設計図が出来、六月二六日に念願の起工式を行うことが出来た。

この年一月二四日には、協会が社団法人として正式に登録された。

しかし、日本政府の助成金は交付が遅延し、更には資材、労賃の六〇%以上の高騰もあり、建設が危惧される事態となった。

地元募金が少ないので、その進行状況によって交付すると情報の接した役員は、このままでは計画の実行は不可能なため、計画の縮小または次年度予算で高騰による不足額の助成を再申請した。

だが、これは受け入れられずに一九六一年三月までに予定の計画を完成せよとの要求があり、結局日本政府助成金は辞退するより方策なしと決定、その旨が通知された。

助成金交付の遅れは伯国のインフレにより、当初の予算額も価値が半減、当時の移住者の経済事情からも、それらを負担しきれないと判断されたものである。

一時、頓挫しかけた会館建設は建設期限の延長と設計の縮小が認められた事で、再度助成金を受けて建設を開始することとなり、募金にも拍車がかけられ、六二年一月一日に新年祝賀会をその新講堂で催すとともに上棟式が行なわれた。

ここに汎アマゾンア日伯協会は名実共に、次の一里塚への

歩みをすすめる事となった。



アマゾン移住60年祭記念事業で完成なった「アマゾン日伯文化交流センター」日本政府（JICA）、全国知事会、経団連、神内良一氏、日本側有志、地元募金で資金が調達された。

アマゾン日伯援護協会略史

ベレン在住 大嶽 一



大 嶽 一 氏

一、創立。

一九六三年七月、汎アマゾン日伯協会辻小太郎会長は、当時の在留邦人日系社会に於ける情勢から、日本移民の入国定着を援助しまた移民の為に福祉援護事業を行う一つの民事団体、即ち移民援護協会の設立の必要性をパンアマゾン誌を通じて広く在住邦人に呼びかけたのをきっかけに、次いで同年八月一四日に開催された日伯協会理事会に於て、これを正式に取り上げ、創立準備委員会を設置することを決定した。

同準備委員会は、医師今田求、海協連ベレン支部長一本杉豊、コロナ代表阿部昇、山ノ内登の四氏に、定款の起草及び事業方針等に関し検討することを依頼した。

しかし、日伯協会そのものは非常に消極的で、また委員会内にも意思の疎通を欠くものあり進展を見ず、この準備委員会は自然消滅したため、新たに山田義雄、今田求、一本杉豊の三氏が發起人会を組織し、一九六四年九月、設立準備委員

会を作り、アマゾン日本移民援護協会設立趣意書なるパンフレットを作り各地在留邦人、日系人に配布し積極的に設立に向かつて第一歩を歩み出した。

同年々末に至って定款の起草も完成し、十二月二十九日最終的準備委員会を開催した。

そして翌一九六五年一月二十六日を期し、創立総会を開催することを決定した。

予定通り一九六五年一月二十六日午後二時、日伯協会講堂に於て、創立総会が開催され、定款の審議決定、役員の選出が行われ、ここにアマゾン日本移民援護協会が創立されたのである。

管轄範囲は、パラ州、マラニョン州、アマゾナス州、マカパー、 Rondônia、アクレ及びリオ・ブランコ各直轄州でアマゾン全域に亘り広大なものであった。その後マナウスに総領事館が設置され、同館管轄地が分離独立した。

役員として発起人の山田義雄は事情により顧問となり会長に戸田子郎、第一副会長今田求、第二副会長阿部昇、専任山ノ内登、第一会計越知栄、第二会計難波栄蔵、理事に長谷川貞雄、山田功治、千葉彦洋、大橋敏男、監事に江村良造、村田利秋、堀口次郎の諸氏がそれぞれ選出された。

二、アマゾン病院設立。

一九六九年日本人アマゾン移住四十周年の記念事業の一環

としてアマゾンニア病院建設を決定し、全コロニアの力を結集し、この建設に向かつて一致団結した。貧富の差なく浄財が集められ、また日本政府よりも一千三百万円の助成金が下付されたほか、南伯の日系商社よりも多大な寄贈を受け、一九六九年十一月十四日、日本人アマゾン移住四十周年記念祭典日に、日伯協会の好意により同協会敷地の一部に建設されたアマゾンニア病院の落成式が挙行された。



大きく育っているアマゾンニア病院

在アマゾン日系社会の地位の向上発展に伴い、又その他諸般の社会情勢の変化は、アマゾニア日本移民援護協会と云う一つの単なる日本移民だけを対象とした援護活動と云うイメージから脱皮し、地域ブラジル社会を含め大きな活動が望まれて来たため、名称を新たにアマゾニア日伯援護協会と改め、移住福祉援護活動の充実を計ることを決定し、一九七四年六月二日臨時総会を開催し名称変更を行い現在に至っている。

四、第二病棟の建設。

日本人アマゾン移住四十周年を記念して建設したアマゾニア病院も、利用者の増大に伴い更に完備した病棟の必要性が痛感され、一九七七年初頭より第二病棟建設の機運が高まり、建設資金調達等に関し理事会は真剣に検討を開始した。そして日本船舶協会の笹川良一会長より一億円の寄付を得て、また地元有志の協力のもとに一九七八年五月起工式を行い、翌年の一九七九年十一月六日、日本人アマゾン移住五十周年の記念日に落成式を盛大に行った。

因みにアマゾニア病院の医療器材はレントゲンや内視鏡等を初めほとんどが国際協力事業団の供与になるものである。

五、トメアスー十字路病院の建設。

トメアスー十字路には援護協会の診療所があり、同地域の日系人のみならずブラジル人の診療に当っていたが、現地日系人の要望に応え病院を建設することになり、一九七八年一月落成に漕ぎつけた。

同病院の医療機材は、これまた国際協力事業団の供与になるものである。

六、厚生ホーム建設。

かねてより日伯協会の学生寮を借り受けて経営していた厚生ホームも、その後シダージ・ノーバの援協敷地内に移転し運営していたが、入居者、また入居希望者の増大などもあり、日本政府の助成金により、設備等の完備した新しいホームが建設され、一九九一年四月四日落成式が挙行された。

定員十一名、敷地も広く中にゲートボール場もあり、娯楽室も完備している。

七、結び。

現在（一九九三年三月三日）会員数一九二一名のうち二世会員が一〇九九名で約六〇％を占めている。

会員の在住地はパラ州は勿論、マラニョン、アマパー両州、バイショ・アマゾナスと広範に亘り、医療サービスを初め福祉援護事業を活発に推進している。

六十年祭々典までの思い出

アマゾン日本人移住六十年祭々典委員会

コッケイロ在住

委員長 佐藤 平治



佐藤平治 60年祭々典委員長の労をねぎ
らう エリオ・ゲイロス州知事…当時

アマゾン日本人移住六十周年祭典委員長として当時を振り返ってご挨拶申し上げます。

一九八六年二月の汎アマゾン日伯協会の定期総会で一九八九年十一月に行う予定のアマゾン日本人移住六十年祭と記念誌発行並びに記念事業として、日伯文化交流センターの建設が、会員皆々様のご賛同を得て日伯協会では色々と根回しを始めた次第であります。

総領事館 JICA などのご指導を仰ぎながら、協会の機関誌を通じ、また地方委員会などを介して啓蒙して参りました。

訪日した時には外務省領事移住部移住課、JICA移住部、アマゾン協会、日伯中央協会、海外日系人協会、日本海外協会、日本海外移住家族会、全国知事会、経済団体連合会を訪問し、祭典への参加とご支援とご協力方を要請致して参りました。

一九八七年十一月正式にアマゾン日本人移住六十年祭祭典委員会が発足し、仕事の方も日増しに大きくなり祭典の為に事務局を設置し、シンボルマークと標語の募集選考を行い、堤事務局長が応募した「開拓の汗で輝くアマゾン移住六十年」を採用することになりました。

当地域に日本人が入植したのは一九二九年九月であります。

先達の日本からの移住者は言語、習慣、風土の異なる赤道直下の熱帯で、開拓の斧を振るい、汗と血と涙にまみれ病魔と闘い、ジュート、ピメンタ・ド・レイノ、ハワイマモンなど農業を基盤とした新産業を興し、日本人移住者の果たした業績はブラジル社会から高く評価されています。

我々の二、三世は政治、経済、学術、文化等あらゆる分野で活躍し、国の発展と日本との親善交流に大きく役割を果たしております。

一九八八年二月、私と副委員長の林丈一氏並びに丸岡義夫氏の三名で訪日、丸岡氏（北伯天理教教会長）の関係で東京天理教本芝大教会の白木原明広氏（アマゾンに最初にハワ

イ・マモンの種を持って来て下さった方で、ハワイ・マモンはその後に大きな産業になりました。)のご厚意で都ホテルに十一日間宿泊させて頂きました。

その間、外務省、JICAを始め関係機関を訪問致し、趣旨説明と記念事業として文化交流センターに付いての具体的な計画書の説明を行い、資金の調達についてご支援とご協力を要請致しました。

全国知事会では、まず日本政府が出す案件であること、会議には案件を提出しますが各知事の意向で決まるとのことでしたので三人で都道府県を廻ることになり、関東、東北、北海道の各県庁を訪問致し、ご支援とご協力をお願いして参りました。

非常に感触はよく、ご理解して頂いてもらった様でした。全国知事会の意向に添っている県が大部分でありました。

宮城県では知事さんが面会して下さい「皆さん、本当にご苦勞様です、ご活躍を祈ります。ちよつと待つて下さいよ。」と、ご自分から外務省と愛知和夫先生に電話をして頂きました。

北海道からホテルに帰って来ますと、外務省中南米局長の坂本重太郎氏と愛知先生から電話があり、早速私に会いたいと云うことでした。

日本の政治権力は、中央主導型で政府の助成金が出なければ全国知事会、経団連また一般の人々も相手にしてくれませ

ん。

我々のように外国生活の永い者にとつては、とても理解出来にくい点でありました。

坂本局長より「アマゾンからご苦勞さまでです。来年はアマゾンだけでなく、コロンビア、ペルー、ボリビアと四ヶ所が予定されており、コロンビアが辞退するようなので四千万円位予算を取りたいと思います。」と本当に有難い言葉を頂きました。

愛知先生はフランスに日本文化交流会館を造られたのとことで、国際交流親善に大いに働いておられる方で、ご理解がありいろいろと励まして頂きました。

私も帰って林、丸岡両氏に報告し、訪日した甲斐があつたと大いに力づけられ、自信を取り戻しました。

日本の関係者にご支援ご協力を頂きましたが、特に国会議員の先生方、外務省移住課長小嶋氏、アマゾン協会の川口勲会長、仁科雅夫（元ベレンJICA所長）、酒井事務局長、全国知事会総務部長の小林広氏などの強力なご支援がありました。

さて中部地方を、廻り新潟県を最後に四月十三日上野駅に着き、夕食にみんなでうどんを食べましたが、私は一箸食べただけでもどしてしまいました。

宿舎に帰って水を呑んでもすぐもどして夕食はとりませんでした 四月十四日、丸岡氏の案内で近くの病院で診察を受

け、薬を貰ってきましたが全然効き目なく、天理教会長ご夫妻が大変心配して下さり、すぐ五反田の通信病院消化器科の斎藤部長先生に連絡され直ちに診察、四月十五日に入院し点滴を受けて、気持ち悪いのと痛みはとれました。

何回も色々な検査を受け、六月六日に神経性胃潰瘍で胃の分泌に酸が多く、胃の3分の1と胃の神経を除去する手術を受けました。

結果は良好で七月四日に退院することが出来ました。

いろいろな方々からお見舞いを頂き、特に北島三郎音楽事務所から大きな花籠をいただき話題になりました。

前会長の山崎太郎氏は東京芝白金の東大病院で、日伯協会と援護協会の副会長山田功治氏は出身地熊本の病院で、援護協会副会長の野口義美氏と相次いで死亡され、今度は私の番かと心の隅で感じたこともあり、入院してすぐに家内を呼び寄せました。

家内も心配しながら付添った様です。

退院してからも通院が義務付けられ、通院後に外務省、アマゾンマゾニア協会、千葉県庁を訪問しました。

千葉県はパラ州と姉妹関係で交流があるため、アマゾン日本人移住六十年祭にご支援を要請してまいりました。

ベレンに帰って総領事館、JICAベレン事務所を訪問致し、訪日の結果報告と今後のご協力をお願い致しました。

早速、六十年祭典委員会を招集し、訪日結果の報告と具体

的な今後の進展についての協議を始めました。

祭典が近づくにつれ、連日のように執行部各部門に亘る会議がもたれました。

「祭典の主役はコロニアにあります」このことを会員の皆様によくご理解していただきました。

会議では反対意見もありましたが、決まると積極的に協力して下さいました。

尚、滞日中にかねて神内講堂の建設計画と資金調達で要請してありましたところ、プロミス社長の神内良一様から東京の宿舎に電話があり、サンパウロの日伯援護協会会長の竹中正氏と私と丸岡義夫氏が福田屋と云う料理店に呼ばれ、奥様も同席され懇談致しましたときに資金の見通しがついた感触を得ました。

ブラジルに帰国する前日の大雨の降る中を、新橋の事務所を訪問致し、副社長さんと松根秘書長と具体的な話し合いがされた時に確信を得ました。

私は宮城県出身ですので、帰国してからサンパウロ在伯宮城県人会から大橋鉄雄さん（元会長で七夕を母県から導入された立役者）の他二名の方に自宅に二週間ほど滞在して頂き、七夕の製作指導をしていただいて、祭典の前日にベレン婦人会の応援を求めて完成し会場に展示され祭典に一段と花を添えることが出来ました。

祭典の二日前からは、朝五時から夜十一時頃まで、お客様

のお迎を致しました。

日本政府派遣の慶祝使節団の先生方、全国県議会からの各県会議員の先生方、一般の方々、国内からはリオ・デ・ジャネイロ、サンパウロ、マナウスからの慶祝団の皆様達が参加して下さいました。

パラ州知事のエリオ・ゲーロス、文化長官パエス・デ・ローレイロ氏達の積極的な協力がありました。知事からは交流センターの備品購入として一〇万ドルの確約を得ました。

二、三世たちが進んで協力して下さい、外部との交渉やポ語文書の作成、通訳などで、大きな力となり、特にブラジリアまで行き連邦政府よりブラジル銀行を通じて四万ドルの寄付を頂きました。

この祭典が大成功に終わることが出来たのは、一重に日本政府、JICA、パラ州民の各界の皆様と、日本の関係団体、現地総領事館、JICA、現地産業組合、コロニアの皆様、奉仕された執行部と各委員会がしばしば徹夜で頑張ったことや、事務局の皆さんに厚く厚くお礼申し上げます。

祭典が終わってから、総領事館主催で懇談会が行われましたが、本木千一郎慶祝使節団長は、私に対して「立派な祭典でした。世界の三百何ヶ所を廻りましたが、ベレンほど現地の人々と、とけ合って友好関係が良好な所はありません」と、お誉めを戴きました。

現地のマスコミが、連日に亘り、新聞、ラジオ、テレビで報道して下さり大きな力となりました。ご協力いただきました各界の皆様にも再度のお礼を申し上げます。

眼で見る アマゾン移住 六十年祭々典



(写真説明)

上段・ベレンでの式典光景

下段・エリオ州知事も出席

左・平和劇場の会場を埋めた参加者



右・移住先駆者代表戸田子郎氏への感謝状が佐藤委員長より。



日本からの芸能団の
訪問も相次いだ



右・コロンビア舞踊・花柳劇会
左・大道芸人、ギリヤーク尼ヶ崎の熱演



物産展会場で人目をひいたトロピカルフルーツの山

上段左・日本からの祝賀客が次々
空港へ到着した。
上段右・セー教会での記念ミサ光景
下段左・上村慶祝団々長(中央)と説明役の物産展
上村委員長(右)、左端・大川総領事
下段右・教会を一杯に埋めた参列者



二世グループが主体となって開催したシンポジウム



レストラン「都」

日本料理・中華料理・一品料理・ステーキハウス・その他
寿司コーナーや日本間（座敷）も用意しております。



- * 豊富なメニューで新鮮な味をお楽しみ下さい。
- * 結婚式、宴会の大小を問わずご用命下さい。
- * お客様専用駐車場の設備も有りますのでご不自由は、おかけ致しません。

Tv. 1º de Março, 766 Belém - Pará
Tel: 223-7785 223-2355

NIPONICA COMERCIAL LTDA.

Av. Conselheiro Furtado, 1864
Fone: (091) 223-7906 Fax: 225-2796 CEP 66.040-100
Belém - Pará

代表 武藤信義

家具製造・販売

木材の輸出



60年祭のシンボルマーク
（山本陽三氏作品）



上段・移住の故郷トメアスーでの式典模様
中段左・内外からの慶祝団を歓迎する宴会も
ベレンヒルトンを会場に催された
中段右・ベレン市内には祭典を祝う広告があ
ちこちで見られた
下段左・お隣のアマゾナス州マナウス市でも
祭典は盛大に開催された

アマゾン地域各州における

邦人移住地の現況



ロライマ州編

アマゾン地域と言ってもロライマ州の首都ボア・ビスタは、他のアマゾンの都市とは趣きが多少違う。

日射しが強い事は強いが、肌にまといつく様なあのベツタリとした蒸し暑さは無く、風も心地好く気候的にはしのぎやすい所である。

地理的には北緯二度四九分一九秒と、ブラジル国の中で唯一、北半球に所在する首都となっている。

（細かい事を言えば、アマパー州の首都マカバーは北緯〇度二分二五秒と、かろうじて北半球にひっかかっている感であるがこれは無視）。

ボア・ビスタから南下して隣州アマゾナスの首都マナウスへと抜ける国道が開通しているが、七八〇キロメートル全線の走破は無理のようで、普通カラカライーと言う所からバルサに乗換えマナウスへと向かっている。

サンパウロ州のリメイラという町から、十二台のトラックで二万五千本の柑橘類の苗木をボア・ビスタまで陸送してきた人にたまたま会ったが、二十四日間もかかってしまったとボヤいていた、やはりこの州は辺境の地としてはブラジル一かも知れない。

むしろ他国のベネズエラやガイアナへ向かった方が一番近く、ベネズエラとの国境までは国道百七十四号線で二百二十キロ、ガイアナへは百四十キロとボア・ビスタの郊外程度の

距離である。

ロライマ州と言えば最近一番話題を集めていたのが、インディオ・ヤノマミ族とガリンペイロの紛争であろう。現在は、実力行使でガリンペイロを追放したので両者間の争いは小康状態を保っている様であるが、州の五分の一ほどは占めそうな保護地の面積では、政府の目もそう届く筈もなく一説には三万人も居たと言うガリンペイロ達の侵入を、そういつまでも防いでいられないのではないかと思う。



橋を渡りガイエナへと向かう・国境まで140 km

同州に関する情報は割に少なく何となく隔離されている様なイメージの州であるが、マナウスから飛行機に乗れば一時

間そこそこで到着する距離である。

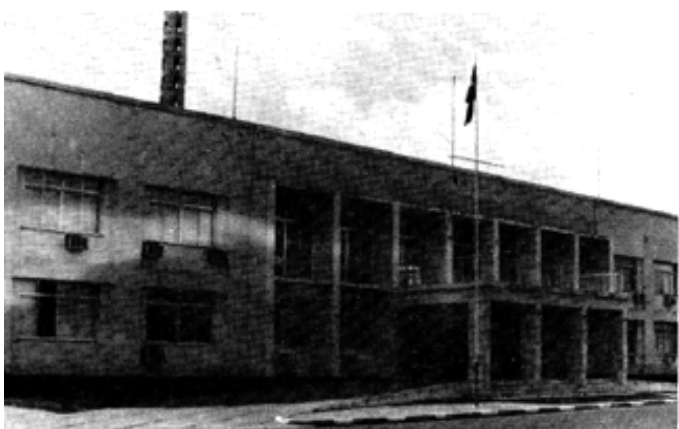
この州に日本人の移住者が入ったのは一九五五年というから、今から二十八年前の事である（その頃ロライマ州はリオブランコ直轄領であつた）。

当時の交通手段は川を渡る舟しかない。ボアビスタ一带に広がる草原地帯を利用して牧畜が早くから営まれていたが、これらの牛をマナウスへと運ぶ舟が頻繁にリオ・ブランコ川を行き来していた。

日本人の移住者もマナウスからこの牛を乗せて来た帰りの空舟を利用しボアビスタへと向つた。



ボアビスタの中心地



ロライマ州の州庁

日本の神戸港からパラ州の首都ベレンまで一カ月の航

程、ここからマナウス行へと舟を乗換え、マナウスから更にポアビスタ行へと乗換え、このベレン⇨ポアビスタ間が一カ月と言うから、幾ら何んでも遠すぎるのではないかと、どこかに文句を言いたくなってくるが、

「こんなに遠い所とは、まったく知りませんでした」

と当時の入植者土井モヨさんも当初あまりの辺鄙さに驚いてしまったらしい。

日本人移住者が入植した地はポアビスタの町外れに二家族、ポアビスタから更に九十キロ北へ向ったクイアーノというコロニアへ十一家族が入植している。

一九五五年に入ったこれらの第一陣の移住者達は、実はベルテラ・ゴム園から転住してきた人達であった。どうしてベルテラから転住して来たのかは、小誌に設けてある年史の一九五五年の項に記載してあるので説明を省略するが、第二陣が一九六一年に日本から直接クイアーノへ入ってきた時には、ベルテラからの転住者達は僅か四家族しか残っていなかった。

この第二陣の九家族プラス単身一名計五十三名の移住者達は、佐賀県出身者で占められていた。

ロライマ州の首都の人口は現在十八万人程度、日本人移住者達が入った頃はせいぜい一万五千から二万人程のものであった。作物を作っても消費人口が非常に少なかった。

一九五五年にボアビスタ近郊に入植した佃千鶴子さんは「町外れのミランジーニャと言う所で夫（故・善三郎さん）と野菜作りをしました。が、本当に生きるだけといった状況でした」と往時を語る。

ボアビスタ市内には当時の入植者中、この佃千鶴子さんと子息達それに土井モヨさん（佐賀県組、夫の堅三郎さんは故人）一家、秀島みす子さん（佐賀県組、夫の幸男さんは故人）一家が健在である。

土井さんも秀島さんも「土地は良かったけれど町から遠すぎて、特に雨期には二つあった小川が溢れて道路が通れなかった。病人を自転車に乗せて九十キロ先のボアビスタ市内まで運んだこともあった」と、立地条件の悪かった事を口を揃えて語ってくれた。



向かって左より、社会長、佃、秀島、土井の皆様

クイアーノ移住地に入った移住者達は結局、年月の差はあれ全家族その地を立ち去っている。

ボアビスタ市内で踏みとどまったのが、先の三家族の人達であった。いやもう一人居た。家族と離れクイアーノへ残った青年が一人、今でもそこに住んでいると言うからこれはすごい。この人は非日系人と結婚し、農業を継続している。

ロライマでは、一九八〇年代に入り連邦政府が植民地計画を発表し、他州からの農業者を募った。

この折、東北伯や南の方から三〇家族程の移住達が転住して来た。

その中に、一家族だけ日本人の農業者が混じっていた。この二十年ぶりの日本人農業移住者は辻一夫・郁さん夫妻である。

辻さんは、マナウスから永大の合板をベネズエラへ陸送する仕事を六年間続けており、ロライマについてはある程度熟知していた。

辻さんは、アマゾナス州ベラビスタの移住者である。「気候が抜群に良い」との理由からマナウスの仕事をたたみ、ボアビスタ市より十五キロ地点のモンテ・クリスト移住地へと入植した。

辻さんは養鶏と養豚を現在営んでいるが、ボアビスタ市内の卵の二十％は辻さんのものである。

この時の植民地計画は、うまく行かなかった。辻さんのみ

が持ちこたえ見事に成功の花を咲かせている。他州からの見学者があると州側は、辻さんのグランジャに必ず連れて来ると言う話しであつた。

ロライマは一九八八年に直轄領から州へと移ったが、州政府が今一番力を入れている移住地がボアビスタから北へ七十キロの地点にあるパッサロン移住地である。

州側は、この地に四十家族の日系人農業者を導入する計画である。

一九九一年五月、パラ州のサンタイザベルから加藤奨一さん夫妻と弟の幸男さんが移住してきた。ベレン空港まで州の飛行機が迎えに来た。

加藤さん等は、サンタイザベルから二十人の労働者を引き連れてのロライマ入りであつた。

牛の空舟から飛行機での出迎え隔世の感である。

マモン畑の加藤幸男さん



新保校長（右）



ボアビスタから北へ二百二十キロ、ベネズエラとの国境地帯にサマーンと言う入植地がある。ここに入ったのが、開発青年の外館君である。

外館君は、加藤さんと同じサントイザベルにある、パラエンセ組合に派遣されていたものである。

このサマーンにはもう一人、神（じん）と言う人も居る。神さんはロライマ北部農産組合の理事長をやっている人だ。

州側のこれら日本（系）人農業者にかける期待には、我々の予想以上のものがあり過剰すぎはしないかと幾分心配であるが、これがまた余計な心配と言うやつで、これらの農業者達がしっかりと州側の期待に答える成果を上げているから痛快である。

ロライマ州に居住する日系人は、全部で二十家族程度である。異色の人では、一九九三年に国立の農科大学が新設され、この初代の学長になった新保ムネヒロさんがいる。新保さんは高拓生移住者の子弟で、アマゾナス州パリンチンス生まれの二世である。

ボアビスタは、公務員の町である。連邦政府、州政府、市、その他公社、公団の職員であふれている。

市内の人口の八割が、これらの人との事だ。しかも皆、他の州から来ている人達である。

ナタールの時期になると、ボアビスタの町は空っぽになっ

てしまいうらしい。

皆、故郷へ帰って行くのだ。これらの公務員の中に、日系人も大分いると言うが正確な数字を把握する事はできなかった。

ブラジル最北端のロライマで生活する日系人達は、当初隔離された様なイメージを持っていたが、色々と調べている内に、ベレン周辺にクイアーノ出身者や親戚等がごろごろという事が判明した。

アマゾンの邦人はやはり一つだなど、つくづく思い知らされた。



バスサロン移住地の入口

パラ州編

パラ州内に邦人の集団地は、十九地域ある。

勿論、この他の地域にも居住している邦人は居るがこれは散発的で、これを逐一拾い上げて行く事は困難である。

一応、これらの十九地域に的を絞って集団地を紹介して行きたいが、ほとんどの地はトメアスー移住地を離れた移住者達が転住して行った先である。

ベレン市内

現在百二十万のベレン市の人口で、アマゾン地域では最大の都市である。

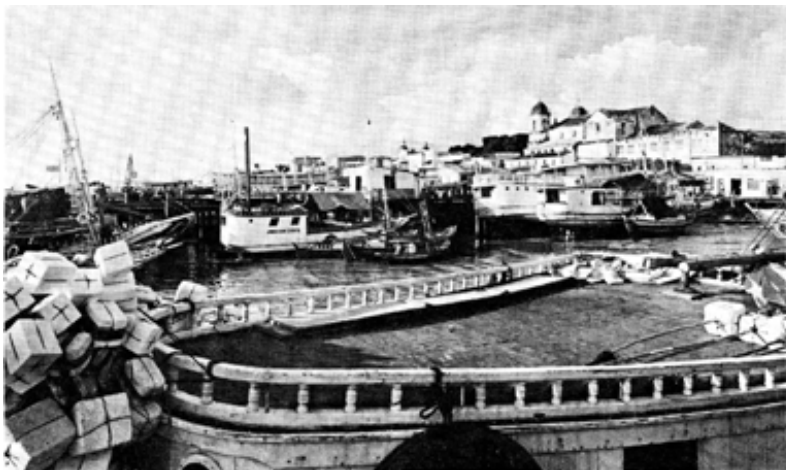
湿度が年平均八十六%と、同じアマゾン河流域の都会地マナウスの八十二%を越える。

サンパウロ辺りから飛行機で帰ってくると、ベレン空港に降りたった途端、ムワーツと生温かい空気に身体が包みこまれ「おっ帰ってきたなー」と何となくホッとしてくるから慣れとは不思議なものである。

もともと、カメラや顕微鏡のレンズにはカビがはえるし、暫らく着なかった服も臭くなっているはで被害の方もかなりある。

雨もよく降る。大体十二月の終り頃から雨期に入り、五月の初め当りに終るが最近は、時期がズレてきたり、雨期にも

かわらず雨が降らなかったりと気候が変わってきている様だ。それでも年間の平均雨量は、二千六百を少々越えている。



ベレンの港の風景Foto ミゲール近岡



マンゴーの並木がベレンの町の特徴だ

ベレンに居住した当初の日本人達は、ペルー下りの人等である。

菓子屋に勤めたり、アイスクリーム屋を始めたり、ペンキ塗りをしたりと色々な職業について糊口をしのいでいた訳だ。

その内、野菜作りを始める人も出てきた。アカラー植民地（トメアスー）へアマゾン第一回目の移住者が入植した一九二九年以後は、南米柘植会社の事務所も出来てあちこちから日本人がベレン市内へ集まり出した。

アカラー植民地を脱耕してきた人、アマゾン奥地からの退耕者等が取り合えずベレンへと移ってきたものだ。

一九四一年の調査では、市内から近郊にかけて約七十家族の邦人が居住していた。

この後、第二次世界大戦とともに邦人は全員アカラー植民地へと軟禁させられてしまった。

終戦とともに再びベレン市内へと人が戻ってきた。



終日賑わいを見せるベレンの商業地帯

一九五八年に調査された市内の邦人数は八九家族・三百七

十七人となっている。

入植初期（一九三〇年代）のベレンの町の様子を大嶽一さんが汎アマゾン日伯協会の会報「パンアマゾン」百八十八号に記しているが、これによると「日本人と云えば南米柘植株式会社社員、領事館員とか少数の野菜作り位いのもので、我々が町を歩いていると物珍らしがられる一方、町の悪童達から「シナ・マカコ！」と言ってからかわれたものでした」とある（マカコとは猿の意）。

大嶽さんの記述では、タバーレス・バストスへの曲がり角から先は、馬と人がやっと通れる位の道しか無く再生林が続き、サントイザベルとかカスタニャール方面へ行くのには薪をたいて走る汽車しかなかった、とのことである。

現在のベレンの町からは想像だに出来ないが、サントイザベル在住の第一回アマゾン移住者大橋敏夫さんの話しでも「マラリアの心配がなかったのは、ベレン市内でも植物園辺りまででした」とのことで、ベレンの町が河岸のシダーデベリーヤを中心に、徐々に内陸部へと発展して行った様子がよくわかる。

これは、交通の手段が河舟から車へと移って行った歴史に平行している。

ベレン市内の居住者としては草分け的な長谷川貞雄さんや五十嵐明さん達の畑は、植物園の近くにあった。

今では、住宅地として一等地に入る所であるが、当時は町

の外れ長谷川さんは植物園の裏手の森で炭まで焼いていたと言う。



パラ州の州庁

現在、ベレンの町には五百家族の日本・日系人が居住している。

他州からの日系人も増えてきている。その他、トメアスーやカスタニャール、モンテアレグレ等の地方からも子弟教育の為に、アパートをベレン市内に所有する人が増えて来た。また、ベレン市内の居住者の職業も多種多様で、居住地域も一部固まっている区はあるものの広く市内に分布している。

かつての様に、ほとんどが商業者で住む所はシダーデ・ベériaと特定化する事はできなくなっている。

この他、二世の世帯主層がグンと増えてきているのも特徴であろう。

コッケイロ移住地

移住地と記してしまっただが、この言葉は今は適切でないかも知れない。

コッケイロ地域で農業を営んでいる人は、指で数える程になってしまった。

ベレンの町が、東の内陸部へと急激に発展しておりベレンとの隣接地であるコッケイロは、すっかりベットタウン化してしまった。



かつての農村地帯のプロビデンス街道

特にシダーデ・ノーバ（新市街）地区は、住宅供給公社の

建設した二戸建ての住宅の団地となり、かつてはこの地区がトメアスーに次ぐのではないかと言われたほどの、日本人による胡椒の栽培地だったとは俄かに信じられない。

コッケイロ地域の先住者は、ベレン市から転住してきた長谷川貞雄さんで一九五三年にこの地へ入っている。

同時期に立岩助信さんが共同経営者河内東一さん、稲垣丑三さんとともに胡椒栽培の為カパネマから転住してきた。

当時のコッケイロは、サンブラスからブラガンサ鉄道に乗り十三キロ地点にあったプロビデンスシア駅の左手に広がる農村地帯であった。



ブラガンサ鉄道・サンブラス駅々舎跡Foto ミゲール近岡

パラ州は、このブラガンサ鉄道のおかげで、古い時代から沿線地帯が盛えている。

一八八四年十一月には、マリアフマッサと呼ばれる蒸気機関車が最初の区画であるベレン―ベネピーデス間の二十九キロを走っている。この後、終点のブラガンサまでの二四五キロ間にレールは延長されて行く。ちなみに、日本最初の鉄道が新橋―横浜間（こちらも二十九キロ）に開通なったのが一八七二年（明治五）であるから、それから僅か十二年後にはアマゾンの片田舎の町から村を、当時の最新の交通機関が走っていたのだから、これは驚きである。

コツケイロはベレン市と目と鼻の距離であつたため、一九五五年に日本人を導入してベレン市の野菜の供給地へと計画案が、ベレン市会へあがつた事がある。クアレンタ・オーラ川沿いの土地であるが、この計画は地域住民の反対等がありお流れになっている。

集団では入って来なかったが、地の利の良さから自然に日本人が増えてき、また胡椒栽培に適していた事もあり、アマゾン河中流地帯、トメアスーや他の入植地からの転住者が増え、プロビデンスシア街道沿いは、胡椒園やキャベツ、トマト、キュウリ等を作る畑で活気ある農村風景を見せていた。

一九六〇年頃のコツケイロ地域の邦人人口は、四十五家族を数えている。

同年、パラ州は五十四年ぶりの大豪雨に見舞われた。海

抜ゼロに近いコツケイロの被害は甚大であった。

一九六五年代に入ると胡椒に胴枯病が蔓延し始めやがて、同地域のピメンタ栽培も他の作物に転耕せざるを得なくなってしまうた。

胡椒から農業、そして養鶏の里としてのコツケイロの変容である。一九七五年頃より同地域は住宅団地として、更に変貌していく。

かつてのピメンタ園や野菜畑、養鶏場、コロニアの野球場が住宅地として次々と姿を変えて入った。

農村地帯としての当時の面影が今でも残っているのは、クアレンタ・オーラ街道を奥に入った武田司平さんの養鶏場辺りであろう。

現在、サントイザベルに本部を構えているパラエンセ産業組合の発祥の地は、このコツケイロで一九五六年長谷川貞雄、大橋敏雄、大橋康男、河内信一、伊藤善正の六名によって設立なったものである。

現在の同地域の邦人人口は七〇家族を越えそのほとんどが、シダーデ・ノーバの住宅団地に入居している。

タパナン移住地

ベレン市の外れのエントロカメントの交差点を左に入り、イコアラシーの町へ向う州道の十五キロ地点辺りにある。この州道はブラガンサ鉄道の支線がかって走っていた所であ

る。

タパン地域の一画にベングイーと言う町が誕生して、周囲の環境が一変した。

この町は、土地を不法に占拠して住みつくポッセイロ（不法侵入者）達によつて作り上げられた所である。

雲霞の如くポッセイロ達が集まって来、それこそ一夜の内に木造小屋を建て、その数が何百ともなれば、土地の所有者も何等手の施し様がなくなる。

人が住み出せば店ができ、道も造られその内バスも走り出す、市も放つて置くわけに行かず水道や電気の設備をする。広大な不法占拠地はやがて町の体裁を整える。

しかし住んでいる人達は、ほとんどが低所得者層なので犯罪が頻繁に発生する。

野菜、果樹、養鶏などを営んでいるタパン地域の農業者の悩みは、栽培作物を盗まれる事である。卵も鶏も格好の標的にされてしまう。

また、住宅の波が農業地の周囲まで押し寄せて来、衛生上の問題から保健所に営業停止を命ぜられた養鶏家も出てきた。

タパン地域への邦人入植第一号は、一九四九年トメアスーから転住してきた菊池俊光さんで、翌年ペルー下りの川本清八さん一家がベレンより移転した。

同地域は、コッケイロと並ぶベレンまでの近距離地で、野

菜や胡椒栽培にその後、次々に日本人移住者達が入植してきた。

一九五八年のタパナン地域の邦人は三〇家族百七十三人となっている。



タパナン移住地へ入る道

現在は、相次ぐ盗難や強盗に嫌気をおこして日本に引揚げて行ったり、出稼ぎを利用して家族毎、日本へ行ってしまった人等で十数家族になってしまった。

居住者の数は毎年減少しており、タパナンの往時を知る人にとっては淋しい限りである。

アナニンデウア移住地

ブラガンサ鉄道（一九六四年廃線）でコツケイロ（プロビデンシア駅）の次がアナニンデウア駅であった。

アナニンデウアはベレンの隣りの市で、コツケイロやタパナンと同じような事情から集団地が形成されてきた。



森が消え木造の家が次々と・アナニンデウア

即ちベレンが近く、交通の便も良かったことである。戦後、同地域には二十一家族程が住み、胡椒や野菜栽培に従事していた。

ベレンへの地の利の良さが、今では少々裏目に出てしまっている。タパナンと同じ様に不法侵入者達が、周囲を取り囲む様な形になっている。

特にひどいのは、国道を右に入り太陽クラブの野球場へ向う支道沿いである。

あの辺りは再生林の森で、何十という蝶々が集団で樹々の間を飛び交っていたのを見たのはつい最近のことである。

井上一高さん宅に用事があり久し振りに支道に入った所、本当に目を丸くして驚いてしまった。

あの緑の森が消えてしまっていたのだ。跡地には、木造の小さな家々が延々と続き、ものすごい数の人々が通りを行き来していた。

一九九一年四月にベレン都市圏内の失業者率を州政府が発表していたが、これによると十一・三% 数にすれば五万五千人と出ている。

仕事もなく住む所もない人々が、ベレン近隣の土地へと侵入して行く訳である。

同地区の明るい話題としては、土山岩吉さんがゲートボールの屋内コート場を、アナニンデウア市内に建設し老人達へ開放している事である。

雨期のあるアマゾンでは貴重な施設で、老人達の健康作りや社交場として大きな役割を果たしている。

同地区への邦人の入植は戦前から始まり、田中良介、長谷川保二、本木七郎、立岩助信、四釜信造、工藤講二、内藤茂三郎、鈴木一郎さん等がパイオニアである。

胡椒の衰退とともに、同地域での農業者が減り、現在は十家族そこそこの小さな集団地となってしまった。

ベネビーデスとモエマ移住地

アナニンデウアを過ぎてマリツバ、ベンフィツカ、ベネビーデス、モエマ辺りに五、六十家族の邦人が在住していた。日本人会もベネビーデス（一九六三年設立）とモエマ（一九七〇年）にそれぞれあったが、邦人の減少とともに現在はベネビーデスのみになってしまった。

ベネビーデス地域への移住者の導入は、比較的古い時代から行なわれている。

一八七五年から七六年にかけてパラの長官を勤めたフランシスコ・マリア・コレイア・デ・サー・イ・ベネビーデスという人物が、欧州からの移民六八名を一八七五年四月ベネビーデスへと入植させている。

当時ゴム景気でふくれ上がるベレンの人口とともに、食料の自給が急務であった。

ヨーロッパからの移民は、以降二十七年間に亘って続けられ四千人がブラガンサ鉄道沿線に入植している。

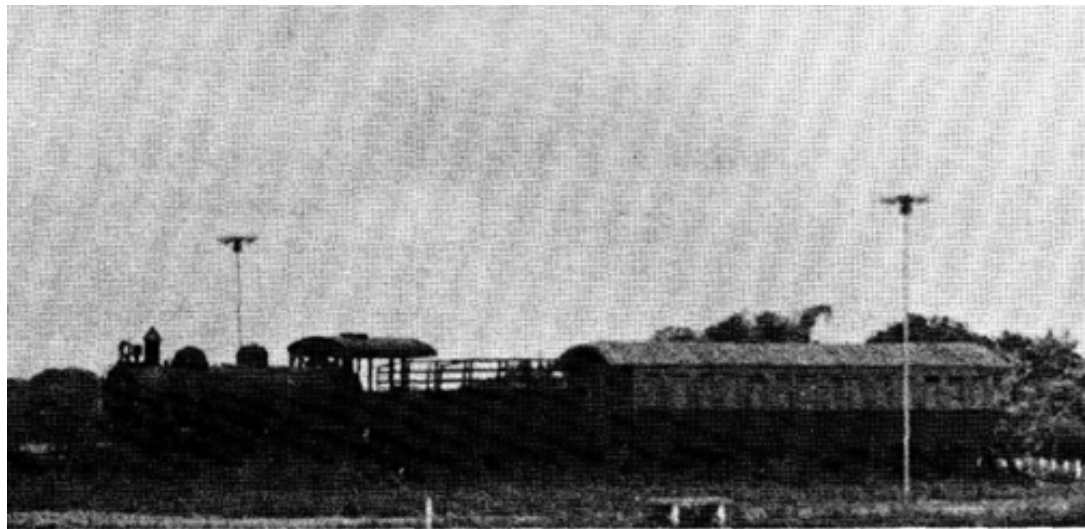
このブラガンサ鉄道の最初の開通区間が、ベレンのサンブルス駅からベネビーデス駅までの二十九キロ間であった。

ベネビーデスはパラ州の計画移住地だった訳だ。恐らく地名も長官の名から付けられたものであろう。

日本人の同地域への入植は、一九五八年にベレン市対岸のクチジュバ島から転住してきた御法円龍さんであった。

一九六〇年代に入るとトメアスーやグアマ等から、胡椒栽

培の目的で日本人達が次々に入植してきた。現在は、邦人数も大分減少してしまい十家族ちよつとになってしまった。



マリアフマッサ号がベネビーデス・ベレン間を初めて走った

モエマはベネピーデスの延長線上にある。一九五一年に高島将元さんが、ブラジル人の商人と胡椒園を共同経営で始めたのが矢嚆である。

一九五四年には高島さんと同じ高拓生出身の安井宇宙さんが、アマゾン河中流のジユル チーから転住して来、高島さん

んの隣地に入植、胡椒栽培に入る。

安井さんは当時、山崎太郎さん等と共同経営でレガトン船（交易船）に乗り商売をやっていた。

翌年、高拓生出身の田中貞介、藤島正徳、鈴木五郎さん等がモエマに転住してきた。モエマは一時高拓生村になった感であった。

モエマの地質は胡椒園に向いていなかった事と、病害のダブルパンチで二十家族程は居住していた邦人農家もやがて一人去り二人去りで現在は、一々二家族を残すのみの消えた移住地となってしまった感である。

サンタ・イザベル、サント・アントニオ

移 住 地

国道三一六号線でベレンから三五キロ地点がサンタ・イザベル。

そこから北へ向かうビジア街道沿線がサントアントニオ地域である。

旧ブラガンサ鉄道のジョン・コエーリョ駅辺りが現在のサントイザベルで、邦人移住者が集団的にこの地に入植しだしたのは一九五五年以降で、六〇年代にはトメアスー移住地に次ぐ日系人口となり、サントイザベル郡全体の人口の三・五九％にも及んでいた。（現在は、カスタニャール移住地の方が

サントアイザベルより日系人口は多くなっている。

この地への日本人第一号は、一九三二年頃の西原清東（さいはらせいとう）氏である。西原氏は日本で衆議院の副議長までやった事のある政治家であるが、明治三十六年にアメリカテキサスへ渡り米作りに成功「ライス・キング」とまで称されたユニークな人物である。

西原氏は、一九二九年（昭和四）南拓の福原社長の招きで同社のカスタンヤール農事試験場の支配人としてアマゾンにやって来ている。

西原氏は当時アメリカからサンパウロへと再移住していたものである。

同氏は、サントアイザベルでラランジャやその他の果樹類の苗木作りに挑んでいた。

次いで一九四〇年頃にトメアスーから大橋伊太郎、米沢重男、アマゾン興業移住地より鈴木信次郎さん等が移って来た。

サントアイザベルでの胡椒栽培が戦後、本格的に始まるとあちこちの移住地から入植者が集まり出した。一九六〇年にはベレン―ブラジリア間の国道も開通し、輸送面でも同地域は便利な地となった。

一九六六年に海外移住協会が行った調査を見ると、サントアイザベル及びサントアントニオ地域に居住している邦人の最

初の入植地がそれぞれ異なっており、同移住地が自然発生的に出来た集団地と言うのが一目瞭然である。



サ・アントニオの日系農家の住居



パリエッタ軍曹の子孫のノエ・パリエッタ氏

百九家族を対象に行ったこの調査の記録を見ると、次の様になっている。

△トメアスー三五家族△ベレンニ二△グアマー一四△ベル
テラー一△ベラ・ビスタ六△ビラ・アマゾーナス五△サン
タイザベル四△フオードランジャ三△サンパウロ二△モンテ
アレグレ二△ロザリオ二△クイアーノ、マウエス、バイシヨ・
アマゾーナスがそれぞれ一家族づつ。

病害にあった胡椒栽培農家は普通、更に遠隔地を求めて移

転して行くか他の栽培作物に切替えるかであろう。

サントアイザベル、サントアントニオ地域は、他へ移動する者が少なかった。養鶏や蔬菜、メロン、マラクジャ、ハワイマモン、デンデ椰子等に活路を見出だし何とか移住者が踏留まった。

新作物では、北川福一さんと藤原英彦さんとがスペインメロンの試作に成功し、一九七二年には年間一七〇〇トンの最多出荷を記録するまでになった。

養鶏面でも旧ブラガンサ鉄道沿線では随一の養鶏村へと発展、一九八〇年代には卵用種が八十万羽、肉用種は一九八六年に百五十万羽を記録している。

一九七〇年代の後半に一大ブームを呼んだハワイマモンも、サントアントニオの丸岡東さんの耕地にブラジルで初めて植えつけられその後、カスタニャールの山瀬、大屋さん等が栽培化に成功したものである。

当時ブラジルのハワイマモン総植付け本数の十三%近くを、サントアイザベル、サントアントニオ地域が占めていた。

また、高品質のオイルとして人気を呼んでいるデンデ椰子油（オイルパーム）も植付面積では、同地域がブラジル随一となっている。

デンデ油の搾油工場も日系のパラエンセ組合やデンデ・ド・タウアー、その他のグループによってそれぞれ操業されており、ポスト・ピメンタに向かって意欲的に取組んでいる

移住地の一つと言えるだろう。

一九五七年にサントタイザベル、サントアントニオ・デ・タウア両地区が一つの日系人会を結成し、野球グラウンド、相撲、ゲートボール、バレーボール、日語学校の施設も持った活発な会活動を行っている。

現在、百四十家族程が両地区に居住している。

少々余談になるが、サントアントニオの移住地区を走るビジア街道の終点の町がビジアである。アマゾン河々口に面した半農半漁の町である。

実はこの町が、ブラジルのカフェーの発祥の地である。

この村（当時）で生まれたフランシスコ・デ・メーロ・パリエツタ軍曹（現在の少佐に当る）が隣国の仏領ギアナからカフェーの苗と種子をこっそりと持出してパラ州へ一七二七年に運びこんだもので、ビジアの彼の農場へも移植している。

彼の子孫がビジアの町で今でも生活しており、そんな歴史の町が、サントアントニオの移住地から車で僅か二十分の目と鼻はどの距離にある事を付記しておきたい。

カスターニヤ移住地

アマゾン地域では、ベレン市、トメアスーに次ぐ大きな邦人集団地である。

ベレンから国道三一六号線で七十四キロ地点に位置し、日本人移住とは古くから関り合いを持つ歴史の町と言って良いだろう。

アマゾンに日本人移住が始まる三年前（一九二六年）に「南米企業組合」がカスターニヤールに二七七〇町歩の農場を買上げている。

南米企業組合とは、ニューヨーク在住の日本人の或グループが、南米諸国を研究するために南米協会という団体を発足させた。

鐘紡重役の福原八郎が、アマゾン調査団の団長として南米へ渡る時にニューヨークへ立寄った折、この南米協会のグループが急遽「南米企業組合」を組織して福原団長に、土地の購入を依頼したものであった。

福原団長も個人的にこの組合に加入し、資金の一部を負担している。

福原団長は、カスターニヤールにあったイタリア人のロンバルジ農場を購入した。

この農場の支配人がニューヨークから到着するまでの間、鐘紡のブラジル派遣留学生であった仲野英夫が代理として着任してきた。

カスタニヤールへ入った最初の日本人が一九二六年のこの仲野氏である。

その後、北米より支配人として不島六郎氏が赴任、農場で甘蔗栽培、製材、カシャーサ（火酒）等を行つた。しかしこれらの事業はうまくいかず、不島支配人は帰国し農場は、一九二九年に南米柘植株式会社試験農場として活用される事となつた。

南拓のカスタニヤール試験農場には、同社の内藤克俊氏と生島重一調査団員とが入り、胡椒やカカオ、肉桂その他熱帯果樹の試験栽培を行つた。

この内藤氏は、日本のレスリング選手として初めてオリンピックでメダルをとった人物として有名な人である。

一九二四年（大正十三）の第八回パリ大会に出場し、グレコロマン六一キロクラスで八位、フリースタイルで三位入賞に輝いている。

内藤氏は、カスタニヤールの農場閉鎖後サンパウロ州のモジダス・クルーゼス市へ転住しており、彼の子息がブラジルだったかサンパウロだったかの柔道連盟の会長を暫くやっていたのを思い出す。

南米企業組合は、一九三〇年にニューヨークから西村亀太郎氏を送りこんできた。

同氏は、米作を中心に行う事を決め福原氏とも計り、試験農場の隣接地数百町歩の原始林を買収し農場を拡張した。

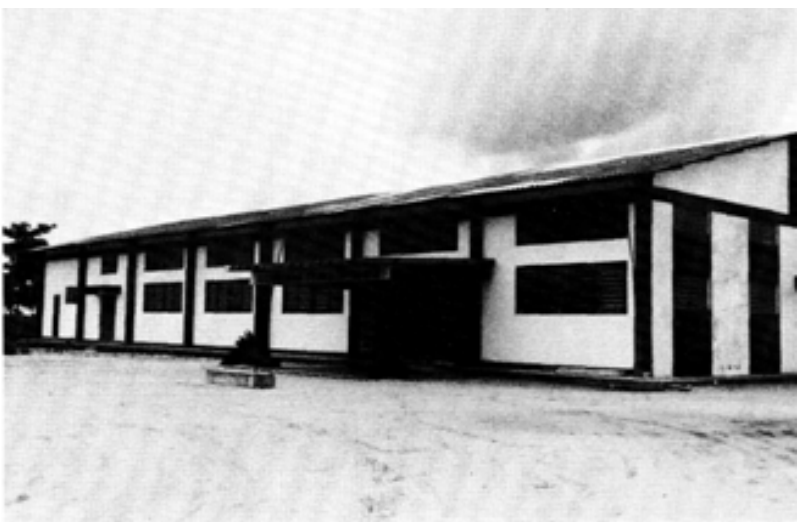
内藤氏が南伯へ転住と入れ替わりに、サンパウロから米作り王・西原清東氏を招聘した。

西原氏のサンパウロ州トレメンベーの米作農場で働いていた片岡治義（第一回 笠戸丸移民）も、この折り西原氏とともにカスタニヤールへ移った。

西原氏の目指した機械農法による大量米作はアマゾンでは適さずまた、米の値も安く結局、西原氏は米国へ帰国、片岡氏とともに入植した数家族もこの地を去り片岡一家のみが同地に残った。



国道三一六号線沿いにあるカスタニヤールの町



カスタニヤール日系人の拠点・文化協会建物

この後、福原八郎氏の実弟本木七郎氏が一九三四年にカス

たタニヤール農場へ移住してきた。

この一九三四年頃には、すでにの在来種に目をつけ邦人達がカスタニヤールで、栽培を行なっているのが興味をひかれる。

南拓試験場五百本、片岡農場一千本、本木農場一千本、西村農場一千本、福原農場第一希望園一千本、第三希望園一千本等である。



カスタニヤールの先駆者・片岡翁の顕彰碑



マモン景気で一時代を築いたアマゾニカ組合

シンガポールから導入された南洋種の胡椒がトメアスーに入ったのが一九三三年で、生産物として商品価値がでてきたのが一九四七年頃からである。

胡椒が偶然にアマゾンへ導入されたのではなく、物になるとの予備知識のもとに関係者により取寄せられた事を立証している。

当時カスタニャールには、前田光世氏（コンデ・コマ）の農場や外務省通商局第三課長の大橋忠一氏の土地五十町歩もあつた。

第二次世界大戦後の一時期カスタニャールは、片岡家と佐藤信市家のための空白時代があつたが、一九四三年頃にトメアスーより南洋種の胡椒の苗が移植され、また同地に邦人移住者がボチボチと集まつて来た。

その後カスタニャールからクルサー、イニヤンガピー、サンフランシスコと胡椒栽培の農家が増えて行き一九七〇年には六四家族、二一七人の邦人々口となっている。

やがて胡椒への病害が発生し、胡椒に代わる栽培作物の導入が急がれた。

一九六八年にサンタイザベル地域で試作されたスペインメロンは南伯で好評を得、カスタニャール地域でもイニヤンガピー地区の農家がメロン栽培に着手しだした。

次いで胡椒の病害対策にこのメロン栽培を取入れたのが「カスタニャール農業生産共同組合」で、通商メロン組合と呼ばれた（後、アマゾニカ産組に改名）。

一九七四年頃には、同地域の山瀬さんと大屋さん等がハワイマモンの栽培に成功し、七〇年後半にハワイマモンブーム

を北伯に呼んだ。

メロンもマモンもやがて地理的にも南伯に近い東北伯地方へ主力の座を奪われて行くが、同地域では新栽培作物の導入に常に意欲的で、一九八四年にはアセローラのヒット作物を生んだ。

このフルーツは、ビタミンCの含有量が他の果物に比べ飛び抜けて多量で、レモンの三〇倍近くを含んでいる、一見サクランボに似た赤い果実である。

原産地のカリブからブラジルへ入ったのは一九五五年と古い、カスタンニャールの下前原輝男さんが初めて商業化栽培に成功したものである。



カスタンニャール入口

アセローラは日本向けにニチレイを通じて輸出されており、その生産量は八五年二〇トン、八六年六〇トン、八七年

二百トンと年毎に増加している。

新しい味はなかなか定着しにくいが、南伯と言う大きな市場がこの味覚に良い反応を示しており、将来性ある果物と言えよう。

ただし、東北伯地方での栽培面積が増えており、気候や土壌、地理的な面でハンディのあるアマゾン地域にとつてたまたまやノルデステ（東北伯）は脅威となりそうである。

カスタニヤールの日本人会が発足したのは一九六六年。一九八四年にはJICAの助成金を得、二十×四十二メートルの立派な会館が建設された他、日語学校、野球場、ゲートボールコートも所有し会の活動も活発である。

グアマー植民地

現在のグアマー移住地は、サンタ・イザベルから完全舗装の州道を二十二キロトメアスー方向へ走った位置にある。

一九五五年に連邦政府の計画移住地として開設された頃は、ベレンから水路で四十八キロの地点、今のブジャールの渡し辺りの岸沿いのイグアッポ（水中林地域）三万二千町歩がそれであつた。

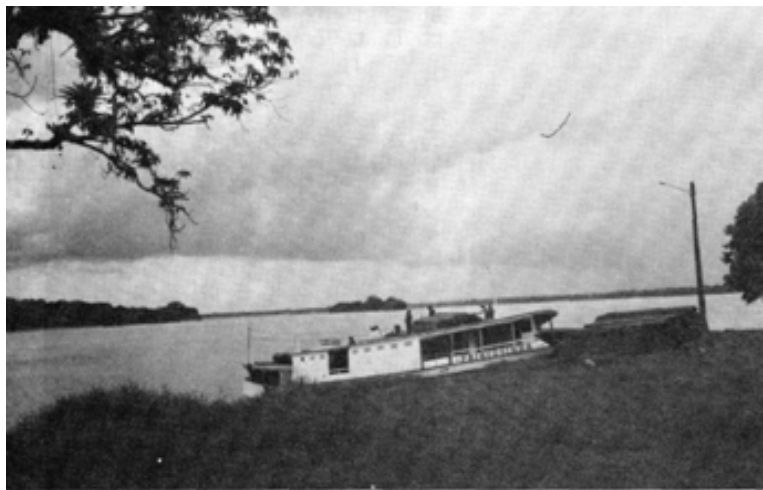
政府はこの低湿地地帯を利用して水稻栽培植民地計画を作り、水田米作に秀れたノウハウを持つ日本人移住者の導入を

図った。

しかし、低湿地帯を耕地とする為の一番重要な、灌漑排水溝は完成されていなかった。グアマー川に潮が満ちてくると、家の中にまで水が入って来た。

日本人移住者第一陣は、サンタレンのベルテラゴム園を、政府のブラジル人契約労働者保護政策の為出された十五家族が一九五五年十一月にまずやって来た。

この後、一九五七年までに計百二十九家族の入植者があつた。



グアマー移住地への上陸地点



日伯文化協会の皆様

沼地同然の割当てロッテに当った移住者は、移住地からの脱耕を計ったが相次ぐ脱耕に、INCR A（農地改革院）や海協連も様々な手を打ちこれを防ごうとした。

（移住地の改善でなく、単に逃亡を防ぐだけの手である）。

これらの経緯は、本誌に井上勝さんと大江牧夫さんとが文を寄せているが、グアマーに入植した移住者は異口同音に「本当にひどい移住地だった」と語っている。

同移住地を脱耕した人達も、百家族近くにも上った。

残った移住者達も、高台地帯へと移動した。グアマー移住地は、タカジョス地区とベルナンブコ地区とに分かれているが両地区が合併して一九八一年にグアマー日伯文化協会を発足させた。

一九八八年には電気も開通し、同地区もやっと住み易い移住地となった。営農形態は養鶏や果樹、菜蔬、カカオ、胡椒等と多様である。現在は三十家族近くが居住している。

アバエテツバ移住地

同移住地はベレン市の対岸にあるパルカレーナ町へフェリーボートで渡り、そこから更に陸路で三十二キロの計七十二キロ地点に位置する。

グアマーへ入植した岩淵義之さんが、一九六〇年に転住してきたのが邦人移住の始まりである。

その後、木田周次郎さんがパルカレーナ地区より転住、ピメンタ栽培を開始した。

アバエテツバの町は、トカンテンス川のマラバー市とを

結ぶ水路の要地点に当りまた、カワラやレンガその他甘庶から作るピンガ酒の産地としても知られており、アバエテツーバの港は船舶の出入りで終日賑わっている。

邦人農業者は当初、この町へ供給する野菜の栽培から始めた。

岩淵さん入植から六年後には、邦人農家も十八家族に増え、トメアスーやグアマー、ベルテーラやベレン近郊からも転住者が相次ぎピメンタ栽培も佳境に入った。

他の移住地のピメンタに病害が出た時点でも同移住地は持ちこたえ、七〇年代の終わり頃まで無病害地域として人気を集めた。

日本人会の発足は一九八〇年二月、八三年には日語学校を兼ねた公民館を建設するが八六年にJICAの助成金を得、現在の日伯文化会館の完成になった。

パルカレーナ町近郊には、日伯合弁のアマゾンアルミの工場があり、これに関連するインフラ整備で、アバエテツーバの町も恩恵をこうむっている。

この地域の邦人は、現在四十家族程である。

アカラー移住地

アカラーの移住地から夜は、グアマー川をはさんでベレンの町の灯りが眺望できる。

直線にするとその程度の距離であるが、ベレンから実際に同移住地へ辿り着くには少々厄介である。

アカラーまでのルートは三つある。

船に乗る水路コースで百二十キロ、これは潮の加減で六〜九時間かかる。

もう一つは、ベレンから国道を走ってサンタイザベルへ出ここから右折してトメアスー方向へと向い、ブジャルーの渡しを渡った後州道をアカラーへと向かうコース、これで百八十キロ。

三つ目のルートが、ベレンから対岸のパルカレーナへとフェリーで出、アバエテツバ、モジューを経由する百五十キロのコースである。

第二、第三のルートともフェリーを二回利用せねばならず、四時間から六時間の時間が必要である。

以前にこの第三のルートでアカラーへ向かう砂利道の州道を車で走っていたら、田舎の雑貨屋の店先にピラニヤの開きを売っていた。

体長二十センチは越す割りに大振りな黒っぽい色のピラニヤで、ツクルイー発電所近くのトカンチンス川で捕れたものらしい。

その村の周辺では、ピラニヤの干物を食べる習慣がある様だ。

アカラー移住地は、現在のトメアスー移住地と外部の人は

よく混同する。トメアスーは以前アカラー郡内にあったため、アカラー移住地と称されていた。

一九五九年九月にアカラー郡からトメアスーが分離し以降、アカラー移住地からトメアスー移住地へと名称が変わった。現在のアカラー移住地は公式には、パエス・デ・カルバリヨと称すが一般的にアカラー移住地で通っている。

そのアカラーの移住地へ日本人が入ったのは、一九五八年トメアスーから転住してきた鎌田譲さんと浜岡君子さんの二家族である。



▼アカラー日伯会館



上図JICAベレン所長（中央）を囲んでアカラー日伯協会会員の皆様

その後、最悪の状況にあったグアマー移住地から谷口明水さん等六家族が一九五九年十月、そしてグアマーからの第二

陣が宮崎忠信、今野大八、山本繁さんら十三家族が一九六〇年八月に入植してきた。

同地の営農形態は、ピメンタとカカオを主作物にレモン、ココヤシ、アバカテ、グアラナ等の栽培を行っている。

また、日系人が飼っている牧牛が約三千五百頭。日系人の土地の所有面積が一万三千八百ヘクタールとなっている。

一九六六年アカラー日本人会が組織され、一九八九年には念願の電気が国際協力事業団の助成のもと移住地内へひかれた。

現在の日系人家族総数は、四六家族二百二十四人であるがピメンタの値の凋落から、日本への出稼ぎ者が増えているのが現況である。

イガラツペアスー移住地

カスタニャールの町を過ぎ、マラカナンへ向かう州道へと左折する。ベレンの町より約百キロの地点に位置する。移住地としては比較的若い地である。

邦人入植者第二号は、一九六〇年グアマー移住地を逃れてきた米倉豊さんであるが、移住地としての体裁を整えてきたのは七〇年代に入ってからである。

この地も、ピメンタの病害から転耕地を求めてやってきた農業者達で、一九七〇年頃トメアスーより二、三家族の移住

者が入植し、それから僅か六年後には一挙に三十家族まで膨

れ上がった。

やがて同地もピメンタにとって安全圏でなくなり、四十家族をピークに転入者もほとんどストップ状態となった。

現在は三十五家族。その内トメアスーからの転入者が二十三家族、グアマーからが五家族、残りがイガラッペアスーへ日本から直接入植してきた人達である。

主な営農作物は、ピメンタ、マラクジャー、デンデヤシであるが、デンデの搾油工場を地元の日系人で設立し操業を



団結心の強いイガラッペアスー日伯文化協会会員の皆様

行っている。

日本人会は、一九七六年に設立され日本語学校も同年に開校されている。

サンタ・マリア移住地

国道三一六号線沿いにベレンから百十キロの地点。同地は南伯へ向かう国道十号線と中伯の諸州とを結ぶ国道三一六号線の分岐点に位置している。

サンタマリア郡の四五七平方キロメートル内に、三万人の人口を擁しているが経済、教育、医療ともに隣町のカスタニャールに依存している。

現在二十二家族の邦人が同地に居住している。

この地に日本人が入ったのは一九五九年の五十嵐明さんである。

五十嵐さんはピメンタ園を開設し、同人の娘婿に当る鈴木甚次郎さんを支配人として居住させた。

今でこそサンタマリアと言っても、さほど遠方の感じはないが、当時は遠隔地の領域であった。

「地域の将来性を見込んで」五十嵐さんは、農場を開設したものであった。

一九六〇年にベレン―ブラジリア間二千五百キロをつなぐ国道が開通し、五十嵐さんの見通した様にこの地域は交通の

要所として後に栄えてくる。

一九七〇年前後に、トメアスー移住地よりピメンタの病害のないサンタマリアへと日系人が移転してくる。一時は、四十家族にまで増えたが、同地が病害に汚染されてからは、他地域へと転住者が移っていき現在は二十二家族へと落着いている。

一九八二年に子弟への日語教育の必要性から、日語学校が開設され日本人会も創立された。

同地域の栽培作物は、マモン、マラクジャー、西瓜、ラランジャ、マンガヤピメンタ類である。

ノーバ・チンボテウア移住地

国道三一六号線からサリーナス（サリーノポリス）へ至る州道三二四号線沿いにある。ベレンから百四十キロ程の距離。

邦人は現在十数家族であるが八十年代初めには三十家族を越える農業者が同地域に居住していた。

一九六〇年五月、辻小太郎氏が伯人と共同経営による「伯国胡椒株式会社」を設立、ノーバ・チンボテウアに二千五百町歩のピメンタ園を開設した。

一年間に十万本を植付け、五年間で五十万本にまで達する大きな計画で、専務取締役の長谷川保氏や工藤講一氏等が同

園で采配を振った。

しかし、この計画はうまく行かず、数年で会社は解散してしまった。

このピメンタ園に就労していた邦人二家族が、同地に引続き残留しピメンタ栽培に従事した。

この後、トメアスーやグアマーを離れた移住者がこの地へと転住して来、集団地が形成されたものである。



家族的なノーバチンボウア日本人会

日本人会の設立は一九六八年と割に古いが、居住区域が広範囲であつたためほとんど活動はされていなかった。

八三年に日語の教室が開設されこれにともない会の組織も結束してきた。

同地域がピメンタの病害に汚染されてない時期には、一千五百トン近い収穫をあげていた。

現在は、ピメンタ、果樹、蔬菜等営農を多角化している。

カピタン・ポツソ移住地

カピタン・ポツソと言えばラランジャ（オレンジ）がすぐ頭に浮かぶ。

エントロツカメントからコツケイロにかけての国道脇で、袋に入ったラランジャが山の様に積まれて売られているが、これは全てカピタンポツソ産である。

ピメンタの代替作物として一九八〇年初頭に同地で植付られたものが、土壌や気候が適していたものか、またたく間に同地域一帯に広がり、今ではパラ州のラランジャ生産の八十%、二百万本が栽培されているラランジャの里である。

ベレンからは、国道二一六号線で、カパネマの手前百六四キロ地点からオーレンに入る郡道に折れ、同町を過ぎ五十六キロの地である。

国道十号線沿いのサンミゲル・ド・グアマーから、東へ抜ける道路もある。

カピタン・ポツソに初めて足を踏み入れた日本人と言えば、山田義雄に率いれた大嶽一、茂木勇、簗輪操、山本英二、立岩助信、鈴木清吾等が入植したのは一九三一年、トマスーにアマゾン第一回移住者が入植した僅か二年後である。

山田義雄は、オーレンのカバネマ側にあつたカバレイロ・コンセクション十万町歩の開拓を目指していたが、日本側での協力者が得られぬままに、一九三〇年十月のブラジルでの革命で、このカバレイロ・コンセクションの権利が無効となつてしまった。

オーレンのカピタンポツソ側にあつたコンデ・コマの前田コンセクション二万五千町歩は、この折にも特別の権利が継続され、コンデ・コマは山田義雄に自身のコンセクションの開拓を依頼した。

山田義雄一家と六人の青年達は勇躍して開拓事業に挑んだが、三町歩はどの土地を開墾し米、ミールヨ、マンジョカ等を二作した時点で農業はストップしてしまった。

土地が悪かったことと、全員がマラリアにかかつてしまった事からである。

次に山田等は、カピタンポツソへ出向き、木材の伐採を始めた。

当時のカピタンポツソには小さな村しかなく、オーレンからの陸路もなくグアマー川をカヌーに乗って三日程かかって森へ入った。

この頃になると青年達が次々と山田のもとを去り、山田もオーレンの町へ転住し雑貨屋を開く一方、日本から持ってきていた薬を使い医者まがいの仕事をし同地で重宝がられた。

大嶽一さんは、永らくアマゾンア日伯援護協会の会長職に

あり現在も現役で仕事をされて居られる。

山田は、その子息達がベレン市内で百貨店を経営しており、アマゾン有数の実業家として広く知られている、オーレンからカピタンポッソにかけての住民は、セアラ、マラニョン、ピアウイ等の北東伯人が多い。革命で無効となった十万町歩のカバレイロ・コンセッション、そして前田コンセクション跡地も北東伯人が全て占拠してしまった。



日語校に揚げられた鯉のぼり

カピタンポッソに再び日本人が入って来たのは、一九七〇年代に入ってからである。

ピメンタの無病害地を求めて伊藤泰介、新妻常顕、渡辺富雄さん達が次々とやってき、一時は二十五家族にまで増えたが現在は十三家族に落着いている。

日本人会は一九八三年に発足、同年日本語学校も開設されている。

主な営農作物は、先に記したラランジャの他にピメンタ、牧畜、マラクジャなどがある。

カパネマ移住地

旧ブラガンサ鉄道で朝五時にサンブラス駅（ベレン）を出発してカパネマ到着が午後三時。かつて十時間かかった行程を、今は国道三一六号線で三時間も車で走れば到着する距離となった。ベレンから百八十キロの位置となる。

南拓会社重役で衆議院議員の千葉三郎氏が、一九三〇年（昭五）カパネマからサリーナスに至る街道沿いの土地を購入し、トメアスーを退耕した市原津南三、田中光五郎計七家族の転住者を福原八郎氏の意で入植させた。

その後、南拓の事業縮小とともにトメアスーを離れる者が多くなりこれらの人々は、カパネマへと転住していった。

一九三六年には同地は三十家族にまでなった。邦人の増加とともに、市原氏はカパネマ市内へと移り商売を始めた。

当時同地で成功者として数えられていたのが、市原氏の他に河内栄一郎、東一兄弟と稲垣丑三氏等であった。

カパネマの邦人々口は流動が激しく、戦前には十五家族に減少し戦後も一時五家族程にまで減ってしまったが、トメアスーやグアマーからの転住者が入植を始め八〇年代には最高の四〇家族にまで膨れ上がった。

現在は十家族程度となっている。

かつてこの町最大の商売人であった市原氏をほうふつさせるのが、佐藤道夫さんであろう。同地の有力者として知られている。

この地から大西洋岸の避暑地サリーナス（サリーノボリス）にも日本人が在住していた。山本栄二、西原吉助氏等であるが、大型農業者として名を挙げたのが筒井茂利さんであった。



カパネマの牧場地帯風景

トマトの栽培を行い百トンの収穫を得、この他にも貝がらに目をつけ、この粉末を養鶏用の飼料として年間一千〇一千

五百トンも生産していた。

移住者で始めてベンツの八トントラックの新車を購入したのはこの人である。

カパネマ地域での営農形態はピメンタ、蔬菜、果樹類が主である。

また、同地域はマルハ麻の生産地として知られている他、一九六二年に設立されたパラ州唯一のセメント工場がある。

トメアスー移住地

アマゾンに日本人が最初に入植開拓した地として、あまりにも有名であるが最近は、環境問題の見地から自然環境をうまく生かした熱帯農業の成功地として、外国の文献に広く紹介されており各研究機関の対象となっているモデル移住地である。

ベレンの町から同移住地までは一カ所フェリーを使用するものの陸路で行くことができる。四〇五時間の行程である。かつては、二七〇キロの水路を十五時間かけて通っていた。生産物もこのルートでベレンへと出荷していたものである。

一九五九年九月一日トメアスーがアカラ郡より独立し、同移住地呼称もアカラ移住地よりトメアスー移住地へと変更に

なつた。

△移住前の時代

同移住地への日本人移住者導入の直接のきっかけを作ったのはパラ州知事ディオニジオ・ベンテス氏である。同氏は一九二五年から二九年まで知事の任にあつたが、州知事就任と同時に州の開発の為に日本人移住者の導入を考え、当時のリオの田付大使にカッピン河流域の五十万ヘクタールの土地の無償提供を申し入れた。

同知事は、パラ州へ赴任する折、田付大使のもとを訪れ日本人移住者受入れの意図を伝えていた。

ちようどその頃、外務省よりブラジルの農業事情の視察に芹沢安平農学士が来伯し、サンパウロでの調査を終え北伯に向かうことになった。

田付大使はディオニジオ州知事宛に芹沢氏の紹介状を認めた。芹沢氏は、鐘紡のブラジル派遣留学生であつた仲野英夫氏を同行しパラ州へと向かった。

ディオニジオ州知事は、日本人移住者による開発地としてカピン河流域とモジュー河流域を調査依頼し、芹沢農学士はカピン河流域の開発の可能性に賛同「一家族二五町歩計二万家族で五十万町歩」の大規模な移住プロジェクトを知事より提供され、これを携え田付大使のもとに帰って行つた。

当時のブラジルは、日本人移民に批判的なムードがあり、

田付大使はディオニジオ知事の日本人移住プロジェクトに大いに心を動かされた。

田付大使からの報告を受けた日本政府も調査団をパラ州へ送る事を決め、結果的に民間企業の鐘紡の武藤山治がこれを引き受ける事となった。

武藤山治は、同社重役の福原八郎を団長とする九名の調査団を一九二六年に派遣、一行は同年五月三十日にベレンへと到着した。

田付大使自身もこの折、一行と合流するためにマナウス、ベレンを訪れるという熱の入れ様であった。

福原調査団は、カピン河流域の土地が開拓に適さないと判断し新たにアカラー河とモジュー河流域の調査を行い、アカラー河とその支流アカラーペケーノ河沿岸の五十万町歩の土地を選定した。

この後、主としてパラ州の土地を開拓する「南米拓殖株式会社」が、一九二八年八月に日本に於て設立され福原八郎氏が社長に選任された。



トメアスー組合前の福原氏胸像

全社設立の僅か十二日後には、福原社長は社員の五反田貴己、新井高次、友田金蔵氏等と共に再びベレンへと向かった。十月にベレン到着後、南拓の現地法人を設立するために福原社長等は奔走したが手続きが意外に手間どり、州側との契約の期限上とりあえず福原個人名で州側とのコンセッション契約を取交わした。

一九二九年一月やつと現地法人「コンパニア・ニッポニカ・デ・プランタソン・ド・ブラジル」(ブラジル農耕日本会社)が設立なり、福原名義の契約書が会社へと移された。

この契約によりアカラに六十万町歩、モンテ・アレグレに四十万町歩この他、パラ州内のマラバー、コンセイソン・ド・アラグアイア、ブラガンサの三地域に各一万町歩の州有地の無償下付を受けたものである。

福原氏等は最初の事業地をトメアスーに決定した。

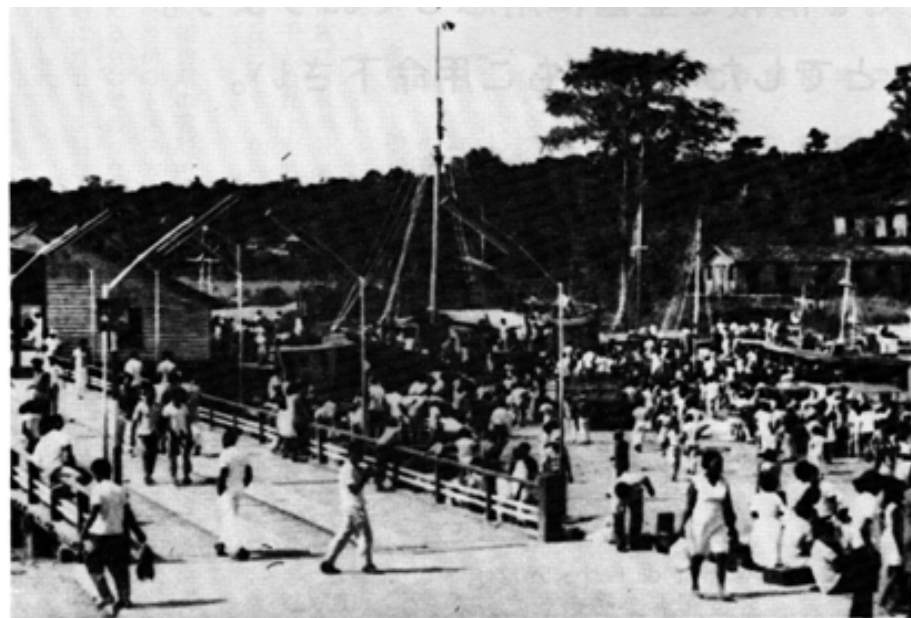
この間、日本の南拓からは先発第一隊の福原社長の後を追う形で、第二隊として四名が同年の同じ八月に出発した船でベレン入りした。(現在存命の星野修さんはこの船)

続く第三隊は九月に日本を出、十二月にベレン港へと到着した。

これらの先発隊のメンバーは第一回アマゾン日本人移民者を受入れるために、事務所の開設やトメアスー移住地の測量、伐採、病院建設等に大童の日々であった。



初期の開拓地の山焼き



終日賑わいを見せていたトメアスーの波止場

△移住者の入植

記念すべき第一回移民者連は一九二九年（昭四）七月二十四日大阪商船のもんてびでお丸で神戸港を出帆し、九月七日リオ・デ・ジャネイロ港へと入港した。

前田光世や南拓の新井高次その他農務局関係者、リオ在住の日本人などの出迎えを受けた。翌日、移民者一行四十三家族と単身者九名を加えた百八十九名は、まにら丸に乗換え九月十六日ベレンの港へと無事に到着した。まにら丸は日本の客船として初めてベレン港へと寄港したものである。ベレンで五日間の休息後、南拓の汽船に乗り込みトメアスーの波止場へと着いたのは、九月二十二日午前八時半であつた。

続いて第二回の移住者達が同年十二月、三十五家族百八十六名、第三回十八家族が翌年七月に到着。こうしてトメアスーへの移住者は戦前が三五二家族の二千百四名（一九二九年～一九三七年）、戦後は二七八家族プラス単身者二六四名の合計一千七百九十七名を数えた。

（一九五三年～一九八〇年）。

△開拓初期の苦闘時代

開拓当初のトメアスー移住地は慘憺たるものであった。南拓は永年作物にカカオを選び入植者に栽培を指導した。しかし、入植者達にとって自給自足の体制を整える事が急務であつた。

トマト、大根、ピメントン（ピーマン）、茄子、胡瓜等を主体とした野菜や米作りが始まつた。頼みのカカオの栽培成績は悪く、野菜類もベレンの一般市民にはまだ馴染みがなくほとんど売れなかつた。

そこへマラリアの発生があつた食べて行く道が無い所へ、マラリアの恐怖から移住地を脱耕する者が増えて行つた。

このマラリアの猛威は、すさまじいばかりのものであつた。一九三三年一月に百五十八名の催病者数であつたものが、十二月には三千名と言うおびただしい数にまでふくれあがつた。

当時の在住者が二千四十三名であつたから、一人で何度か催病した者が居たことになる。

マラリアや黒水病による死者も次々に出始めた。

トメアスー移住地には、一九三七年までに三五二家族二千百四名が入植しているが脱耕者は、二百七十六家族一千六百三名をも数えた（一九三五年―一九四二年）。

七七%にもものぼる脱耕者数で、移住地に残つたのは七六家族（五百一名）のみとなつてしまつた。

一九三五年四月、南拓が大幅に事業の縮小を行った。移住者にとつての頼みの綱が突然切れてしまった。

サンパウロ方面への転住を決意した人達にとつて、その旅費を捻出するには米や野菜の植付しかなかった。米作の植付面積が増えていった。

トメアスーで取れた米は割りに評判よく一等米はモンテ・フジの商標のもとにリオに送られ、二等米はマナウスへと積出されていた生産量が三万俵まで達した年もあった。また、野菜類はベレン市民に食べる習慣がほとんどなく、食文化の改革を行う必要性があった。

入植初期の一九三一年には、アカラ野菜組合（高田幸之助組合長が誕生し移住者の経済的自給の確立を目指した。

組合は、ベレン市内の南拓事務所の一隅を借り受け野菜の直売所を設置した。村上辰之助販売主任は積極的に販売の開拓を行い、初年度は赤字であつたものの売上は徐々にのびて行き、翌年から黒字へと好転させた。

ベレン市民に大根やトマト、キャベツ、胡瓜等を食する新しい食文化が根付いてきた訳である。

これにともない、ベレン近郊で野菜栽培を行う日本人移住者の数も増えて来ている。

一九三五年十一月、野菜組合の発展にともないアカラ産業組合へと改組が決まった。南拓縮小後の組合の存在意義が

非常に重要なものとなってくるのである。



坂道を下るとトメアスーの町が見えてくる

△戦中の時代

一九四二年（昭十七）一月二十八日ブラジル国は日本国に対し国交断絶を布告した。これにともない在留邦人は全て敵性国人として取り扱われる事となった。

同年八月十五日ベレン沖でロイド・ブラジレイロの所有

船ハエペンディーがドイツのUボートに撃沈され乗組員、乗客合わせて二百七十名が死亡するという事件が起こった。この事件に触発されたベレン市民が暴徒と化し、日本人の家や事務所、商店等を次々に焼討ちにした。

連邦政府は、暴動から枢軸国の人々を保護するという名目で、アマゾン各地に存在していた邦人五十家族とドイツ人、イタリア人等をトメアスー移住地へ軟禁した。

同植民地はパラ州の管理下に移され州営トメアスー植民地となった。

南拓の現地法人コンパニア・ニツポニカやアカラ産業組合の経営も州政府の管理下に移って行った

△戦後の時代とピメンタ景気

戦後同移住地の人々は、州管理下にあつたアカラ産組の経営権を取り戻す運動を開始した。

この為、一九四六年三月青壮年層によつてアカラ農民青年同志会（会長・関勝四郎、委員長・戸田子郎）が結成された。

同会はまず、移住地の生産物を輸送する専用船の建造を行った。

森から木を切り出して、板を揃えていくという、まったくの手作りの船である。

エンジンは、南拓にあった中古のフォード自動車のエンジンを取付けた。こうして七カ月かけて十八トンの木造船「ウニベルサル号」が完成した。

一九四六年十一月十八日の処女航海では、十七回もの故障の末やっとベレン港まで辿り着いたが、この船のおかげで州政府によって押さえられていたベレンとトメアス間の生産物の搬出ルートが、植民者自身の手によって再び確保された。

一方、生産物販売、日用品購買の権利を産組へ返還させる運動も、日伯両語に堪能な高橋勝正、沢田哲氏等が何度も交渉を重ねた結果これに成功している。

運輸、航行を農民同志会で、販売購買を産組でと暫く二本立ての時代があったが一九四九年九月に農民同志会はその権利を産組へ移管した。

アカラー産業組合はこれを機にトメアス―混合農業産業組合へと改称し公認産業組合として生まれかわった。

戦後のトメアス―への移住は、一九五三年八月、二十九家族百八十一名がアメリカ丸で入植した事に端を発する。

この当時のトメアス―移住地は―ピメンタ景気に湧いていた。小さな粒のピメンタは、黒ダイヤと呼ばれ同移住地は黄金時代を迎えていた。

トメアス―の胡椒栽培はもともと、南拓の栽培作物の一

つであつた。

南拓では、在来種の胡椒樹をアメリカノとグアマー河上流のイリツィアで調達し、南拓のカスタニヤール農場に植え付けた。この後、トメアスーのアサイザール試験場へも二千本程を移植している。

しかし、この在来種からの収量、結実率は少なく、一九三三年に南拓社員の臼井牧之助氏がシンガポールより携えてきた南洋種にやがて取って代られる。

南洋種の苗は、アサイザール試験場で二本のみが活着した。一九三五年の南拓事業縮小で同試験場も閉鎖されたため加藤友治氏がこの苗を譲り受け、斎藤円治氏ともどもコツコツと挿木増殖に努めた。



齊藤円治氏と田付景一大使



加藤友治氏

トメアスー植民地でピメンタ栽培が生産物として日の目を・みたのは、一九四七年に入ってからである。

トメアスー産組の生産物売上高のナンバースリーの座を同年初めて確保し、ピメンタが商品として物になる事が立証さ

れた。

第二次世界大戦による世界の主要生産地での荒廃により、ピメンタの値は以降うなぎ昇りに上がって行き、戦前の相場の十倍以上にまで高騰した。

一九三八年度と同移住地の生産量は僅か七十キロにしか過ぎなかったが、五二年に四百六十五トン、五六年一千二百トンと驚異的な増産を続け、六八年には五千七百トンと最高記録を作ってしまう。

△ピメンタ以降と現在

アマゾン地域の一大救済作物となった黒ダイヤであったが、一九六二年頃よりこのトップの座に陰りが見えてきた。胴枯病と根腐病の発生である。

種々の対策は取られたが、結局は病原菌から逃れて遠方へと転耕する事が一番であった。トメアスー移住地を離れて行く者が増えて行った。

これにともないピメンタの生産量もみるみる内に減産し八〇年代に入ると一千トン台をかううじて維持する程度となつてしまった。

ピメンタ一辺倒のモノカルチャー農業から脱却し、営農作物の多角化を目指し始めた。



現在、カカオ、マラクジャール（パッションフルーツ）、デンドやし、グアラナー、マモン、レモン、ゴムそれに野菜や養鶏等、複合する事により安定した経営の確保を目指している。

また、熱帯果樹のジュース加工工場もJICAの助成金で一九八八年に完成、コロニアは農産加工の分野へも新たな挑戦を試みている現況である。

もう一つ忘れてならないのが日系人会の存在である。同移住地における日系人会の発足は、意外に新しい。

これは、トメアスー産業組合が永い期間、移住地の中心機関として機能してきた事からである。

一九六一年地区連合会がまず発足し、六六年にトメアスー文化協会と改称、七〇年にブラジル公認の団体となっている。

トメアスー入植三十五周年記念事業として文化会館が完成、同移住地の文化、スポーツ、日語教育の拠点として活発に機能されている。

また、同移住地での日語教育は、入植と同時に開始されており北伯最古の歴史を誇っている。

現在、コロニアの人口は二百十家族程度で、他の移住地同様日本への出稼ぎ者も多く、約三百人ほどが常時働きに出ている。

写真で見るトメアスー移住地



トメアスー移住地の中心機関
トメアスー文化協会



トメアスー文化協会の役員の皆様
正面左より鈴木専任理事、海谷会計理事、
押切会長、古元副会長

千葉三郎氏を記念してのサブロー・チバ通り



トメアスー墓地には日本式のお墓が
たくさん建てられている。

写真で見るトメアスー移住地



トメアスーへ向かうブジャールの渡し。フェリー
はサンタイザベル側を離れようとしている。

写真で見るトメアスー移住地



ビメンタの黄金期に日本から大工を呼び寄せて建築された家屋も今は草に覆われた。



クワトロボッカスの中心街
日本人の店もたくさんある。

第二トメアスー移住地

トメアスー十字路から、州道を南へ二十五キロ地点から始まる。

二万五千八百ヘクタールの移住地である。

第二トメアスー建設の構想は一九五六年（昭三二）頃に生まれた。当時のトメアスー移住地が二百戸を越える移住者で満植状況にあった事と、交通・衛生・教育等の社会施設の拡充のために集団規模を大きくする必要性があった。

こうしてトメアスー入植三十周年の記念事業として、一九五九年に同移住地の建設が具体的に計画された。一九六二年造成工事が開始され、同年九月十四日現地よりの入植第一陣の二十五家族百十四名が各ロッテへ配耕された。

また、日本からの移住者第一陣は、翌年十月二日あるぜんちな丸で六家族三十名が到着した。

同移住地は、他の移住地と異なりJICAが直接造設した移住地である（当時は、現地法人のジャミックが土地を購入）。

移住者はピメンタを主力作物に、六四年二月末で八万四千本を植付けている。ピメンタの値段もよく移住地のすべり出しは好調であった。

新植の苗は増えていき、七三年には植付総本数は三十六万本、同年の収穫量が一千五百トンを記録している。

その後、七四年の水害と同移住地を襲ってきたピメンタの



第二トメアスーへの州道入口・左のバラゴミーナス方向へと入る



移住地は州道沿いに広がっている



開拓初期の第二トメアスー移住地風景

病害のため、収穫量は減産を続ける。

この当時の移住地の経済的打撃には、計り知れないものがあつた。

移住者達はこのピメンタシヨックから立ち直るために、胡椒園跡にスペインメロンや 蔬菜、マラクジャ―、カカオ等を植付け営農の複合化を図つた。

この他、同移住地の南西に第三トメアス―（アイウ・アス―）移住地を新たに造成、胡椒の病害から逃れて新たに胡椒園を開設している農業者達もいる。

現在、同移住地には五十家族の邦人が居住している。

サンタレン移住地

パラ―州第二の都市、ベレンからはアマゾン河を遡行し七百五十キロの地点に位置する。

アマゾン河本流とタパジヨス河支流の分岐点で、古くからゴム、カスタニヤール・ド・パラ―（パラ―栗）やジュツタの集散地として栄えた町である。

同じパラ―州内だが、ベレンとサンタレンでは一時間の時差がある。

同地に日本人が最初に足を踏み入れたのは、アマゾン興業株式会社のマウエス移住地に入植した小出秀雄氏と言われて

いる。その後、高拓生関係者の越知栄氏と二名の者が、サンタレン市上流のサントアントニオに開設されたアマゾニア産業のジュート種苗園へと移って来ている。



落ち着いた佇まいのサンタレンの町

第二次大戦勃発とともに辻小太郎氏一家が、サンタレン市下流八キロにあるイツキー島へ転住し、軍の拘留から免れている。

辻氏は、この後一九四六年にサンタレン市へ移り商売を始めた。

一九五〇年大統領候補のゼツリオ・バルガス氏（労働党）がサンタレンを訪れてジュート産業の奨励を公約する。

翌年二月、同氏が大統領に当選し、その就任式に労働党サ

ンタレン支部長のエリアス・ピント氏が列席することを知った辻氏は、大統領宛にジュート会社の設立案を提案した文書を託した。

大統領は、この案に非常に関心を示し辻氏との会見を早速望んだ。

辻氏はリオへ上府し、製麻会社の計画書を作成し大統領に提出、この話し合いの結果、日伯合弁の「サンタレン製麻会社」が誕生した。

辻氏はゼツリオ大統領と会見の折、アマゾン地域への日本移民の導入を打診しており、大統領の強い希望を知った同氏は、日本側の上塚司と図り戦後の移民再開の具体化を目指した。

一九五一年九月上塚、辻両氏はリオで大統領に面会し、「五年間に五千家族二万五千名」の移住者を受け入れてくれる様、請願書を手渡した。

こうして戦後移住の第一陣は、一九五二年十二月十七家族五十四名が、アマゾン河中流域のジュート栽培農家のもとへ配耕されている。

サンタレンを紹介するには、フォードのゴム園について触れなければならない。

一九二三年米国は、英国のゴム栽培保護政策に対抗して、アマゾン地方へゴム生産に関する調査団を派遣した。

この調査団の報告書を読んだヘンリーフォードは、アマゾ

ンでのゴム栽培に進出を計画し、まずブラジル人ジョルジ・デユモンの所有していたコンセッションの土地の内五十万ヘクタールを手に入れた。次いで隣接地百万ヘクタールの土地のコンセッションを得るために一九二七年、パラ州知事ディオニジオ・ベントス氏との間に契約を結んだ。これは、南拓が受けたアカラ河流域のコンセッションと同時期である。

フォードのコンセッションは、タパジヨス河の右岸、サンタレンから遡行して百八十五キロの地点に位置し、「フォードランディア」と命名された。

もともとサンタレンは、アメリカ人にとって馴染みの土地であった。南北戦争の終わった後の一八六七年から南軍の軍人だったワーレン・ランスフォード・ハスチングスに率いられたアマゾン移住者が、パラ州の提供した土地へ入植しているのだ。

フォードは、フォードランディアの他に、サンタレンにもっと近い地に「ベルテラ園」を造設し、フォードランディアへ百六十万本、ベルテラへ二百四十万本のゴムの樹を植えた。

この両ゴム園にも辻移民として三回にわたり日本人移住者が導入された。一九五四年十二月フォードランディア六家族二十七名、一九五五年一月ベルテラ六十一家族三百九十名、一九五五年四月フォードランディア十六家族百五名、ベルテラ三十九家族二百五十三名の移住者達であった。

一九五五年四月、伯国農務省は両ゴム園に入植した日本人移民の退耕を突如命令してきた（一九四六年フォード社は両ゴム園を伯国政府に安価で売却している）。

この主な理由は、日本人移民による現地労働者の圧迫という事であつた。第三次ゴム園入植者は、着伯する間もなくの退耕命令であつた。

移民受入れ機関であつた辻氏の「アマゾン経済開発会社」では、百二十二家族七百八十五人の転耕先を物色するのにやつきであつた。

（分散配耕先）

モンテ・アレグレ移住地	五五家族	三五八名
ベレン近郊	二一家族	一二七名
グアマー	一五家族	一〇一名
クイアーノ	一二家族	七一名
サンタレン	七家族	四三名
アレンケール	五家族	三六名
アカラー	四家族	二六名
マナウス近郊	三家族	二三名
合 計	一二二家族	七八五名

こうしてフォードランディア、ベルテラ移住者七家族、四三名がサンタレンへと移つて来た。

一九六六年には邦人二十家族、一二七名が居住しており、

その後もトランスアマゾニカからクヤバーへ抜ける国道の開通などで、サンタレンはアマゾンでの交通の要衝として脚光を浴びてきており、南伯からの移住者も増えて来ている。



日系人会創立十周年を記念して建築された会館



サンタレン地域発展に燃える日系人会の皆様

農業者たちもクルワ・ウーナ街道沿いから、クヤバー街道沿いへ転住しており、ピメンタや牧場、町の近郊では養鶏や野菜栽培を行っている。

現在邦人人口は三百人程でその大半が農業者であるが、サンタレン市内で商業を営んでいる人達もいる。

市内で唯一の日本食レストランを営んでいるベルテラ組の生田勇さんや、辻小太郎氏の実弟辻小平さん等が健在であ

る。

サンタレンの日系人協会は、一九七四年一月に設立されており八四年には、JICAの助成を受け六百平方メートルのレンガ建ての立派な会館が完成している。

ピメンタの値の下落とともに、日本への出稼ぎ者が増えているのも他の移住地同様である。

モンテ アレグレ移住地

一八九〇年頃、州営の植民地が開設され、ポルトガルやスペイン人三千人が入植しており古くから移住者により開かれた地である。

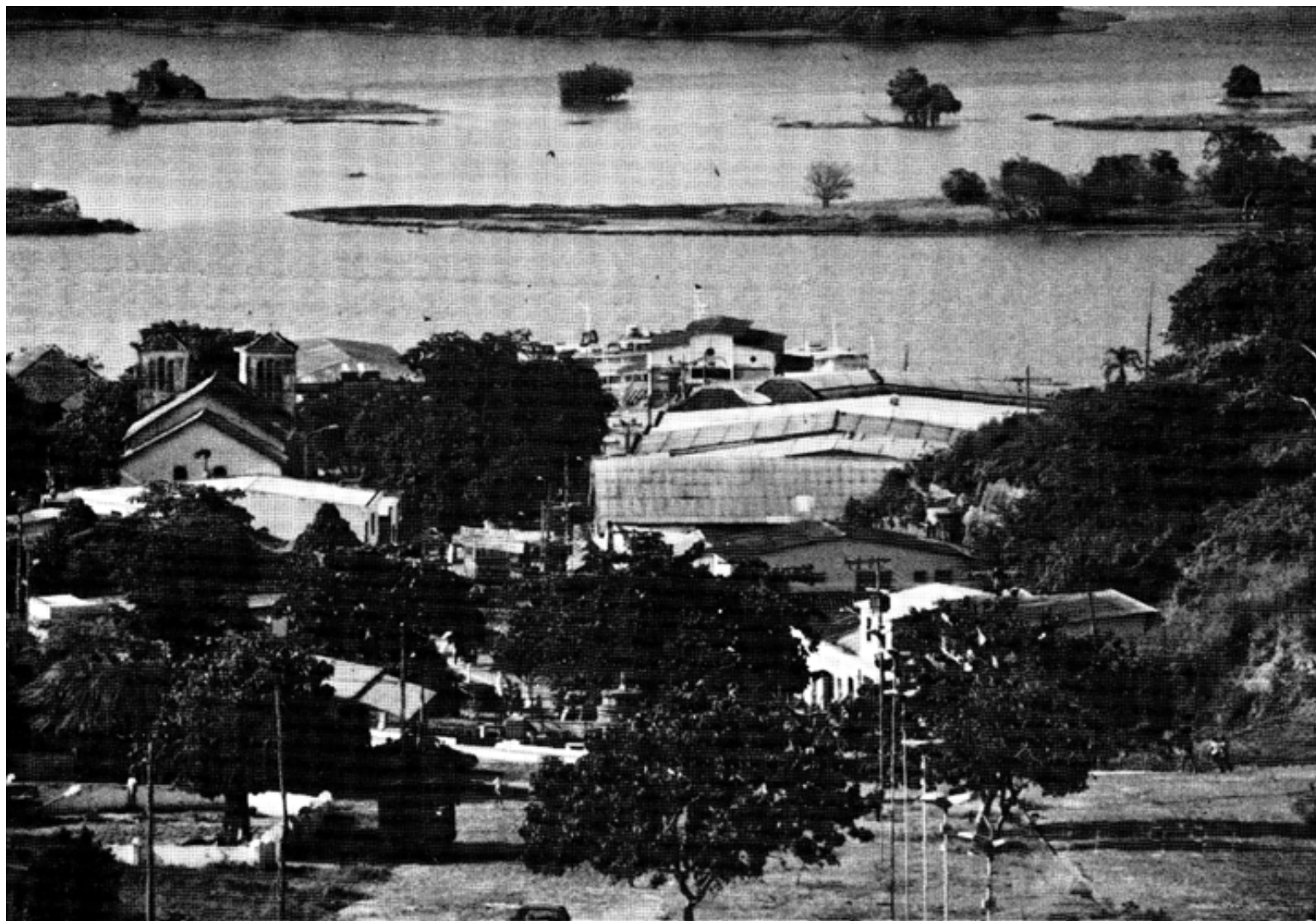
日本人移住とも、一九二八年より関わり合いを持つ事になる。

位置的には、サンタレンよりアマゾン河本流を百二十キロほど下った対岸で、ベレンからは六百三十キロの距離である。

土地は起伏に富み町からイタジュリー山（四百メートル）が眺望出来る。町外れには硫黄質の温泉も湧き出ており、保養地として利用できそうだが、特に何かに利用されている風もない。

サンタレンからこの辺りにかけて、古いインディオの文化が栄えた時代があり土器や石斧等が今でも時折発掘されており、モンテの岩壁画も関係者間には良く知られている。

南米拓植会社がアカラに六十万町歩のコンセッションを得



モンテアレグレの市街を一望する

た折、モンテアレグレへも四十万町歩の土地の無償下付を受けた。

南拓は一九二九年九月に初めて社員を同地へ赴かせ、鉱山物資の調査を行っているが、この松本彬、石川清彦両技師と生島重一調査員が日本人として最初の一步を同地に刻んだことになる。

アカラ移住地への第一回入植が一段落した同年十一月、南拓の直営農場の建設のために測量チームが派遣され、モンテ市より北へ三十キロの地ムラタに本拠地が設けられた。

南拓はこの地で綿花や煙草、ラミー等の試験栽培を行い、農場支配人に仲野英夫氏が赴任している。

南拓はムラタ本部に事務所、職員住宅、診療所、精綿工場などの設備を建設した他、サナトリオまで建て家族、单身者を入れ二十名ほどが居住していた。

同地へ日本人の移住者が入ったのは、一九三一年大阪YMCAのアマゾン開拓団一行四十七名である。

このアマゾン開拓団を組織したのは、五反田貴己氏である。五反田氏は、リベロンプレットの日本総領事館の書記官として勤務していた経歴を持った人で、福原八郎氏が一九二八年にコンセンシヨンの契約のためにパラ州入りした折通訳として随行している。

彼は福原氏の仕事のけじめがついた後の翌年一月に日本に帰国し、アマゾン開拓の指導者たる若者の養成の事業を興し

た。

大阪キリスト教青年会附属団体として大阪YMCA海外協会を設立、大阪朝日新聞社の後援を得アマゾン開拓青年団を結成した。

第一回の開拓団一行は、五反田氏を団長に平賀練吉副団長他四十七名の若者達であつた。

一行は、モンテ市から南拓事業所のあるムラタへ向かう途中の二十三キロ地点にあつた、サンタローザの福原氏耕地に入植した。

しかし、入植三カ月目にして、種々の軌轢で開拓団は解散してしまつた。

五反田団長は帰国し、平賀夫妻と七名の若者が残留した。やがて平賀夫妻もトメアスー移住地へ転住し結局、上野浩爾さんのみが最後までこの地へ踏み留まり現在までに至つてゐる。

これより先の一九三五年には、南拓の事業縮小により同地の農場も閉鎖され、押切他男氏を残すのみで南拓関係者全員がモンテから立ち去つてゐる。

その押切氏も一九四六年にトメアスーへと転住し、戦後の一九五三年に日本よりの移住者がやって来るまで、モンテには上野さん唯一人となつてしまつた。

戦後、連邦植民地へ二十四家族百六十名の第一回移住者が到着した。連邦植民地は、南拓の農場跡を含む四十五万六千

町歩で造成されていた。

翌年第二、第三の移住者合計四十三家族二百六十四名が入植。

第一回から三回までは、アサイザール地区へと全員配耕されている。

この後、一九五五年に入りベルテラゴム園からの転住者達五十五家族三百五十八名が、ムラタから北方へ十キロのドイスガーリヨス地区へと入植して来た。

ベルテラからの転住は突然の事で、ムラタから入植地までの十キロ間の道すらまだ造成されていなかった。

ベルテラ組は、ムラタで野営しながら入植地までの道路造成をまず始めなければならなかった。

ほとんど整備されていない移住地の上に、交通の便も非常に悪く栽培作物の搬出さえ困難であった。

退耕や脱耕者が相次ぎ始めた。

アサイザール、ドイスガーリヨス合わせて百二十六家族八百十名も居住していたが、第一回の入植から五年後の一九五八年にはすでに六十家族三百六十四名にまで減少し、その後も退耕者は続き一九六〇年後半には僅か二十家族を残すのみとなつてしまった。

一九六〇年の後半からモンテアレグレに、東京農大出身の青年達が次々に移住してきた。

岸靖夫、大竹秋広、加藤和明、大槻雄二郎、石井要等の各

氏である。

一九五七年に石黒衆吉さん等により設立された、モンテアレグレ農業協同組合の支配人としてそれぞれが勤務、この後独立し現在では同移住地の指導者的立場で、移住地の発展に寄与している。

一時衰退気味のコロニアであつたが七〇年代に入り分家独立、組合呼寄せ青年の独立などで移住者数も持ちこたえた。これにともなうように、幹線道路の整備や地権の交付、銀行の農業融資の開始などで同移住地をとりまく環境も好転してきた。



モンテアレグレ日伯文化協会の会館

現在、日系人は三十五家族程でその七割が農業者、三割がモンテ市内で商業やその他の仕事に従事している。

農業者は、ピメンタや牧畜、野菜、果樹等を組合わせた営

農を行っており、野菜類はトマト、ピメントン（ピーマン）レポーリヨ（キャベツ）、キュウリ、カボチャ栽培が主である。果物と野菜は、対岸の都市サンタレンやタパジヨス河の上流にある金採掘の町イタイツバ、それにアマゾナス州の首都マナウスへも送られている。

しかし、主要作物のピメンタの値がここ数年低迷しており、同移住地からも家長の三分の一ほどが日本へ出稼ぎに出ている現状である。

同地の明るい話題としては、モンテ市の副市長に石黒マリオさん、環境局々長に高谷一之さん、財務局々長に高谷東夫さんと、日系人が市の主要ポストを占めている事であろう。これは、同地での日系人に対する高い評価と、これまでの信頼関係を如実に物語っている。

日本人会の組織は意外に新しく一九八〇年に生まれたが、これはトメアスー同様農業組合を中心とした日系人活動が行われていたからである。

モンテアレグレ日伯文化協会（岸靖夫会長）の特色は、同協会内に農事部が設けられている事である。育苗センターや有用作物のテスト栽培などを、この農事部が行っている。

この他、市から提供された十六ヘクタールの自然林を、エコロジーパークとして同協会が保護・管理しているのもユニークである。

アルタミーラ移住地

トランスアマゾニカ（アマゾン横断道路）沿いの移住地である。

アルタミーラの町から西のイタイトーバ方面へ向かい、八十キロ地点から百キロ地点にかけて日本人の移住者達が入植した。

この町を流れるシングー河流域には、一千七百人のインディオがそれぞれの部落を形成して居住している、インディオの密集地帯である。

シングー河を利用して、一千七百万キロワットの巨大な水力発電所の計画が電力公社から発表されたが、インディオや環境保護グループの猛反対を食い一九八九年に計画は一応中止されている。

人口十万人を越すアルタミーラ郡にある火力発電所の電力では、町の消費をまかなう事はできず停電は日常茶飯事のできごとである。

アマゾンの真只中に開発された町の宿命で、町の発展と環境の保護とが二律背反しており、アルタミーラもどういった形で今後この問題に対処して行くものだろうか。

*

*

*

ベレンからアルタミーラまでの直線距離は六百五十キロメートルながら、実際に陸路を車で辿ると一千二百五十キロ

もかかってしまう。また、雨期には通行不能となる地点もあり栽培作物は、地元が主な消費地でサンタレンやイタイツバまでがせいぜい搬出可能な地である。

この地への日本人移住者第一号は、北川勲さんである。一九六二年十二月ベレン近郊サンタイザベルよりの転住であった。

陸路がまだなく、北川さん夫妻はベレンから船で引越荷物とともにシングレー河のビットリアまでやって来、ここからアルタミーラまでの田舎道を辿った。



アルタミーラの日伯会館

当時、アルタミーラの町には、教会のジープと郡長のトラック、そして北川さんの荷物を運んだ運送会社のトラックが二台の計四台の自動車数しかなかった。

人口僅か四千五百人の当時の町は、まったくの辺境の地みたいな所で、そんな地をわざわざ選んだ北川さんの転住の目的は何だったのか。

実は北川さんは、アルタミーラ一帯に広がるテーラ・ロツシャの土地を目指したのであった。

飛びつきり肥沃な同地の土壤に植える作物は全て、無肥料で収穫出来た。

トマト、ナス、キュウリ、葉野菜、落花生などを作り町で販売する生活から始めた。ピメンタも四千五百本植えた。

こちらは激しい乾燥に襲われたが、刈草やカンナ層で土を覆う事により問題が解決、六トンの収穫を得るまでになった。

その内、トランスアマゾニカ国道の建設工事が開始され、工事関係者達で町が一举に三倍にふくれあがった。

北川さんの出荷する野菜類や鶏卵が、飛ぶように売れ始めた。

一九七〇年六月、メジシ大統領により発表された国家統合計画（ナショナル・インテグレーション・プログラム）の一つとして、東の大西洋岸からアマゾンの原始林地帯を突っ切り、西のペルー国境まで抜ける五千五百キロの国道トランス・アマゾニカ建設が、発表から僅か四カ月後に着工された。

この道路建設に平行して沿線に、INCR A（植民・農地改革庁）により造成された植民地に、ノルデステ（北東伯）地方を中心とした内国移住者達が次々に送りこまれて来た。

アルタミーラからイタイツバ間の五百キロメートルだけでも、建設開始から九年目で一千七百家族の入植者を数えて

いる。

日本人移住者達が同地へ移ってきたのは、道路建設直後の一九七一年からであった。

トメアスーやベレン近郊が主で南伯からの転住者もあり、アルタミーラは最盛時には三十家族をこす邦人農家で活気を呈していた。



雨期のトランスアマゾニカ・乗客がバスを押して難所を脱出

しかし、トランスアマゾニカの整備状態が悪く、栽培作物はどんどん出来ても市場が限られその上、移住地内九十二キロ地点にある砂糖製造工場の経営がおもわしくなく、頼りに

していたサトウキビ栽培が経済の主力とならなかった。

こうして移住地離れが始まった。

一九七八年当時、移住地内にある「トランス・アマゾニカ・プライニャ日伯文化協会」（会員十五家族）と、町を中心とした「アルタミーラ日伯文化協会」（会員十六家族）の二つの自治会がかつてあったが現在は、アルタミーラ日伯文化協会（一九八八年公認団体に登録）のみとなってしまった。

ガリンペイロ達が金採掘場へと舟で向う



アルタミーラの主要な交通の一つである馬車



今では、移住地内に居住して営農している者は僅か二家

族、他は全て市内から町外れにかけて生活している。

一九九一年二月に、北川さんの提供した土地二千平方メートル内に日系人会館が建設された。

会員は二十家族を割っており、この内農業者は三分の一、他は商業、機械、会社員その他である。

年々減少気味の日系人口ではあるが、同地での日系人の活躍は高く、弁護士会々長で前警察署長の長浜パウロさん、アルタミーラ農牧組合（非日系）理事長を三期勤めている下垣圭徳さん、前郡全議員の梶原ネルソンさん、トランスアマゾンカ砂糖キビ生産者協会（非日系）の会長河合勝彦さん等が地域社会の中枢に居るのが力強い。



下垣農牧組合長



移住地の先達北川夫妻

ロンドニア州編

ロンドニア州の開発は急ピッチで行われている。二十年前十一万の州の人口が、現在十倍に当る百十万人にまで増加している。

同州は、かつてグアボレーと称されていた。アマゾンのゴム景気の時代にゴムを採集する人々が、ブラジルの東北部特にセアラ地方から同州へ入ってきた。

悪魔の鉄道と呼ばれたマデイラ・マモレー鉄道が、州都のボルト・ベリョからボリビアの国境まで敷設されているのは有名であるが、ゴムの時代が去った後同州には産業がなく、食糧や経済物資までパラ州のベレンからやってくる月二回の一千トン級の船に依存していた。

一九六〇年代から七〇年代にかけてボルトベリョ・クヤバー間（一千五百キロ）の国道や、トランスアマゾニカ道路、マナウス間の国道（九百キロ）が開通しロンドニアは、北と南とを結ぶ中継点として俄かに発展して行く事になる。

一九八一年には、直轄領から州へと昇格、この頃から急激な人口の流入が始まった。

国道沿線に内国移住者が大量に入植、これら何十万人の農業者が開墾のために焼く森林と、牧畜業者の造成する広大な牧場作りのためにロンドニア州はパラ、マツトグロッソに次ぐ森林破壊のワーストスリーにまでなってしまった。

他の州は、森林焼失面積を年々減少させているが、ロンドニア州はその傾向がなくまた、短期間の内にかかなりの面積を破壊してしまったので、世界中のエコロジスタ達のブラックリストに掲載されてしまった様である。



町のリョーベートルポが進む開発

ロンドニアでの日本人の足跡には古いものがある。ペルーへ移住した人達が耕地を脱耕し、ゴム景気に湧くボリビアへに入った。

ブラジル国境に近いボリビア国ペニー州のリベラルタの町には一九一一年頃、四〇五百人の日本人が居住しており、天長節の催しを初めて行った所、二百人の日本人が集まってき

たとの記録がある（五〇年前後の思い出・八木宜貞著）。

これらの人の一部がベニ河を下り、ブラジルと国境を接するグワヤラーメリンの町へやってきた。この町には、今でも日本人の苗字を持つ混血のボリビア人が沢山居住している。

中山、川村、小林、日立、富山、重国、小さな町を少し歩いただけでもこれだけの家族の人と出合った。

この町の市長を三期勤めた、ミゲール長山という人も居る。

ボリビアとブラジルとの国境を流れるマモレー河を渡り、ブラジル側の町グワジャラーミリンへと辿りついた人もいた。

後にベレンの町でアイスクリーム屋を開いた玄場松一氏は、一九二二年頃まで、このグワジャラミリンで野菜作りをしていた。

また、ペルーのマルドナルドからマドレ・デ・ディオス河を経てブラジル領のマデイラ河へ入ってきたペルー下りの人は、ポルトベリーヨの町へと入った。

後にマウエスへ渡った山根武一氏は、一九一二年に同地へやってきている。

ロンドニアへ足を踏み入れた日本人は、アクレ州に次いで古い歴史を持つものと思われる。後に成功者となればいろんな資料にも記録が残るが、名もなく埋もれて行った人達の

足跡を辿るのは今となっては不可能である。

ロンドニアで亡くなった移住史前の先駆者の人達も、かなり居たのではないかと思われる。

特に、一八七二年から始まり一九一二年に開通なった全線三六六キロのマデイラ・マモレー鉄道工事に従事したと思われる、日本人労働者の記録が何もないのが残念である。



川の向こうはボリビア領・国境の町ゲアジャラーミリン



ボリビア側グワヤラメリンに住む日立さんの一家

トレーゼ・デ・セツテンプロ移住地

ロンドニアへ日本人の移住者が入植したのは辻移民村として、一九五四年七月、二十九家族百八十人が直轄州の開設した移住地へゴム栽培を目的として入った。

（同行の一家族が上陸を前に同地への入植を拒否しサンパウロ行きを要求したので、その家族はそのまま日本へ送り帰されている。）移住者達は、移住地の手前にあった合宿所へ全員入居させられた。ここから移住地に広がる原始林の伐採に通った。

森林の伐採は当然、手前から奥へ向かって始める。山の火を入れるのは、全員の耕地の伐採が終了してからである。先に倒した原木はよく枯れているが、一番奥はまだ生木である。

現在ベレン在住の須藤実さんは、スタート時から手痛いハンディを負ってしまった内の一人である。

須藤さんの耕地は一番奥であった。倒した木は全然燃えず、他の移住者達が植付けを始めても、まだ何も手がつけられない状態であった。

移住地は、ゴム園の造成と言うのが州側の計画であったが実際には種一つ準備してなく、移住者達はカヌーで川を下り九十キロ先送りまでゴムの種を採集に行く事から開始した。ゴムの植付けの後、自給自足の体制作りである米やトウモロコシ、マンジョカ、バナナ等を栽培した。

その内、丸五郎さんが野菜を作りポルトベérioの市場へ売りに出した。丸さんの作るキュウリは、まだ町の人が見たこともない様な立派な物で「ドートル・ペピーノ」と丸さんは呼ばれる様になった程である。

移住地の人々は、野菜や果物、炭を作り町へ販売に行く様になった。

ポルト・ベérioまで十一キロの輸送は週に一回、土曜のみ州のトラックが運んでくれその他の日は、午前二時頃に起き生産物を担いで悪路を町まで往復した。

重たくかさばる品物や炭は、カリニーヨ（一輪手押し車）に荷を乗せ根気よく押しながら夜明け前の暗い道を市場へと辿った。

日本人移住者の作る生産物は、全て飛ぶように売れた。野菜等は、日本人の品物が売れ尽くす迄は、ブラジル人の物が売れない程の人気であった。

しかし、しよせん一万五千人しか居ないローカル都市である。市場はせまくやがて生産過剰気味となった。

移住者達は、養鶏や養豚なども取入れゴムが成木になるまでの糊口をしのいだ。

六〇年に入りクヤバーまでの道路工事が始まりまた、アリブナン河上流で錫鉱石の採掘が始まりガリンペイロ（採掘人）が何万人と入ってき、ポルトベérioの人口が増加してきた。おかげで卵や野菜に対する需要が大幅に増えてきた。

この六〇年から七〇年にかけて首都の人口は、五倍にまで上昇している。移住地も、この頃からようやく経済的なゆとりができてきた。



一同に会したトレゼ・デ・セッテンプロ自治会の皆様

ゴムは、野火で何度か焼けた事と非採算性から伐採する農家も現われ始め、ピメンタや畜産、カフェー、カカオ、グアラナ等を取入れた営農の多角化が図られた。

七七年に移住地内の電化、八一年には電話の架設も始まり、他の移住地に比べ比較的早い時期に文明の恩恵に服している。

現在ポルト・ベーリヨの人口は四十万人にまで膨れ上がっており十二家族の日系農家で生産する農作物の百%近くが同市でさばけている状況で、同移住地は経済的に安定している。と同時に町へ転住し店や修理業、レストラン等を営む人も出てきた。スーパーマーケットを所有する丸さんや、鶏卵の卸売業を大規模に営んでいる門脇さんなどは転業組の成功者であろう。またこの地は、金の採掘地としても知られておりガリンペイロに転じた人も居る。

ポルト・ベーリヨの町の中には、移住地からの転住者やパラナー等からやってきた二世達で三十〜四十家族は居住している。

日本人会の組織は、移住地内に古い歴史を持つトレゼ・デ・セッテンプロ日本人自治会があり、この他親睦団体としてポルト・ベーリヨ体育文化協会が一九八三年に市内に設立されている。



トレゼ・デ・セッテンプロ自治会々館

アリケメスとジーパラナ移住地

ポルト・ベーリヨから国道三六四号線をクヤバー方向へ向かい二〇二キロ地点がアリケメス、そこから更に四十二キロ先がジーパラナである。

国道の開通にともない、一九六二年にINCRA（伯国移植民院）により開設された移住地である。

パラナ州からの入植者が多く、日系人も一九八〇年に国際協力事業団ベレン支部が行った調査によるとアリケメスに三十七戸百七十九名、ジーパラナに二十二戸百八名がパラナやサンパウロ州から移住してきている。

同年にはアリケメス日伯体育文化協会が創立され、日語学校も開校され、八八年にはJICAの開発青年を日語教師として迎え入れている。

八四年に百四十九家族の入植者を数えたアリケメスは、当時ロンドニア州最大の日系移住地であった。

移住者達は、カカオ、カフェー、ゴム、米、トウモロコシ、フエジョン等の栽培を行っていた。

クヤバーやポルト・ベーリヨの都市が近く、食糧供給基地としての将来性が高く買われていたが、入植者はその後ストップし転住者も相次ぎ現在は、アリケメス二十家族、ジーパラナ五家族にまで激減、日本人会も九一年には自然消滅し、両地域から日本への出稼ぎ者が多く出ている。

同地域の日系人は、南伯出身者で構成されており、同じ州

内とは言えトレゼ・デ・セッテンプロやポルト・ベリーヨの邦人達とは歴史的にも精神的にもまったく異なった生活圏にある。従つて両地域の交流はまったく無く、僅かに日本の宗教の信徒のみの限られた範囲での交流が行われているだけである。

尚、ブラジル側国境の町グワジャラーミリンに、三々四家族の日系人が居住している。

マラニョン州編

サンルイスは歴史の古い都市である。フランス人が一六一二年にマラニョンへ侵入し、サンマルコス湾のウパオンアスー島へ上陸、植民地本部を設立した。

この地を当時のフランス王ルイ一三世にちなみ、サンルイスと命名している。現在の州都である。島内に百万人の人々が居住している。

ポルトガルとフランスは、新しい国ブラジルをめぐって十六世紀の初めから何度も交戦しており、マラニョンでの戦いは三年の年月を費やしてようやくフランス人を駆逐している。

この戦いに敗れたフランス人がアマゾンの北方へと逃亡

し、ギアナを占拠また、ポルトガル人はこれを機にアマゾンへの進出を開始フランシスコ・カルデラ・カステロ・ブランコが一六一五年十二月にサンルイスを出発し、翌年一月にベレンへと到着している。

これがパラーの創設でありまたアマゾン地域の開発の夜明けとなっている。



サンルイスの旧市街



カラジャースからサンルイスまでの鉄道

マラニオン州は一七七五年までパラーを含めた全アマゾンを行政下に入れており、当時同州はマラニオン・グランパラ州と称していた。マラニオン州の本格的な開拓は古く、一六二〇年からである。

ポルトガル領のアソーレス群島から、選抜された移住者達が次々とマラニオンに送り込まれている。

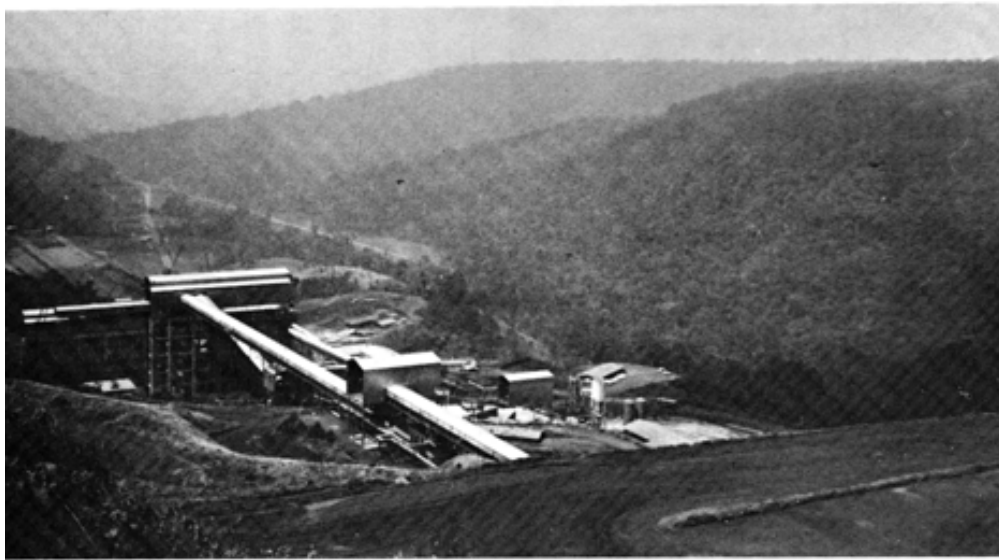
一六七七年までに四百家族以上の移住者が同地へ入植している。

マラニヨンの古いポルトガル系の家族のルーツは、大体大
西洋に浮かぶ十の島、アソーレス諸島である。

マラニオンを代表する産物と言えば何といってもババサー
椰子である。この椰子油から石鹼や化粧品、洗液剤等が作ら
れている。最盛期には、八十億本を数え恐らくマラニオン全
土を覆いつくしていたのではないだろうか。現在でも州内面
積の半分を占めている。



マラニヨンの名物ババサー



カラジャース鉄鉱石の山中にある駅

パラ州に世界一の鉄鉱石の山カラジャースがある。埋蔵
量が百八十億トンと、五百年間は掘り続けられる程の山であ
る。

ここで掘り出された原石は、鉄路で八百九十キロ先のサンルイスのポンタ・デ・マデイラ港まで輸送されており、日本へも定期的に輸出されている。

機会があつてこの鉄道に便乗した事があるが、マラニョン州沿線の景色は行けども行けどもババスー椰子の森ばかりで、実際に目にするマラニョンのババスーの迫力に圧倒される思いであつた。ちなみにカラジャース鉄道のマラニョン州内の距離は約六百五十キロはある。



サンルイス在住日系人の皆様



一六五四年の建物



サンルイス港遠望

サンルイス周辺の移住地

（ロザリオ、ムルアイ、サンタフェ、エストラータノーバ）日本人の移住者は、一九六〇年七月十九家族百十一人がサンルイス市の郊外八十キロメートルにある州の計画移住地ロザリオへ入植、次いで翌年十家族五十二名がサンルイスより三十キロのムルアイ移住地へと入っている。

これらの計画移住者以前に、サンルイスで農業を営んでいる人達が居た。

トメアスー移住地（当時のアカラー）より戦前に転住を図った渡辺仙吉（トメアスー第三回移住者）、吉川矩寛（第七回）、荒牧近宗（第七回）等が一九三三年に、サンルイス市より四キロ地点にあるアニールで野菜作りを始めている。

この後、坂本恵（第二回）、細江嘉一郎（第二回）、松村浩一郎（第七回）、本間武四郎（高拓生）等が入植し、同じ頃転住した赤司さんは現在も健在で牧場を営んでいる。

マラニョン州の農業・鉱業事情の調査の為に、同州へ足を踏み入れた日本人となるとこれよりもっと古い。

一九二五年に鐘紡のブラジル留学生であった仲野英夫が、外務省嘱託の芦沢安平農学士に同行して同州を訪問、一九二九年には鉱山技師の松本彬、石川清彦、生島重一調査員が福原八郎の意向をうけて鉱物調査を行っている。

また、一九三二年にも福原社長の要請を受けた東北大学田

中館秀三講師、古関徳弥技師等がパラ州境に近いトラウイラ島付近でボーキサイトの調査を実施している。

ある時期居住し通過していった人としては、ペルー下りの人達であろう。サンルイスで野菜作りをし更に南下、サンパウロやパラナーを目指している。

ロザリオに入植した移住者達は、入植後八年目には十五家族が他地区へ転耕し、僅か四家族が残っているだけであった。

野菜移民として入ったロザリオの役割は、人口二十万のサンルイスへ野菜や鶏卵等を供給する事であった。

しかし、ロザリオ⇨サンルイス間の道は悪く、乾期に入っても農業用水が無く、また土地も石ころや起伏が多く農耕に適していなかった。

ロザリオを出た人達は、ムルアイ近くのサンタフェやサンルイス島内のエストラダノーバへと転住した。

一九六五年から六六年にかけては、七家族がパラ州カ스타ニヤールのイニヤングッピ地区へと集団転住している。ムルアイへ行った養鶏移住者達も、その後サンルイス島内へと転住している。

現在は、エストラダ・ノーバを中心に十一家族程が営農しており、マモン、アセローラ、マラクジャ、野菜類を栽培しサンルイスの町へと出荷している。

また市内には、六五家族が居住しているが、そのほとんど

がサンパウロやパラナ、ミナス地方からやってきた二、三世層で、非日系人と結婚している人達が多い。

日系人会は、マラニョン州日系自治会がサンルイス市内にあり、一九九〇年三月にはJICAの助成を受け新会館を建設している。

日本への出稼ぎも、一家族中に誰か一人は出ている様な現況である。

その他の地域

（インペラトリス、バルサス、チモン）

消えた移住地・インペラトリス、新興移住地・バルサス、将来有力な移住地としてチモンを紹介したい。

ベレンからサンルイスへ行く場合、国道三一六号線にそって東南の方へと走るが、インペラトリスは、パラ州のサンタマリアでその三一六号線から別れ、国道十号線を一路南下し六百キロ、トカンチンス州との州境の町である。

マラニョンの牧畜地帯として栄えている町で、木材もかなり伐採されている。同州内第二の都市である（サンルイスから六百五十キロ）。

同地への日系人入植一号は、一九六五年ベレン近郊から新海勢喜三さんが移転してきた。

その後、ベレン近郊やサンパウロ、パラナ地方からの移住者が相次ぎ、最盛期には三十五家族にまで増えた。一九八四

年に日系人会が設立され、日語学校の設立も計画されていたが、農業不振から同地を離れて行く人が増え出し、八九年には日系人会も自然消滅してしまった。

同地の草分け新海さんも九一年にベレンへと引揚げてきている。

現在、ロザリオ出身の小川善一さんが市内に居住している他、新海さんの三男一家それに南伯からの二世が多少居住している程度である。

バルサスと言う地方がある。インペラトリスを更に三百七十六キロ南下したマラニョン州の南の奥地、トカンチンス州とピアウイ州との州境に近い所である。

この辺りは、標高が五百メートルはある高原地帯で気候も熱帯サバンナとなりセラードと同じ気候に属している。

この地域に、パラナ州から集団で日系人が入植している。マラニョン農業技術公社によりバルサスの開拓が発案され、エンブラッパ（ブラジル農畜産技術研究公社）のロンドリーナ支部を通じ日系農家が募られたものである主として大豆が大規模に植付けられており、一戸当り少ない所で四百ヘクタール、大きくやっている所で三千ヘクタールの面積を栽培している。

大豆以外には、ミールヨ（とうもろこし）、米などであるが米はあまり成績が良くない様である。

パラナ州のロンドリーナ、マリングア等から入植してきた日

系人は一九八五年頃には十四家族が営農バルサス文化体育協会も設立されていた。

しかし、同年をピークに転住者が出始め現在は五家族が純然たる日系人の減少とともに日系人会も一九八八年に自然消滅している。

最近、セラード開発計画の対象地域として認められたので再びバルサスが脚光を浴びそうである。

マラニョン州第三の町がチモンである。

パラナイーバ川をはさんで対岸の町がピアウイ州の州都テレジーナで、チモンの経済はほとんどテレジーナに頼っている。

チモン市では、パラ州の日系農家の誘致を考えており、すでに市長ほか農務局長などがカスタニヤール、ベレンを訪れ日系農家を募っている。

カスタニヤール、サンタイザベルの有志達が、これを受けて同地の視察を行っており、アセローラや熱帯果樹栽培には適地であるとの視察報告を出している。

今の所、具体的な動きはないが二世農業者の独立先には有力な地となりそうである。

ピアウイ州編

北東伯地方の代表的な州である。

汎アマゾニア日伯協会の傘下にある日系人会としては、一番東側に位置している。

同州は、マラニョン州とセアラ州とに挟まれており、南に九百キロと長く伸びている。



しっとりした雰囲気の特レジーナ市の町並



特レジーナ市内の静かな住宅地

南部地帯は、早魃多角形地域に属しており乾燥地として良
く知られている。

それでは南部地帯は全て、草木も生えない様な干上がった
土地かと言えばそうでもない。バイアー州に接するマンガベ
イラ高原地帯は、標高六百メートルから九百メートル近くま

での台地がニヨキニヨキと山の様に盛り上がっているのだ。シャッパードと称するこの山様台地が、広大な地域一帯を占めている。一つのシャッパードは広いもので七〇八万ヘクタールはあり、どこまでも真つ平である。

実は、このピアウイ州最南端の台地の上で、一九八六年から日系人が開拓に取り組んでいる。

マツトグロツソ・ド・スール州から四十九家族の農業者がコレンテ地区に五万八千八百ヘクタールの土地を購入し入植したものである。

セラード地帯と呼ばれるコレンテ地区で、米や大豆、とうもろこしの栽培に従事しているが、現在は四家族二十二人と減っている。

コレンテ地区の乗っかっているシャッパード（台地）もとてもなく広く、その一部はバイアー州へと広がっている。

コレンテより三十キロ先にあるバイア側で、パラナ州からやってきた日系人グループがアグアス・クララスという開拓地を造成して頑張っている。こちらは一九九〇年までに四百十八ヘクタールを開墾し、大豆、米の収穫を着実に上げていた。

ピアウイの南部地域は、ほとんど未開発でパラナやリオグランデ・ド・スール、マツトグロツソ・ド・スール辺りから非日系人の農業者達が集団で入ってきている。

そんな中の一人でリオグランデ・ド・スールからやってき

た農園主は、六千ヘクタールの耕地にカジュー栽培を行っていた。

生産物はトラックでセアラ州の首都フォルタレーザまで一千二百キロかけて運び出している。

ピアウイ州がJICAに依頼して調査しているのが、パラナイ川の航行についてである。

パラナイバ川は、この南部地域から北上し一千四百キロ、大西洋まで達しているのだ。



パラナイバ川上流の田園地帯

この川が航行可能となれば、一千トン級の船を走らせピアウ

イの南部地域に接するバイアー、マラニョン、トカンチンス、セアラーからの農産物運搬を、一手に引受け様という大きな計画である。

途中、ボアエス・ペランサ・ダムをパナマ運河方式を採用し、四二メートルの水位調節をしなければならず、計画は大規模なものである。

しかし、近い将来この計画が実現なればボンジェズやサント・フィロメーナ、パルナグア、ジュブエス、バレンサ等の田舎町は一変してしまう。

先を見越した訳ではないだろうが、これらの町や村周辺に日系人が十一人数えられる。

ピアウイ州の首都テレジーナ近郊に入った最初の日本人は、一九五〇年代の後半に竹下一さんがいる。竹下さん一家はアマゾナス州より転住してきた。

竹下さんの後を追うようにテレジーナ入りしたのが、一九五七年の三浦健一さん一家五人である。

竹下、三浦の両氏は、野菜栽培や養鶏等を営み、都市へ生産物を出荷していた。

一九五九年に三浦氏が、弟の順一さん一家を北海道から呼寄せた。順一さんは、市内で長い間旋盤業を営んでいた。

一九七四年に、アルベルト・シルバ州知事の招待を受け、サンパウロより熊本県出身の一世・中山征治さんが、州の政府広報担当特別補佐官として赴任してきた。

中山補佐官は、州知事が交替しても、常に州政府の要職のポストにあると言う、希有な人物で現在も国際協力特別補佐官として次官級の待遇を受けている。

一九九二年十月には、ピアウイ州で初の日系人会「ピアウイ日伯文化協会」が設立され、中山氏がその初代会長に治まっている。



中山 征治 氏

テレジーナ市内には八家族の日系人が居住し、農業・サービス業・建築業などにそれぞれ従事している。

ピアウイの北部の海岸地方では、エビの養殖が盛んに行われている。

すでに、外国への輸出も行われている程の技術レベルで、将来有望な産業となるだろう。

この海岸地方の町パルナイーバでエビ養殖に挑戦しているのが、熊本県出身の鬼塚ヨシカズ氏である。日本政府もこの地で、エビ養殖の調査研究を行っている。

アマパー州

アマパーは、自由貿易港として商業都市に変貌をとげようとしている。

首都のマカパとその隣接地サンターナにかけて、輸入品の無税取扱いによる販売が許可されたのである。



対岸の仏領ギアナは目と鼻の先・国境のオイヤボケ Foto 近岡

同州はセーラ・ド・ナビウから採掘されるマンガンと、かつてのジャリー社の大森林プロジェクト以外にこれといった産業がなく、国防上以外にあまり重要視されていない州である。

首都のマカパ（人口十七万）は、赤道の直下に位置しており州の北部が仏領ギアナとスリナム国とに接していることから、国境線の問題で十五世紀から様々な紛争をおこしており、国防上からは非常に大切な地ではある。

そもそもアマパーの開拓を最初に始めたのは、フランス、オランダ、イギリス人等で、隣国のギアナ三国を拠点に侵入を図り、大西洋に面したカーボ・ノルテには基地を設営して牧畜やタバコ、砂糖キビ等の栽培まで行っていた。

ベレンから派遣されたポルトガル軍が彼等を駆逐するのは一六三七年に入ってからで、その後もフランスは執拗にアマパーに侵入しブラジル側と幾度も交戦している。

一七六四年には、現在も残っているサン・ジョゼー・ド・マカパ要塞の着工に入り、十八年の歳月をかけて一七八二年に完成させている。

工事の為に、七五〇人の黒人奴隷をアフリカから連れてきている他、二千人を越す国境守備隊も駐屯し始めた。

この食糧の供給を解決するために取られた処置が、ポルトガル領ソーレス諸島からの農業移民の導入である。当時、三四〇家族が導入されている。

アマパーの開拓はこうして国防上の問題をきつかけとして、開拓されている訳である。

一九〇〇年にブラジルの外交官リオ・ブランコの活躍で、アクレの領土問題がやっと解決した後には、同州はただの辺鄙な町へと戻ってしまふ。



ギアナ3国からの侵入を防いだ要塞・Foto近岡



仏領ギアナの町サン・ジョルジFoto近岡

次に動きが見られるのは、一九四三年のパラー州から分割され連邦直轄領となった時と、五〇年代に二千五百万トンの埋蔵量のマンガン鉱床が発見された時ぐらいであろうか。

このマンガン鉱の開発のために、アメリカのベッレヘム・スチール社が子会社を設立した。

マカバに設立されたイコミ社は、マンガン鉱の積み出し港の港湾施設や、一九五八年にはサンターナ港から鉱山までの百九十五キロ間の鉄道の敷設を図った。

新しい産業が興ると、町にも活気が出てくるものである。当時のアマパー直轄州は、州の農業振興とマカパ市の食糧供給、そしてイコミ鉱山従業員に対する野菜供給のために日本人移住の導入を計画した。

移住地は、マタピーとファゼンジーニア、マザゴンそして後にカンポグランデの四地区である。



サンターナの港

一九五三年第一陣としてマカパの北百三十キロにあるマタピー植民地へ二十四家族、またマカパ南方十四キロにあるファゼンジーニアへ五家族が配耕された。

集団による農業者の移住は、実に十八世紀のソーアレス移民以来の事であった。

翌年マタピーへ第二陣二十一家族、一九五七年マザゴンへ七家族四三名が日本より次々と入植してきた。

戦後日本人移住者の入植した移住地は、マイナスの要素がどこでもよく似ている。

交通不便で、入植者が生産物を大量に供給し出すと市場にあふれ、移住地自体もインフラが出来ていない。

アマパーの場合も、これにあてはまる。永年作物のゴムを強制的に植付けさせられたが、後の作物が続かない。

営農資金はやがて底をつき、転住者が始める。もっと立地条件の良い所を求めて、移住者達は各地へと散っていった。



アマパー日伯協会公民館

一九六三年当時のマカパ市の人口は、僅か三万五千人である。

マタピー入植者は一九六四年までに、三十三家族が脱けており、現在三家族が残っているのみである。

ファゼンジーニアの移住者達も去って行った。町から近く有望かと思われていたが、やはり市場が狭く生産物が思う様に捌けなかったものである。

マザゴンの移住者達は酷な表現だが、貧乏くじを引いてしまった。

マザゴン移住地は、マカパからアマゾン河を遡り六十五キロ、マザゴン町の対岸の島内五千ヘクタールがあてられた。移住地への幻の第一陣は一九五五年四月、サンタレンのベルテーラゴム園から転住させられた十五家族である。

この移住者達は、マザゴンの町に一カ月程居ただけで全員ベレンへと引揚げ、タパナンにあつた移民収容所を経て第一回グアマ移住者となっている。

現在、サンタイザベルに居住する平瀬勝衛さん一家もこの中にいた。

「マザゴン移住地で最初に見たのは、立ち木に何かのスジが入っているのです。現地の人に、あのスジの跡は何かと問い合わせたら、雨期になると増水してあのスジの部分まで水位が上がるとの返事でした。」

それでは、耕地に当る所は水没してしまうじゃないか、と言う事がわかり平瀬さん等は移住地入りを拒否して、ベレンの領事や移住の引受団体の辻社長等と交渉して急遽グアマ移

住地入りとなったものである。平瀬さん達の判断は賢明であつたかもしれない。

もつとも、グアマ移住地も水没移住地で、十五家族の転住者達の運命はあくまでも過酷であつた。

幻の第一陣から二年後の一九五七年十月、日本からの直来者達四十三名が島へ上陸した。

島は原始林に覆われ、耕地の八〇％が湿地帯、残りが高台であつたが、条件の良い土地はすでに現地の人が居住しており、日本人移住者達は島内の奥深く配耕されていた。

第二トメアスーに住む竹下澄子さんは「孤島の植民地に、日本人が入植している事態が不思議であつたかも知れない。一九五五年入植受入れ不備の為、十五家族も退耕した経緯が知られた。」とパンアマゾニア百六十七号に当時の想い出を記している。

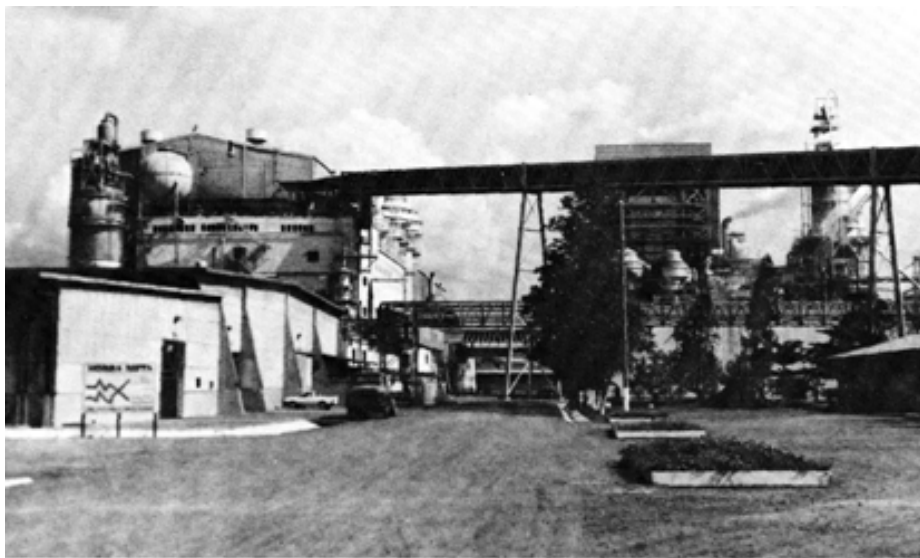
入植した後に、先陣の退耕が知らされている様子である。竹下さん一家は、最低の生活を強いられながらも五年間を島内で耐え、以降カンポベルデ移住地を経て、トメアスーへと転住している。

「北伯第一の日本人植民地トメアスーに移住したのは、一九六四年二月である。何処へ行つても日本人ばかりで、安心感があり帰国した様な錯覚を起こすのであつた。」

「八年もの耐乏生活で棒に振つた基盤を、取り戻すべく努力

した。心身ともに疲労困憊した。私達はここで初めて人間らしい生活が出来、瞬く間に歳月は過ぎて行つた」竹下さんが、パンアマゾンニアに記している文である。

どこの移住地が普通で、どこの移住地がつかつたと言う判定はしてはならない事かもしれないがしかし、アクレのキノリィやロライマのクィアーノ、パラィのグアマー、かつてのトメアスー、そしてアマパーのマザゴン、大宅壮一がアマゾンス州のベラビスタ植民地を緑の地獄と称しているが、どこもかしこも緑の地獄だらけで、そんな所へ配耕された人達の事を思うといくら昔の事とは言え何ともやりきれなくなつてしまう。



日本から運ばれてきたジャリーの紙パルプ工場

アマパーには、もともと鐘紡の武藤山治社長名義で十万町歩の土地コンセッションがあつた。

第二次大戦でこれが無効となつているが、若し南拓がアマパーのコンセッションに着手していれば、アマパーの日本人移住はまた違った形でその歴史を刻んでいたかも知れない。

なお、最後になつてしまつたが、アマパーを最初に訪れた日本人は一九三〇年の南拓の生島調査員、農業者としては熊本県出身の福岡未七さんが、一九五〇年トメアスーからファゼンジーニアに転住し野菜作りをしていた。

現在のアマパー在住の日本人ならびに日系人は、三十五家族程度となっている。

アクレ州編

ブラジルの最西端、ボリビアとペルーに国境を接した州である。

普段でも二時間の時差があるところへ、夏時間システムを国がとっておりまた、アクレ州が夏時間を採用してないときているので三時間の時差が出来てしまった。

飛行機の時間は夏時間で運行されているので、アクレの首都リオ・ブランコへ到着すると時計を三時間元へ戻し、昼食

前だったのが突然朝食へと変わってしまった。
おなじみのテレビの夜の番組が、日中に放送されているの
も妙な感じである。



下町ムードのリオブランコを中心街

飛行機がロンドニアの首都ポルト・ベリヨを離れ、リオ・
ブランコへ近づいてくると機外に牧場地帯が広がってくる。
この地帯の森林伐採も相当なものである。アクレの牛の飼
育頭数は、一九七七年に七万五千頭これから三年後の一九八
〇年には、二十九万頭と一挙に二六〇%もアップしており、
近年の州開発のスピードぶりが伺える。

牧場地帯を抜け飛行機は、町のちよつと外れにある空港へ
と着陸した。実はこの飛行場は、もともとペルー下りの古野

功さんという人の農地だった所である。

アクレ訪問の第一歩から、日本人と縁のある話しを聞き時差ボケも吹っ飛ぶ思いであつた(たつた三時間の時差ボケであるのだろうか)。

アクレの住民は、東北伯出身者の子孫がほとんどである。一八七七年に東北伯一帯に大早魃がおこり、この地方を逃れてアマゾンに入りセリンゲイロ(ゴム採集人)となっている。当時僅か三年間に二十五万五千人の人々が移動しており、その大半がアクレへと入っている。



高層ビルの無い市街地

また一九七〇年代に入り、リオ・ブランコからポルト・ベリヨを経て南伯へ通じる国道三六四号線の開通により、サンパウロ、パラナ等の地方からも人々がアクレへと入ってきた

七〇年代、八〇年代とそれぞれ十万人ずつの人口増である。リオ・ブランコの食品や生活物資は、国道三六四号線経由でポルト・ベリヨ（五百四十キロ）から毎日入荷しており、町の商店街にも品物が豊富に取揃えられている。

リオ・ブランコの市内は、下町ムードで活気がある。高層ビルは皆無で、最高の州立銀行の建物が六階建て。

街角や公園内にタカカ売りの屋台があつたのには驚かされた。タカカはベレンの専売特許かと思っていたが。またバナナを薄く切って、その場であげるバナナフリッタの屋台もあり、ちこちで見かけた。



ボリビア軍の駐屯地は川の右手にあった



町のあちこちで見かけるタカカの屋台

農産物で米に次いでバナナの生産が多い州だけの事はあ

る。

そのアクレの雨期は早くて長い。十月頃から始まり、五月の初め頃までかかってしまう。

町の中を流れるアクレ河の水も、雨期とともに徐々に水位が上がっていき十二メートルほどは高くなる。

七五年と八六年には堤防を越してしまい、町が水びたしになっている。乾期の時期の五月から九月にかけて「フリアジェン」と言う現象が発生する。

例のアンデス風である。フリアジュンによって、どの位まで気温が下がるかと言えば、一九二一年にクルゼイロ・ド・スールというアクレ第二の都市で七・三度を記録している。リオ・ブランコでも、一九五二年に八・八度の最低記録がある。

熱帯地方でここまで冷えたら、凍死者が出てしまうのではないだろうか。

アクレの歴史も実が変わっていて面白い。

アクレはもともとボリビアの領土であった。一八六七年に条約によって正式に認められている。

ところがアクレに実際に居住していたのは、セアラーから家族や仲間達と共にやってきたジョアン・ガブリエルでゴム液の採取を行っていた。

この後、セルトンの大草魅でセアラーやパライーバ、アラゴアス、リオ・グランデ・ド・ノルテ方面から毎月のように

蒸気船に乗り、ゴム採取の労働者やその家族達に移住してきた。

ボリビアへ達するアクレー川



一八九八年当時のアクレの人口の九五%が、ブラジル人で占められていた。ボリビア政府は軍隊を駐留させ、運び出されるゴムから十五%の税金を徴収していた。

リオ・ブランコ市内のアクレ河に掛かる橋の向う側、現在のセグンド・デイストリット（第二地区）と呼ばれている一帯がボリビア軍の駐屯地跡である。当時はプエルト・アロンソと称されていた。

ルイス・ガルベス・ロドリゲス・デ・アリアスと言う、スペインの元外交官の登場である。

ガルベスは自分の職を捨て、アマゾン河口の町ベレンへと

姿を現す。一八九九年二月、ベレンにあるボリビアの領事館へ勤務する事となった。

この折、ボリビアがアメリカと取り交わすアクレ地方の領有に關しての秘密協約を知り、ベレンを去りアマゾナス州へと出向いた。

時の州知事ラマール・ジュニオールへ、ブラジル軍によるアクレの制圧を持ちかけるのであった。

ラマール知事は立場上軍をアクレに出す事は出来ないが、個人的にガルベスを支援した。

ガルベスはラマール知事から援助してもらったお金で義勇兵を募り、武器弾薬、食糧等を揃え一八九九年六月四日三名の部隊を率いアクレを目指した。

ガルベスの部隊は、蒸気船に乗りプルス河を遡行、更にアクレ河に入る為に小さな船に乗換えプエルト・アロンソに到着した。

部隊はプエルト・アロンソに着くまでに河岸に住むブラジル人を巻き込み、舟を何十隻も仕立てて町へ突入した。

ボリビアの駐留軍は戦うこともせずにあっさりと白旗を揚げてしまい、ガルベスはアクレ共和国を設立し独立国の宣言をやってしまった。

ガルベスは大統領に自ら就任し一方で、ブラジルの大統領にアクレをブラジルに併合してくれる事を要請している。

この後の一九〇三年十一月のペトロポリス会議によりアク

レ領地がブラジル領土となるまで、ブラジル＝ボリビア間に数々のドラマがあるが、ガルベスの一見無謀ともいえる行為と外向的手腕で勝利を治めたりオ・ブランコ男爵の活躍あつての今日のアクレ州であろう。

アクレ州では、一九〇二年のボリビア軍との戦いに従軍した戦士達を後々まで厚遇し、かなりの年金を支払っていた。最後の一名が十数年前に亡くなっているが、州議員のサリーより多い額を支給している。

先にペルー下りの古野功さんの事にふれたが、リオ・ブランコに最初に居住した日本人が古野さんである。



ペルー下りの古野さん



古野さんの次女スエノさん

一九二〇年に、ボリビアのコビハというブラジルとの国境の町からアクレー河を下りリオ・ブランコに辿りついている。一九八七年十一月に亡くなっているが、町には古野さんの子孫達が沢山残っている。

一九五九年に日本人移住者がやってくるまでの四十年間、日本語を使う事はまったくなく、キナリーへ移住者が入った

時には喜んで何か事あるごとにキナリー植民地へ足を運んでいた。古野さんが亡くなる前に、キナリーへ遺体を埋葬して欲しいと家族へ遺言しており、古野さんのお墓は希望通り親友であつたキナリー移住者の西沢さんのお墓の隣に設置されている。

アクレ州は、アマゾン地域で一番古く日本人が足を踏み入れた地である。

ペルーからアンデスを越えボリビアへ入り、そして泉靖一、斎藤広志両先生の言葉を借りれば、「アマゾンの密林の奥深く、風に吹かれたタンポポの実のようにちりぢりに飛び散つた……」ボリビア国パント州コビバは、アクレ州に隣接している。コビバの町で腰を落ち着けた人、コビバからアクレに入りシャプリの町に居住したり更にアクレ河を下りマナウスやベレン果ては、サンパウロ、パラナまで大遠征を成し遂げている人達もいる。

古野さんは、仲間数人と徒走やカナーでリオ・ブランコを目指した。二百キロほどの距離だが当時一カ月かかって辿りついている。

リオ・ブランコに上陸したのは、古野さん一人であつた。他は再びコビバに戻ったり、マナウス方面へと消えて行つた。古野さんは、現在の飛行場のある地で野菜作りを始めやがて、ブラジル人の女性ドナチリアさんと結婚する。

飛行場造成のため土地が吸収され、代替地として現在は町

の住宅区となっているアビアーリオ区へと移る。

やがて第二次世界大戦となり古野さんの一等地は州政府により没収され、代わって町外れの原始林地帯二十五ヘクタールへ強制的に移動させられてしまった。

古野さんにとってこの事件は、一生の心の傷となり、次女のスエノさんの話しでは「死ぬまで悔しがっていました」。

古野さんはこの後、土地や全ての財産名義をブラジル生まれの娘さんの名で登記している。

日本の国を意識せずに、唯一人でアクレで生活している古野さんにとって一九五九年に喜ばしい出来事がおきた。

日本からの移住者達が、こんな辺境の地まで入ってきたのであった。

今でこそアクレ州は、国道三六四号線を通じて南伯までのルートが確立されているが当時は、まったくの地の果て的な所であった。

神戸からパラ州のベレンまでは移住船で三十八日間、ベレンからリオ・ブランコまで船を二回乗り継ぎ二週間。乗換えの待ち時間を加算すると、ベレンから目的地まで三十日近くかかっている。

これらの移住者達は四月に六家族四十四名、同年六月に七家族四十七名が、リオ・ブランコから三十キロ地点にあるキナリー植民地へと入植した。

第二次移住として夫や息子達と共にリオ・ブランコに上陸

した守屋巴さんは「六月にリオ・ブランコに着いたら、四月の先陣の人達がまだ宿舎で共同生活をしていたので驚かされました」と語ってくれた。



アクレー日本人移住者の上陸地点

キナリーの原始林はまだ未開のままであつた。それから二十五キロの地にあるキナリー村へ全員が移動し、村に居住しながら五キロ先の入植地の開拓へ通う生活が暫く続く。

キナリー村は現在は、人口一万二千程の町へと変貌を遂げている。

移住者達は、馬車に乗ったり自転車に乗ったりし、朝早くから夜遅くまで開墾作業を続けた。

やがて、移住地で居住できるようになった者から村を出て行った。

今でもキナリーに居住している浜口さん一家は、移住地内

にテントを張り村への行き帰りの時間を惜しんで開拓した口である。

キナリーへ入植した十三家族中九年後までに、九家族が同地を去っていった。残っていた四家族も一人去り二人去りし現在、西沢イチさんと浜口カズコさんの二家族が居住しているのみである（主人はいずれも他界している）。

西沢さんはキナリーの町で、日用品や食品を売る店を営んでいる。



キナリー移住者・西沢イチさん



キナリー村は今は町へと変貌している

西沢さんの店で売る煎りたてのピーナツは有名で、リオ・ブランコからお客さんが買いに来る程である。一週間に百キロは、確実に出るとのことであつた。アクレではピーナツは生産されていないらしい。移住地には、次男が残り今でも農

業を営んでいる。

もう一家族の浜口家は、ミニスーパーをキナリーの町で開いている。主人の寛さんが存命中の頃は、精米所や一万羽を越す養鶏業を営み、かなりの羽振りをきかしていたという。

「入植当時から現在まで、特に苦しいという記憶はありません。キナリーが特に悪かったとも思いません」と浜口カズコさんが自信を持った口調で、キナリーでの三十数年間を語ってくれた。



浜口さん親子



辺びな移住地の代名詞となったキナリー移住地

しかしこれは、最後まで残りアクレのその後の発展とともに息を吹き返した成功者（少数派）の感想であろう。

実際には、リオ・ブランコまでの道は悪路で永い雨期に入

ると、車は通行出来ず馬や徒歩以外に通える手段はなかった。当然移住地で作った米や野菜が売れなくなってしまった。病人が出た時には、手づくりのタンカに病人を乗せ二日ばかりで町へと運んだ時もあった。それにマラリアも発生した。

ペルー下りの古野さんも、そんな移住地が心配でたまらず自分の仕事を放つても移住地へ通つていたと言う。

キナリー移住地の脱耕の大きな原因を占めたりオ・ブランコまでの街道は、今では完全舗装となり街道沿いには別荘も建ち昔日の面影もない。

日本人移住者が入植したキナリー移住地には、移住者達が夢を托して植樹したゴムの木々が大きく育っている。

時代が代わりコロニアの主は今では、非日系人の農業者達である。

人口二十万の都市を僅か三十キロに控えた貴重な食料基地としてキナリーは今、脚光を浴びている。

このアクレの新時代に、サンパウロやパラナから転住してきた日系人達がいる。

一九七四年ロンドリーナからやってきたのがアクレ日伯文化協会の青年会長を勤めている小池修さん一家である。

小池さんはリオ・ブランコ近郊の土地六十五ヘクタールを購入し、米やトウモロコシ、野菜等を栽培した。

七〇年代に森清茂、清則兄弟やその他四〇五家族が農業

者としてアクレ入りしている。

その他の分野でも、様々な職業の日系人達がリオ・ブランコに居住を始めた。

これらの人達のパイオニア的な人が、川田哲夫医師である。サンパウロ州アリアンサ出身の二世医師は、一九六三年というから日本人移住者の入植四年後と最も古い。

キナリーの道が悪く、馬に乗って往診した事もあるという先駆者で、一九七九年のキナリー入植二十年祭には、国際協力事業団ベレン事務所より感謝状を授与されている。川田医師は特別で後は七〇年から八〇年代にかけてである。

リオ・ブランコで米倉兄弟と並んで大手の建築会社を経営している笹井隆、厚兄弟。州や市の建築物をほとんど引受けている。

リオ・ブランコ市の工事局長は、アラサツーバ出身の中村好夫さん、衛生局長はモジダスクルーゼス出身の川原カルロスさんである。

アクレにはキナリーの西沢、浜口一家やペルー下りの古野一家を加えて現在七十家族二百九十九名が居住しており、日系人経営による中華料理店も市内に一軒ある。

かつてペルー下りの通過ルートに当たっていたシャプリーの町には、誰も現在居住していない様子である。シャプリーまでの百八十キロ間が、雨期のため途中までしか車が入れず現地を訪れる事ができず残念であった。

シャプリーで暫く農業をやっていた森清則さんや、仕事で一年程シャプリー通いをした笹井厚さんの証言である。

最後になってしまったが、州の検事の職にある鈴木義雄さんと言う人も居る。父親はペルー下り、母親は非日系人である。

リオ・ブランコから西へ向かいペルーへと抜ける国道が完成すれば、アクレは交通の要衝として今後益々発展して行くであろう。

ブラジルの輸出品がパナマ運河を通過する事なく太平洋へ達するからである。

アマゾンの自然環境破壊という声に、この横断道路計画は中断されてしまつて整備されていないが、すでにペルーの国境まで道は達しているのだ。

後は、政治的な解決を待つのみである。



リオ・ブランコからペルーへと抜ける国道

アマゾナス州編

アマゾナス州の首都マナウスは、ゴム景気で栄えた町である。

アマゾン河上流の密林地帯に十八世紀後半に、金に飽かして造られた都があり、ヨーロッパから一流のオペラ歌手や芸人達が出演したアマゾナス劇場が建設されていたとは、ゴムというものの計りしれない富が伺い知れる。

ゴムブームは、ヨーロッパから文明まで輸入した。イギリスは一八七二年に、先行投資を図り「アマゾン河汽船航行会社」を設立、三十一隻の河蒸気船を用いてアマゾン河の足を確立した。

イギリスはこの他にも、一八九五年に「アマゾン電信電話会社」、九八年「パラীগス会社」、一九〇二年から九年にかけて「マナウス築港営業会社」「パラ―電鉄電灯会社」「マナウス市改良会社」「パラ―工事会社」「マナウス電車電灯会社」を次々に設立して行つた。

アメリカも一九〇六年に「パラ―築港営業会社」翌年に「マデイラ―マモレー―鉄道会社」を設立している。

ヨーロッパとアマゾンとを結ぶ月一回の定期航路も当時あつた。

七千二百トンの大型客船が、英国のリバプール港よりベレン港を経由でマナウス港まで遡行していた。

ゴムの富を享受している層は、ヨーロッパから直接家具やドレスを購入していた。



船は今でも主要な交通の足である・マナウス港

このアマゾンの歓楽の都をめざして、日本人も早くからマナウス入りを果している。

日本人の恐らく第一号と思われるのが、竹沢萬次である。一八九〇年（明治二三年）に「シルコ・インペリアル・ジャポネース（日本帝国サーカス）」を率いて、ゴムの全盛期を迎

えようとしているマナウスの土を踏んでいる。

ゴムブームで湧くアマゾンから、カフェーブームのサンパウロ、もつと南のリオ・グランデ・ド・スールからアルゼンチンまで竹沢のサーカス団は興行を行なっている。

次いで一九〇〇年代の初頭に入り、ペルー下りの日本人達がアンデスを越えてボリビア経由でブラジル領のロンドニアへと入り、そこからマナウスへと渡ってきている。

一九〇九年から一二年にかけて松下正彦と言う行商人が、マナウスを何度か訪れている。松下は日本の玩具である竹トングや扇、紙風船等を売り歩いて、かなりの利益を上げ最後は、マナウスからペルーへと行商に行き一財産を築いた人物である。

この松下がマナウスを訪れた時に、すでにマナウスに居住していたペルー下りの日本人と会っている。

マナウスに居住していたペルー下りの人としては、記録に残っている人だけでも山根武一、飯野太吉、高橋数馬、広繁利吉、藤田十作、西垂水金次郎、飯田泰次郎や諏訪敏男氏等が、一九一〇年代から二〇年代にかけて転住してきている。

南伯へ移って行く途中、マナウスを経由して行った人達ならば恐らく数しれないであろう。マナウスで医師のインチキ免許を手に入れサンパウロで暫く開業していた大庵喜八氏や、日本新聞社を創刊した翁長助成氏、ベレンへと更に移住した玄場松市氏や高橋庄助氏、川本清八氏等々書き出したら

キリがない程の数である。

ペルー下りとは別のルートで、マナウスへやってきている人達も居た。英国のリバプール港経由である。本誌の「アマゾン移住前史の項と重複するので詳細を省くが、一九一二年にはそれらの人々の記録が見られる。

一九一六年、コンデ・コマ（前田光世四段）と佐竹信四郎四段もこの地で格闘技の興行を行なっている。

この他、ブラジル移住史中の有名人である鈴木貞次郎氏（南樹）も、一九一二年にマナウスを訪れ政府のゴム調査隊とともにギアナ国境近くまで踏査している。

さて、アマゾナス州への邦人移住史に、そろそろ入って行きたい。

同州の邦人移住は、パラ州のそれと平行して進行している。

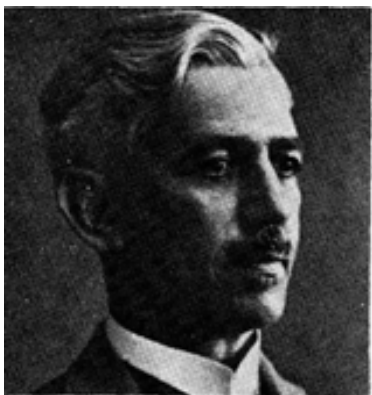
一九二四年、日本大使館から派遣された野田良治書記官、森本海軍武官がベレンを視察した後にマナウスを訪れている。両名の視察は、パラ州への邦人移住を州知事が希望しており日本政府側の事前調査的なものであった。

パラ州では、邦人移住へのお膳立てがその後着々と進み一九二六年には鐘紡の重役福原八郎氏を団長とする調査一行が、パラ州を訪れる事となった。

田付七太駐伯大使は、福原調査団二行をパラ州政府に紹

介する事を目的にパラ州へと向かう。

調査団一行の到着が遅れた事からエフィゼニオ・サーレス・アマゾナス州知事の招待を受け、先にマナウスをこの折訪問した。



エフィゼニオ州知事

この田付大使一行中に、大使館囑託という身分で栗津金六氏がおり、栗津氏は後に「アマゾニア産業研究所」の設立に関り合いを持つこととなる。

また、福原調査団一行中の通訳大石小作氏は「アマゾン興業」設立にタッチしてくる。栗津氏、大石氏ともに奇しくも一九二六年のアマゾン訪問がきっかけとなり、後の開拓事業と縁が出来てくる訳である。

もう一つ、アマゾナス州へ入った開拓者グループに「海外植民学校」がある。同校々長の崎山比佐衛氏は、一九二八年七月にマナウスを訪れ海外植民学校の分校を建設する事を決意している。

アマゾニア産業、アマゾン興業、海外植民学校の三つの異

なつた開拓グループが、ほぼ同じ時代にアマゾナス州の開拓に手を染める事となる。

各グループの詳細は、この後の“アマゾン河上・中流地域”の項に記載して行きたい。

マナウス市周辺の移住地

マナウスは、自由貿易港である。日本の大手企業であるソニー、ホンダ、シャープ、セイコー、ナショナル、スズキ、ヤマハ等十社が、市内から五キロ地点にある工業団地で生産活動を行なっている。

この他、日系の地場企業もかなりマナウスへ進出してきており、アマゾナス日系商工会議所（川田敏之会頭）の会員数は四十二社となっている。

マナウスは、ゴムブームで人口が増え次にフリーゾーンでまた町が発展している。

一八六〇年の人口は僅か三千五百人、ゴムブームで北東伯特にセアラーからの移住者が流入し、一九一〇年には八万人へと急成長している。セアラーからの移住者達は、同地方を襲った未曾有の大早魃もあり、ゴム液採集の仕事を求めて移動してきたものである。

余談になるがセアラーの大早魃は一七九一年から九三年、一八七七年から七九年の二回が特にひどく、牛はほとんど全滅、七七年と七九年の折りには州の人口の半分に当る五十万

人が飢えと流行病で死んでいる。

マナウスの自由貿易港は、一九五七年に法制化され、実際に活動を始めたのは一九六七年からである。マナウスを含む一万平方キロが、自由貿易港に指定された。

一九六一年二十万だった町の人口が現在は百万人となり、おり、ロンドニア州を経て南伯地方へ通じる国道三一九号線も人口増加の原因となつている。

マナウス市内の日系人口は現在約五百家族（進出企業社員も含めて）程となっている。

二世層も各界で活躍しており、市会議員の三木将美さんや軍警大佐の岡田オダシーさんなどが居る。

日系人会としては、西部アマゾン日伯協会（出田務会長）が、一九八〇年五月に設立されており、アマゾン地域の西部の各州を束ねている。

同会では、歯科と内科の診療所を運営している他、日本語学校（昼間部）並びに日語講座（夜間部）も開講しており生徒数は各百名程度が常時学んでいる。

ベラビスタ移住地

戦後、辻移民村として一九五三年九月に第一陣二十三家族百三十九人が入植している。

同移住地は、連邦植民地で一九三六年に開設されていたが成績振るわず、ジュート栽培で日本人移住者の活躍を知った植民地支配人が、本部へ働きかけ日本人移住の導入を取り付けた。

移住地は、マナウス市の対岸に位置しており、ベラビスタ地区とカカオピレラ、アグアフリア、アリアウ、カルデロン等の地区の二つに分けられる。

ベラビスタ地区へ行くにはマナウスからリオネグロ河、ソリモンエス河を経て小船で六〜七時間。

カカオピレラ等へは、リオネグロ河を横断し四〇分の距離である。

この二地区を称してベラビスタ移住地と言うが、入植当初は両地区を結ぶ道路がなく水路による交通のみであった。

第一回移住者達は、アグアフリアへと入植した。日本からの移住者達は翌年六月に三十八家族二百十八名三回同年七月七家族三十六名と続き一九六二年十月までに合計百三十九家族八百十八名が入っている。

しかし移住地は土地が悪く、交通の便も水路に頼る他な

く不便な地であつた。

当時のマナウスの人口が十五万程度で、移住者達の作る生産物は販売に行き詰まつた。



開拓初期の小学校（ベラビスタ）

第五回としてアグアフリアへ入植した出田務さん（西部アマゾン日伯協会会長）は、「野菜を作っても食べる人が居なくて売れなかった。土地が痩せており、籾二俵を蒔いて米が十俵しか収穫出来なかった」と当時を語る。

出田さんの入植する二カ月前に日本から評論家の大宅壮一氏が移住地を訪れ「緑の地獄」と同地を評している程の条件下にあつた。

次々に到着する移住者を受入れる現地側の準備もゼロに等しかった。

アマゾナス州ベラビスタ移住地創設三十年史にその辺の実情が記載されているので抜粋してみたい。「二カ月毎に数十家族、数百人の移住者が相次いで到着するのに対して受け入れ準備はゼロであった。道路の不備、耕地割り、伐採未完了、仮宿舎に居るものは次の移住者が来るので追い立てられ、十キロ近い、道とも言われぬ山間の踏み分け道を家財道具を肩にて運搬し、ヤシの葉を取って地上に敷き、雨露をしのぐだけの屋根をかけ、彼等は生活した。食料品は三十キロ、五十キロのものを、数キロの山道を肩にかついで飢えをしのいだ。」

一九五五年より退耕者が出始めた。ベレンや南伯へと多くは去っていった。

一九五六年までに百二十五家族が入植し、九十七家族が耕地を去っている。

この当時パラ州のトメアスー移住地は、胡椒の黄金時代であった。退耕者はその後も続き最終的には百十七家族が出ているが、退耕者の三十七%がトメアスとベレン近郊へ、三十五%がサンパウロ方面、マナウス周辺が二十六%となっている。

「トメアスから、日本人のパトロンが我々を誘いにやつ

てきてました。食うや食わずの時に、目の前に現金を積んでの誘いですから酷でしたよ」と出田さん。

当人は意地でもトメアスへはいくまいと誓ったらしい。かつて緑の地獄と称されたベラビスタ移住地も、今では対岸に百万の大都会を控えた食料供給地となっている。

ベラビスタ地区には居住者は誰も居ないが、その先にあるマナカプール町近くに二家族、カルデロン、アグアフリア、カカオピレラ地区に二十家族が住み養鶏や蔬菜、ピメンタ、グアラナ、果樹等を栽培している他、牧畜も営んでいる。

一九八三年には、移住地内の電化工事が行なわれ三十年目にして文明の灯に接している。

エフジェニオ・デ・サーレス移住地

マナウス市より、イタコチアラ街道を四十キロ地点より始まる州政府の移住地である。移住地までの道路は舗装されており、マナウスまでの交通の便は非常に良い。

しかし、開設当時はジープやトラックでしか通えぬ様な未完成の道路で、雨の日には通えぬ区画もあった。

一九五八年十一月に第一回移住者十七家族百十八名が到着した。

山焼きはまだ終わっていない、移住地は四〇〇五〇度もある急傾斜地もあり、そして黄色い重粘土の土に移住者達は

一時不安にかられた。

移住地と町とをつなぐ唯一の交通機関は、州農務局のトラックが週に一回が二週に一回となったり、三週に一回となる事もあり移住地内の人々にとって、この輸送の問題は切実な悩みであつた。

一九五九年に、海協連からフォードの六トン車が貸与されこの問題が解決された。

移住地内で栽培した野菜類は、アマゾナス劇場横の大通りに空き箱に積んでの露天売りで当初スタートした。



エフィゼーニオ・デ・サーレスの組合

移住者の入植は、毎年一回のペースで一九六一年まで続いた。ベラビスタ移住地やロライマ州のクイアーノ移住者が、同移住地へと転入してくる反面、退耕者もあつた。しかし、退耕者の数は割に少ないものであつた。

この退耕者中五家族が、ペルー国プカルバへと移つていく。

ピメンタ栽培がプカルバで始まり、経験ある邦人農業者がスカウトされたものであつた。

一九五九年四月、エフィゼニオ・サーレス農業共同組合の前身であるマナウス農協が発足、組合員十七名からのスタートであつた。

一九六〇年一月移住地内にRIOTAOYAMA（尾山良太）小学校が開設され、念願であつたイタコチアラ街道も一九六五年にイタコチアラ迄の二百八十キロが舗装された。

一九六八年四月には、エフィゼニオ・サーレス自治会も設立され移住地は次々に体系を整えて行つた。

この頃からマナウス市も、貿易自由港として活動を始め、人口も見ると見る内に増加していった。

エフィゼニオ・サーレス移住地は重要な農業生産基地としてまたたく間に経済が安定、生産物は全てマナウスへと搬出している。

営農形態は、養鶏を中心に蔬菜果樹、ハワイマモン等で、養鶏では三万羽を飼育している大型養鶏家も居る。同移住地内

の居住者は三十七家族となっている。

カシヨエイラ・グランデ移住地

マナウス市と隣接している。市の中心から僅か七キロの地点にある。

三百五十町歩の土地内に二十二家族が居住している。

一九六六年に、元ベラビスタ入植者達十人が共同で土地を購入したのが始まりである。

その後、一ロツテ百三十四メートル×一キロで分譲を開始し、現在地権所有者は三十六名となっている。

地理的に非常に恵まれており、同地内で栽培される野菜、マモン、果樹類そして鶏卵とともに全てマナウス市場で捌けている。

移住地内には、進出企業の子弟を対象としたマナウス日本人学校や日系キリスト教系の全日制小学校、日本人の建設した自然博物館などの施設もある。この他、マナウス・カントリークラブ運営のゴルフ場も隣接している。

移住地内にもし悩みがあるとすれば、町が近すぎる事であろう。

マナウスの住宅化の波が移住地の入り口まできており、マナウスから車で移住地を訪問すると、住宅地を抜けた途端突然といった形で田園風景が展開するので、むしろ戸惑いを覚

えるほどである。

膨れ上がるマナウスの都市化の波を、いつまでカシヨエイラ・グランデ移住地が防いでいられるか一等地の悩みである。

アマゾン河上・中流地域

《アマゾン興業株式会社》

大石小作という人物がいた。鐘紡の技師長を勤め一九二三年（大正十二年）に辞職し、自費でヨーロッパ諸国を巡った後、南米に入っている。一九二六年福原調査団がやって来、この一行に加わる。

調査団が帰国した後、単独でアマゾン河を遡りアマゾナス州のマウエス郡へと入る。

マウエスはグアラナの特産地で、大石氏はこのグアラナに着目し邦人植民地の設定を思い付く。

時の州知事エフィゼニオ・サーレス氏は、日本人移住者による同州の開拓を提唱しており、大石の申し入れに州政府の土地の払い下げを約束する。

大石は一九二七年に日本へ一担帰国し、植民事業の賛同者を募った。これに同調したのが、沢柳猛雄氏（元文相・沢柳政太郎の実弟）や小川亀重氏などで、一九二八年（昭和三年）

九月株主百八十人により「アマゾン興業株式会社」が設立された。二十株以上の株主は植民地内の土地十五ヘクタールを無償で獲得するという条件がつけられている（大石氏は取締役選任されている）。



沢柳 猛雄氏

大石小作は、この会社設立に先立ち五月、社員三石久、久保田喜久郎、増田太郎、唐木道雄、羽野鶴雄、尾崎貞吉、石田喜由の七氏を率いて神戸を出発、同年八月二十三日にマウエスに到着した。

大石一行は、マウエス町よりカヌーで一時間三キロの地点に事業本部を設け、州政府の認可のもとに九月五日から百五町歩の伐採と山焼きを始め、こうして作った耕地に先ず四万五千本のグアラナを新植した。

この人達が、日本から直接開拓の為にアマゾンへ入り、斧を振るった第一号となろうか（ペルー下りの日本人は、もっと古い時代から開拓生活を送っている）。

その年の十一月、社長の沢柳猛雄氏が鈴木茂氏、松本武彦氏、大石小作夫人、永井よしえを引き連れ事業地の視察に日本を出発、翌年二月にマウエス入りをしている。

マウエスへの第一回移住者達は一九二九年十月二十七日のさんとす丸で神戸を出発、翌年一月五日現地へ到着した。七家族プラス单身青年十九名合計五十名の構成であつた。

マウエスは、マウエス河の右岸に面しており河は青く澄み、河岸は白い砂浜につながれた美しい景観で知られる町である。

グアラナの生産と販売は当時、ユダヤ人とイタリア人で市場を占めていた。マウエスの町とその周辺の当時の人口は僅かに二千人であつた。

大石氏は、移住者の到着に先立ち一九二八年十月二十日に、州有地二万五千町歩のコンセッション契約を州側と締結している。

コンセッション契約は、九月の伐採後に初めて行なつておりまた、大石氏は会社が設立される以前に日本を出ているために、会社設立の詳細を知らない。

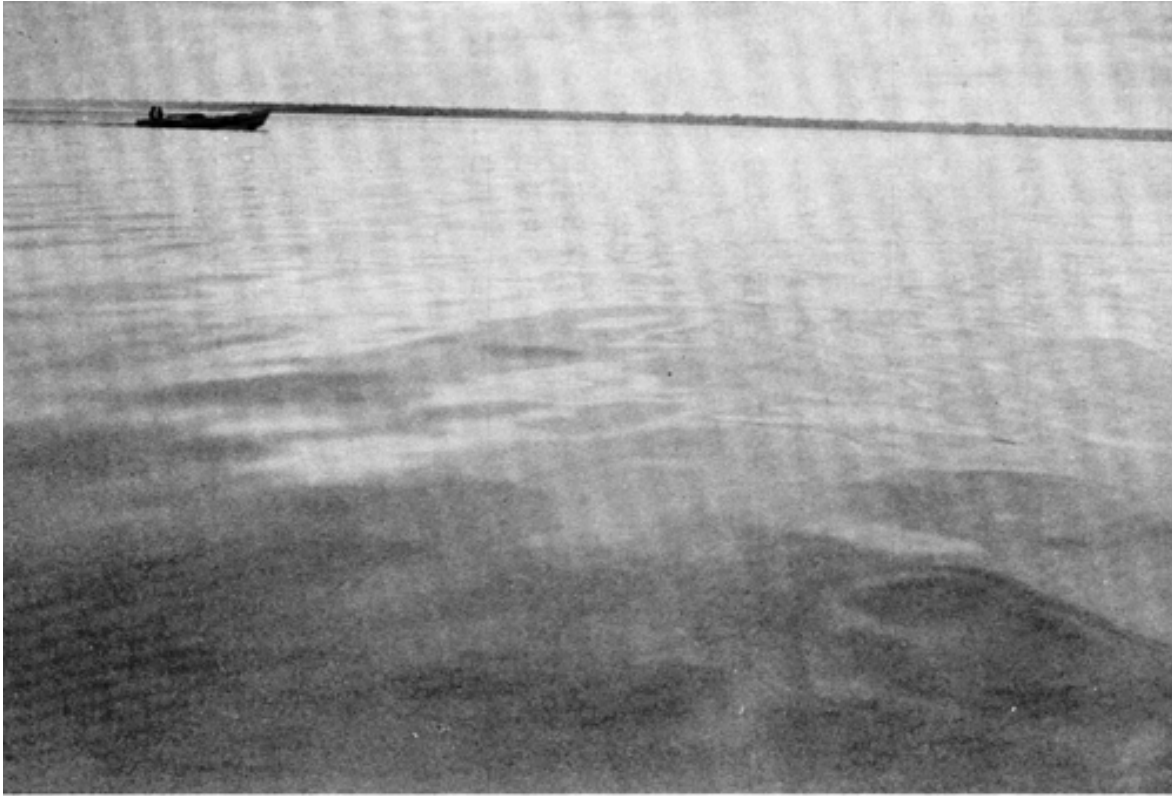
州とのコンセッション契約も大石個人名義で行なっている。

次いで大石は、事業地本部の所在地を「サーレスシ」と命名している。エフィゼニオ・デ・サーレス知事の姓と日本語の市とを組み合わせたものである。

第一回の移住者達が入った一月は雨期であつた。割り当てられたロッテの伐採と山焼きはままならず、乾期が来るまで

先に植え付けたグアラナの間に、自分達の食料確保の目的で米その他の間作を指導した。

大石は、開拓資金の送金を東京側へ何度も依頼したが、これ迄の経費の報告が何等なされていなかった事から、送金を得ることが出来なかった。



アマゾン大河 F O T O ミゲール近岡

大石は、第一回移住者到着の翌月に突然、電報をもって辞職を東京へ発信し、マウエスの対岸に購入していた自己の農

園へと引き揚げてしまったり第二回移住者十二家族プラス単身青年二十二名の合計六十六名は、一九三〇年七月二十三日沢柳社長に率いられマウエス入りした。

沢柳社長は、大石氏のもとを再三訪れ大石名義になっていたコンセツションを沢柳名義に変更することの了解を得たりアマゾン興業が、ブラジルで法人化手続きがされていないため個人名義となっていたためである。

アマゾン興業は、当時マナウスで蔬菜栽培に従事していたペルー下りの山根武一氏を移住地に招き営農の指導を仰いだ。また南拓より檜村正之氏が医療対策に招かれている。

アマゾン興業の移住地は、事実上破綻した。移住者はこの後も一九三二年に十一名が入植している。

大石小作は、その生涯をマウエスで終えている。

マナウスで軍警大佐の職にある岡田オダシーさんの父秀臣さんは、第二回の移住者で本業は歯科医であった。後にパリンチンスに転住し同市で開業している。

同じく第二回の鈴木信次郎はトメアスーに移り、測量師として働いていた。他の移住者達はほとんどマナウスやイタコチアラ方面へと転住して行った。

《海外植民学校》

アマゾン興業と同時代にマウエスに関わり合いを持つのが、海外植民学校の校長である崎山比佐衛氏である。

崎山氏は、青山学院大学の神学科を卒業後一九一四年（大正三年）から二年間をかけて南北米を踏破している。

帰国後、移民教育の必要性を感じ海外植民教育会を、次いで一九一八年に植民を目的とする人材養成のために、東京の世田ヶ谷に「海外植民学校」を創立した。

同校は、一九二九年までに十一回の卒業生を送り出し、同校出身者三百余名とその関係者一千余名が海外へ雄飛している。

崎山校長は、一九二七年（昭和二年）五十四才の時、再び南米行きを目指しペルーへ到着後アンデスを越えてイキトス経由でマナウスへ入り、一九二八年七月初めてマウエスの土を踏んでいる。



崎山比佐衛夫妻

大石小作氏と先発隊が同地へ入る一カ月程前であつた。マウエスがグアラナの特産地である事を当然知つての訪問で、

東京で大石がマウエスの報告を行なっていたのを耳に挟んでの行動であつたと思われる。

崎山氏はマウエスの風光明媚な土地がすっかり気に入つた。

移住者を入植させグアラナを栽培、収穫した実を工場加工し販売する構想を描き日本へ帰国している。

崎山氏は帰国後の一九二九年、海外植民学校卒業生伊藤松之助氏を、マウエスの土地選定のために派遣した。伊藤氏は同年初めにアマゾン入りし、次いで八月にサンパウロに居た同校卒業生の山ノ内登さんが、伊藤氏の仕事を助ける為にマウエスにやってきた。

山ノ内さんは、ベレンで健在である。山ノ内さんは一九二六年サンパウロ到着後、旅費を貯めアマゾンへ行くことを計画一度目は、リオまで辿り着いた折にマラリアに倒れサンパウロへ引き返している。

ノロエステ線ブリグイで日語教師に従事していたが、辻小太郎氏と出会い、辻のアマゾン視察に同行して一九二九年七月にベレンに到着、この後マナウスで辻と別れてマウエスへと入ったものである。

一九三〇年七月、伊藤氏等の選定した土地の登記のために、海外植民学校主事の今井修一氏が卒業生の宇野丹治氏とともにマウエス入り、五百町歩の土地の登記を行なった。

この土地は、アマゾン興業の事業地本部のあるサーレスシ

の対岸に位置し、下流四キロには大石小作氏の耕地が所在する。

土地の登記後、今井主事は日本へ帰国、宇野氏はマウエスへ留まった。

一九三二年九月、海外植民学校の分校を設立するため、崎山校長自らが一行十名と共にマウエスへと移住してきた。

崎山校長一行のマウエス入りに奮い立ったのがアマゾン興業の残留者達であった。大石小作氏の脱落や資金の欠乏で、経営上破綻を采たし氣息奄々としていたアマゾン興業の入植地であったが、崎山校長一行の到着、さらに翌年にも二家族六名が加わり、対岸のアマゾン興業移住地も力付けられる思いであった。

崎山校長夫妻は、校舎建設の協力を求めるために校友たちの歴訪を思い立ち、一九三九年四月より翌年四月まで、南伯方面からアルゼンチンまでを訪れ、マウエスへ帰ってきた。

ところが帰ってみると、健康地と安心していたマウエスがマラリアの娼獺地となっており、留守を守っていた人達もほとんどマラリアに罹っている状態であった。崎山校長も旅から帰って二カ月目にマラリアに罹り、一九四一年七月二十四日享年六十七才でその生涯を終えている。

亡くなる四日前に、四十度近い熱をおしてグアラナ畑へエンシャーダ（鋤）を担いで仕事に出、そこで力つきて倒れている。

マウエス地域に残った植民学校関係者や崎山氏の遺族、アマゾン興業関係者等は、グアラナやジュートの栽培、牧畜等を営んでいた。

一九五八年の調査では、十六家族百二人の居住者が認められている。

現在は、二、三世の家族が七家族ほどで、崎山さんの孫が漁業を営んでいる他、小野さんがマナウスからマウエス間の航路の船を所有し営業している。

この他、海外植民学校関係者である神園敬さんが、グアラナの買い付けに定期的にマウエスを訪れており、日本へもグアラナを輸出している。

マウエスに一家族だけ一世の人が居住している。一九六四年一月のあめりか丸でマナウスのエフィゼニオ・サーレス移住地へ入植した飯盛義治さん（五十四才）である。飯盛さんは、マナウスからアクレ州、マツトグロッソ州へと移って行きそれぞれの地でゴム栽培の指導を行なって来た。マウエスへは一九八七年に転住し、アセローラやピメンタ等の栽培を行なっている。

アマゾン興業、海外植民学校そして大石小作氏の耕地は、現地の人達が入っていたり再生林の森になったりしてまったくの「つわものどもの夢の跡」である。

マウエス市内にある墓地には崎山比佐衛夫妻や大石小作夫妻またこれらの関係者の墓が合計十一基ある。

飯盛さんは、お盆には必ず先駆者達のお墓参りは欠かさない。

また、市内に「ミリアム・サキヤマ」という名の小学校もある。崎山さんの孫で若くして交通事故で死亡した、小学校長で修道女でもあった崎山ミリアムさんの名を記念してのものである。

こんな地からも二、三世達が日本へ出稼ぎに出ているのが、妙に現実的である。

《アマゾンア産業研究所Ⅱ高拓生Ⅱジュート》

鐘紡の福原調査団を迎えるために、田付七太大使一行はベレンを訪れたがこの折、アマゾナス州のエフィゼニオ・サーレス知事ともマナウスで面談している。

この大使一行中に、栗津金六氏が加わっていた。栗津氏はこの後大使館を辞め、サンパウロ州ノロエステ線のリンスで土地売買の仲介や法律相談事務所を開いていた。



写真・栗津金六氏

東京の実業家山西源三郎氏が南米で何等かの事業を興そうとブラジルに着いたのが一九二六年十二月であつた。

山西氏は、ミナス・ジェライスとサンパウロ州の一部を視察した後、リオの日本大使館を訪れている。山西氏はあまり日本人の居ない地方の視察を希望し、対応に出た関根郡平海軍武官のすすめでアマゾン行きを決める。

山西氏はたまたま上塚司氏より栗津金六氏への紹介状をもらつて来ていた。上塚氏と栗津氏とは同県人で、しかも神戸商大の同窓であつた。

栗津氏のアマゾンへの案内役は正に適役であつた。山西氏と栗津氏は早速マナウスへ向けて出発しすでに顔見知りとなつていたエフィゼニオ知事と会い、州有地百万町歩のコンセッションを請願する一九二七年三月十一日、山西、栗津コンセッション契約が締結がされる。

契約はオプションで、四カ所四百万ヘクタールのうちのいずれか一つを二カ年以内に選定し開拓に入るという条件であつた。

山西氏は直ちに日本へ帰国し、開拓のための会社設立に奔走する。しかし山西氏の努力にも拘らず事業は一向に進展せずついに、当時大蔵大臣高橋是清の秘書官であつた上塚司氏のもとを訪ね全面的な援助を依頼した。

上塚氏は結果的には、山西・栗津コンセッションの契約の

実行についての一切の権利を依託されることとなった。

上塚氏は、外務省より二万五千円の補助金を受けアマゾン植民計画の第一次調査団を派遣したのは一九二八年八月末で南拓の創立総会と同じ月であった。

調査団一行は、リオ・デ・ジャネイロで粟津金六氏と合流、十二月に現地入りし、まず三十万町歩の土地を選定している。この土地はマウエス、ウラリヤ、アバカシー、カヌマンという四つの河に囲まれた地域である。

また、事業の遅れから原契約の期限を二年間延長する申請を出し、アマゾナス州政府より一九二九年一月二十一日にその許可を得ている。

一九二九年暮れ粟津氏は日本へ帰国し、上塚氏と詳細な打ち合わせを行なった。

すでに同年九月には、南拓の第一回移住者達がトメアスーへ入植している。

日本政府から更に五万円の補助金を得、上塚氏は第二次調査団を派遣することとなった。

一九三〇年六月七日、上塚司氏自ら団長となり、りお・で・じゃねいろ丸で神戸港を発った。粟津氏は準備の都合上、一便先のさんとす丸でサンパウロへ向かっている。

上塚司氏は、この調査団組織以前の三月二十日に「国士館高等拓殖学校」を設立、アマゾン開拓のリーダーをを目指す人材の養成作りに入っている。

上塚調査団は第一隊十三名、第二隊九名の計二十二名の団員で組織され、第一隊は九月十九日マナウスへ到着、以降マウエスにあつた日本人入植地を視察したあと下流パリンチンを拠点に調査に入つた。

調査隊は、マナウスよりパラ州までの境に至るアマゾン河のバイショアマゾナス地帯を調査した結果、イタコチアラ町よりパリンチンス町を中心とした地点に、百万町歩の植民地を設定する事となつた。と同時に、パリンチンス町より下流のビラバチスタ耕地を購入し、ここに本部基地を定めこれをビラアマゾニアと命名した。

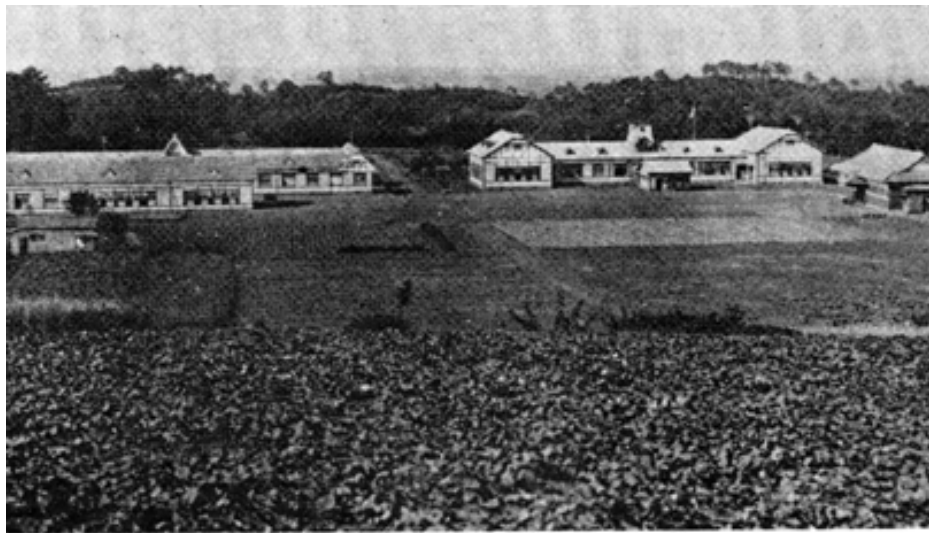
上塚氏は早速ビラアマゾニアに「アマゾニア産業研究所」の建設を開始、研究所内に農事部、気象観測所、病院、実業練習所の四部門を設け、研究所の所長に栗津氏を任命した。十月二十一日には、団員一同で入植祭を執り行なっている。

国士館高等拓殖学校は、当初国士館専門学校の敷地内にあつた。

一回生、二回生までがこの世田谷の校舎で育ち、一九三二年（昭和七年）以降は国士館から分離独立し「日本高等拓殖学校」となり校舎は神奈川県生田村（現・神奈川県川崎市生田）へ建設された。

学校の入学資格は旧制中学卒業以上の者で、日本で一年間勉強実習し、更に一年間はパリンチンスのアマゾニア産業研

研究所付属実業練習所で实际的訓練を受けることとなつて
いる。



日本高等拓殖学校全景



希望に燃える船上での高拓第一回生

卒業生は、一九三二年の第一回生から一九三七年までの第七回生まで二四八名が巣立ち、アマゾンへと向け日本を出発している。

第一回卒業生一行四十七名は、国士舘中学の教師から高拓生の指導にあたっていた越知栄氏を団長に、一九三一年四月十九日、大阪商船のさんとす丸（七千八百トン）で横浜港を出発した。二行中には吉岡一家のアマゾン興業移住者や東京農大卒業生である木内謙一、佐藤信一両氏も混じっていた。

高拓一回生の越知団長



これは、高拓生アマゾン派遣にあたつて上塚氏が、拓務省から五十人分の旅費援助を得ていたが、卒業生中からアマゾン行きを辞退する者が現われ頭数を揃えるために編入した処置であつた。

一行は、六月五日にリオに到着。

二日後にアフォンソペンナ号(三千五百トン)に乗り換え十七日にベレン港へと入港、二十日パリンチンス入りし、ここから小船に分乗しビラアマゾニアへと上陸している。

高拓生等は、ビラアマゾニアから東に二キロの原始林五十町歩の伐採に入り米、マンジョカ、グアラナ等を植え付けた。一年間の実習が終わると四十二名中の半数程が、南伯、マナウス方面へ出ていきまた、帰国するものも出た。

残つた者達は、ウイクラツパ河岸に入植地を見つけ、ここをボア・エスペランサ移住地と命名、カスタニヤやグアラナの栽培に入った。

高拓第二回生は、翌年の一九三二年五十三名が引率者、配

偶者及び家族入植者を入れ六十名の陣容で七月三日にビラアマゾニアへ到着した。

二回生まではビラアマゾニアでの実地訓練を受けているが第三回生からは、ラーモス河に沿い約四十キロの地点にあるアンジラに模範移住地を造成し直接この地へ入植させた。

第三回生の入った一九三三年の年には、上塚氏と意見の対立があつた粟津氏がアマゾニア産業研究所の所長を辞任し、代わつて日本高等拓殖学校の教務主任であつた辻小太郎氏が所長に就任している。

また同年二月には、アマゾニア産業研究所が日本の財界人の後援を得て財団法人化され、同研究所はこの後の一九三五年九月に「アマゾニア産業株式会社」へ改組されている。また、ブラジル側の現地法人は翌年二月に登録されている。

アマゾニア産業研究所の所長に就任した辻小太郎氏は、以前からアマゾンでのジュート栽培に着目していた。一九二九年には、山ノ内登氏とともにジュートの調査のためにマナウスを訪れている。

後日、マウエスへ残つた山ノ内氏のもとへジュートの種子を約一キロ程送り試作を勧めている。

山ノ内氏は恐らくアマゾンで初めてと思われるジュートの試作をしているが、三カ月後に百八十センチ程に伸び花が咲いたが、それ以上は伸びずものにならなかった。

アマゾニア産業研究所では、一九三一年よりインド種子を

入手しフォルモーズ島を中心に一応試作は行なっていた。辻新所長はジュート栽培の奨励に力を入れた。

ジュートの詳細な経緯については、本誌「インドより移植されたジュート」の項で記述されているので大要のみで終らせたい。

第三回の家族移住者として渡伯してきた尾山良太氏によって発見された二本の新品種のジュートから、播種用種子増殖のために中央試験所が研究を担当した。直接担当に当たったのは第三回の高島義雄氏であつた。



尾山氏のジュート園

高島氏は一九三五年八月から新品種の種の増殖に取組み、五百グラム程を収穫した。

この種子を三等分し尾山氏、中内氏それに中央試験所とで受取っている。

アマゾンでのジュート栽培の成功は、日本人移住者の評価を一挙に高めた。

一九四〇年三月アマゾン産業株式会社は、マウエスのアマゾン興業を合併している。

一九三八年以降高拓生たちはバルゼア地帯（アマゾン河岸の低湿地）へ移りジュート栽培へと転向していった。

栽培地は、アマゾナス州マナウス市の上流ソリモンエス河から、パラ州のサンタレン方面までの一千キロを越す広大な地域へと広がっていった。

そんな中、一九四〇年に建国二千六百年とビラアマゾンニア創立十周年を記念して、社殿風の八絃会館が元宮大工の棟梁だった増永栄次郎氏等によってビラアマゾンニアに建設されている。



バルガス大統領と会見する上塚司氏と辻氏（後方左）

一九四二年、伯国の対日宣戦布告により、アマゾンニア産業株式会社の資産は全て凍結されてしまった。ビラアマゾンニアに残っていた一部の社員は適性国人として捕えられ、トメアスー移住地へと軟禁させられた。

なお、ジュート栽培に従事していた者は、そのまま仕事を継続する事が出来た。

ビラアマゾンニアは州政府に接收され、間もなく競売に付せられマナウス市の財閥J・G・アラウジョ商会に売却されている。その後中国人の関係しているアマゾン製紙会社が戦後にアラウジョ氏より買い取っている。

戦後のアマゾン移民は、上塚司、辻小太郎両氏のジュート栽培の実績がゼツリオ・バルガス大統領に評価されたものであろう。

一九五三年戦後第一回のアマゾン・ジュート移民十七家族五十四名が三月ベレン到着、同月十五日にパリンチンス等へ入った。リオ・デ・ジャネイロまでの同船中に戦災孤児六名がおり、彼らはサンパウロへと移住している。

戦後初のブラジル移民であったため、これら移住者達は関係各方面から注目を集めていた。

移住者達は、アマゾン河流域のジュート栽培地帯であるパリンチンスやウルクリツバ、アレンケールの邦人農園へと配耕されて行った。

ところがこの年は、アマゾン河は三十年ぶりかの大水に

入っていた。移住者に準備された住居が浸水している所もあつた。

また滔々と流れるアマゾン河の岸で、十二時間の水中作業であつた。入植して二週間目には早くも四家族の脱耕者が出た。

このニュースは関係各方面に衝撃を与えた。戦後初の先駆者移民であつただけに、その影響を考慮しての事であつた。

両親とともにパリンチンス入りした碓久博さん（ベレン在住）は、当時の事をこう語っている。「河の水があふれて我々の住む家も水浸しで、日本から到着したばかりだったので驚いてしまった。水の中でのジュートの作業は、若い私には耐えられましたが、父親にはかなり負担だった様でした。」残った十三家族もこの後、ほとんどの人達がベレン近郊や日本へと帰国して行つた。

《パリンチンスとその周辺》

パリンチンスには、戦後十五家族の高拓生が居住していた。現在二、三世を含め六十名程の日系人口である。

パリンチンス日系人会も組織されている。日系人会館は、高拓生の昔の寄宿舎が使用されている。

日本語学校は、高拓第七回生の東海林善之進さんが先生になり毎夜開かれ十二名の生徒が通っている。

町の中には、ビラアマゾニアで戦前・戦後を通じて医療活動に従事、非日系人からも慕われていた戸田善雄氏を記念した「ドートル・トダ」郡立診療所がある他、ジュート産業の功労者尾山良太氏の名をとった「リョウタ・オヤマ小学校」もある。

市内に居住している高拓生は三回生の八田公重さん、四回生の木村宗一さん、坂本孝さん、六回生の川上顕二さん、この他アマゾニア産業関係者の尾山多門さんもいる。また近郊には三回生の徳田源爾さんと森進一郎さんがグアラナの栽培を行っている。

パリンチンスから小船で川を一日、マウエス方面へ向かった「パレリニヤ」には第四回生の半田二郎さんと馬場廉二さんが牧畜を営んでいる。

アマゾン河の上流「ウルカラー」に居住しているのは尾崎さんで牧場経営、その対岸の「ボツカ・ダス・ガルサス」に五回生内藤菊次郎氏の甥丸山吉次さんが、牧場と日用雑貨商を営んでいる。

なお、ビラアマゾニアには、朽ち果てた本部建物と八紘会館が残っているだけである。

アンジラ模範植民地では、第四回生の木村宗一さんが牧畜と商業とを営んでいる。

《パラ州側に入った中流地域》

アマゾン河を下りアマゾナス州からパラ州へと入ったすぐの町がジュルチーである。



カヌーはアマゾン河の自転車だ

戦後は一時六家族が居住していた。この地の草分けで一九四一年にこの地へと移ってきた丸岡京さん(三回生)はベレンで健在である。

丸岡さんは一九六七年、自分の耕地内に小学校を建設し耕地で働く労働者の子弟の教育に力を注いでいた一世で最後まで残っていたのが小林増美さん(二回生)と、徳橋光子さんで、小林さんは一九九一年にベレンへ徳橋さんもベレンへと転住してきた。

現在、ジュルチーには小林さんの長男マリオさん一家八人が牧畜を営んでいるが、マリオさんは同市の市会議員でもある。

もう一人、短期居住者としてマナウスから二世の医師が州の病院へ着任してきている。



サンジョアキン船付場（ジュルチー）

ジュルチーを離れ河を下った次の町がオビドス。ここには丸岡さんの次男の丸岡雄二さん（五十六才）一家八人が住んでいる。丸岡さんは船舶関係の鉄工場を町で営んでいる。

この他、長男ダニエルさんと長尾ゼネージオさん、猪股さんの一家が居住している。

ダニエルさんは、パラ州立銀行員、ゼネージオさんは商店を経営している。

支流トロンペッタス川を上がって行った所にオリシミナと

言う町がある。

この町で商売をしているのが原田公三さん（五回生・ベレン在住）の長男のベンジャミンさん（五十三才）一家である。この他に原田克郎さん一家と牧場、商売を営んでいる上条ミチルさん一家、アマゾン興業関係者の長尾誠四郎の子息で船の修理業をやっているアルマンドさんの家族が居住している。

アマゾン河を隔ててサンタレン市の対岸にある町がアレンケール市である。サンタレンから船で十時間程の距離。

この地に初めて入ったのは、六回生の佐脇忠志さん（ベレン在住）と川上顕二さん（パリンチンス在住）で、一九四二年頃である。

アレンケールは土地が肥沃でテーラ・ロッシヤ地帯がある。昔はカスタニヤ・ド・パラ（パラ栗）の一大産地として栄えた町で、パラ州のマラバーに次ぐ量を出荷していた。

最近はアメチストが発見されており、ガリンペイロが大分入っている様である。

佐脇さんは、アレンケールから出るパラ栗の三分の一を自身の耕地から収穫し、市場を一手に取り仕切っていたユダヤ人を相手に取り引きを行っていた。佐脇さんの耕地の総面積は一万一千町歩で牧場を営んでいた。

アレンケールには戦後最盛時で十五家族の邦人を数えてい

るが、出入りも激しく結局一九七〇年代までに定着していたのは、佐脇さんの他に、池上欣二さん（三回生・ベレン在住）、大西虎雄さん（エメボイ実習場二期生）坂口さん（第一回ジュート移民）、岩坂保さん、具島政雄さん（ベルテール移民）などであった。

現在アレンケールに居住しているのは、一世では坂口成夫さん、アレンケール一番の大きな薬局を経営している。

もう一人の一世は、岩坂保さんである。

二世では、池上さんの次男のジョナス・二郎さんが雑貨店を経営している。

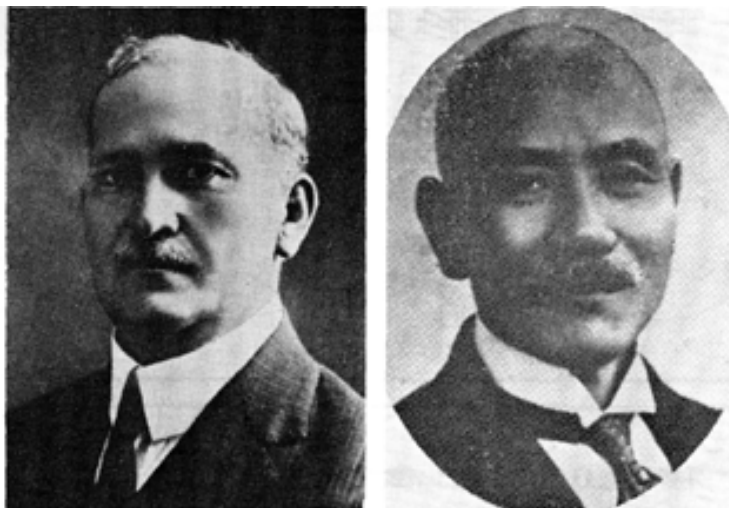
坂口さんの子息のヒロシ・フオードさんはラボラトリオを開いて父親を助けている。

最後に余談となってしまうが、大西虎雄さんの出身であるエメボイ実習場とは移民会社海興がサンパウロに設立した移民の指導者養成所である。

正式の名称は「サンパウロ農事実習場」で、日本から永住の目的をもった青年を二年間実地教育を施す実習機関で、高拓生の目的、システムとよく似ている。（高拓生は、一年間日本で、残り一年を現地アマゾンで実地訓練）。

このエメボイ出身でアマゾンへきた卒業生は大西さん以外に、Y・山田グループの重役をしていた故・堀口次郎さん（二期生）がいる。また、汎アマゾン日伯協会が移住六十周年を記念して設立した、文化交流センターの建物を設計した

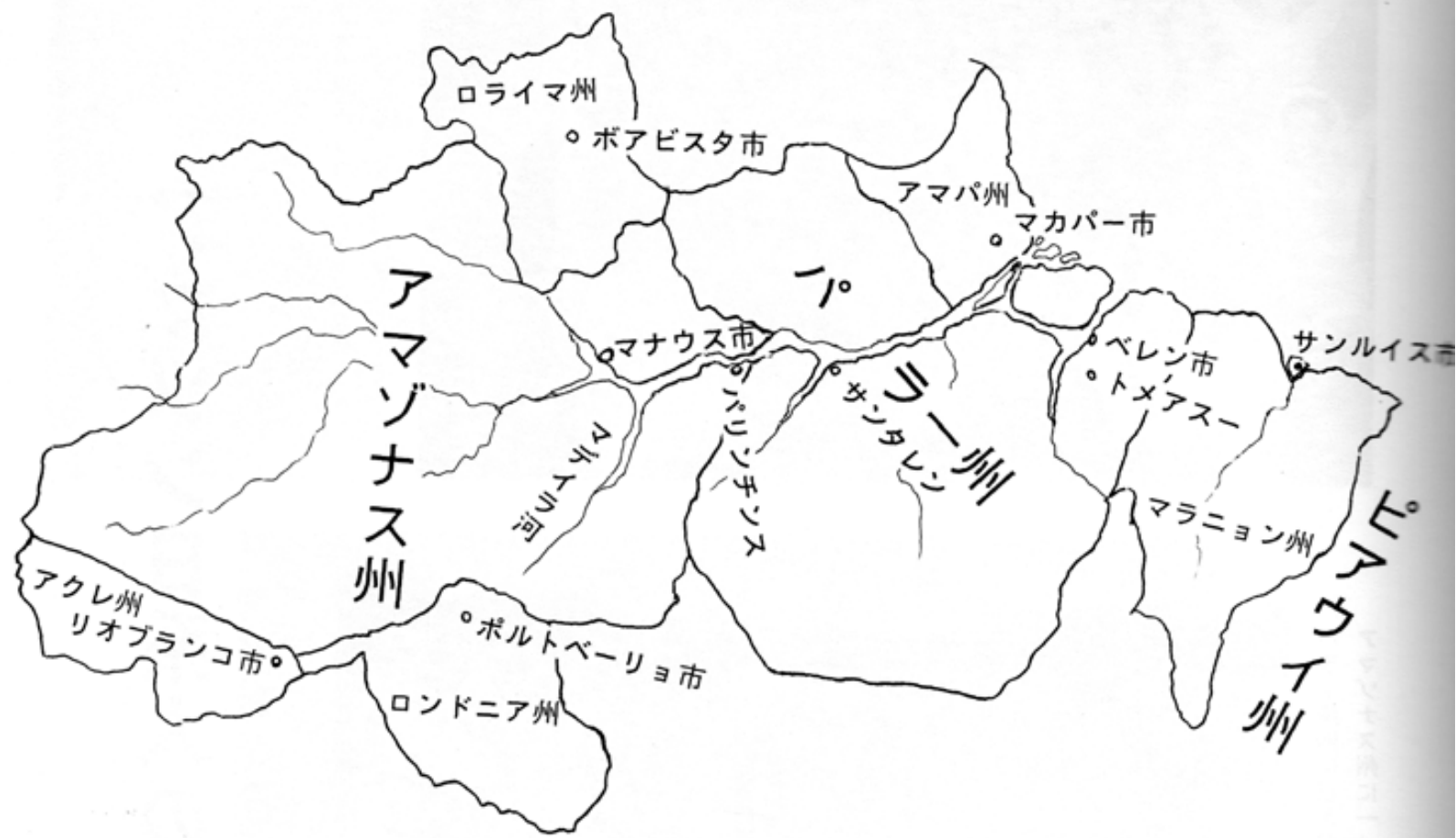
のは大西オリンピオさん、虎雄さんの長男である。



アマゾン日本人移住のきっかけを作った
ジオニジオ・バラ州知事と田付七太大使



マナウスに建つ開拓者の慰霊塔



グラビア

写真
ミゲール近岡

二世層も様々なコロニアの行事に
参加している。サンジョアン祭にて。



パラ州内に日系のゴルフ場は三カ所、
アマゾナス州に一カ所ある。

お年寄りのスポーツでありレジャー
でもあるゲートボールは盛んだ。



日本週間の行事中、もちつきが
行なわれ好評を得た。



盆踊り大会は各地方コロニアで
開催されている。



グラビア特集



毎年催される日本週間中の
目玉行事の盆踊り大会
会場は文化交流センター神内講堂



運動会

特集・アマゾンの未来

アマゾン農業を反省して

カスタニャール在住 佐藤 清美



日本人がこのアマゾンに入って来てすでに六〇年、私達新移民と言われる者でさえも早や三〇年の月日が経ちました。

それぞれが夢を描きながら入植して、悪条件と戦いながら努力をしてアマゾンに適作であるピメンタ・ド・レイノによつて基盤を築き、一時はアマゾンと言えばピメンタ・ド・レイノかと言われる位であつたが、今はどうだろうか？ あのピメンタの里と言われたトメアスーでさえも、奥地へ奥地へとピメンタ作りは後退りをし、ましてやベレン近郊のピメンタ生産者は遠く四百キロ、五百キロと離れた農場を経営しており、他の作物などをいろいろ研究しながら営農安定への道を模索しているのが現状であります。

私も最近アマゾンの農業はこのままで良いのだろうかと考えさせられて居ります。

入植すでに三十三年、トメアスーへの入植十四年を経て現在カスタニヤールへ移り早や十九年、一体何をして来たのだろうかと振り返ってみるに、トメアスー時代もカスタニヤールに移ってから、第一に考えたことは、早く金を儲けて何とかしようと言う、金、金、金、金を儲けることばかり考えていました。

しかし未だに金は儲からない。

昨年だったか、日伯農村文化振興会で出している「のうそん」に成功の原理と言う記事が連載で出ていたことがありました。

その記事を読ませてもらった時自分の脳天を金槌で叩かれた様な気がしました。

成功の原理は先ず目的を決めるその目的をどのようにして達成させるかと言う順序、仕方などが説明されており、ただ金が沢山あるから事業が大きくなったから成功したと言うものではない、その人がどんな目的を持っていたか、その目的に達せられたか否かによって成否が決まるのだと説明されておりました。

その記事を読んで私の目的は何んであったか？金を儲けることばかりを考えており、金が儲かったら何かをやるうと漠然とした考えでしかなかったことに気がつきました。

今、考えて見ると金は決して目的ではなかったはずで、ただ目的を達成させる為に便利なもの手段でしかなく、それをあたかも目的のように考えていたことが的はずれであることがわかってまいりました。

金の儲かりそうなことがあったら、何も考えずに一途に進んだものでした。誰かが何かで儲かったとか、何作物の値段が良いとか云うと、自分の条件は後にして飛び付き、いざその作物の収穫が出来た時には飛び付いた時の様ではなかったと云う繰り返しをしてまいりました。

人間だれでも幸せでありたいと願っております。

それも長続きのする幸せであります。

しかし今のままで、このアマゾンにて農業を営んでいる者にそれが望めるであろうか？

私達アマゾンに住む農業者はこの点よく反省して見る必要があるのではないだろうか。

現在の世の中ほとんどが科学オンリーで、自然の事など無視されたかに思われるが、科学は物理の応用であり、これは大自然が基本であると思う。

私達農業にしても、現代は近代農業とか科学農業とか叫ばれているが、やはり基本になるのはこの自然であると思う。現在行われているピメンタ栽培にしても転地することによって問題が解決するであろうか？

今から五年位前であったと思うが、国際協力事業団が毎年

行う農業の技術指導の派遣にコチア産組の間島技師が講演のときに「一番作物が育ち良い条件の土壌とは、酸素が二十五%、水分が二十五%、七%の有機物、あとは粘土でもよいのです」と説明されましたが、私達はそんな事より何肥料をどの位使用した方がよいのかを知らうとして、この説明には一向無関心であつたが、これが私達農業者の基本であつたのでした。

次の年にやはり事業団派遣の木元技師が見えられた時に尋ねましたところ、七%の有機物は一ヘクタール当り五〇トンという返事でした。

その五〇トンで私の頭にひらめいた事は、今から約十五年ほど前に南伯産組の中沢源一郎氏をアマゾンカ組合の前身であるメロン生産グループが招き、トメアスーへ視察に同行した時でした。

中沢氏の先輩である平賀練吉氏と合いピメンタの病気にふれ、トメアスー組合が日本から農学士を招き、アマゾンのピメンタ栽培の現状を見てもらつた時の事を話され、「皆さんがアマゾンの土地は痩せて悪いと言うが、悪い土地なら原始林の木があれば伸びますか、と云われたそうです。」

その農学士たちが調査して解つた事だが、アマゾンの原始林は年間一ヘクタールあたり、生の木の葉を五〇トン落葉する、それがそのままそこにあり、土壌として育成されている。人間が原始林を切り焼き払い根を引き抜いて平にして畑ら

しい形にはしたが、いままで毎年繰り返されていた自然のサイクルはどうだろうか、これは今まで土壌であつた場所をただの土にしてしまったのが人間のやり方である。これではピメンタに病気が出るのも当然であると、その農学士は云っておられたと、話されて居りました。

こうした事を聞くにつけ私達農業者が作物は自分たちの手で作るんだと云う考えから、今までやってきた行動は自分本位の間違つた思い上がりであつた様に思われます。

私達農業者は如何に経費を少なく、基本条件の土壌を整える事が出来るかに尽きると思います。

雨季、乾季と相反する条件の激しい土地、これを如何に好条件の土壌として保つかが、私達農業者の第一に考えなくてはならない仕事ではないでしょうか。

私達が日本で行い、また頭の中にあつた事は温帯農業の基本でありました。昔から云われている「精農は草をみずして草を取る」は温帯農業の基本であり、いかに地温を上げ地中の有機物の分解を早め、作物の栄養とするかを考えた農法でありましたが、ここでは相反する条件が要求されて来ます。

「働く」と云うことは、何も賞賛するにあたらなない。働くことの目的如何によつてその価値が決まる」

私達が仕事をするには、やはりはっきりした目的を決め、この目的をいかに安易に確実に達成出来るかと言うことは大

切であると思います。

農業の一番大切な土壤にしても有機物が昨日より今日にかけて、どのくらい少なくなったかは私達の目には、はつきり見えないでしょうが毎日毎日が減少しています。

ましてや大雨など降り泥水が流れる時などは、どれだけの有機物が流出されることでしょう。

私達がいままで考えていた肥料さえ施せば作物は出来るという観念だと、本当の肥料とは何でしょうか、人間に例えれば食事ではないでしょうか。

私達の健康も、いかに栄養素があると云っても薬だけでは仕事をするだけの体力は保てないでしょう。食事は主体であり、不足分を薬で補ってこそ、始めて健康であるはずです。

肥料なども化学肥料、粕肥料等が肥料であって、有機物などは肥料ではない様に考えられますが、化学肥料や粕肥料等は薬の部類に入るものと私は判断いたします。

農業にしても土が一番主体で人間で云ったら身体でしよう、その土が健康でなかったら満足のいく働きは出来ないと思います。

そうした点から見ても、常に理想的な土壤を保って行くためには、私達農業者が今まで通りの農業の方法で良いものだろうか。このアマゾンの農法も考え直さなくてはならないでしょう。

言い換えるなら、如何に安易に理想とする有機物を、その

土地に還元出来るかと云うことだと思われます。

大自然との調和を

農を業となす場合は、やはり一番先に考えなければならぬことは、採算が合うかどうかと云うことであると思います。

他から搬入する場合は一番確実なるも経費と、その量の確保に色々問題があると思われます。

余り人工的な手を下さなくても自然の成り行きに任せられる農法を研究しなくてはならないと思います。

私達が今まで考えて行つて来たことは、草との戦いであつたが敵視することよりも、草との調和をするべきではないでしょうか。

私達が、このアマゾンにて農業を選んでおるのも、それは幸せでありたいと願うからです。

その幸せを永續させるには、ただ一時的な金儲けではなく、千差万別する天候にも、あまり左右される事なく収穫される作物を選び、年間を通して安定した収入の道を得られる様な環境にある事を望むのは当然でしょう。

農業にも集約経営、多角経営と色々な方法がありましようが、そこに営農する人の条件によつて又経営方法も変わるでしょう。

私は、どちらかと云えば小規模ながらも多角経営の方です。ゴム、デンド、ピメンタ、アセローラ、リモン、サポチー

リヤ、短期作物としてマラクジャ、メロン、マモン、ピメン
トン、養鶏、養豚。

これらは金儲けではないと云えば、嘘になるかも知れま
せんが土地条件や環境条件からの選定になっております。樹
木農法を主体に堆肥を肥料とする農法を行うことに目的をお
きますと、やはりこうなってしまう。

ただ今後は、この一つ一つをいかに良きものにするかを実
行に移したいと考えて営農するつもりです。

今までの行動は自分本位の行動であって、機械化にしろ作
物の事など考える事より、ただ能率の事を中心としたやり方
であつた。もし作物が口を聞くことが出来ていたら当然反発
があつた事であろう。

ピメンタ栽培にしろ、現況の状態を招いた事は、我々の自
我から出た結果にほかならない様に思う。

応用問題を解くには基本問題をマスターしなくては解けな
いように、私達が農業の応用問題を解くのに農業の基本問題
を無視して居つたのだからナンセンスであつた。

熱帯農業の基本、発想をこの点よりしたならば、アマゾン
の農業も決して捨てたものではないと思う。また面白きかな
です。

この地帯は植物優性の国です。

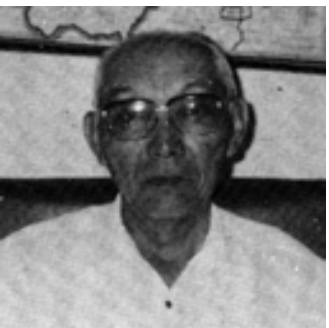
恵まれた大自然と調和をする事で望みもかなえられる事で
しょう「人生好きなことばかりをするのが、人生ではない。や

らなくてはならない事をするのが人生なんだ　私が南伯産組の理事長であつた中沢源一郎氏より教えられた人生訓です。アマゾンには私の第二の故郷、ここに骨を埋めるつもりですから、ここでやらなくてはならないことは、やるつもりです。

特集　・　アマゾンの未来

変　　貌

ベレン在住　・　仁　科　雅　夫



仁科雅夫氏

一九五九年から四度びベレンに勤務しているので、いつの間にかアマゾンは私にとって故郷となつてしまった。およそ四〇五年づつ、五〇六年おきにベレンで生活していると、ずっと続けて生活している方々とは、また違った意味でアマゾンの移り変わりをハッキリ感ずるような気がする。

先日、五艘さんから「アマゾンの未来」を語れ、と奨められ、ついその気になって安請け合ひはしたものの、経済観測が

難しいのと同様、否それ以上に未来を述べるのは至難の業だ。仕事柄バック・データーを将来に置き換え、現状分析を加えて一応の経営計画を作ったりもするが、アマゾンの未来はそんなバック・データーでは語れないと思う。仕方がないので、私の『思い入れ』の2と3を述べさせていただくことにする。

『たら』の実現

勝負事に『たら』を使えばグチになる。あそこでヒットが一本出てい『たら』、とかあのパッターを沈めてい『たら』、あの時三万をつもってい『たら』、と云う類である。

しかし、将来を想う時、『たら』を目標に置き換えて関心を抱き、手の届く範囲は自らそれに向かって努力するのは肝要なことと思う。

ベレン、ブラジリア街道があっ『たら』南伯と陸路でつながる。

沿岸航路の貨客船が欠航すればバタタ、セボーラなどが一ヶ月もベレンのフェーラから姿を消してしまった一九五九年頃、つくづく道路があっ『たら』と話したものだ。

当時は市内の十階建て以上のビルは建築中であつたマノエル・ピント・ダ・シルバだけだったが、七〇年にはBR14号（今のBR316号）は舗装され、ビルも増えて来た。

今ではビルの名を云っただけではタクシーの運転手にも通

じぬほどの林立である。

三題話ではないが、水力発電としては世界第二の能力をもつツクルイ発電所が出来たお陰で高層ビルのエレベーターの運行が七〇年頃と較べ飛躍的に良くなった。

電力事情のお陰でビルが出来たと云ってよい。

アマゾンアルミ（電力供給）のお陰で生活環境も良くなつて来たのである。

エネルギーの安定供給が如何に都市生活を変貌させるかを如実に体験した。

一九六〇年頃、故辻小太郎さんが、BR14号が完成すればベレンは水陸交通の要衝となり、将来中国大陆の上海を超える大都市となると云われたが、難点はベレンの港湾施設だ、と物産の岡田さん、カネボウの赤田さん等と大いに議論したものだった。

ベレンの港は今でも数千トン級がやっと接岸出来る程度だ、数万トン級が接岸出来、世界で最も高いと云われる繋船料が安くなり、周辺に産業が興らぬかぎり”上海”にはなれぬ、と若い者（辻さんを除いて当時皆二〇〇四〇代だった）が将来を語り合ったものである。

その港は、素人目に昔と少しも変わっていない。

しかし、バルカレーナのアマゾンアルミの専用埠頭はトカシンクス河に面して、数万トン級の外航船が接岸可能であ

り、将来はこれを拡充してベレン市の玄関としてはどうだろうか、それにはグアマ河の架橋、周辺道路の本格整備が必要であり、行政的にもベレン都市圏として整備する必要があるう。

架橋が完成すれば必然的にアカラ・トメアスー両郡の他、沿線各地の日系コロニアの産業道路も整備され、産業・文化振興の進展がさらに期待されよう。

一九七〇年頃、日本も一枚加わって架橋計画の話があつたが今日まで日の目を見ずにいる。

仄聞するところによると『環境問題』への配慮から関係方面に躊躇もあるが架橋計画は消えた訳ではないと云う。

ツクルイ発電所の完成によつて産業の振興、生活の近代化が進んだと同じように、港湾（関連施設も含めて）架橋、道路の整備が次のインパクトとなることは明らかである。

数万トン級の接岸出来る近代的港があつたら、『グアマ河に橋が架つたら』、さらに吾港も拡大整備され『たら』と、これらと関連する産業振興、具体的な業種など、あれこれ考える昨今である。

「ブラジル（人）の日本（人）観」

一九五九年、私は日本から「ゴムぞうり」を持ってきた。当時の日本は、まだまだ雑貨類も外貨獲得のため大いに輸出していた頃で、「ゴムぞうり」もその一翼を担っていた。

今でこそブラジル製の「ぞうり」が庶民に愛用されているが、足の指に挟んで履く地下タビ、ゾーリは当時ブラジルの人々の目には奇異にうつったに違いない。

日本には靴は無いのか、と聞く手合いもいた。隣家の少年に「日本に鉄道はあるのか」と聞かれたこともある。

一九六三年頃までベレン・ブラガンサを走っていた単線車連結で日に二往復していたと記憶する。乗客は絶えず火のこに注意し半日がかりでベレンに着いたものである。

一部の知識人を除いて、日本は遅れている国と考えられていた。

ただ先輩のお陰で日本人の勤勉、正直、教育心などは当時から認められていたが、それでも彼等にとって何か不都合がある。「ケ・ジャポネース」と明らかな侮蔑のまなざしを向けられたものだ。

しかし、今は全く違う、日系コロニアのたゆまぬ努力と日本の発展とが彼等の日本（人）観を一変させている。

先日、日本へ研修に行った米国で学位を取っている研究者が手紙を寄越した。

「貴方の国は何とすばらしい国か」「人々も実に温かく親切である」と。米国一辺倒の彼が研究、生活を通して日本を見直してくれたことが嬉しかった。

アマゾン日系コロニア六〇年にして、ブラジル人が眞に日本（人）を理解してくれたのだと思う、将来この関係を広く、

さらに深めて正真正銘、両国間のきずなを強くしたいものである。

「環境問題」

アマゾンに暮らす吾々にとって気になることは「環境問題」だ。

環境と開発の調和が理想であるが、アマゾンを理解していない人々によって勝手な情緒的捉え方や、心情的発想、抽象論の展開は迷惑である。

住民の生活的側面、開拓の実態を見ないで論じられるのが困るのである。

“アマゾンの緑” が年々日本国土の半分も失われている、砂漠化が進んでいる、農業開発は悪で採取産業は善だ、とかがそれである。

確かに原始林はベレンから遠くはなったが “緑” は失われている。

所謂アマゾン盆地（約四億ヘクタール）の植物の再生力は強烈で、山を伐った経験のある方はお判りの通り、一度開いた圃場の再生林化を如何に防ぐかに農業者は最も苦心するところである。

少しも “緑” は減っていないのである。



地平線まで連なるユーカリ植林の山（ジャリー社）

砂漠化はアマゾンのどこで現出しているのだろうか、先年米国インディアナ大学環境研究室のエミリオ・F・モーラン教授に、一九七〇年のアルタミーラ及び周辺地域と一九九〇年の同じ場所の衛星写真を見せて貰った。

七〇年は、トランス・アマゾニカ建設中で、その建設拠点となっていた同市及び周辺は、写真で見る限り “爪の跡” だらけで乱開発と云われても仕方がないが、九〇年の同じ場所の写真には “爪の跡” がほとんど見えない。同教授でさえアマゾンの植物再生能力に驚いていたほどである。

採取産業は環境破壊の最たる “金” の採掘が有名であるが、世界的に有名だったパウローザ、ゴムなどかつての原始林の自生種はほとんど見当らなくなってしまった。

パウローザ（クス科）などは見付けたら伐り倒して、木片にして現場で蒸留してリナロール八〇%以上を含む精油（ボ

ア・ド・ローズ油）をとってしまいうから採取業者が資源を枯渇に導いたようなものである。

換言すれば環境問題は、人類の欲望のつづく限りついて廻るものであるのに、又クヌクと冷暖房完備の部屋で「地球にやさしい農業」とか「アマゾンの緑を守れ」とか環境問題を論じるのはナンセンスであろう。

現在論ぜられている環境問題の中でアマゾンにとって私が唯一同調出来る意見は、” 遺伝子資源の保存 ” と云うことである。

今のうちに百万、二百万ヘクタール単位で数ヶ所の聖域を保存することが必要である。この聖域には勿論インディオの居住も認めてはならない。

また原始林を一挙に機械抜根することも避ける必要がある。

しかし、通常の開畑、開墾は一向支障ないと考える。

この環境問題のやかましい折、マナウスの長岡さんが「アマゾンにおける薪原料火力発電所計画」を雑誌に発表された（アグロ・ナッセンテ、一九九三、四月号）。

原始林の単なる保存ではなく、有効利用と植林（樹種の選択が重要）を提示されている。

具体的内容は省略させていただくが、さすが四〇年間アマゾンの森林を愛くしんで来られた実務家のご意見に感心した次第である。

アマゾンの未来を語るには世論となっている、所謂環境問題をクリアーしなければならないが、これを待ってからでは何も出来ない、人類の生存が続く限り環境問題もついて廻ると思うからである。

「おわりに」

“ホラ”を吹けば良かったのかと稿の終わりに考えたりもするが、（ “ホラ”は他人に迷惑を及ぼさないがウソは迷惑をかけることだと私なりに定義？しているが・・・）これから何とか実現して欲しいと思うことを述べると次のようになる。

〔ア〕、日本の資金・技術協力による継続的な自然環境調査と環境にマッチする一次産業の導入と振興。

〔イ〕、港湾施設の拡充・グアマ河等架橋と道路整備（これにより〔ア〕、の産業さらに二次産業の導入拡大が期せられる）。

〔ウ〕、ア、イ、を基盤とした近代的一大ベレン都市圏の整備（ブラジリアのような人口都市ではなく、より人間的な生活的な都市を理想としたい）

〔エ〕、文化・医療・保険面での国際協力の充実。

〔オ〕、研修・交流の拡大、等々。

具体的な内容は敢えて述べないが、一九五九年から今日までの三十四年間の変化と今後二〇〇三〇年間の変化とは比較にならぬテンポで進むものと思われる。

ただし、この国の政治・経済の再建、インフレの沈静化が前提となることは論をまたない。

当地域には六〇年の確固たる基盤を有する日系コロンビアが存在する。現在正に二世、三世が社会のあらゆる分野の中堅としてブラジル社会で活躍している。

願わくば日本の国際協力のパイプ役として彼等のさらなる活躍を期待したいし、また日本が官民を問わずアマゾンに対する十分な認識と理解に基づく諸施策を展開されること切望するものである。

また五、六年後にアマゾンがどうになっているか、その日までせいぜい健康で過ごしたいものと秘かに思っている。

「出稼ぎ体験」から覗いた日本の現状とアマゾンの将来性

ベレン在住 草刈 幸也



横浜にある造船所で、一万馬力一〇〇回転と云う船舶用大型超低速のエンジン組立作業をしていました。

月給は手取り四十五万円、寮も完備しており、もつと居たかったのですが、六月「母キトク」の連絡があつたので、あわてて帰国しました。

その間に日本の社会で体験したことから、当地アマゾンでの生活の方が、よっぽど将来性があることを確信しただけでも、貴重な出稼ぎ体験だと思いました。

最初に気付いたことは、現在の日本人一般の健康が加工食品によって痛めつけられていることでした。

昔、自分が日本にいた頃の日本人は、もつとみんな体力があつたと思います。

今の日本人は力がない、体力がない、思考を持続させるだけの耐久力がないことであります。

おそらく化学薬品や防腐剤だけの食品を連続して知らない

内に食べているために、視力や聴力の低下から始まり、栄養不足や薬品の影響で内臓器官に支障を来しており、水分やその他の養分などが腸から吸収されずに汗となつて出てくるために皮膚を痛め、皮膚病などに冒される人が、多く見受けられました。たまたま銭湯に出かけて多数の裸をみて、このことを感じました。

栄養の片寄りか、不足か、化学薬品の影響か、抜け毛が多く、昔の人達は豊富でツヤのある髪の毛を持っていたと記憶していましたが、今の人は髪の毛が少ないというか、薄くなつて来ていることを感じました。

いろいろの店で売られている弁当類、おかず、つまみ等にしても果たして本物の材料から作られているのかも疑わしく、単価を押さえる為に、化学的に処理されたコピー食品を主体にして作られているのが、ほとんどではないかと思われ
ます。

自分はこわくなつて来て、面倒でも材料を自分で確かめて買つてきての、自炊をしておりました。

それでも、材料本体の味が、どこかの過程で化学処理されてしまつているのを感じました。

それはブラジルで、毎日日本物の材料を食べ続けていたからわかつたのだと思います。

砂糖などは、精製されすぎて本来の味と甘味はなく、魚で卵を抱いているのが材料に美味しいなどと噂になると、業界

は人工的に注射で卵を抱かせてしまいうらしい等の話を聞けば、どんな材料が何処で人工的に化学処理されてくるか、わからなくなってきました。

このような食品を主体に生活している長期滞在者や、居住者たちは知らない間に健康が、むしろまれて来ることが考えられます。

次に感じたことは、人々の言動がコセコセしていて、気持ちにゆとりのない毎日を過ごしている人達が沢山いることを知りました。

ものの見方が狭いし、自分に直接関係ない（本当は大いにあると思うけど）世界には関心なく、井の中のかわずのような人種が増えていることで、同級生たちに会っても、海外に旅行した経験のある友人と、国外に出たことのない友人とでは、ものの見方の尺度が違うことを痛切に感じました。

日本人の顔をして、読み書きは出来るくせに、政治や経済、世界情勢には関心なく、何を目的に生きている人達なのかと考え込むような人が沢山いることもわかりました。

職場内でも、自分たちの工程の先の方で、問題が起こっても誰も関心を持たず当事者の責任にして、その前後の工程の人達は無関心で過ごしていることも分かりました。

隣り近所の人達の間での挨拶はなくなり、職場での友情もなく、経済が上昇している間はよいけど、それが左巻きに

なった時には、お互いに人間的な繋がりがなく、・仕事の上でも各自がバラバラの分野で就業しており、全体的な流れを知らうともしない為に、あらゆる分野に濃みが吹き出してくるのは間違いないようです。

出稼ぎと云う現象によって、多くの日系人がアマゾンから出かけて、また現在でもまだ多くの人々が働いている現在、それぞれが日本の問題点を知り、考えさせられ、アマゾンの良さを再認識して安心して帰られるところを見つけただけでも、素晴らしい現象だと思いました。

特集 ・ アマゾンの未来

今世紀末に胡椒の大相場が到来する

ベレン在住 瀬 古 興 平

胡椒と云うものは面白い、非常に面白い商品だと思います。

例えば、コーヒーなどと異なり、胡椒は世界で生産供給国が5〜6ヶ国で、しかも生産地域が限定されている割に消費国は120ヶ国ほどあります。

次に胡椒は食品加工などに混合する割合が少量の為、1トンが5000ドルの安値であろうと、3000ドル、或るいは5000ドルに暴騰しようが消費量はそれほど減らず、需要

量の平均した年間伸び率は3%位で安値になると増加して高値になると減少する傾向にあり、その上下の差は10〜20%位と見られています。

日本人が導入した胡椒



そして、私達の先輩であるアマゾンに入植した最初の日本人移住者達が胡椒の大量栽培に成功したおかげで、後続の日本からの移住者を大量に導入することが出来、現地の労働者何十万人に雇用の道を開き、ブラジル国内の工業であるトラクター、トラック、農耕エンジンなどの業界を活性化させ、農薬、肥料を始め、食品、日用雑貨の分野にもそれを波及させていき、地元の商業を発展させ、しかも無一文同様に移住して来た日本人や現地の人達に莫大なる資本を握らせる機会を与えて来たからであります。

しかし、その胡椒も1990年より急激な相場下落を起こ

し、それ以前の1986～1988年の三年間に亘って戦後の歴史にない高値相場であるトン当り3500ドルが続いていた時点で、各生産国の農家が大量の新植栽培を行っていた為に、大相場で稼ぎ出して来た資金を現在では食い潰しを始めて来ており、胡椒園の管理維持も出来ず、資本力のない農家から順次撤退が行われ、胡椒園の放棄から他の作物への転換などが行われているのが、世界の主要生産国の胡椒栽培者達の共通した現状であろうと推察いたします。

胡椒の相場は昔から十年周期と云われてきました。

それは過去のデータを読むと底値より天井相場に到達するのが約六年、天井値をついてから底値に落ち込むまで約四年と云う比較的正确な相場の変動が予測が出来ていたのであります。

ですから当地で胡椒を栽培されて無一文から財産を築き上げてこられた多くの人達は、底値から天井相場に達する間に収穫した生産物を毎年売り続けて来たことになります。

胡椒は植えつけて大体三年後から収穫が始まるために、底値からジリジリと相場が上がり始めると一斉に各地で栽培が始まり、それが育って収穫が開始され出すと大量の出荷が始まり、需要と供給のバランスが崩れて相場は下がり始めて行きます。

第二次大戦以降、共産主義諸国は計画経済を行って参りました。

胡椒の生産国であるインドは非同盟でソ連寄りの路線を選び、生産物の胡椒を生産原価方式価格でバーター取引決済で共産諸国に売り、自国内で生産できない商品と交換しておりました。

そのために自由主義諸国に於て胡椒相場が下降したり騰貴しても輸出余力のある胡椒を自由主義諸国の市場に流さなかったために他の生産国であるブラジル、インドネシア、マレーシアなどでの供給過剰を防ぐことが出来て底値を支えることも出来たわけであります。

それは共産主義諸国による予算経済管理で相場の安い時には必要以上にインド以外の生産諸国よりも買い付けて相当の在庫を抱え、相場が騰貴した時には買い付け数量を減らして在庫の食い潰しで世界の胡椒相場を緩慢にして采たわけであります。

ところが1991年急激に共産諸国の崩壊が起き、資金不足から国家管理ストックの放出と食い潰しが始まって来ました。

その結果、インドの生産量が産地在庫として積増されて来たために、いつでも何処の国にでも供給出来る状態が1994年頃まで続くことになってしまいました。

更にインド以外の生産国が抱える在庫を合わせると1996年頃まで必要消費量の供給が可能と推測されてまいります。

また先進消費国の不況と金利高でユーザーの持越しロング玉手当の買出動は1997年頃から始まると考えられてきます。

歴史的にみて胡椒産地には、何年毎かに病害、旱魃、洪水があり潜在的生産能力と実際の生産量は大きな開きが生じ、加えてこの不況が長引くと胡椒園経営からの撤退か各国生産地で起こり、持ち越し在庫の売りだけが続く現象も考えられます。

反対に投機グループの参入でトン平均1000ドルを目安に2〜3万トン買占め、供給を引き締めれば相場が騰貴してもおかしくない状態でもあります。何故なら必要資金は現在なら2〜3千万ドルで充分だからです。

これらの現況から判断して玉不足による天井相場が1999年頃到来しても決しておかしくない状態に置かれていると私は判断しています。

特集・アマゾンの未来

匿名座談会

「アマゾンと日本の違い」

場所・日伯会館会議室にて

出席者・（発言順）

司 会・編集部

Aさん・五十才、家族をベレンに残して四年間、出稼ぎに行ってきた日本人男性（日本の大学卒）。

Bさん・二十五才、日本に二年半出稼ぎに行ってきたベレン生まれの二世男性（ベレン国立大卒）。

Cさん・日本に四年間留学してきた二十八才のベレン生まれの二世女性（ベレン国立大卒）。

「日本の素晴らしいところ」

司会・本日は皆さんに集まって頂いて、アマゾンと日本の違うところをトコトン話合って頂きたいと思っています。初めに一人一人に、まずアマゾンと違って日本の素晴らしいところを、思いつくまま話してもらいましょう。

まず、Aさんからどうぞ！

A・そりゃ、インフレがないことです。

一年立っても百円は百円の価値があることですよ。ここじゃ、何ヶ月毎かに一番単位の低い紙幣か小銭を捨てていか

にやならない。その連続がズーと何年間も続いているし、日本に行く時に一番高額の紙幣を一枚だけ持って行ったら、帰って来てみたら一番低いお札に化けていた。(笑い)

乞食でも受け取らない。

司会・Bさんは、どうですか？

B・強盗やら迫剥ぎがないことです。日本じゃ、強盗と云うと夜中に人目につかないように銀行とか家に侵入してくるイメージがあるけど、ここじゃー昼間から人通りのある所で時計とか財布をとられてしまう。

C・夜でも女性が安心して一人歩き出来ると云うのは最高ですね。

街を歩いていてもゴミ一つ落ちていないんです。

四季があつて、景色が変化していくなど、素晴らしい自然に恵まれた国ですね。

それから街での買物が日本では気軽に出来るんです。ベレンの街では、何んてか分からないんですけど、店にチョツと入ってみようかと云う気持ちが出にくい雰囲気があるみたいなんです。

例えば、ベレンでは時間つぶしにブティックに入ると云うことはあり得ないような感じで、店員もそんな客はいないだろうと思っているんじゃないかと、思ったりしちゃって。

日本では、本当に時間潰しに入って、楽しんで見ている内に衝動的に買物をしてしまうことが、しょっちゅうあります。

た。

A・すべて時間がキチツとしていることです。

七時十五分に来る電車と七時十七分に来る電車があると、事故が起こらない限り二分間隔で毎日時間通り動いていることで、これが電車に限らずすべてに亘って時間通り動いていることです。

B・銀行とか郵便局とかの対応がとても親切で、本当にお客さんを待たせないというか、お客さんを大事にしてくれると云う感じがしますね。ブラジルに帰ってくると銀行や郵便局に行くと行列が長くてイヤになっちゃう。

A・ここじゃ、収入で生活していくだけで精一杯だもんね、食べて電気、水道代、子供の学費払ってパーになる。

家賃とか家の月賦など段々遅れてたまって行く状態がほとんどの家庭じゃないかな。

ともかく日本の豊かさに比べると、ブラジルの貧しさはショックすぎるよ。ブラジルも昔は、こんなじゃなかったのに、ここ十年位の内におかしくなっちゃった。

B・ともかく、働けば働くなり報酬がもらえ、倹約すればそれだけ貯金が出来て、それが少々の金額でない事は、非常に有り難いと思いました。

僕は、二年半夜も残業して四万ドル貯めました。

勿論、カチカチのケチンボ生活でなく、休みの日はそれなりに楽しんで来ました。ベレンに帰って来て、四万ドルの内

から兄貴の会社に出資して、家を買って車も買い、嫁さんもらいう事が出来ました。

今度は事情が分かったのでまた、出かけるつもりです。

司会・奥さんを連れてですか？

B・いや、一人で行きます。それも一年位のつもりです。

こつちじや兄貴の会社のソシオ（出資者）になったので、働かなくても会社から毎月手当が出るし、留守の生活費の方は心配ないので、日本で働きながらブラジルで将来どうゆうことをしたらよいかの勉強もしてみたいと思っています。

「満員電車と駅のホームは日本社会の恥部」

司会・それでは、今度は日本でイヤなこと、アマゾンに比べると、これはいやだなあーと思ったことがあったら云って下さい。

A・これはアルアル。

B・沢山ありますよ。（三人が同時に笑う）

C・私みたいに留学生の場合は毎月手当を頂いていたので好きな勉強と適当な遊びをエンジョイ出来ましたが、日本に住みついて働くとなると、やっぱり考えてしまいますね。

司会・どうしてですか？

C・何だ、かんだと云っても男性社会ですもの、まず職場では女性と云うだけで差別が始まります。

給料から仕事の内容からすべてにわたって感じます。

私は、日本人の顔をしているけど、ブラジルからの留学生と云う肩書きだけでお客様扱いになっていました。いろいろ招待されたり、中元とかお歳暮とか、日本人社会の付き合いからはずされて生活することが出来ました。

それが日本の社会に仲間入りした途端、女性と云うだけで給料は差をつけられ、学生時代に勉強してきた学問は重視されずに、お付き合いの費用だけは一人前ではどうにもなりませんね。（笑う）

A・私は出稼ぎが資金稼ぎの手段でしたので、気持ちの上で日本の社会と分けて考えていたから精神的に楽でしたが、自分がこの社会に家族を連れて住みつくとなると、チョツと考え込みますね。

もつとも、昔はそういう社会が当たり前と思って住んでいたんですけど。

司会・では具体的に体験したことから話して頂けませんか、Aさんから、どうぞ！

A・具体的にと云われると困るんだけど、ブラジルの生活に慣れちゃうと、何となくイヤーな感じがするんだけど、さつきも云ったようにあくまで私は、この社会の人間じゃないんだと云うことで傍観して来ましたが、ともかく建前と本音の使い分けの難しいところで、良いところを見せようと、悪いところは隠すし、他人はその悪い所を知っていても

知らんぷりをしているし、人と話していても、心にもない世辞を云っているのか、思ったことを話してくれているのか、サッパリ分らない。

それと自分の考えをしつかり持っている人が少ないみたいで、だから人との話題は個人の意見とか、悩みとかでなく新聞とか雑誌とかテレビの話題とか、どちらかと云うと関係のない他人の話が主体になってしまっているので退屈してしまうし、誰と話しても情報源が同じだから会話の面白味がない社会に感じるんです。

建前と本音に神経を使って、日本国中が物凄い無駄なエネルギーを消費している感じがするんです。

司会・ブラジルではじゃなくて、ブラジル人社会では必要以上で会話が発達していると云うことですか？

A・そうですね。

ブラジルでは街角でばったりと知人にあったりすると別れた時点からの、お互いの消息から始まり延々と道端での会話が続きますね。

二人とも約束があるのに会話に身が入ると、約束などどうでもよくなる。(笑い)

C・私は日本社会の良いところと悪いところを分けると云うか、悪いところがそのまま正直に大衆にさらけ出されてしまっている場面は 満員電車の中とか、駅のホームなどを歩き廻っている人達の行動をみれば、私達外国人には、すぐ

分かります。

B・あれはヒドイ、人間じゃないよ。人間の格好をした動物を放し飼いをしている自然動物園だよ。(司会がまさかと呟く)ホームのエスカレーターを走って登ったり、降りたりする人が物凄く多い。

両方の手で左右の手摺りをつかまって登っていたら、何人にも怒鳴られた。

「邪魔だ！」

「あんたは、礼儀を知らないのか!」「なにしてるんだ!」もう、ムチャクチャだよ。

黙ってエスカレーターに立っている人は、手摺りによって、それらの動物たちが通るのをさけるのがマナーと思っているみたいだ。

おとなしい礼儀正しい人々が、段々と社会の片隅に追いやられて、わがままな感情本位の動物たちが大きな顔して人間社会に暴れ込んで来た感じだね。

彼等動物たちは、そんなに 急ぐんなら、もう少し早く起きて出勤すれば人間らしくゆっくり歩けるのに、最終電車ギリギリまでバーで飲まずに、早目に切り上げてホームに向かってゆっくり歩けば、もっと人間らしくなるのに、まったくわからない。

C・それじゃ、動物たちに対し失礼すぎませんか? (笑い) 私も何度も経験したことなんです、年寄りだと思っ

て道をよけて先に通らせてあげようとする、相手は図にのつたと云うのか、これは自分の通る道だと云う顔して、ひとの好意を無視するいやらしい年寄りが多いのに気付きます。

A・私の知っている人が松葉杖について日本にやって来たのですが、サンパウロの空港では彼が通るところ、みんな立ち止まって道を開けてくれたのに、成田では何人もぶつかって来たらしい。いやになってしまつて、予定より早く帰国してしまつたらしい。

B・それ、それよ。

日本人は人に迷惑をかけるのを嫌がると聞いていたけど、駅のホームなどで自分の行きたい場所に真っ直ぐに歩いていく。

周りの人に頓着しない、ぶつかつてでも自分の行先に近づこうとする。

人の足を踏んずけてでもぶつかつても「すいません」と一言も云わない人がほとんどです。

C・満員電車で立ち上がろうとすると、立ち上がるのを待たずに人を押し出して座つてしまう。

ともかく、毎日電車に乗り駅のホームを通らないと生活していけないから、さけることが出来ないことだけに困るんです。

A・それで思いだしたんだけど、終電車に乗ってくる素晴

らしい美人が多いんです。

感じとして、会社の秘書のようなタイプが多いんです。

さつそうと電車に乗り込んでくるのはいいんだけど、座った途端にグニャーとなって、口を開けて股を広げて醜態をさらけだして眠りこけるんです。

勤め先のストレスが溜り続けて疲れてるんだなーと同情しちゃうけど、さつきの話しじゃないけど、電車の中とか駅のホームは公衆の場所じゃなくて、人間の本能をさらけだす場所に変りつつあるみたいですね。

「クサイものに

フタをしていく社会」

司会・それじゃー今度は、日本人社会全体のこととて、アマゾンに比べて、何となく違和感を感じると云うことで何か？
C・なぜ、皆さん流行ばかり追いかけているか、本当にわからないんです。

美容院にはいつて、自分の髪型を注文したらハヤリでないと云われたんです。今の流行は、こうゆう型ですと云われるんです。

おそらく周りが周りだから本人は親切な気持ちで云ったんでしょうけど、イヤ私はこうゆう型にして下さいで押し通しましたけど。

A・そう云えば、帰りの飛行機の中で、学生のサッカーチー

ムと一緒にになったんです。

髪の形から着ている服から全員まったく同じでした。

C・土産を持ってきて「つまらない物ですが」とくれるんです。そんなつまらない物、なぜもって来たのと云いたくなるけど、開けてみたらつまらないものじゃないんです。(笑い)

A・さつきの松葉杖の知人だけど、日本にはびっこや、不具者やめくらなど、あまり街の中で見かけないので、いないのかと思ったのでいろいろと聞いてみたら、皆んな家から出してもらえないとか、本人が出たくない雰囲気があるのでびっこりしていました。

C・Aさんの云われたびっこことめくらとか云ってはいけないんです、日本では。

私の友達が教育関係の留学生で来ていたんですけど、学校では、黒人とか田舎とか、落第とか身体障害者とか、かたわめくら、びっこなどと云う言葉を使ってはいけないことになっていられるらしいのです。

A・都会より田舎の方が、よっぽどいいのに。

B・それじゃ、学校の先生達が差別運動を始めていくわけだ。

正しい歴史も、物語も教えることが出来なくなってきたしまうんじゃないの。

例えばサー” 田舎に住んでいた奴隷の黒人が、かたわに

なつたために学校にいけずに落第して“ などとは云えなくなつてしまふ。

何で田舎がいけないのか、黒人がいけないのか、落第が悪なのか、言葉があつて使つてはいけないなど、無茶苦茶な教育じゃないか、生徒たちが大きくなつてたまたま新聞記者になつたけど、この言葉は使っちゃいけないんだ、あの言葉も駄目だと思いこんでいるから結局何にも書けなくなつてしまふ。(笑いころげる)そのうち、先生たちは矛盾に気が付いて会議を開いて反対語も悪いんだと云う事になり、「都会」も「白人」も「及第」も禁止してしまふ。(笑いが止まらない)

司会・Bさんよ、笑うのもいいけど、批判もいいけどサー、貴方が先生だったら、どうするね？

B・(司会に向かつて)あのネー、言葉つてのはねどこの国にだつて、嫌な言葉、汚い言葉があるんですよ。

また、そうゆう言葉があるからきれいな言葉、美しい言葉が光ってくるんじゃないですか？ それから、これは僕が一番云いたいことだけど、言葉と云うのはですね、その言葉をつかう時の状態が善意であるか、悪意であるかが問題なのであつて、善意であればどんな言葉を使つても、嫌らしくや、汚らしくには聞こえないことで悪意で使うと、どんなに綺麗な美しい言葉も、汚ならしく聞こえると云うことですよ。

だから、僕が先生だったら言葉を教える前に、生徒の心を育てる教育とか、気持ちを良くする授業から始めますよ。

司会・だけど、そうなると先生そのものの質が問われて来ることにならないですか？

B・そう云うことです。落第はさせない、飛び抜けた才能も認めない、全員平均した生徒しか生産できない工場に学校がなっている。

そんな工場から出てきた先生と云う製品が教わったことのない善意とか悪意なんて云われても分からない。仕方がないので、差別は良くないらしいから、それに関係する言葉を禁止していこうと云うことになってくる。

それで表面上の問題だけを片付けていく社会なんだ。

現れたので聞いてみたら、家から出なくても、近所の人を食べ物や、おかねをくれていたと云うんです。一時的だったけど、ものすごい景気だった。だから政治が変わると、この国は途端によくなくなることがある。

B・ところが全然長続きしない。(笑い)

ともかく、その時の思いつきでいろいろの政治を始めてみる。ダメだったからと云ってまた百八十度変わったことをする。国民もあんまり政府など信用してない。それぞれが勝手に動いていると云った感じだね。時間なんかも、それぞれが勝手に自分の時間を持っていて歩いているみたいだ。

「時計に支配されている社会」

C・時間と云えば、日本人は時間に追い廻されているみたい

ですね。

パーティーなんか、やっと話がのって来たときに「時間で」と云われると当り前のように、みんなゾロゾロと出て行くんです。

約束があるから自分だけ帰らしてもらうとか、子供が待っているからとか、まだ仕事が残っているからと云って一人一人がそれぞれの理由でバラバラに帰っていき、段々と人が少なくなつて来たナァーとを感じるのがパーティーのあり方だと思ふんですけど、どうも何んかおかしいのよね。

A・自分で自分の行動を動かすことが出来ずに、時計のよきな品物にみんなが支配されている感じはありますね。

と云うことは、ある日時計と云う品物がなくなったら電源の切れたコンピューターのようにみんながパニックに入る。なにしていいか分からなくなってくる。

B・この間、ブラジル人の友達に云われちゃった。

テレビのニュースで皇太子の結婚式でアナウンサーが日本では、誰もが時間を守らなければいけないし、すべてが時間通り進んで行く。花嫁の妊娠も三日間以内に決まるんだと云っていた。

僕はテレビを見てなかったので、他の人に聞いたら本当にそう云ったらしい。これでまた、日本人のピアーダ（ジョーク）が沢山増えてくる。

C・ブラジルでは時間に余りこだわらない人生が送れます。

八時間は日本と同じように流れているけど、時間は時間、自分は自分、なるべく守ろうとするけど、それ以上に自分にとって大事なことが起これば守らない。そして周囲の人達がそれを認め合うところがありますね。

「予期しない行動をする」と

パニックに入る」

B・さつきのAさんのみんながパニックに入ると云う話で思い出したこと（思いだし笑いを始める）があるんだけど、僕が次々と悪戯にパニックを起こさせたことがあるんですよ。

あのね、ここでは買い物をするときには相手の立場を考えて、たとえば一六〇〇クルゼイロスの物だったら二〇〇〇クルゼイロス出して更に一〇〇クルゼイロス出せば相手の釣り銭は五〇〇クルゼイロス一枚で済むわけでしょう。

そのつもりで最初は知らないでこの習慣でやったでしょう。相手はキョトンとしているんです。しばらくしてこれは心中パニックに入っただんだなーと思ったんです。それから次々と試してみたんです。

例えば、九百五円のものだったら千円札と五円銅貨を出すんです。どこでも誰でもパニックにはいります。パニックに入らないのは自動販売機だけです。（大笑い）

C・だけど、ホテルのチェック・インは私達ブラジル人に

はパニックに入ります。

ブラジルでは、予約さえしてあれば、午前中だろうが午後であろうが、どうせ一泊分は払うのだから本人の自由だろうと思うのだけど日本じゃ大概のホテルが午前中なのですよね。

そのためにチェック・インの時間に合わせるために他の行動が制限されて来ると云う私達にとっては、馬鹿馬鹿しいと思うことが何回ありました。

司会・例えばどうゆうことですか。

C・一例は美術館の見学をしてホテルに入るスケジュールがあつたのですが、案内する人がチェック・インの時間ばかり気にして、せつかくの見学が名目だけの見学で本当の見学にならないんですよね。

私、どうしてもチェック・インが午前中ではなくてはいけないのか、あるホテルでフロントに聞いたんです。

そしたら、何と答えたと思いますか？それ以外の時間のチェック・インはコンピューターが受付けないようにプログラムされているんですって。（笑い出して）私、おかしいなあーと思ってしまつて、だつてそうでしょう。人間は感情で行動しているんでしょう。

特に旅行している時などはその時の気分とか感動に左右されながら行動しているんだと思うんです。

そうゆうお客さんの存在をコンピューターは受け付けずに、

それを当然と思い込んでいるホテルの経営者達もおかしいし、コンピュータのプログラムも変えずに一生懸命ホテルの宣伝をしている人達が分らないんです。

「人間らしく生きられる社会」

司会・Aさんにお聞きしたいんだけど、結局日本とアマゾンの違いと云うのは、貴方にとって何んなのですか？

Aさんは、日本に生まれて日本の教育を受けて、それからアマゾンに移住してきてピメンタ（胡椒）を植えられ、ある程度の資本を握られて日本にも遊びに行き、そうゆう体験をされながら今度は出稼ぎにいかれて、いろいろと複雑な心境だと思えますけど。

A・そうですね、日本の社会と云うのは家庭にしろ、学校にしろ職場にしろ、それぞれ独特のルールと云うのか不文律みたいなものが存在しているんですね。

だから、それから外れると周囲の人間から追い出されてしまいう雰囲気があつて、個人の特長とか個性が発揮しにくいし、たえず周りの人達に気を使いながら、又表面を飾りながら本心ではエコノミック・アニマルを目指して生活しているんだと思うんです。

勿論、皆が皆とは云いませんが、ほとんどの人々がそういう風に知らない間に子供の頃から洗脳されて来てしまっているんです。

だから、夫婦とか親子とか家族とか友人とか云っても表面上の形だけで構成されている感じが多いみたいなんです。

人間的な心のつながりで結ばれるなんて云うのは、少ないケースに入ってくると思うんです。

そういう社会で育った私は私なりにエコノミック・アニマルを目指していたんです。だから大学を出て、就職してみても毎日が平凡な仕事に飽きたらなくなつて、たまたまトメアスーのピメンタ景気で大儲けが出来る生活を聞いてやって来たわけです。来てみたら、トメアスー社会と云うのは、ちよつと日本の社会とは違うんですよ。

先輩たちの云う通りにピメンタを植えていけば、自然とお金がたまつて来る。毎年確実に収入が増えてくる。

それで日本に遊びに行つて友人たちにホラ吹いて得意になつていた頃もあつたんです。

しかも、トメアスーでは隣り近所の人達との間での競争意識があるわけではなく人情たつぷりで日本の家族関係とか親戚関係以上の繋がりが出来上がっていくんです。

でも、今考えてみれば、ピメンタの値段が永久に高値で、まさかピメンタが病気でバタバタやられていくことなど誰も予想していなかったから、あんなのんびりした生活が出来たのかも知れません。

それがピメンタの値段が暴落して木は病気でどんどん枯れて行き、家計が苦しくなり出した時、家長がエコノミック・

アニマルで徹底していた家族が最初にバラバラに崩壊を始めて行っただけです。

豊かな時でも家族の融和とか、夫婦や親子間の対話やその教育を充電していた家族は苦しくなっても、それなりに安らぎの場所になっているんです。

そして、その安らぎと云うのは家族の前で、それぞれが怒ったり、泣いたり、わめいたり、怒鳴ったり、笑ったり思ったことが云える雰囲気でないと思いの場所にならないことがわかったのです。一人でも誰かが我慢して何も云えなかったら家族にならないことが分かったのです。

そういう体験をしたあとに日本に出稼ぎに行って感じたことは、豊かな社会になっても、ほとんどの家庭が充電をしていないのです。相変わらず昔のように、エコノミック・アニマルに一生懸命なんです。

私の住んでいた社宅に某新聞の拡張員が新聞の勧誘に来たんです。タオルとか洗剤を持って来て、まるでヤクザと変わらないんです。私がブラジルから出稼ぎに来ていると話したら、びっくりして同類と思ったのかちよつと仲良くなつてしまつていろいろ事情を聞いたら、拡張員の団長ともなると新聞社の幹部とツーカーの仲らしいのです。

と云うことは、日本の社会のオピニオン・リーダーであるべき新聞社でさえ、きれいごとを云っても現実にはヤクザに頼らにや生きていけない体制になつてしまつていているんです。

ねえー。

だから、さっきの話じゃないけど理想的な家族関係を大きくしたものが社会だとすると、クサイものにフタをし続ける体制が保たれている内は誰かの犠牲によって社会の体面が保たれていることになり、豊かさがくずれたりしてフタをされていた人達が表面に出て来た時、拡張員が怒り出して新聞社のきれいごとに反抗したり、生徒が先生の教え方に矛盾を訴えたり、身体障害者がその家族に対して反乱が始まったりして来た時にそういう人達の立場が表面に出て来て、社会全体の論争が始まり、お互いの存在を理解した時に素晴らしい社会が生まれてくるんだと思うんです。

そういう意味じゃ、アマゾンの方が生々しいところもあるけど、まだまだ人間らしい生き方が出来ると私は思っています。

どうせ生きるなら人間らしく行きたいですもんね。

司会・いやー、大変貴重なお話を伺いました。本当に有難うございました。

それでは、次にBさんにお伺いしたいんですが、Bさんは大学時代に大学を一年休学されて日本に留学された経験もあり、また貴方のご兄弟はみんな日本語が達者ですが、Bさんにとって日本とブラジル両国の親善とは、二世の貴方にとってどうあるべきなのですか？さきほどは大分辛辣な批判をされていましたけど。

B・（しばらく考え込んでから）日本とブラジルの親善とは私の存在そのものが親善になると思います。

私の両親たちもブラジルに出稼ぎにやって来たのかも知れません。所期の目的を達したのか、どうなのか分かりませんが少なくとも私達兄弟と云う財産を作り出したことは間違いないと思います。

日本の批判をしたからと云って日本が嫌いだからでなく好きで親しみのある国だからです。そして私自身、日本人の二世と云う立場に非常に満足しているんです。

そして、日本の良いところも悪いところも知り、ブラジルの良いところも悪いところも知っていることが両国の親善だと考えるんです。

これから国際化の時代になるのに、一般の日本人は余りに外国人のこと、考え方など知らなすぎるんです。

そうゆう中で、二世ではあるけど、多少は日本と外国の違いを知っていると云うことが日本にとって貴重な存在であり、ブラジルにとっても大事な国民の一人であると思っています。

こうゆう云い方をすると外国を知らない日本人には生意気に聞こえると思いますが、そう云う自己主張がこれから日本の人達に必要な時代がやってくると思っています。

司会・どうも、有難うございました。

B・どうも、云いたいこと云わせてもらって有難うござい

ます。

司会・それでは、最後にCさんに　我々ここの日系社会は、今後ブラジル人社会のなかでどのような位置付けがされるべきなのか、Cさんは国立大学を卒業した時に、大学から教授の席を約束されていたのを断って日本に留学されて来たと聞いておりますけど。

C・そうですねー、非常に難しい質問ですね。

私の思うには、ブラジルと云う国は日本に比べて非常に若い国だと思っんです。

そして、とてつもなく広い国なので、サンパウロのような所とアマゾンのような所とは、当然異なった文明が育ちつつあると思います。ですから、私も含めた日系社会の人達は日本から或いは両親から受け継いだ日本の文化の良いところを持ちこんで、それをアマゾンの良いところと混ぜ合わせて住みやすい社会を造る努力をすることだと思います。

それには、まだまだ時間がかかりますが、ただ先輩の人達が移住して来てすでに六〇何年たったら、大分周りも知らない内に、変わって来たんじゃないですか（先輩たちは、別にブラジルの為などでなく、自分自身の生活を向上させようと、日本で身につけた習慣とか文化を思い出してはそれを日常生活に取り入れて行った、それを見て周囲のブラジル人が真似し始めた。

また、ブラジル人社会の良いところも見習って行った。だ

から、私達も同じように日本の良いところを知り、ブラジルのよいところを取り入れ、それを混ぜ合わせて自分自身の生活をより良くしていけば、それでいいんじゃないかと思えます。

また、六〇年たったらアマゾン独特の文化が出来上がっていると思います。

司会・いやー、まったく恐れいります。

私自身、大分考えさせられました。

本日は、本当に有り難い話を聞かせて戴いて感謝しいます。

本当は、皆様の名前を出したいんですけど、約束ですので匿名で発表します。

特集・アマゾンの未来

出稼ぎによって救われた私

アナニンデウア在住 安藤 純

考えてみれば、おかしい現象であり、歴史に残る出来事でもある。

「貧乏人は麦を食え」と一国の総理が口にするほどの貧しい社会に夢をなくして、アマゾンに移住してきた。

ブラジルの経済が毎年ひどくなるに比例して、日本は麦など食べる人がいなくなるほど豊になってしまった。

もし、この「出稼ぎブーム」と云う機会が、我々コロニアに与えられてなかったら、日系コロニアにとって、アマゾンの未来など考えることも出来ず、コロニアの半数は枕を並べて討ち死にしていたに違いない。

それほど農村の疲弊から始まったこの経済不況は、計り知れない変化を日系コロニアとブラジル人社会にもたらした。

自分が出稼ぎを決心したのは経済的な行き詰まりであった。

日本で働いた経験もなく不安もあったが、家族を抱えての生活に不安より行動の方が大事であった。

最初は名古屋で仕事を見つけ、給料もまあまあ、とてもブラジルでは稼いだせない金額を手にすることが出来た。

最初抱いていた不安の、日本での就職未経験と云うのは意味がないことがわかった。我々出稼ぎ階層にはブラジルのよ

うに各々が「考えながら」自分の仕事を片付けていく習慣が必要でなく、云われた通りにロボットに徹していればよかった。例えそのやり方が不合理で効率が悪いと知っていても、ロボットはそれに徹していればよかった。

云われた通りの作業を続けて報酬が定期的に保証されるようになる、仕事に対しての改善、効率向上などを考えるエネルギーがいらなくなるので、そのエネルギーは自分自身の問題に転換していくようになって来た。

ブラジルに残した家族のこと、自分の将来、今までの反省、日本と云う環境におかれてブラジルとの生活の比較が出来るようになり、「考える」ことが非常に多くなった。これは多くの出稼ぎ同胞に対しても言えることではないかと思う。

多くの考える時間の中から、私なりに自分の将来の展望を探し始めた。

ブラジルに帰ってから自分は何をしたらよいか、たどりついた結論は「指圧」であつた。日本で働きながら「指圧」の勉強を始めた。

家内が健康体でないので六カ月毎にブラジルに帰国していた。

日本には合計四回出稼ぎに出かけたことになる。

その間、ブラジルに残った息子には留守家族を守る自立心が生まれていた。

おそらく当地の日系人たちは五千人近く出稼ぎに、出かけ

ていた頃があつたのではないかと思う。

一人平均毎月一千ドルを留守家族に送っていたとしたら、毎月五百万ドルの資金が当地域に流れ込んでいたことになる。

この経済効果は表面に出ないけど、どれほど日系コロニアと関連者たちをうるおしたか分からない。

更に二、三世の人達が出稼ぎによって、ブラジルと日本の相違、比較をすることが出来て、私のように考えて、各々の将来の展望を探しだして、日本の優れた技術、文化を身につけてブラジルに帰国してから役立てようと行動し始めた時に、始めて「出稼ぎブーム」がコロニアの空洞化ではなく勉強強化となり、それがアマゾンの未来の一端につながっていくものと私は考えています。

特集・アマゾンの未来

アマゾン奥地からの視点

ロンドニア州在住 橋口和正

この文を読んだ読者にとって、おそらく私が一番アマゾンの奥地、辺境に住んでいる日本人からの投稿であろうと思う。

私はボルトベリーヨより更に奥のボリビア国境に近いマ

ディラ河の上流で金掘りをしている。

そんな私に記念誌編集長より記事の依頼が舞い込んだ。

アマゾンの奥地から地球全体を眺めた上で、アマゾンの未来を述べた記事が欲しいとの無茶苦茶な話しであった。

一般常識から考えると、私のような地の果てに住んでいる人間で、しかも金掘りなどの云う事は誰も耳を傾けないのが世間さまであり、表の社会である。

それで読者が読む読まないかは勝手と解釈して、機会を与えてくれた編集長に応えて、云いたい事を一人で遠慮なく述べさせてもらうことにする。

私はアマゾン奥地をアチコチ渡り歩いて、何年間も金掘りをしているが、これは立派な地下産業の一構成員でもある。ブラジルを始め、中南米一帯の資源の豊かな国々では、その実質経済の約七割は我々地下産業の連中が、表の経済の三割を支えていることになる。

その表面に出てくる三割の数字をいじくり出して、やれブラジルの外債が多過ぎるの、インフレが月三〇%以上は暴動が起こるの、ブラジルは後進国などと、世界の先進国の経済学者たちが、地球上のアチコチの豪華な事務所の中で、馬鹿みたいにコンピューターをいじくり計算ばかりしている姿を想像しただけでチャンチャラおかしくなってくる。

彼等の収入のもとをたどっていくと、全部アマゾン一帯から出ていった資源に付加価値をつけて、仲介マーゲンを加え

ながら加工していく段階で、そこからはみ出るおこぼれの話
しを情報提供とか云うかつこいい名前に変えて報酬を貰って
生活しているに過ぎない。

さて、ここまで私が書いたことですら、理解する経済学者
はまずいないと思う。

頭の良い奴で、最低三年位は納得するのに年数がかかる。
それも現地に足を踏んで現場を見た奴にしか分らない。
ましてや、文才のない私の云わんとすることが、どれほど
世間さまのインテリ連中に理解されるかわかったもんじやな
い。

表の社会では地下産業と云うと、すぐ麻薬、武器、偽造紙
幣などと想像しがちだが、それは貨幣経済とか管理経済に所
属する人種の云うことで、我々の社会はあらゆる産業が誰れ
の規制も受けずに自由自在に活動しているのが特徴である。

「天は人の上に人を作らず」と日本の偉い人が云ったが、こ
こでは、「アマゾン人は人の上に人を作らず、それぞれ自由に好
きなように生きなさい」そのものである。

ここでの権力者は、強烈な太陽であり、雷をとまなう豪雨
であり、太古から横たわる原始林であり、清々と流れるアマ
ゾン大河である。

彼等自然のもつ巨大なエネルギー、大自然の変化に対して
人間の特権階級など手足も出ないし、すべての人間を同じ条
件下で平等の環境においてしまう。

人々に背番号をつけてコンピューターでコントロールすることが当り前の感覚になっている表の社会の連中には、広大なアマゾンに散在して居住している人々の実態を知った時には、大自然の統制下で生きている人々を自然から横取りして支配しようなどとのむなしさ、無力さを切実に感じるはずである。

彼ら表の社会での権力者と称する人間の持つ力、特権、地位、富など何一つ誰れにも通用しないことを知らされるからである。

自由で平等の我々の文化圏にはまず敬語がないことである。

人間に階級がないから敬語も必要でなくなってくる。

名前も不要である。ただ他人と区別する為に分かり易い名前やアダ名のみが通用する。一生アダ名だけで生活する人間などいくらでもあるし、親のつけてくれた名前さえ知らないで一生過ごしてしまう者さえいる。

礼儀作法などもない。各々が感じたままの感謝や喜び、なぐさめを表現するだけで人間関係は円滑に動いていく。

遠い地球の果ての何処かの国では、冠婚葬祭の費用の為に働かねばならないと話したら、そんな無駄なエネルギーを消費している遅れた国が、此の世にまだあるのかと云われた。治安は人々の持つ正義感、良識にもとづいて処理されていく。

約束を守らない者、周囲の社会、人間関係を乱していく者は知らない間に消されていく

死体は大自然の動物たちが自動処理してくれる。

人々が納得しない殺人や暴力行為は、その仲間や家族からの復讐が待っている。

ここでは住民自身が警察であり、裁判官であり、予算も役人も不要な即裁即罰の治安システムが確立されている。

自然の中で自然に従って生活していけば、表の社会の煩わしいシステムは何も必要なく生活していくことが可能であることを立証している。地球上でもっとも省エネの行政地域と言えるし、何でも形式にこだわる社会は考え直した方がよい。

自然の中に放り込まれ、或るいは自ら求めて入った人々は、お互いに切磋琢磨して生きていくことに遅しくならざるをえなくなる。

教育は、アマゾンの環境そのものが学校になっている。世間さまで大学を卒業しても職がないと馬鹿騒ぎをしているが、ここでは生まれて死ぬまで学校の中で働いているようなもんだ。

ここでは、投資も技術革新も不要な社会である。何んぼ投資しても、アマゾンの大自然に吸い込まれてしまうので投資の意味がなくなってくる。

大自然相手のコスト・ゼロの産業がほとんどだから、技術

革新の経費など無駄になってくる。

更に一匹狼の群れだから組織力など育つわけがない。

アマゾンの大森林の中で、多くの動植物が種の保存の為に、外敵から守りながら一生懸命自分なりに知恵を働かせて進化を続けているように、ここでの環境は人間すらも進化させていく条件をもっているようだ。

養鶏場のニワトリと地鶏との違いのように、表の社会では生まれたての赤ん坊から成人、老人と一生社会に組み込まれたシステムに頼らないと生きていけないように、ここでは物心ついた時から自分の問題は自分で考えて行動しないと生きていけない環境におかれている。

配合されたビタミン剤入りの飼料が食事時間に運ばれてくる社会と、ヒヨコの中から自分でミミズでも虫でも探して歩かないと生きていけない社会とは、当然人間の着想や行動の規範が変わってくるはずであり、人間として逞しく生きざるを得なくなってくる。

現在、私の居住する地域だけでも、あらゆる人種が何十万人も散在して生活している。

表の社会からグルグル廻り廻って来た仕事を請け負う最下端の下請け人達ばかりである。

原始林の中から大木を伐り出す者、それを運び出す者、それを製材する者、動物たちのあとを追いかけている者、獲った獲物の肉を必要とする者、毛皮だけを集める者、薬草を集

めている者、樹液や樹脂を採集している者、果実を集める者、ダイヤ、金、白金などを掘る者、それを買集める者、ルチル、ニオブなどを採している者、半貴石を掘る者、運んでいる者、インディオの太鼓や弓矢を集めている者、これらの多勢の人間に蛋白源を供給するために牛を飼っている者、管理する者、その牛を買う者、殺す者、売る者、牛の胆石だけ集める者、ピラニヤやワニを獲って塩付けにして供給する者、船やトラックや飛行機でこれらの人間や物資を運搬している者、そのエンジンや機械を修理する者、燃料を供給する者、e t c。

この広大なアマゾン一帯に居住する何百万人かの人口が莫大な地下産業を動かし、どこかの接点で表の社会につながりをつけて、ノッタ・フィスカル（納品書）のついた商品として表の社会に初めて正式に登場してくる。コンピュータに入力するのは、この時点から始まってくる。

だから表の社会で、何んぼ偉そうなこと云ったところで、我々の地下産業に従事する人間がそっぽを向いた時には表の世界は成り立たなくなってくる。

それこそ地球上にパニックが起ってくる。

また、我々の産出するものがいきなり表の社会に現れるのもパニックの原因を作り出す。

アマゾン地域から掘り出される金（きん）が、いきなり表の社会に発表されると世界の金相場が下落する。

しかも悪いことに、表の社会ではみんなが経済学者になつたつもりで事務所で計算ばかりする奴や、政治家みたいにしやべるだけで生活しようとする奴ばかりが増えて来た。

工場は工員の変わりに、ロボットを据えて人間がラクをしようラクをしよう、どこかによりかかり始めて来た。

そのよりかかりと、無駄なエネルギーは廻り廻つて、我々裏の社会の人間にシワ寄せがやってくることになる。

よりかかれた我々は、何も他人の為に生きているわけではないので、肩に重荷がかかり過ぎて采たら、そのよりかかりを外してしまえばよい。

一本、二本とよりかかれた枕が外されて行き、それが何万、何千万本と連鎖反応を起こしていく時に、表の社会では予想しなかった事態が始まり、どうしてよいかわからない人間がゴマンと出てくる。

それは仕方のないこともある。

地球の上で生きるために汗水流して働いている我々も、表の社会で冠婚葬祭のために働いている人種との経済も、どこかでつながって動いていることに気付かないか、気付いても知らんぷりしていたむくいであるからである。

地球上のさいはての場所で、たくましく泥まみれになつて働いている人々と、表の社会でふんぞり返つてしやべったり計算ばかりしていたり、人間の交際は物品の交換がないとできないと決めている連中とに、平等の価値を与えた時に初め

て地球上の人間と経済のつながりが理想的に機能してくる
ことになると思はう。

アマゾンの未来

その環境と文化

クヤバー在住　小川　芳　男

アマゾン河の集水域、すなわちその一滴の滴が、蒸発して
何処かに吹き飛ばされない限り、最後の最後には世界最大の
大河となって大西洋に注ぎ出す大陸のお盆は、ブラジル国内
だけで、約400万平方キロに及んでいる。

と言つても、ピンと来ないと思うので月並みだが、日本の
総面積の10倍強、あるいはインドより2割がとこ大きい、
とでも表現してみよう。

世界第5の面積を有するこの国の実に47%にも及ぶアマ
ゾン流域だが、ただ単にアマゾンと言つても、そこには色々
な地域状況が存在している。

おおまかには、北側にギアナ高地、ブラジル最高峰のネブ
リーナ山を包するローライマ山地。

南側は、ブラジル盾状地と呼ばれる古い岩盤の高原。

そして中央の大部分を占めるのが、この地域の象徴とも言
うべき広大な熱帯雨林である。

最近私は、トカンチンス河、シングレー河、タパジョース河

など、ブラジル高原から流れ下りるアマゾンの大支流群の源流の探索を目的として南の端境である、マット・グロッソ州北部、ロンドニア州、アクレ州を毎月のように歩いている。この辺りは特に最近、自然破壊が急進していることが問題になっている地域だ。

ロンドニア州の森林破壊は、ランドサットの衛星写真で世界的に有名だが、隣のアクレ州もまた伐採が進んでいる。この付近の密林には、ブラジル・ナツツ樹が多い（豊かな密林を非能率的な牧場に改悪する際、有用なナツツ樹だけ残し、他を根こそぎにしている）。

痩せた牧草の平地に、ブラジル・ナツツの巨木だけが墓標のようにその影を落としている。

また、特に驚いたのは、マット・グロッソ州北部に広がりつつある大豆の巨大プランテーションである。機械化に有利という理由なのだろう、開発の名のもとに大地をすべて平地化してしまっている。

シンダー河の源流を求め、百万分の一の地図を頼りに、本来流れのあるはずの場所を探したが、そこは遥か地平線の彼方まで平坦な大豆畑しかない。そこには、在った筈の谷の痕跡すらない。

つい最近まで、魚類を始めとする種々の生物たちが息づいていた場所は、まったくの泥土に帰してしまったのだ。そこには夢の跡すらなかった。

防風不足で吹き上げる竜巻の砂境を遠く眺めながら、どうしてそこまでする必要があるのか？　を感じざるを得なかった。

アマゾンの環境問題は、自然だけでなく伝統文化にも及んでいる

熱帯雨林は、西暦1500年にヨーロッパ文明によってブラジルが発見されるまで、先住インディオたちの聖域だった。

我々日本人と同系統の血を持ったアジア民族たちが、遙か氷河時代のカムチャツカ陸橋を越え、北米大陸を縦断し、パナマ地峡を渡り、この自然の楽園に辿り着いたのである。

博物探検時代の古典紀行にも、森には動物たちが躍動し、果実がたわわに実り、無数の鳥たちが群れ翔び、川や沼には溢れんばかりの魚、亀、鰐がひしめいていた記述を追うことができるが、それ以前のアマゾンには真正銘の野生のパラダイスだった。

先住インディオたちは、この恩恵を謳歌しつつ、独自の自然感覚と文化を築いてきた。

ヨーロッパ合理主義的な開発の始動以前は、の話である。

最近のインディオのニュースをいくつか拾ってみよう。

アマゾンには、黄金の宝庫としても知られている。自然に恵まれたインディオたちには、石ころ程度の価値しかない金

も、文明人には血を血で洗う争いのネタである。

ガリンペイロと呼ばれる金掘りたちは、縦横無尽にインディオ・テリトリーを荒らしまくっている。

彼等がインディオを丸め込む切り札の一つがアルコールである。

最近、ネグロ河流域のワイミリ・アトロワリ族で、神父殺しがあつた。アル中のインディオが、神父を撲殺したのである。

文明は、確実に彼等の文化を蝕んでいる。

もともとインディオには、字というものがない。それを補うのが、親から子の世代への語り伝えである。特に、パジェと呼ばれる祈禱師が、お祈り、呪術、秘伝の薬草などを次代のパジェに口伝するのが習いとなっているが、その最も貴重な伝統も消え去ろうとしている。ガリンペイロとの抗争で、デミニ村の虐殺として世界的な話題となつたヤノマミ族の最近のパジェは、薬草の秘伝もすっかり忘れ、アスピリンを風邪の処方に使用するのである。

またインディオの自殺も目立ってきた。マット・グロツソ州のドラード族の何人かが、服毒あるいは飛び込み自殺を計っている。

近代文明の大波に飲み込まれた彼等が、文化をなくし、だまされ酒に溺れ、自己を喪失したことがその原因とされている。

世界的に見ても、先住民族問題は、その膿を各地でフツフツ吹き出しつつあるし、今後もそれが続くことは間違いない。

このように、環境や文化問題から見るアマゾンの未来には、大変に暗い影がさしている。

ブラジルは、1992年の第一回世界環境会議の開催国である。

私利私欲に溺れ失脚した当時のコーロル大統領の意図が、本当の世界的エコロジー問題の改善にあつたことは到底信じられないが、この会議は一つのステップとして重要な意味を持っていたことは確かである。

エコ92の資料によれば、ブラジルには、政府団体、非政府ボランティア団体、プロ系非政府団体の3種の環境関連団体が、有名なところだけで200以上ある。

だが、これらの一部には環境を歌っているながら、それとは似ても似つかない団体もある。例えば、感情ばかりの動物愛玩溺愛的な保護活動団体である。

単に見た目に可哀相だから守ってやるのは、エコロジーの大天敵のほずである。エコロジーのシステムは、そんな単純なものではない。すべての生き物たちは、地球という乗り物の中でバランスを保つことによって系統を維持している。それを人間が、人にとって愛らしいと感ずる生き物だけ一方的に保護したら、他方人知れず衰退に向かう生き物が必ずい

る。

また、保護のため一切の捕獲・採取を禁止する、という考えを持つ団体もある。これは、統治する側の政府系に根強い。

これも私に言わせれば、ほとんど無知としか言いようがない。

自分の指で触り、自分の手で採らせ、自然の不思議さを身体で感じさせることが、次世代に本当の自然観を養わせる唯一最良の方法だと私は信じるからだ。それをやらせないがために、動物愛玩溺愛的な机上のセンスだけ養われてしまうのである。

自然の物を捕獲、採取するのは、自然破壊だ、と反発されるかも知れない。しかし、要は節度の問題である。言い訳に受け取られそうだが、特別に絶滅に瀕している生き物でない限り、適切な間引き、（これは、自然界でいつも繰り返している掟である）は、かえって系統の存続を強化する。

百歩譲って、もし節度ある捕獲・採取を自然破壊と認めたとしても、それにも増して、人々に地球的な自然観が定着してくれるほうが、未来の環境保護に百億倍も有益に決まっている。

もちろんエコロジード、文化保護だと騒いでも、今更有史以前の太古の地球を取り戻そうたって無理な話だし、そんな必要もまったくない。

最も大事なのは、地球の自然の中での人間も含めたエゴの

ない共存共栄だと思う。

貧困に喘ぐ人には、もちろん地域開発が必要である。ただ、やらずぶったくりの大規模開発だけは再検討の必要があるだ。

自然を破壊してのプランテーションは、一部の人の莫大な利益を上げるだけで、全体的な地域社会の向上に役立っているとは思えないからだ。

貴重な文化遺産は、それを残しつつ、共に栄えるという方法を模索しなければならない。

これらすべて、一夜にして解決できるような問題ではない。

しかし、今何か始めないと取り返しのつかない事態に陥っていくのは確実だ。

19世紀始めに、35億ヘクタールの熱帯樹林に覆われていた緑の地球は、200年を経ずして、その30%を失ってしまった。

アマゾン以外も含めてブラジル全土に5億ヘクタールあった熱帯雨林は、過去10年間に6千万ヘクタールが破壊された。

アマゾンの密林は、既に10%にあたる4千万ヘクタールが灰となって消えている。

もちろん政府には、良い指針と指導を期待するが、世界一の負債をかかえるブラジルでは、それもなかなか儘ならない

だろうし、非政府団体のはうが、かえってやりやすい部分もある。

93年から日本の私の友人たちが、非政府団体としてアマゾンとパンタナルの緑を守る運動を開始した。私も同運動のブラジル側の関係者として活動を開始している。

具体的には、世界の子供達をアマゾンの密林に招待し、インディオも含めた地域の子供たちとの交流、また地球に残された最後の野生に接する場を提供しようということの一つの目的にしている。

日系移民は、アマゾンの熱帯雨林を舞台に活躍してきた。そして将来もまた独自の苦労と問題を解決しながら、活動を続けていくことだろう。

今述べたような環境問題や文化喪失問題は、直接的にはアマゾンの日系社会に関わり合いが少ないかも知れない。

しかし、地球的規模の未来を救う認識は、人類の義務である。

アマゾンの日系社会の未来を担う世代にも、「地球の自然を大切にする心」が芽生えてくれることを願おう。

その心が、愛玩動物にひいきするような溺愛でなく、現実の地球社会の中に調和を見出せるような自然観として育ってくれたら、アマゾンの未来はより明るいものになるだろう。

アマゾンとは（地理と歴史）

夜明け、アマゾン河がヨーロッパの人により発見されたのは、ブラジルの発見に先立つ二カ月前であった。

一五〇〇年二月、スペイン人ビセンテ・ヤーニエスがアマゾン河口付近を通過し、大江の存在を記録に留めた。

ビセンテ・ヤーニエス・ビンソンはクリストファー・コロンブスと航海を共にした事がある人物で、当時彼はインドへの航路を探しての航海の途次であった。

実際にアマゾンに入った最初の人は、同じくスペイン人のフランシスコ・ド・オレリヤーナである。

一五四一年から四二年にかけて、アマゾン河を横断すると言う快挙を成し遂げている。

もつとも、この横断は食料を求めての止むに止まれぬもので、横断そのものが目的ではなかった。

ペルーを征服したフランシスコ・ピサロの弟ゴンサロ・ピサロと言う人物がいた。

ゴンサロ・ピサロは黄金と肉柱を求めて、大規模な探検隊を組織しペルーからアマゾン地域へと向かって行った。

スペイン人三百人、インジオ四千人、それに荷をひく百頭

のリヤマや二百頭の馬、猟犬、その他食糧用の牛、羊が数千頭と言う大遠征隊であつた。

充分に準備したはずの食糧であつたが、何しろ四千人を越す大部隊であつた。ペルーの高原地帯からアマゾンの熱帯地帯に降りて来る間に食糧はすっかり底をついてしまった。

四千人のインジオは全滅、牛や羊も食べ尽くされてしまった。スペイン人達は、馬や犬を食べて何とか飢えを凌いだが、もうこれ以上の行軍は無理であつた。

ゴンサロはフランシスコ・ド・オレリヤーノに帆船一隻と六十人の部下を与え「十二日以内に食糧を探し戻つて来るよう」との命令を出した。

オレリヤーノは、勿論十二日以内の帰隊を目指したものの、アマゾン河上流へと辿り着いた頃にはもう約束の期限は過ぎ、おまけに自分たちの食糧すら無くなり、もつと先へ進む以外に取る道はなかった。

結局オレリヤーノ一隊は野草に靴底まで混ぜて食べると言う散々の目に会いながら、八カ月後にどうにかアマゾン河口に辿り着いた。この行軍の途次、一行がリオ・ネグロを経てニヤンムンダー川の口に差しかかった時、女戦士（アマゾン）に率いられたインジオに遭遇、危うくオレリヤーノの隊は全滅の危機に陥ったが、どうにかその地を脱している。

この女戦士達のこと、後にヨーロッパへ伝えられ無名であつた大河に「アマゾン」の名称が冠せられた訳である。

オレリヤーノは、その後スペインへ帰国、再び船団を組みアマゾン河へ挑戦したが、現在のパラ州モンテ・アレグレ付近で病死している。

アマゾン河がペルーから大西洋まで通じていることが分かり、その後様々な探検隊がエルドラードを求めてアマゾン地域に入っていた。

一五六〇年九月にペルー側から、再びアマゾン河横断を目指したのがペードロ・デ・ウルスーアの一隊であった。兵四百名とインジオからなる一行は、クスコからワヤガ川を経てアマゾン河へと入った。

この一行は、よほど質が悪かったと見え、アマゾン河々口へ出るまでに次々と隊長が殺されていた。

まず、ウルスーアがその部下フェルナンド・デ・グスマンとローボ・デ・アギルレにより殺害され、次いで隊長となったグスマンがアギルレにより暗殺された。

最終的にアギルレに率いられた一隊は、一五六一年十二月に大西洋に抜けることが出来た。しかし、このアギルレも後で他の事件で暗殺された。

アマゾン河流域は、こう言った探検時代を経て、十七世紀に入りスペイン、フランス、英国、オランダ、ポルトガル間の領土争いの時代へと巻き込まれていく。

スペインはペルー側からアマゾンへ侵入し、フランスは一六一二年にマラニョンに植民地本部を設け、フランス王ルイ

十三世の名をとり、その地をサン・ルイスと命名、北伯地方へその触手を延ばし始めた。

英国は一六〇四年にギアナに植民地を設け、またオランダも一六二一年オランダ西インド会社を設立し、ギアナ側から英国共々アマゾンを狙っていた。

特にフランスの動きは積極的で、サンルイスに拠点を構えた翌年に、ダニエル・デ・ラ・トウシエー他五十人の兵と二十人のインジオからなる隊を組織し、アマゾン河流域の偵察に当った。

一行は、現在のベレン付近に居住していたトウピナンバー族と友好関係を保ち、一年間ほどかけアマゾン河の偵察に当った。

ポルトガルは、一六一五年十一月マラニヨンのフランス人をようやく駆逐することが出来た。

この余勢をかってポルトガルは、フランシスコ・カルデーラ・デ・カステロ・ブランコに命じ、アマゾンの防衛と開発の任に当らせた。カステロ・ブランコは三隻の帆船で一六一六年一月十二日に現在のベレンに到着した。

上陸地点は、今のベール・オ・ペーゾでフェリス・ルジク・ニアと名付けられた。カステロ・ブランコは、早速十二門の砲を設置する要塞を、森を切り開いて構築した、と言っても木材を組み合わせ椰子の葉で屋根をふいた程度の小屋であった。マラニヨンを出発した日にちなみ、この要塞を「フオル

チ・ド・プレゼーピオ」(キリスト誕生記念)と命名した。フェリス・ルジターニアと名付けられた上陸地は、その後サンタ・マリア・デ・ベレン・ド・グラン・パラーと名称が変えられた。

ベレン・ド・グラン・パラーの地は、なんと言っても英国やオランダからの侵入者からアマゾンを防衛する基地としての役割が大きかった。

英国との争いは一六三二年、オランダとは一六三九年まで続き、ようやく戦いに終止符を打っている。

一六三七年にポルトガル軍は大規模なアマゾン探検隊を組織した。隊長がペドロ・テイシエイラ、兵六十数名、インジオ千二百名、四十七隻の船からなる大艦隊であった。

艦隊は十月にグアジャラ湾を離れ一年後にエクアドルのキトへと達した(船はナポ河上流まで、以降陸路)。この地で一行は大歓迎を受け、ベレンへの帰途に着いたのは翌年、即ち一六三九年の二月であった。

テイシエイラ一行はアマゾン河を初めて遡航し上流まで横断したことから、上流から再び河口まで戻り着いたと言う二つの記録を樹立した。

ポルトガルが、後にアマゾンを自国の領土と主張するに当たつの基礎資料は、この時のテイシエイラの功績の賜物である。

テイシエイラのアマゾン河探検の翌一六四〇年、六〇年間

に亘ったスペインのポルトガル統治が終わり、ブラジルは再びポルトガル領となった。

一七世紀後半に入り、インジオの受難の時代が始まる。ポルトガル人達はインジオ狩りを始め、マラニヨンの砂糖キビ地帯へ農奴として大量に売り払った。

アマゾンの一部のインジオは、オランダ人と手を組みポルトガル人へ反抗、この為ポルトガルは軍を派遣しトカンチンスやタパジヨスのインジオの討伐を幾度となく行っている。

特に一六六四年に行われたタパジヨス河流域のカボケーネス、一六六六年シングウ河のタプヤス、一七一九年マデイラ河のトラース、一七二〇年ジュルア河のジュイナとの戦いは大規模な戦闘が記録されている。

これらのインジオの保護の立場にあったのがジェズイット（イエズス会）であった。ジェズイットはバイアを基点に北部はアマゾン河のマラジョー島から、中南部はエスピリット・サントス、リオ・デ・ジャネイロ、サンパウロ、パラナ、リオ・グランデ・ド・スールまで広範な地域でインジオの教化活動を行っていた。

植民者にとってジェズイットの宣教師は目の上の瘤的存在であり、一六五三年にはマラニオンの植民者等により同地域の宣教師がポルトガルへ追放されると言う事件まで起きている。

ジェズイットによるインジオ奴隷化禁止の訴えは国王や法

王にも届きインジオ自由令がだされたが、植民地を開拓する上には黒人やインジオの奴隷はどうしても必要と言うことで、一八八八年の奴隷解放令までの約二百年間に何度もこの令は出したり、引つ込めたりが続けられた。

アマゾンを本格的に開拓するために、最初の集団移民がベレンへやって来たのが一六七六年である。ポルトガルのアソーレス島より五〇家族、二三四名の移住者が上陸した。

アソーレス移民は一六二〇年から始まり、当初マラニョン、セアラ―へと送り出され十八世紀に入り、南部のサンタ・カタリーナ、リオ・グランデ・ド・スールの開拓と防衛に導入されている。

一七二七年五月仏領ギアナからカフェーの種子と苗が一軍人によりベレンへもたらされた。これが後にブラジルを世界のカフェー王国とまでならしめる最初の種と苗であった。

ブラジル・カフェーの恩人となったのはフランシスコ・デ・メーロ・パリエツタ軍曹（現在の階級だと少佐）で、パラ州ビジャ市の出身である。

パリエツタは一七二二年から二三年にかけてマラニョン総督マイア・ダ・ガマの命を受けて、マデイラ、マモレー、ガボレー川周辺の偵察にあたった事のあるアマゾンに精通した軍人であった。

パリエツタは一七二七年二月二十日仏領ギアナとの国境線問題の調査の為、ベレンを出帆、同年五月二七日、無事に任

を果たして帰港した。この折り持ち出し禁止になっていたカ
フェーの種子と苗を、仏領ギアナ総督夫人クロード・ドルビ
エーから好意で受け取って来ている。

他国への持ち出し禁止の品を、どうして総督夫人から貰え
たのは興味のあるところだが、一説によると「パリエツタの
美丈夫振りに総督夫人が魅了され・・」。

この説は余りに出来過ぎている、何故ならパリエツタはそ
の時五七才、この時代の五七才と言えbaumう老人の部類であ
る。

いずれにせよ、ブラジルに初めて持ち込まれたカフェーの
種子はパリエツタ所有の農園に植えられた。

ここからカフェー栽培が、パラ州内、隣のアマゾナス州
へと広がり、そしてリオ、サンパウロへと南下していった。

アマゾン河の博物学者、ヘンリー・W・ベイツの著書に、一
八〇〇年代のアマゾン河流域でのカフェー栽培の様子がよく
出てくる。マデイラ川やらソリモンエス川流域でも栽培され
ていたらしく、カフェーはアマゾンの広範囲にわたって植え
られていた事がわかる。

ビジアの町外れにあるクルサジーニヤと言う村には、今で
もカフェー樹がどこの農家にも植えられており、パリエツタ
が二百六十年余の昔に持ち帰った種子の子孫かと思えば感慨
深いものがある。

余談ながら、現在のビジア郡長がノエ・シヤビエル・パリエッタと云い、このパリエッタ軍曹の子孫ということである。

カフエーはアマゾンで栽培された農産物としては最初の外国への輸出品となった訳である。

一方、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて、アマゾンがゴム景気に湧いたことは余りにも有名な話で、おかげでマナウスやベレンがゴムの集散地として一挙に発展していくことになる。

ゴムは勿論アマゾンの原産で、ヘンリー・フォードの発明した自動車のタイヤとして重用され、殷賑を極めたがその裏で凋落の陰が早い足取りで忍び寄っていたのである。

一八七二年、英国はかねて目をつけていたアマゾンのゴム苗数千本を、同国人ウィツカムに命じサンタレンより、密かに英国船で持ち出させたのである。

この苗が英領インドに植えられ、そして東南アジアに広がって行った。

一九一三年、早くも東南アジア産ゴムは五万トンに達し、三万七千トンのアマゾン産を凌駕したのである。

プランテーションによる東南アジア産と、原生林に散在するアマゾン産とは勝負にならず、以降アマゾン産は年々減少を余儀なくされた。

一方、アマゾンのはかつてポルトガルの直轄領として農業開発に力が入れられ、カカオ、カフェーなどが盛んに植えられ、またゴム景気、パラ―栗景気を通して入植者が増大していた。

十八世紀末八万人であつた人口も、一八七二年三三万七千人、一九〇六年には百十万人にも膨れ上がっている。

一八二六にはアメリカの蒸気船「アマゾナス」が、蒸気船として初めてベレン港までやってきた。

この後、一八四三年にはブラジル海軍の蒸気船「グアピアス―」三五馬力が九日間でベレン・マナウス間を走破、蒸気船による初横断を行っている。

一八九五年「アマゾン電信会社」、九八年に「パラ―瓦斯会社」、この他一九〇九年までに「マナウス築港営業会社」「パラ―電鉄電灯会社」「マナウス市改良会社」「パラ―工事会社」「マナウス電車電灯会社」「パラ―築港営業会社」「マデイラ・マモレー鉄道会社」などが設立され、文明化の波はアマゾン地域へも急速に押し寄せて来た。

外国からの移民も盛んとなり、一八五〇年頃にスペイン移民、一八六七年アメリカ移民、一八七五年ヨーロッパ移民、そして一九二九年の日本移民へと続くのであつた。

日本人移民はシンガポールから胡椒の苗を、また英領インドからジュートの種子を導入、アマゾンに一大産業をもたらした事は周知の通りである。

英国人に持ち出されたゴムの仇討ちを日本人が果たしたと評価する者もある程である。

『アマゾン河』―先日、日本からブラジルは初めてと云う客人を迎えた。

ベレンの波止場の河辺に案内したらびっくりされて「まるで海のようなですね」と表現されておられた。

ベレンの対岸にある都市マカパまで直線にして三四〇キロあつて、遠くに見える島は河口の中にある島々の一つだと説明したら、しきりにウーンと唸られておられた。河の水が茶色く濁つて波をともしうのをみて、やはり実際に見ないと本だけでは駄目ですねと話されていた。

上流から大西洋に向かって流れている巨大な水量が満潮時になると、今度は大西洋から逆流し始めて水位が上がりだす。

大潮時には河辺に沿った道路に走る自動車と、河の上を動く何千トン級の船が同じ平面で動いているような錯覚を起こすことがある。

その客人を、そのあとベレンから車で約一時間位のところにあるモスケーロ島に案内した。

橋を渡つて島につくと、道は一直線でいけどもいけども島の河辺に出ないのに驚き、やっと河辺に来て対岸がやっぱりベレンの波止場で見たように遠くにしかみえないのにびっく

りされていた。

アマゾン河のことについての本は山ほどあるので、いまさら細かいデータを並べても仕方がないが、一応概略のみ説明させていただきます。

南米大陸の地図を広げると、ブラジルの北部を西から東の大西洋に向かって流れている大河で、その支流を数えていくと一千以上になり、しかもその支流そのものがガンジス川よりも大きく、支流のその支流になると数え切れなくなってくる。

太平洋岸にあるペルーの首都リマから直線距離にして百七十キロの、アンデス山脈の標高五千メートル以上の場所を始めてとしてボリビア、エクアドル、コロンビア、ベネズエラ、ガイアナ、スリナム、ギアナなど、いわゆるアマゾン地域を共有する諸国から流れ込んでくる沢山の川がブラジル領内でアマゾン河となり、約六四〇〇キロの長さになって西から東の大西洋に向かって流れていくのである。

各支流から流れ込む河の水の色は、場所によりまちまちで透明な色、黒っぽい色、茶色の色、青っぽい色などしており、また乾燥期に澄んでいた河が、雨期は褐色となったりしながら本流で合流した時には濁った色に変化をしていく。

河口にある大きな島がマラジョー島で河川の中では世界最

大の島と云われ、その面積は四万八千平方キロと云われる。アマゾン河の流量は雨期と乾期とでは相当量の差が出てくるし、またその時の雨量によっても変化されるが、年間の平均流量は毎秒十六万トンである。

水位も上流と下流、潮の影響を受ける場所や雨期と乾期でも変化され、増水時と減水時の平均は五く六メートルある。

増水はゆつくりと始まり、減水は急激に行われていく。

乾期には大小の滝が現れ、水流も激しく支流によつては船で航行するのに水先案内人が必要とされる場所も、雨期になると増水のために乾期にあつた大小の滝は水面下に隠れてしまふために、乾期には陸上であつた森林の中をカヌーなどで自由に往来出来るところも出てくる。

支流といつても河によつては河幅が三く五キロとあるところがあり、対岸と思つて船を近付けると河の中にある島の一つであつたり、その島を一周しようといたずらに船で走ると、河中に散在している島々の迷路に入り込んで出て来れなくなる場合も出てくる。

アマゾン河は天然の交通網であり、船と燃料と食糧さえ調達できれば、水上からアマゾン流域の広範囲に亘つて行動が可能になつてくる。

少し位の滝を登るには、水深の中でスクリューがつかえない限り、ロープで先の岩に縛り付けエンジン全開で、全員が船から降りてロープを引っ張つたり、船体を押したりして、

沢山の滝を船と共に遡航していくことになる。

落差の激しい滝に着いた時は、河岸に陸路を作ることになる。丸太を並べて船をころがしながら滝の上の河に浮かべる作業が待っている。

その作業も決してあせらない、夜になれば野宿して朝になるとワイワイガヤガヤと全員が意見や知恵を披露して、また作業が続いていく。

魚釣りや狩猟の得意なものは作業中に仲間の食糧調達に出かけていく。

河を下りる時も同じである、小さな滝は船の先端で棒を水平に構えた経験者が岩石に船をぶつけないように棒で石についてよけていく。

このようにクモの巣のようにアマゾン一帯に張り巡らされた水路は、人々の交通と食糧調達と水浴、飲料などにさまざまな恩恵を与えて来た。

当然アマゾン地帯の都市は河岸に発達し、河口のベレンから対岸のマカバ、サンタレン、オビドス、マナウス、イキトスなど数え切れない町が各地の対岸に出現していった。

『アマゾン河流域』―前述のアマゾン河に流れ込む各源流や支流が存在してブラジルに隣接するベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア領の一部にまたがる約六五〇万平方キロメートルの面積を「アマゾン」と呼ぶことに

なる。

アマゾン河が赤道から南緯五度位の幅で横たわっているとすると、その両幅にまたがる北緯五度位から南緯十五度位までの南半球の熱帯に広がっていき、気候も熱帯独特の高い気温と高い湿度に一年中さらされることになる。

広大な面積のために場所により年間の平均降雨量も異なり、年間二一〇〇ミリから三四〇〇ミリと差がある。

従って平均気温も二六〜三四度、湿度も場所と時期で六〇度〜九〇度と左右されてくる。

熱帯気候の特色は、一年中季節の変化が余らないことであるとするれば雨期と乾期の違いであつたが、最近はサイクルが少しずつ変化してきて雨期、乾期の区別があいまいな天候になりつつあるみたいである。

そのため一日中シトシトと降り続ける時があれば、翌日はカラッと晴れて太陽がガンガンと照りつけたり、午前中は晴天であつたのが、昼からドシヤ降りの豪雨に見舞われたり、晴れと思ったら豪雨があり、豪雨が去ったらまた晴天になる日があつたり、まさにわけの分からない気候になりつつある感じがする。

「アマゾン生態と開発」の著者・西沢、小池両氏の計算によると、アマゾン河流域に年間降る雨の量は約十五兆トン、その内の約六五％が蒸散と蒸発で大気に戻り、残り三七％が大西洋に流れ去ると云われる。

強烈な太陽光線と豊富な雨量と云う天然エネルギーを注ぎ込まれた土地は、大きく分けてテーラ・フィルメ（高台）とバルゼア（雨期や増水期には浸水してくる土地で、乾期や減水期には陸地になってくる）の二種類に分けられる。

テーラ・フィルメの面積が圧倒的に多く全体の約九六％を占めるが地質は悪く、痩せ地がほとんどで農地には適していないのが特色である。

多量の雨で表土は流され、高い気温で土地の養分の分解が促進されていくので酸性土壌が非常に広範に存在していく事になる。

一方、バルゼア地帯は上流から水が運んでくる土砂のなかに豊富な栄養塩素が含まれているために土質は肥えてくる。その地質の悪いアマゾン河流域の大半を占めるテーラ・フィルメを、覆い尽くすように巨木の熱帯雨林が林立しているのはどうしてかと、疑問が出てくる。

「熱帯雨林の生態学」ジョン・C・クリッチャー著、伊沢紘生監修、幸島司郎訳によると、熱帯雨林の植物は永い年月の間に進化してきて、自然の逆境にも耐えることを覚えてしまったと云われる。

まず太陽の光エネルギーを捕まえ分子に変換した光合成で生活していくらしい。

温帯の植物は、成長に必要な栄養塩素は植生と土壤に存在

しているのに対し、アマゾンの植物は、成長に必要な養分を自分の体内に取り込んでしまい、栄養分を失うことに非常に神経質に進化してきてしまったと説明している。

そう云われてみると、アチコチの原生林の中を歩いた経験から、落葉がぎつしりとあると云う森林に出合ったことがない。落葉や落枝や倒木もまたたく間に分解されて周囲の立木に、その養分が吸収されていくことが考えられる。

インジオの焼畑農業が見直されて来ていることも充分納得できることになる。

切り倒した木を焼けば、植物に貯蔵されていた養分が土壌に循環し一時的には作物ができることになる。但し同じ場所での連作は出来ないので畑を移動していくことになる。

長年、マナウスに住んで居られるコロニアの長岡正雄さんは、そのレポートで貴重な体験から、地域性にもとづいた農法、漁法などの構想を発表されておりますが、ここでは長岡さんの観察されたアマゾン河流域内で派生してきている開発の状況と、その影響を抜粋してみたいと思います。

「先進国に住む人々は、二十一世紀がもうすぐそこに見えるという時代に、いまさら焼畑農法でもないだろうと思われると思いますが、アマゾンの、そして世界中の熱帯降雨林地帯には焼畑農業を営む農民が多数住んでおり、これらの人々は農業開発と云う甘い言葉とは全く無縁な極貧の生活を送っている人々であります。

彼等は生き延びるために薪を切り、森林を伐採しては焼畑農業を繰り返して行く農民である。

よつてこの階層の農法の改革と改善なくしては森林の保護はあり得ないと思っています。

「衣食足りて礼節を知る」と云いますが、腹をすかしておる人間に食物をやらずに何を云つても無理である。

「飽食日本」に住んでいる人々には切実に感じないだろうが、この格言は真実であると思います。「アマゾナス州のほとんどの土地は、第三期層の固結しやすい黄色粘土であり、高温多湿、雨季の長い気候とあいまって耕作農業には全く不適である。

しかし、アマゾンの大小の河川の辺りには人間が住んでおり、すべての住民が焼畑農業を主とし採取農業、漁労を副業として生計を立てている。

自然保護論者は原生林の伐採、山焼きを必須とする焼畑農業、あるいは同様にして行われる放牧業を共に自然を破壊する元凶であるときめつけるが、人類の歴史を振り返ってみると、世界中の森林があつたところで行われた最初の農業はすべて焼畑農業であつたはずである。

特に前述のような気候、土壌を持つアマゾンでは重機械の導入で抜根整地を計れば、土壌の鎮圧、固結を助長させるだけである。

従つて耕作期間の作物による吸収と降雨による溶脱作用に

よって、失われた土壌成分の大部分を還元できる焼畑農業はこの地方の風土に合致した農法と云える。」「焼畑農業の一般的パターンは、最初に原始林の伐採から始まる。

そして山焼き直後から、全く耕耘せずに種子、苗の直播を行う。この農法は日本において戦中、戦後まで行われていた山地農作造林法と類似しているが、強力な山焼きの火によりすべての既存の種子が焼かれるので、原始林伐採の初年度にはほとんど雑草の種がなく、除草を必要としない。

そして、二年以上の耕作を続けると次第に雑草が生えてくるので、跡地は放置し（休耕期間）、ある程度二次林が成長した頃を見はからって再度、伐採、山焼き、耕作を行うのを常とする。

休耕期間は十年以上置くことを理想とする。

しかし、原始林の伐採は極めて重労働であるためと、同一地方に定住する農民が増加してくると、再生林の休耕期間が次第に短縮されてくるようになり、しまいには完膚なきまでに使用してしまい、その跡地は何も出来ない荒廃地となって放棄されていくか、効率の悪い放牧地になる。

よって住民は再び原始林の伐採にいとむことになる。

このようなプロセスの繰り返しを経て、森林の伐採が進行していくのである。

休耕と云う考えは、地力を回復させる為にとる消極的な方法であり、根本的には施肥と同等の思考線上にある事柄であ

るが、度重なる休耕のために再生林を構成する樹種が劣悪してきて、山焼き直後の切り株、さらには地中の根からも萌芽が蘇生するようになり、直播作業（点播）に支障を来し、雑草の発生も激しく、この林立する切り株が除草作業を著しく阻害するようになり、休耕の意味が薄くなってくる。

この悪循環から脱出する方法として抜根、整地して一般的な清耕栽培に移行することが考えられるが、当地方の固結しやすい土壌と高温多湿の気候の下では、溶脱作用が激しく、天地返し耕耘を行っても二、三年ほどしか耕作できないので、この方法も見込みがない。

事実、アマゾンにおける機械化農業の試みはすべて失敗に終わっている。

一方、アマゾンは新しい土地を求める国内移民の流入がなかったとしても、次第に膨れ上がってくる現地住民人口（原住民ではない）があり、これらの人口増加に起因する食料と生業を求める力が森林地帯への圧迫となり、このままではアマゾンの森林地帯は、次第に蚕食されていくのを防ぎ得ない。」「アマゾンの魚類は人口の増加に反比例して確実に減少している。

州都マナウス市付近の、二〇年程前の状態は魚はいくら獲っても獲っても棲んでおり、誰もが無尽蔵と思っていたが、現在では明らかに漁獲高が減少、価格の高騰を来し、これが要因となってマナウス市付近の養魚場建設計画のブーム

を来している。

さらに古老の話によれば、「マナウスの少し川下にある海水と河水の合流点（エンコントロ・ダス・アグアス）付近は、減水期には小さなカノアでは川向こうに渡れなかった。

それは無数にいる魚が飛びはねてカノアに入り込み、カノアが沈没してしまうので、対岸に渡るには四、五人以上でなければならず、その中の二人は飛び込んだ魚を河に投げ返さなければならなかった。」との話である。

それほど多かった魚が、現在では殆ど影も見られなくなつて来ている。

このまま推移すれば大衆の食料源である魚類の将来は極めて悲觀的である。

アマゾンの田舎でも、マナウス市ほど顕著ではないが、魚類の減少が確実に見られるようになった。

例えばマデイラ溪谷の中程に位置するマニコレ郡内のアチニンガ河は、古来郡内でも魚肉の旨いところとして知られていた。

アチニンガ河々口にある湖の周辺には、現在でも五〇家族ほどの人間が住んでいるが、昔に比べると魚影が薄くなり蚊群が増えて蚊帳なしでは、とても過ごされない様になった。

古老の話によれば「昔は蚊がほとんどおらず、河岸の砂浜では何処でもゴロ寝が出来た」もので、乾季の河水の減少した時期には、夜間燈火をつけての航行は火をめがけて魚が飛

び込むため不可能であった。

また「河の辺りには黒くなるほど小魚（稚魚）がおつたもの」とのことである。

魚が少なくなつた元凶としては往々にして人口増加に起因する漁獲量の増加があげられ、これが自然界の生態系を圧迫していることが上げられているが、はたしてそうだろうか？

アチニンガ河では、四十年前には現在よりもかなり住民が多く、河口から四〇キロはど上流までに、住民が住んでいた住居跡があり、しかも再生林を構成している樹種が劣悪化しており、樹高も低いところを見ると、かなり長年月の間、反覆して焼畑農業が行われていたものと見られる。

この様に当時は、現在よりも住民の数は多かつたが、魚類は豊富で特に大型の魚類タンバキー、ピラルクーが多く獲れたために、小型の魚類は食料としては、あまり重要ではなかつた様である。

また、これは当時の漁網の材料が耐水性の強い合成繊維ではなく、綿糸製の投網があつただけであつた事にも起因するが、つまりアチニンガ河では、昔から見ると住民はかなり減少しており、住民の食料としての漁獲量は当然低下してゐたはずである。

よつて地域的な人口の増加が、漁獲の減少につながるとは、直接的な説明にはなり得ない。

これだけ人間が増えれば、当然食料として捕獲される魚類

も多くなるが、アマゾンの一部であるアチニンガ河の住民の減少と、魚類の減少はどうも話の辻褄が合わないのは何故だろうか？ 前述のように、昔はタンバキー、ピラルクーなどの大型の魚類が多く、その他に魚類ではないが、ペイシエ・ボーイ（ジュゴン）、ワニなども多く、魚網の材料として耐水性の強いナイロンなどの化学繊維はまだ出来ていなかったの
で、綿糸製で耐用年数は二年ほどであった。

形式としては、現在最も多く使用されている刺網はまだ使用されておらず、投網のみであった。

よって当時の漁法は、小型の魚類は弓矢、大型の魚類には投槍が使用された。

小型の魚類に釣り針が出てこないのは、当地方の小型魚は、ほとんど草食魚であり、水藻青のりが主食であるため釣り針に掛からないからである。

それでも次第に大型の魚類が減ってきたが、小型の魚類は大型の魚、特に大食漢のピラルクーの捕食による減少量と、当時の人間による捕食量とトントンで、常に自然界の生存許容量一杯の限度を保ってきたのである。

よって大型の魚類は減ったが、その分小型の魚類が増えていたと考えられる。

このような状態が今日まで続いていたなら、現在でも魚類が豊富なはずであるが、それが現在では魚類が減少している

のである。

往時と比較して生態系に打撃（ショック）を与えているのは何か？ 考えられる事は、化学の発達により魚網が綿糸からナイロンに進化し、強度も耐久性も増し、漁船、搭載エンジン、貯蔵設備等が急速に発達し、かなりの遠距離からでも、その漁獲物を鮮度をたもちながら、マナウス市まで持つてくる事が出来るようになったため、専業とする漁師が広がった。

そしてあらゆる合流点（濁流と清流が混じり合う場所）に待ち構えて、産卵のために集まってくる魚類を、産卵開始直前に一網打尽にして都市部に運びさつていく。

これが魚類の産卵システムを阻止し、魚類の減少をまねいた直接の原因と考えられる。

この魚類の減少を知ったIBDF（森林局）は、産卵期間中の魚類の捕獲を禁止しようとしたが、この無数とも云える合流点を監視するには、多数の監視人を必要とし、多くの人件費を必要とするため、すぐには実行出来なかった。

その後、しばらくして態勢をととのえ、いよいよ監視から漁獲禁止に入ったが、今度は都市部の住民から、市場から魚の姿が消えて「我々は何を食えばいいんだ」と云う非難の声が上がり、次の年には解禁したり、また一部禁止したり、朝令暮改の繰り返しである。」地球の宝庫と云われて来たアマゾンも、長岡さんの現場からの生々しいレポートを読んでい

くと、地球どころかアマゾンに居住している人々の生活を支えるのにフーフー云い出して来た感がある。

広大なアマゾン河流域も近年になってから、アマゾン南部地帯の開発が急ピッチに進められており、国道が開通されると支道となる州道が開かれ、それに伴い人間と機械と動物（牛等）が移動をはじめ、かつては密林であったところにあらゆる産業が散在してきているのが現状であり、もし残された大面積の未開地を探すとすれば、アマゾン河北部一帯から国境地帯に亘る地区ではないだろうか。

『アマゾンの人々』―日本から、あるいはその他の国々からアマゾンを訪れて、短期滞在にしる、長期にしる住んでいる内に、アマゾンをたまらなく好きになってしまう人々が多いのに気付く。

だからと云って、この人達がアマゾンの密林の中や、船で河を旅行したわけでもない、ワニやら大蛇やらピラニアを見たわけでもない。ただ仕事か、観光かで何日か町の中に滞在していただけの体験から好きになってしまう。

と云って町の中には外国人に自慢して見せるものは何もない。

かえって町中を歩けば、暑くて汗はダラダラ出てくるし、汚くて乱雑で、場所によっては悪臭が漂うところなども出てくることもある。時によっては強盗やらひったくり

に出合うこともあり得る。

それでも好きになってしまふというのは、アマゾンに住む人々の感じがたまらなく良い、と云うことになってくるのではないだろうか。

別に会話を交わしたわけでもないし、友人が出来たわけでもないが、人々の持つ説明しきれない雰囲気が良いと話された人が居られた。

まず服装がマチマチである。流行もなければ何もない。背広で歩く人もいれば、半ズボンでメリアスシャツにゴム草履で歩く人、各人が勝手な格好して誰も関心持たない。人は人、自分は自分である。

肌の色も多種多様である。白人、黒人、黄色人なんて簡単に分けられるものではない。恐らく二〇種以上に分けられてしまうのではないか、我々日本人なんかも毎日クラーの事務所で働いている人は、肌の色は白で、髪の毛は黒とランクされ、農場で働いてる日焼け顔は褐色のなかの薄い方とか濃い方などと区別されかねない状態である。

夫婦、親子、兄弟で肌の色が異なることは普通であり、何の違和感もない。

隣近所がブラジル人社会に囲まれた家に住んでいても、外国人だからと云う違和感はない。あるとすれば、その外国人の内面にあるだけのことになる。

隣りの家で新車カーを買おうと、パラボラアンテナを立てようと、関心はないし、別に羨ましがることもない。

隣りが泥棒一家と知っていても、自分に被害が及ばないことであれば、付き合いの程度で隣人であり、友人でもある。隣近所と没交渉でありたければ、そうすればよいし、別のために差別されることもない。

隣近所とコミュニケーションを始めようとしたら、時と場所によつては限りなくエスカレートしかねない場合も起こり得る。

私の知っている二世のご夫婦が居られた。ご主人は大学の教授で研究のために他州の大学に転任して行った。

そこで借りた家は、周りがブラジル人ばかりであつた。

陽気な二人は積極的に近所の人々とコミュニケーションを始めて行った。

その内、右隣りの家の女中さんがマツチを借りに来た、しばらくしたら左隣りの奥さんがトマト一つを借りに来た。

そうこうしている内に近所のアチコテから、毎日の食事作りに不足するものを借りにきはじめた。

貸してくれとは云うけど、別に返すつもりはないらしい。

二人は別に金額のはる物ではないので、あるものは快く渡していた。

その内、奥さんが妊娠して出産が近づいてきた。実家の家族が手伝いに駆けつけるには距離が遠すぎて、手間どつていた。

今度は日頃世話になっていた隣近所の人達が、自発的に交

替して二人の食事から家事、掃除を始めだした。

出産の為に入院したときも、全員が手分けしての協力が続いて行った。

家族の人が到着した時には、無事退院して周りの人達が当然のように毎日世話を続けている状態であった。

現在、お二人の家族は近所の人達と親戚以上の交際を続けて居られる。

この人達は、非常にいろんな約束をするが、それが守られるのは割に少ない。

おそらく他人に頼まれると、断りきれない人の良さがツイツイ約束してしまったり、その時の感情の高ぶりなどで相手の立場に同情したりして頼まれないことを約束したりして、時間が立つと忘れてしまうことなども多い。

知らない人でも、困っていきそうな時には誰れかが駆けつけて助けてくれる。

どんなに自分が急いでいるときにも、妊婦や老人、身体障害者などには道やら行列をゆずり、しかも手を貸して手伝ってくれる。

そして非常にユーモアと機知に富んだ行動を毎日の職場の中で展開することがある。

これは一年はど前に私が体験したことなので、それほど古い話ではない。

ベレンの町の空軍基地の中にブラジル銀行の支店がある。

ベレンの銀行開店時間が午前十時である。

私は所用があつたので十時に着いたが、その銀行は開店時間が午前十時三〇分と明示されてあつた。銀行の前には軍人達が大勢開店を待つて行列を作っていた。

銀行の中では職員達が開店に備えて準備をしているのがガラス越しに見えた。

そこへ支店長らしき人物が到着した。

銀行内の時計を見て、表の行列を見て壁にかかっている時計の蓋をはずすと十時十分を差していた針を十時半に廻して職員に開店を指示した。表で見えていた軍人達は思わず笑いだして、支店長を声援していた。

日本から来られた人が「ここは朝からビールが飲めるからいいなあー」と云われたが、町のアチコチにビールは開かれている。店の内容も小さいのやら、大きいのやら、汚いのやら、豪華なものから千差万別であり、朝から飲みだしている人達は珍しくない。

ここの人達は飲み仲間と、ビール雰囲気が一致すれば、どんな辺鄙な店でも常連になってしまう。大事なことは仲間との会話が支障なく、延々と続けられることにある。

そのほとんどの会話は、お互いが発信のしっぱなしで、相手の話をまともに受信する酒飲みは余りいないようだ。

だからバールの中での喧騒は、お互いが自分の云いたいことを相手構わず喋り続けている風景が多い。

レストランでの風景も、左手にフォーク、右手にナイフに使う人、反対に持つ人、フォークだけで食べる人、手でつまんでいる人、それぞれが自分が食べやすい方法で食事を楽しんでいる。誰も他人の作法など関心を持たない。

この地での生活はアミーゴ（友人）の存在が大きく左右してくる。

アミーゴに頼まれたら、何はともあれ解決に努力しようとする行動を開始する。

面白いことに職場の中で、上司と部下の関係でも、社長と運転手の間にもアミーゴ関係が成り立つことがある。

社長を車に迎え入れる時には礼儀正しくドアを開け、客が同乗している時には無言で運転する運転手も、社長と運転手の時は遠慮のない会話が始まる。

二人のアミーゴの基盤は同じ草サッカーチームに属して毎週ボールを蹴っている仲間関係であつたりすることがある。

アミーゴの効用は想像を越える機能を発揮することがしばしばある。

例えばベレンからサンパウロで開かれる学会に出席しなければならぬが、滞在中のホテル代の予算がない、これはと思うアミーゴに相談すると、相談されたアミーゴはなるべくタクシー代のかからない、開催地に近いところに住んでいるアミーゴを思いだし、電話で滞在中の世話から食事まで二人の関係度合いで頼み込む。

頼まれたアミーゴは自分の知らない他人でも、アミーゴの依頼であれば同じアミーゴとして付き合うことになる。

こうしてそれぞれのアミーゴの範囲はどんどん拡大していくが、別に永い間に連絡しなくても、クリスマス・カードなどの交換がなくとも、必要な時に必要なことを依頼し合う関係が成り立っていくことになる。

こうゆう関係が政治、経済、社会の動きに相当影響を与えていくことは間違いないし、それぞれが生活していく為の潤滑油の役目も果たしている。

ピアード（一口噺）を話すことも、非常に上手である。街角で、ビルの廊下などで立ち話で始まりだしたりする。

初めはいかにも深刻な表情でヒソヒソ話しが行われて、大事な用談かと見ていると話のオチの段階で、ドツと爆笑が起きる。

聞き手は、それが新しいピアードと思うと、それを他の場所で披露していく。

暑い中を歩くので、汗をかくために着ているものは毎日洗濯しなければならない、そのために着るものも痛みが早いので反物店や既製シャツの店が軒並みにある。汗とともに体臭も匂うのでシャワーを浴びることは欠かせないし、男女ともローションを使用する。着るもの、行動、考え方でも自分のものを大事にして、他人にそれを押しつけることはしない。だから周囲にいい加減な人達に囲まれていても、真面目な

人間は真面目に生きており、周りの人達にまどわされることもない。

長距離バスや河船による旅行は、たちまち知り合いが出来る。

ともかく、この人は視線が合うとすぐ話しかけてくる。バスや船の旅が終わる頃になると、すっかり親しくなってしまう。お互いに名前もしらずに別れるが、楽しかった思い出だけは残っていく。

一度、こうゆう事があった。ベレンからブラジリア行きのバスに乗ったところ、出発間際に財布を家に忘れて来たのに気付いた。自宅からバスターミナルまでは友人の車で送ってもらったので確認する事もしてなかった。

自宅近くの国道を通るので、運転手に事情を説明してバスを自宅近くの国道で待っててもらうことに頼んだ。

タクシーを飛ばして財布をとって駆けつけると待っていてくれた。

運転手にお礼を云い、乗客全員に詫びると、それからブラジリアまで皆んなにひやかされながらも親しくなっていて楽しい旅が続けられた。

アミーゴの関係とは別に特殊の仲間グループの存在も多数存在する。

通称「パネリーニャ」とか「マファイア」とか呼ばれるが、別に「マファイア」と呼ぶからと云って犯罪組織ではない。

よそものを入れないグループと解釈してもよい。

例えば一つの職場でも欠員が出ると、自分たちの家族、友人などで補充していき、知らない他人は入り込む余地がなくなってくる。

また、地方の町では有力者が何人か集まり、自分たちの障害を取り除いていくために相談したり協力し合ったり、これらがエスカレートしていくと、犯罪の分野に入りかねない場合も出てくる。

この他にコロネリズモと云うのも存在している。今でこそ段々と影が薄れて来たが、権力者がその地域とか分野を押さえてしまうことである。

一九六〇年頃までは、アマゾン地域におけるコロネリズモは徹底していた。

大牧場を幾つも持つ有力者が政界に入り、自分の町における権力拡大に務めたり、商人がアビイア制で各地のアマゾン物産を独占したり、電信電話を持つものだけが相場を操作したりすることが出来た。

一九六〇年代になるとベレン・ブラジリア街道の開通やら電話の新設などにより、新しい情報、人材、資本の流入が頻繁となり、連邦政府の行政が浸透し始めるに比例して、権力者達の手足は少しずつもぎとられて行き出した。

しかし永い年月に亘って続いて来たコロネリズモの習慣は、一般大衆の中に定着して、規模の小さな「親分・子分」の

グループが庶民の中に生まれ始めた。

親分になりたい者は、自分の収入以下である子分を集めることから始まる。

親分であるからには、子分を命令するために金銭をバラまなねばならない。

こうして町の隣近所で、職場の中で、自分の収入に合わせたグループを拡大していくことになる。

子分は親分から時々、小遣いをもらうのでその命令は金額以内のことであれば従うことになる。

音楽に対する考えも一人一人がそれぞれ意見をもっている。

あの音楽は曲がきれいだけど歌手がよくないとか、曲も歌手もよいけど歌詞がよくないとか、非常に厳しい批判をしたりすることもあるが、とにかく音楽が好きで楽器を弾きながら、叩きながら大勢で合唱することが大好きな人達である。

言葉の表現がとても上手で、空腹の時にでも「自分はナントもないけど、胃の奴が騒ぐので何とか慰めねば・・・」とか一皿を落として割ると「皿が手から逃げ出していった」などの表現を使ったりする。

食事の時にでも、そこに誰かがいれば必ず一緒にたべませんか、と声をかけてくれる。アマゾンの上流の山奥の小屋に住んでいる人達でも、食事中に訪問すると必ず一緒にたべませんかと、貧しい食べ物を出してくれる。

女性の人達は主婦も女中さんも清潔好きで、食事のあとの食器は一つ一つ石鹼で丁寧に洗い、鍋などはピカピカに磨きあげてしまう。

勉強の好きな人達は、夜学に通ったり主婦で子育てが終わると、大学に学びだしたり、あるいは小学校から始める主婦も多く、年齢制限は幼稚園だけで夜学の小学校などは老若男女が同じクラスで学友として仲良く勉強している。

「新しいブラジル」斎藤広志著で述べておられるブラジル人の “ 思いやり ” と “ 寛大さ ” が他国から来た人々を魅了してしまうのではないだろうか。

外国から来た人達が、どんな目立つ服装をしてこようが、最新機械を持ち込もうが、自慢話を聞かせようが、どんな異文化を持ち込んでも、みんなソーカソーカと簡単に受け入れて、飲み込まれていってしまう、決して惑わされることなく泰然と構えるアマゾンの人々は、まるでアマゾン大河とそっくりである。

『動物たちと植物』―アマゾンに生存する動物たちや魚類や植物は、非常に種類が多いと云われている。

その原因はいろいろと学説があるらしいが、要するにこれらの生物が生存し易い環境を備えていたらしい。

人間が住みやすかった（暑いとか、マラリアがひどいとかは別にして、衣食住が簡単に入手しやすかった）ように自然

の生物たちも楽しみながら生きて来たのではないかと思われる。

ジョン・C・クリツチャーによるとアマゾンに棲息する多数の鳥類の中で、果物を食べている鳥の中には、餌が豊富にありすぎるため、日中の九〇%をメスの関心を装うことに時間を使っているオス鳥がいると書いてある。

温帯や寒帯に比較すると生物が生き易かったために、永い年月の間にいろんな種族が集まって来て進化し、多くの種が分化していったと説明してある。

沢山の種族が派生しだすと、外敵も現われそれから守るために、それぞれが自分を守るために知恵をしばり出して行ったらしい。

例えば植物などは、動物に食べられないように苦い味のするアルカロイド類をたくわえていったものを、たまたま人間が見つけて分析したら、コカインとかニコチンとかカフェインなど何千種類のものに分けられたりしてくる。

タンニン類で防衛する植物、ネバネバした樹液を出すものの、刺のついた葉を出すものなどと自己防衛を始めた。

今度はこれらの植物を食べていた動物や昆虫たちも対策を考えていくことになってくる。

昆虫の体内でこれらの物質を無毒化したり、隔離したりする進化を続けて来たり、沢山ある植物の中から無害のものを選択することを覚えていくことになる。

森林の中を飛び交う蝶の種類も多い。

コロニアの蝶収集家として知られている浜田正博さんの話によると、世界中で知られる蝶の種類は約二万種ぐらいあるはずで、アメリカに二千種、日本に二百種、アマゾンには五千種位いるはずだとのことで、浜田さん自身がベレン近郊で収集した蝶だけでも七百種もある。

昆虫やら蝶や果物を食べている鳥類の種類も多い。いろいろの色のついた卵を生む鳥、オスだけが卵を温める鳥、大きな鳥が自分の重さではとまれない小枝の果物を飛びながら丸ごと飲み込んだり、前後左右に飛び回り滞空も出来るハチドリなど。

淡水魚の種類なども日本では百何十種類などと云われているらしいが、アマゾンでは一千種類以上などと云われている。

元来が海の魚であつたのがアマゾン河に移住してきて淡水魚に変化してしまった魚類もある。

クマタと呼ばれるヨロイで身を固めたナマズみたいな魚がいる。ベレンの沼地などにも棲息している。水分がなくなつてカラカラに渴いても、土の中でジツとして生きている。

初めて見た時には、古代の生き残りの魚かと思った。日本人の人は味噌汁の中に丸ごと入れて煮たりする。おいしい味である。

マパラと云う鱗のない、脂の多い魚がある。炭火で焼いて

から砂糖醬油で煮込むとアマゾン産の蒲焼きができる。

魚の他にエビ、亀、カニ、貝などがも豊富にいる。

アマゾンには植物が密集しているのが原因かどうか知らないが、象とかキリンとか大きな動物はいない。

陸上にいる大きな動物では、オンサ（豹）、アンタ（猿）、鹿、野猪、蟻喰等があり、河の中では大蛇のスクリジュー、鰐のジャカレー、ピラルクーとかペイシ・ボーイといったさかなである。

現在では、これらの動物たちは相当奥地に行かないと見られない。

かえって小さな虫とか、昆虫類の方が近郊の林の中や、再生林の歩行を困難にさせている場合が多い。

知らないでアリの巣の上を踏んだりしてさされたりすることの方が多い。

アマゾンと云うと、ワニやらピラニヤがウヨウヨしているイメージがいまだにあるらしいが、そんなところは人の少ない奥地にいかないと見られない昨今である。

『アマゾンの研究』——斎藤広志さんの本によると、アメリカではブラジルの研究をする学者は学問の大道をゆくことであり、本国では一流の学究としてキャリアをもつことになる。勿論そのためには、ブラジルに数年から十年位住みついて

の研究となる。

フランスもブラジル学では沢山の学者を出しているが、イギリスとかドイツはわりに少ないらしいが立派な学者を出している。

ナチュラリストとしてアマゾン流域の広範な調査をしたのは、ドイツの植物学者であるフンボルトが初めてで、一七九九年から一八〇八年にかけて調査し「南米旅行記」を發表している。

フンボルトはピラニアの習性を研究したり、電気ウナギの発電原理の解明を試みたり、インジオの使う毒などの研究もしていた。

イギリス人のウォーレスは一八四八年から一八五二年までアマゾンのネグロ川流域の調査を行い「種の進化」の調査をしている。

ウォーレスの友人であるベイツは、ウォーレスと一緒にベレンまで来て一八五九年までアマゾン本流からソリモンエス川、そしてペルー国境近くまで調査し昆虫、哺乳類、鳥類、爬虫類の標本など一万四千七百十二種を採集し、本国のイギリスに送ったら、八千種が未知のものであったと云う。

ダーウインもアマゾンに来ている。その他、ウォータートン、シヨンバーク、スブルース、ハドソンなどが調査にやっ

て来ている。

一九一二年にはブラジルのオズワルド・クルース博士の衛

生調査団がアマゾンに入っている。

翌年の一九一三年には、アメリカ大統領のルーズベルトが探検旅行に来ている。

一九二三年には米国政府のゴム調査隊が訪れている。

一九二五年にはイギリスの有名なフォーセット大佐が長男と数人を連れて、アマゾンの密林の奥にある伝説の「失われた黄金都市」を求めて探検に入ったが、そのまま行方不明になってしまった。

一九二六年の福原調査団、一九二八年の上塚調査団などがあり、個人では泉靖一さんとか、大野盛男さんなどが日本人移住地を中心にアマゾン地方の文化、経済など研究されている。

この他、世界の自然科学者たちのピービ、ミラー、マーフィ、チェリー、チャップマン、デイトマース、マンなどが各自のテーマに取り組み調査に訪れている。

『先住者たち』——私がベレンに移住してきた一九五九年頃は、時々インジオがベレンの町に五、六人のグループで、買物か観光？に出現していた。

ハンモックなど売っている店に入り込み氣にいった品物を勝手に選んで持ち出していた。

その頃、ベレンの商人たちには不文律があって、インジオの買物に対しては代金をとってはいけないうことになっていた。

た。

おそらく上流から船で何日も旅を続けてくるので、船賃とか食事なども無料であつたのだろうと思う。

彼（彼女）等は、お金はいらないと思うのに紙幣を非常に欲しがつた。

しかも、紙幣の金額は関係なく枚数の多いのを喜んだ。

我々は一番少額の紙幣を集めては、渡していたことを記憶している。

現在では、インジオも普通のシャツを着てズボンをはいて、顔の化粧を落として町中を歩いており、またインジオの血をひいた人種も増えて、町の住宅などに住み着いて来ているので、あまり気にすることもなくなつて来た。

裸のインジオが弓矢を持って……等の光景などは、奥地の部落にでも行かなければ見られなくなっている。

私が二〇年前にアマゾンの密林の中を、ブラジル人の仲間三々四人と歩いていた時があつた。

ジャリー川の上流でインジオの部落に入ってしまったことがあつた。

裸で赤いフンドシをしていた。弓矢で川の魚を上手に獲っていた。

獲った魚を木の葉にくるんで土に埋めると、その上で焚火を始める。

焚火の周りに座り込んで壺に入つた、自分たちが何かの植

物を噛み砕いてツバと一緒に混ぜて作られた酒を廻し飲みする。

飲まないと何かイヤなことが起こりそうなので、仕方なしに飲んだことがある。

その内、土の中から魚をとり出して食べさせてくれたが、塩気がないので旨くない。

今度は我々にいろいろの物を要求し始め出した。煙草にはじまり、色のついたシャツとか、特に赤い色のついた品は非常に欲しがった。

早々に退散したことがあった。

「共生の大地」山口吉彦・文、構成によれば、十五世紀頃にアマゾンに先住していたインジオたちは、三百万人位いただろうと推測されている。

十五世紀の半ば頃から、ヨーロッパから渡って来た人々が、持ち込んだ武器や疫病によつて、多くのインジオを滅亡させたり土着の生活習慣などを破壊していった。

スペイン人はアンデスを越えてアマゾンに侵入し、ポルトガル人はアマゾン河口から上流に向かって侵入していった事になる。

これらのヨーロッパ人が持ち込んだ黄熱病、天然痘、マラリアなどや、奴隷狩りに抵抗する部落の虐殺、ヨーロッパからの入植者のために軍隊によるインジオ討伐などが行われ、十七世紀になってインジオの死亡数が急激に増えて二百万人

位のインジオが命を失ったと云われている。

一九〇〇年にはブラジルだけで二三〇部落、約百万人のインジオがいたが、現在ではわずか五〇部落、約十万人位しかないだろうと云われている。

これらの先住者たちが生活の知恵から考えだした、いろいろの文化は現在でも我々の日常生活に取り込まれている。

代表的な物にマンジョーカがある。マンジョーカ芋は動物に食べられないように青酸毒をもつて自己防衛物質を蓄えて来たが、インジオ達は見事に毒抜きの方法を見つけ出した。アマゾンに居住するほとんどの住民が主食にしている、フアリーニヤがそうである。

苗木で直播したマンジョーカ芋を八カ月位して引き抜く、抜いた芋をそのまま近くの川の中につけてしまう。

一週間位したら芋を水から出してつぶしてから絞る、絞ったのを大きくて平らな鍋の上で、遠火で気長に炒ると云うより乾かすつもりでカリツとするまで混ぜていく、作業は助手が必要で鍋の上で粉が固まらないようにフルイにかけて細かくしていく。

出来上がったフアリーニヤ粉は、缶などにしまつて食べるに必要だけ出していく。

一方、芋を絞った時に出た汁には澱粉が沈んでいき、汁は煮込むことによりアマゾン独特のツクビイと云う黄色い調味料になる。

現在でもアマゾンに住んでいるほとんどの家庭では、フリーニヤ粉が食事に必要であり、焼き肉や魚の料理からアサイ汁を飲む時、缶詰めを開けた時などにフリーニヤと一緒に食べる習慣がある。

インジオは、マンジョーカにそっくりのマカシエイラと云う無毒の芋も見つけてくれた。この芋は生でそのまま煮ても食べられ、ケーキの材料にもなる。

さらにマカシユーラの葉だけちぎって細かく挽いて、鍋の中でコトコトと一週間ぐらい煮込んで、固いものの順から次のような材料（干肉、豚の皮、耳、尻尾、塩漬けや燻製の脂や肉、牛の腸やら胃袋）を入れながら味付けをして仕上げるアマゾン独特の「マニソバ」と云う最高に美味しい料理を開発してくれた。

皿に盛られて出てくるマニソバは黒くて気持ちのよいものではないが、これにツクビイの調味料をかけて食べるとグルメ族にとって忘れられない味になる。

面白いことに、これだけ材料に脂っこいものを使用しながら、食べても胃にもたれない料理である。

インジオが教えてくれたツクビイは、いろいろの料理に応用され、「パット・ノ・ツクピー」とか「タカカ」とか煮魚の材料として使われ、アマゾン名物の食べ物として庶民に定着していった。

その他、彼等はいろいろの植物の樹液や実や葉に含まれて

いる養分が、どんな病や傷に効くかを我々に教えてくれた。

『鉱物資源』―アマゾンに埋蔵されている鉱物資源の話しになつてくると、植物やら動物などの話しに比べて内容が生々しくなってくる。

その用途が戦略物資や最端技術や練金師たちの材料に欠かせない要素をもち、換金サイクルが早く金額が大きいためである。

「大カラジャス計画」でアマゾン東部を中心とする大プロジェクトを軌道に乗せ始めたら、今度はアマゾン河北部の地下資源の開発計画が出てきた。

しかも、各国家や企業グループとか利権グループの意思や思惑が絡んでくるので、話しが複雑になりブラジルの国内でもいろいろの情報が入り乱れてくることになる。

更にインジオの領地に多くの資源が埋蔵されているために、インジオ問題をさけて通れない状況に追い込まれてくる。

鉱物資源の開発を重視して、それによってブラジルの抱える諸問題（外内債・国境地域の麻薬や不法採掘の撲滅・国防）などを一挙に解決していこうとするグループと、そうゆうことをさせたくないグループなどが、絡み合っているような状況のような感じをうける。

反対グループは自然破壊、インジオの人権尊重などを旗印にしているし、純粹にそうゆう運動をしている人達もいれば、中にはインジオを介して確立してきた利権を守りたいグループとか、自分たちの仕事を邪魔されたくないとか、あるいはブラジルをこれ以上豊かにさせたくないと言うグループの存在なども想定されてくる。

因みに現在ブラジルから産出されている鉱物資源は次の通りであります。

鉄鉱石	5・827万トン	(世界四位)
金	7万トン	(世界六位)
ボーキサイト	740万トン	(世界三位)
錫鉱石	4万2千トン	(世界一位)
ニオブ	8万4千トン	(世界一位)
燐鉱石	477万トン	(世界七位)
マンガン	28億7千万トン	(世界二位)
ダイヤモンド	60万カラット	(世界八位)

(数字は「甦えるブラジル」中江章浩著より) 「大アマゾン探検誌」 W・プライス著森下賢一訳によれば、アマゾンの地下資源の豊かさを認識していたのは、ウインストン・チャーチルであつたと云われる。

チャーチルは、アマゾンに埋蔵している鉱物資源の重要性を知っていて、戦争に勝つためにはブラジルの協力がないとだめだと言明したため、それからアメリカ人のアマゾンへの

関心が高まり出したと書いてある。

おそらくアメリカにしろ、ヨーロッパの諸国にしろ、アマゾンに関する地下資源の調査はされつくしており、何処には石油があり、何処にはなにがあると資料を揃えているのであらうと思う。

しかしながら、これらの地下資源も一昔前に比べて、それほど価値もなくなりつつあるのも事実である。

『アマゾンの日本人』——アマゾンではコロネリズモが定着していたために、権力者であつた各地の牧場主や商人たちは、自分たちの子供に弁護士や医者などの勉強をさせていた。

なかにはヨーロッパなどに留学させていた親などもいた。その子供たちが育つと、親の財産を基盤に政界に入ったり、弁護士や医者になり、それぞれがバネリーニヤの関係を築き、その子供の代になると経済学士とか建築技師とか大学教授とか、社会の広範に亘って広がって行つた。

彼等は自分の体を動かしての労働を決してしなかった。ましてや、主婦たちや娘、息子たちにもさせなかった。筋肉を使う職種を軽蔑していた。

そうゆう時代に日本人の移住者たちがアマゾンに入つて来た。

肉体労働である農業者たちは、彼等にしてみれば一段低い

階層にみられたとしてもしかたなかった。

そして、日本人農業者の作る米やとうもろこし、その他の農産物はやはり大商人や、親方の末端の配下に組み込まれていたのではないかと考えられる。

トメアスーで黒ダイヤの時代と云われる胡椒の全盛時代が戦後いきなり訪れ、それによって日本人が急激に経済力をつけ、ブラジル人社会に食い込み始めたのも、トメアスーと云う地域とか、胡椒の栽培方法やら、その商内などが伝統的なコロネリズモ達の網にひっかかりにくかったことなども、日本人の発展とブラジル人社会への浸透を早めていった一つの原因ではなからうか。

当時、アマゾン上流から搬出されてくるパラ栗（カスターニャ・ド・パラ）とか動物の毛皮（鰐、豹、鹿、蛇など）などはユダヤ系の商人が押さえていたし、砂金は中近東のシリア系の商人とか、薬草とか樹脂はドイツ人とか、ポルトガル人は穀物とか、それぞれ得意の分野で網を広げていた時代でもあった。

ジュートの栽培の場合は、アマゾン河流域から出る各種産物の集荷ルートが確立されていたので、それに乗せることが出来たが、トメアスーの場合は彼等にすれば事情のわからない所在であつたろうし、胡椒などはリオとかサンパウロの商人達が外国から輸入していた時代であり、彼等の商圈外にあった産物で、恐らく一時的な景気だろうと傍観していたの

ではないかと推察される。

胡椒景気の波は、多少の変動があつても多くの日本人達の、経済基盤を築く土台を作りあげてゆくだけの時間が与えられていた。

トメアスーで築いた栽培ノウハウはまたたく間に、ベレン近郊を始めアマゾン各地の日本人移住者たちに伝えられ、ブラジル銀行の積極的な長期融資もあつて、同じ時期に南の方に移住した一般農家や単独青年などに比較して、独立が容易であつたであらうと思う。

胡椒の景気と云うのは、経験した人でないと説明しにくい
が、私が日本から来て二年位してトメアスーにいた頃である。

戦前のある移住者が自宅の新築祝いをするのに、その準備を手伝わされたことがあつた。

確か牛を二頭、大きな赤豚を三頭、鶏を二百羽殺して、シュラスコにするために朝から大勢の人達が手伝いに来ていた。

ベレンからは、船に輸入ウイスキーやビール箱やらジュース類が山とつまれ、これらの飲み物を冷やす氷がギッシリと積んであつた。

船客の中には、ベレンからのブラジル人招待客に混じつて、二つの楽団が来ており、夕方から明け方の陽が上るまで交替で演奏して招待客は、新装なったホールで踊り続けたことがあつた。

何百人の人達が招待されたのか、記憶にないが、庭先きにギッシリと自家用車が並び、ベレンから招待されていた小型飛行機（テコテコ）のパイロットが家の上を旋回しながら、花束を投げていた。

このような遊びをする人達が沢山おられてケロッとされていた。

このような経済基盤に支えられて、その子供たちはベレンやサンパウロの大学に学び、卒業してブラジル人社会に活動の場を求めて行った。

アマゾンで最初に大学を卒業して、社会活動を始めていかれたのは、高拓生の子弟たちであり医者、弁護士、経済学士、建築技師、大学教授などの分野に進出し、次にトメアスーの子弟たちが育ち、現在ではアマゾン各地の植民地から、あらゆる分野に人材が浸透し始めているのが現状である。

一方、時代とともに方針の展開が出来なかったコロネリズモは、世代の交替期に突入していくことで衰退が始まり、若いこれらの人材がブラジル人社会に解けこんでいく過程で、新興勢力などとの接触で頭角を現してくることも起こって来た。

胡椒を主体に養鶏、牧畜、果実などの多角経営が形成されていくと、それに付随して日本人間の商業進出も活発になって行った。

戦後、継続的に行われた单身青年や家族移住も、日本経済

の発展とともに減少し現在ではバツタリと止まってしまった。

それらの現象も多少の影響はあるのか、あるいは思考の相違からくるのか、日本人子弟たちの結婚も積極的にブラジル人社会に溶け込んでいく時代になってきた。

また、これらの子弟と結婚した多くのブラジル人が日本での体験をする時代になって来たし、その体験話しが帰国後にその家族たちに語られるような時代にもなってきた。

アマゾンにおける日本人及びその子弟たちの、ブラジル人社会の評価は一般に高く、真面目で正直であると言われている。

いま両国の人間はお互いに理解しながら、更に自分の考えを相手に知ってもらいたい時代に入っただのではないだろうか。

記念誌編纂に当たっての協力団体（者）

パラ州

ベレン日系人協会

コケイロ日本人会

タパナン日本人会

アナニンデウア日本人会

ベネピーデス日本人会

サントアイザベル、サンアントニオ日伯文化協会

カスタニャール日伯文化協会

サントマリア日本人会

イガラツペアスー日伯文化協会

グアマー日伯文化協会

ノーバ・チンボテウア親和会

カパネマ日伯協会

カピトンポッソ日本人会

アバエテツバ日系人会

アカラー日伯文化協会

トメアスー文化協会

サントアレニ日伯協会

モンテアレグレ日伯文化協会

アルタミーラ日伯協会

エリオ・ゲイロス州知事（当時）

パエス・デ・ローレイロ文化庁長官（当時）

原田ベンジャミン（オリシミナ）

◆アマゾナス州

西部アマゾン日伯協会

出田務、大沢日伯事務局長、陣内衛（マナウス）

川上颯二（パリンチンス）

飯森義治（マウエス）

◆アクレー州アクレー日伯文化協会

小池修（リオブランコ）

笹井厚・隆（リオブランコ）

森清則（リオブランコ）

◆マラニョン州マラニョン日伯文化協会

山田清（サンルイス）国吉オルガ（バルサス）

◆アマパー州アマパー日伯協会

川上静香（マカパー）

◆ロンドニア州トレゼ・デ・セツテンプロ自治会

山口宜行、門脇道雄（ボルトベリーヨ）中村弘（アリケメス）

◆ピアウイ州中山征治（テレジーナ）

◆ロライマ州ロライマ日伯協会

辻一夫、新保レオナルドジョアン・ルイス州農・配給局長
ルイス補佐官

△なお、本誌発刊に当り国際協力事業団（JICA）並びに
パラ州文化庁の援助を得ております。

誠にありがとうございました。

編集後記座談会

記念誌編集委員長 ・五 艘 晋

記念誌副編集委員長 ・堤 剛 太

堤 「やっと終わりにこぎつきましたね。二人ともヨタヨタ
のゴールって感じですね」

五艘 「いやー本当、僕はワープロをうち過ぎて途中から肩が
上がらなくなってしまい、 堤さんは目まいがする変な病
気になってしまいうしでね

堤 「最後は時間との追いかけてっことで、実際ストレスになっ
てしまいましたよ」

五艘 「はつきりしとかなきゃいけないのはね、二人がこの仕
事を引き受けたのは一九九三年の一月六日からという事なん
だよな。じゃその前はようになってたんだと云われたら、それ
は我々の云う事じゃないから、ここではちよつとね」

堤 「しかし、この仕事のおかげで、アマゾンの隅々まで行けた事は楽しかったですね。 時間があつたら、アマゾン河をベレンからマナウスまでのぼって見たかったのですが」

五艘 「堤さんは、アクレ州やロライマ州まで行ってきたけど、移住者が三〇〇四〇年前にああいった辺境の地へ入ったって事どう感じましたか」

堤 「今でこそ各州へ通じる国道が開通してますが、当時は陸の孤島でしょう、開拓する為に国を出て来た訳ですが、やはり残酷物語ですね」

五艘 「ある資料読んでいたらね、移住への意義としてこう書いてあるんだよね『日本は』 国家として『武力的に資源を支配しようとして戦争の誤りを犯した。しかし、今日我々は』 民族』として 』個人』として 』平和裏に世界の資源の開発に寄与したい 』との熱望に燃えている。

そして、そのみが日本の世界に貢献しうる道であり、日本自らを救う法でもあろう。』こんな事を真面目に考えていたのだろかね、これは表向きの顔で本音は 』うば捨て山』だからね、実際」

堤 「今となつては、そこに書いてある通りになつてきていますが、犠牲が多過ぎましたよね」

五艘 「移住者の歩いて来た道のりは、正真正銘のノンフィクションだからね、すごい迫力ですよ。 日本の人が聞いたら仰天するような体験をケロッとして話してくれる、生の証言

を何かの本として残しておきたいな、とつくづく思いますよ。

今ならまだ生きて居られる人も、多少は居られるので間に合うんだけど、肝心の資金が底をついてしまったから、ちよつと無理か」

堤 「私は、各移住地をもつと掘り下げて記録作ってみたいですね

五艘 「ところで、この一年間の仕事を振り返ってどうでしたか」

堤 「先ほども云いましたが、六十五周年に六十年誌では恥ずかしい思いがありましたから、何としてもこの一年で終了したかったので時間的にかなり無理しましたね。それに、二人で引き受けた手前、全て二人でやる以外にないと覚悟はしていましたが、広告集めやら取材、原稿、ワープロ、割付け、校正まで手を出してしまったので、まるで零細企業の世界でしたね」

五艘 「ほら、表紙に使う空撮の写真、カメラマンのミゲール近岡さんに頼んだ時の話、あれは傑作だったよね」

堤 「いやー、あれは面白かった。こんなこと云ったら怒られるけど」

五艘 「金がありませんので、テコテコ（軽飛行機）でなく、もっと安いので飛んでくれないかと頼んだのですよね。それじゃウルトラレーベ（超軽飛行機）にしましょうって事で、あ

れは羽根の下にぶらさがるやつで時々落ちるでしょう」

堤 「ミゲールさんも最初のうちは（大丈夫、大丈夫）て云ってましたが、こちらがわざと何度か（気をつけてくれよ）というもんだから段々気になり始めて、最後は（これが最後か）なんてブツブツ云いだして、笑ってしまいましたね」

五艘 「出稼ぎの人達は、各移住地どうでしたか」

堤 「我も我もと行っていたピークは過ぎていますが、各移住地とも出稼者層が定着している感じですね。

それから、まさかと思う様な辺境の地からも、名古屋や大阪、静岡に行っていたなんて話を聞き驚いてしまいました。出稼ぎブームは、私達が考えていた以上にアマゾン各地域に浸透していたのですね。ピークで、アマゾン全日系人の約三割に当る三千人が出ていたと云う話が納得いきましたよ」

五艘 「さて、二人であまり紙面とってしまうと、どっかから文句が来るといけないのでこの辺でおしまいにしますが、何かもう一言ありませんか」

堤 「本作りしていて、以前に作られている生島さんの「三十年史」それからトメアスーの「みどりの大地」、第二の方の「アマゾンに挑む」、マナウスの「天園」や「ベラビスタ移住地」、カスタニャールの「開拓五十年の歩み」それから小谷さんの「五十五周年記念号」高拓生の「アマゾン開拓史」それと「アグロナッセンテ」の田尻さんと中隅さんの記事、非常に参考にさせて頂きました。

「今度は、この本が次の方のお役に立てればと、そう願っています」

五艘 「もう日本語では出ないだろうね、次はポ語になってしまうと思うよ」

堤 「百年史と云えば後三十五年、憎まれっ子世に帰ると云うから、五艘さんまだ生きてる可能性あるかもしれませんね」

五般 「・・・・・・・・・・・・・・・・」



三五年後の百年史にも
挑戦と五艘さん



国境越えてもう帰って来ない
ではと心配させた堤さん



もう日伯の仕事は
こりこりと近岡さん

結びの辞

汎アマゾンア日伯協会

会長 林 丈一

日本人による六十年の移住史「アマゾン」が、漸く刊行の運びとなりました。

私は初期の責任者として、この完成を心より喜ぶと同時に五年の歳月を費やしたことに責任を感じ、関係各位に対し深くお詫び申し上げる者で御座います。

出発時点では平木義孝氏が主務者として、専心広範囲で適正な資料を集めて頂きました。

しかし残念ながら、平木さんがかなり老齢で有ったことと、遠方より通勤されて居た為、途中で病氣になられ、作業が中断することになったのです。

そんな或る日、現第一副会長の本田利秋氏より話しがあり「全権委任であれば五艘さんが引き受けてくれるかも」とのこと、早速五艘さん宅にお邪魔して、相談したところ、快く承諾して下さいました。

その後の五艘さんの行動は全く迅速で、「六十年史編纂委員会」を再編成して約一年で仕上げて終いました。

勿論、これには、平木さんの下調査も、充分役に立っていることでしょうが、堤事務局長や、近岡氏のご尽力も、大変なもので、只々頭の下がる思いです。

今、日系社会のアイデンティティが問われて居ます。

しかし、それは六十年前の、当地日系社会誕生の時から、連続して問われた、大きな問題です。

先人達は、どんな気持ちで移住して来たのか、どんな社会を夢見て来られたのか、多くの人は黄泉に旅立たれて直接聞く方法は有りませんが、六十年史を通して、その行間に汲み取ることが出来ます。

そのキーワードは団結、協調では無いかと私は感じました。

先人の努力を無にしてはいけない、彼らが叶えられ無かった夢を自分たちの手で実現したい、この冊子を読む人は、きつとそうに感じる事でしよう。

現今の不況も、日系社会が団結すれば簡単に乗り越えられるのです。そればかりか、大きな飛躍さえ出来るのです。

そもそも、移住とは何か、単に人口を増やし、労働力を安定さすだけのものなのか。

折角、一大決心をして、万里の波濤を越えてきた、西も東も分らない隔絶された社会の中で、必死に生きて来た。その結果が、若干の余裕に安んじ、子供を沢山作り、その子供達の将来が現地への埋没でしか無いでは、余りにも悲しい。

日本人の血が、確かにブラジル社会の発展に役立った。ひいては世界協定の礎となったと、未来の歴史家に評価されるような、そんな移民で有ってこそ、先人の専い犠牲に報いることが出来るのではないか。

その為には確固たる日系社会を構築しなければならない。勿論、現地社会の一員として融合し、更にその中で日本人として身に付けた特質―日本文化を開花させねばならない、そんな思いがするのです。

近年後続移住者が絶え、日系社会の中でも、一世は20%を割るのでは無いかと思われる実情からして、残された最後のチャンスのように思われてなりません。

そんな時期に刊行される六十年史が日系コロニアの団結に役立って頂くことを願ってやみません。

最後に、献身この編纂に尽力くださった五艘晋さんはじめ編纂委員の皆様、ご協力頂いた方々、資金援助して頂いた国際協力事業団、パラ州政府、その他関係各位に重ね重ね感謝を申し上げます。

以上

*参考文献

当移住史の編集に際しましては、次の出版物を参考または文中から一部抜粋や引用をさせていただきました。

また写真、資料なども一部掲載させていただきました。

尚、当移住史の編集は一九九三年の一月に依頼され、時間

が充分になかった為に細部亘るチェック作業が完全に来なかったことと、前任者の収集されていた資料に参考文献の添付がなかった為に、そのまま掲載した部分もありますので、ご了承ください。

「大アマゾン探検誌」 W・プライス著・森下賢一訳。大陸書房。

「A Amazonia Parance」ロベルト・M・ロドリゲス著。

「パウリスタ新聞」パウリスタ新聞社。

「パン・アマゾンア会報」汎アマゾンア日伯協会。

「アマゾン移住三十年史」生島重一著。サンパウロ新聞社。

「アマゾン・移住と開発」 田原春治著。アマゾン会出版会。

「アマゾン地域の農業者と日本人」国際協力事業団。

「世界の宝庫アマゾン」藤井卓治著。農林協会。

「アマゾン叢書」生島重一著。サンパウロ新聞社。

「アマゾン河」神田練蔵著。中公新書。

「アマゾン邦人発展史」池田重二著。サンパウロ新聞社。

「海外移住の意義を求めて」——日本人の海外移住に関するシンポジウム——外務省・国際協力事業団。

「スーパー書斎の仕事術」山根一眞著。ビジネス・アスキー。

「アマゾン地域における邦人移住のあゆみ」汎アマゾンア日伯協会。

「みどりの大地」トメアスー開拓五〇周年祭典委員会。

「ブラジルに関する日本語文献目録一九七五—一九八七年」
日本ブラジル中央協会。

「移民の資料目録」和歌山県市民図書館移民資料室。

「アマゾンに挑む・第二トメアスー移住地二十年史」第二ト
メアスー自治会。

「アマゾン・生態と開発」西沢利栄・小池洋一著。岩波親書。

「泉靖一著作集3」ラテン・アメリカの民族と文化・泉靖一
著。読売新聞社。

「熱帯雨林の生態学」ジョン・C・クリツチャー著・井沢紘
生監修・幸島司郎訳。どうぶつ社。

「共生の大地・アマゾンに生きる人々」山口吉彦監修・文
鴻池安志・撮影 真砂秀朗・構成。

「熱帯雨林で私がみたこと」キャサリン・コーフィールド
著・雨森孝悦訳。

「アマゾン川紀行・原始の川を診る」
森下郁子著。日本放送出版協会。

「甦るブラジル」中江章浩著。日伯毎日新聞社。
「エメボイ実習場史」増田秀一著。

実業のブラジル社。

「アマゾンに流れる・日本人苦闘史」御壮金吾著。家の光協
会。

アグロナッセンテ誌。

「熱帯降雨林地帯で行われている焼畑農法の改良」

「アマゾンの自然の魚類の繁殖構想」レポート・長岡正雄。
「大アマゾンニア」野田良治著。満里閣書房。

「中南米移住地実態調査書」社団法人・日本海外移住家族会連合会。

「アマゾナス州ベラビスタ移住地創設三十年史」ベラビスタ移住地自治会。

「開拓五十年の歩み」カスタンニヤール日伯文化協会。

「天園」エフィゼニオ・サーレス植民地二十年誌刊行委員会。

「高拓関係者のアマゾン開拓史」パラ―高拓会。

「高拓生及びアマゾンジュートの歴史」パラ―高拓会・アマゾナス高拓会。

「セルバ・ウエルデ」山根二眞著（野生時代）角川書店。

「物故先駆者列伝」日本移民五十年祭委員会編。

「ブラジルを語る」原梅三郎著。五二出版。

「再度アマゾンを訪ねて」和泉昇二郎著。中央公論事業出版。

「中南米紀行」中田弘平・南坊進策著。中外書房。

「愛土ブラジル」佐藤常蔵著。帝国書院。

「埋もれ行く拓人の足跡」鈴木南樹著。

「ブラジル学への挑戦」中隅哲郎著。サンパウロ新聞。

*写真協力

トメアスー文化協会。岸田鉄也（東京在）本木健一郎。サンパウロ新聞ベレン支局。

付

60年史年表

「アマゾンの日本人移住六十年史」

一九二三年（大正二一年）

▼パラ州政府がリオの田付大使に日本移民のパラー州入植の懇請をする。

▼当時サンパウロに於ける日本人の農業移民が正直で勤勉である評価を受けていた。

一方、黄色人種入植制限案が下院に提出されていた時期でもあった。

▼田付大使は、日本移民をサンパウロ州だけでなく各州に分散させ、各州知事や国会議員に日本移民の真価を知らしめる必要を痛感し、パラ州政府の申し入れを 外務省に報書す

る。

▼パラ州知事、エミリアーノ・カストロ。

▼ブラジル大統領、アルトゥール・ベルナンデス。

▲日本政府も国内不況、人口過剰問題解決の一環として海外移住を奨励していた噂でもあり、外務省は芦沢安平農学士を調査の為、ブラジルに派遣する。

▲関東大震災。

▲鐘紡・武藤山治社長がブラジルの錦花に注目し実業同志会を結成する。

▲菊池寛による文春創刊。

▲虎ノ門事件で山本内閣総辞職。

▲枯れすすき・籠の鳥が流行する。

◆クーリツジ米大統領就任。

◆マルク紙幣の大暴落。

一九二四年（大正一三年）

▼田付大使は野田良治書記官・森本海軍武官の二人をアマゾン視察に派遣する。

ベレン市でパラ州知事と会談した二人は、そのあとマナウスまで詳細に視察しペルーのイキトス市まで汽船で遡航した。

そして、将来日本人の発展地はアマゾン地域であることを報書、太平洋から大西洋までアマゾンをつき抜けて、大いに

発展すべきだと提唱した。

▼パラ州知事、エミリアーノ・カストロ。

▲裕仁皇太子の成婚式。

▲男性のオール・バック流行する。

▲困ったね節・からたちの花。

◆排日移民法が米議会を通過し、アメリカ労働省は、ハワイ在住の日本人の本国転入を禁止。

◆イタリアで総選挙、ファシスト党が大勝利。ムッソリーニの台頭。

一九二五年（大正一四年）

▼パラ州知事ジオニジオ・ベンチスは、パラ州の開発を日本人移住者の導入で 何とか解決の道を求めている。

▼外務省派遣の芦沢は、まずサンパウロを観察し日本移民の実態を調査の上で北上、パラ州知事の歓待と便宜を得て、特にカップイン河流域を観察した。その際、当時すでにベレン市に居住していたコンデ・コマ（前田光世）の世話で調査を無事に終えることが出来た。

またベンチス知事自らの案内でベレン近郊プラガンサ鉄道沿線をも観察した。

ベンチス知事は、芦沢一行の意見を聞いた上で、カップイン河流域に日本人植民地を設置するため、一家族に二十五ヘクタールあて二万家族で五十万ヘクタールを選択する権利を向

こう一年間留保しておく旨、書簡で田付大使に申し送った。

田付大使は協議の上、アマゾン開拓の植民地の件を幣原外相に概況報告すると共に、この殖民地を基盤とした企業または組合創設を提唱し、そのための調査団の派遣を上申した。

▼パラ州知事、ジオニジオ・ベンチス。

▲在ブラジル田付大使よりの報告を受けた幣原外相は、省内の局長級で会議を開きパラ州政府よりの打診は日本の現状からみて好機なるも、その提供地が果たして日本人の移住地に適するかどうか、十分な調査をした上でないと決議は出来ないと判断、調査団を派遣することに決定した。

しかし、当時の政府には予算の余裕無く調査費用の全額負担は不可能であった。

そこで政府は鐘淵紡績株式会社（以下鐘紡と略す。）にその調査費用の捻出と調査団の結成を依頼した。

鐘紡は取締役会を開き、調査費用不足分の八万円の拠出と福原八郎取締役を団長とする「福原調査団」の結成を可決した。

調査団真の選考は慎重に行われ、次の人々が選ばれた。

団長・鐘紡取締役 福原 八郎

東大教授医学博士 石原喜久太郎

内務省防疫官 飯村 保三

内務省土木牧師 谷口 八郎

内務省土木技師 田村 義正

内務省土木技師助手

水村 松栄

山林牧師

石原 清逸

農学士

芦沢 安平

団長秘書（鐘紡留学生）

太田庄之助

▲治安維持法・普通選挙法の公布。

▲ヨサコイ節。

◆金本位制の復帰。



福原八郎団長

一九二六年（昭和元年）

▼田付七太駐伯大使は、囑託の栗津金六、サンパウロ総領事館農事技師江越伸胤、武官関根郡平夫妻を帯同してベレン市を公式訪問、ベンチス知事と会談した。一方、アマゾナス州のエフゼニオ・サーレス知事もこの話を聞き、田付大使一行のマナウス視察を要請、福原調査団のベレン到着が遅れていたこともあり大使一行はマナウス市を訪問する。

このマナウス訪問により、アマゾナス州もパラ州と同条件で百万ヘクタールのコンセッションを無償提供することと

なった。

▼日本を出発した福原調査団一行は、途中ニューヨークで一ヶ月滞在し、調査の下準備に費やした。

アマゾンに関する地質・気候・水利・鉱物・生産物・熱帯病等あらゆる学術書がニューヨーク市図書館に豊富に揃っていたために、一通りの予備知識が得られた。

一行中の石原医博は、同市滞在中であった野口英世博士に合い、黄熱病についての専門的意見を交換することも出来た。

この時、福原はニューヨーク在住の森村組村井保固始め数人の有志より「将来アマゾンに進出したいから、その基地として有望な土地を購入して欲しい」と依頼される。

福原はその主旨に賛成し自らも一口仲間入りし、南米企業組合を組織した。

一行はベレンに到着、かねて待機中であつた田付大使により、パラ州知事始め関係官庁の責任者に紹介されたあと、実地調査の協議・準備などにとりかかった。

▼日本よりの一行九名に田付大使随同行の農事部技師、江越伸胤、鐘紡留学生仲野秀夫、ベレン在住の前田光世の三名が加わり、船でグアマ河を遡航しカッピン河流域の調査を開始する。

三週間に亘る調査の結果、

①土地の起伏が多く、まとまった平野が少ない

②至るところに湿地が散在し、マラリア病原が濃密なところ。

③河流の屈折が多く、その上浅瀬の為に交通不便なところ。

④地質は中世層よりなり、土壌の種類は粘土砂質土、礫質土を有するも農耕に適する肥沃なる部分が少ない。

以上のような欠点があり、日本人移住地として不適であると結論が出た。

福原団長・前田光世・江越牧師は州知事と面会し、その実情を詳細に報告した。

州知事は、それならば州内の官有地であればどこでも差し支えないから、別の方面を調査し理想的なところを選定するようにと要望した。

▼田付大使は帰国命令が出ていたために帰国する。

▼福原団長は調査団を二隊に分け、一隊はモジュー河流域、他の一隊はアカラ河流域を調査した。

その結果、アカラ河本流とその支流アカラ・ペケーノ河の間の土地が肥沃かつ水運よく、高台で低湿地少なく健康地であることが判明したので、団員一同協議の上、この地域五十万ヘクタールの無償提供及び州内の他の三地方において土地を選択するとの許しを申し出て州知事の快諾を得ることが出来た。

▼州知事は今までの経過を認めた日本外務大臣宛の八月十四日付公信を福原団長に託した。

▼福原団長はリオ市において赤松臨時大使に提出し、外務大臣への転送を依頼した。

▼鐘紡技師であった大石小作は、会社を止め自費で欧州視察の旅に出ていた。

ブラジルに立ち寄った時に福原調査団と出会い、福原団長とは面識があつたので調査団の一行に加わり各地を観察した。

調査終了後に単独行動をとり、噂の不老長寿薬グアラナの実態を究めるためにマウエス郡に入り、その栽培方法を視察し、将来有望な作物で有ることを確信し、首都マナオスに州政府を訪ね二万五千ヘクタールの土地無償払い下げの交渉をする。

州知事は田付大使の訪問直後であり、日本人による開拓を強く希望していたので大石の申し入れを承諾した。

▼福原はベレン市より約七〇キロの地点にあるカスタニャール郡内に、イタリー人所有の甘蔗園、ロンバルディア農場二七七〇町歩を伯貸一六五コントスで購入した。

鐘紡の留学生であった仲野秀夫を支配人に任じ管理させた。

▲福原団長は東京に帰着すると、調査報告並びに「アカラ無償提供土地植民地経営計画案」を外務省に提出し、同地が邦

人発展上有望で有ることを具申した。

▲大正天皇崩御・昭和と改元。

▲伊豆の踊り子・川端康成。

◆アメリカでトーキー映画が出来る。

◆イギリスの失業一七万五千人。

一九二七年（昭和二年）

▼田付大使は日本帰国前に視察旅行に同行した通訳の栗津金六に対し、個人の名前でよいからアマゾナス州のコンセッション契約を、これからの日本人の為にも結んで置くように薦めた。

大使が帰国し栗津も大使館を去ったのでこのアマゾナス州の土地の話は、たち消えになったかのようにだった。

東京の少壮実業家・山西源三郎は新市場調査のためブラジルに来ていた。

日本出発に当り親交のあつた上塚司より上塚の神戸商高同窓である栗津宛ての紹介状をもって来ていた。

大使館に於て関根中佐武官よりアマゾン視察を強く薦められ、栗津に連絡をとり同行してマナウスを訪問、州政府と交渉し栗津・山西のコンセッション契約は順調に運び、しかも四ヶ所四百万ヘクタールの内、いずれか一ヶ所を選ぶと云う有利なものであった。

▼田付大使の後任に有吉明大使がスイスより着任した。大使

は邦人のアマゾン地域への進出は、たとえ民間の事業であろうとも日本政府は無関心であつてはならず、これらが不成功となつて悪影響を及ぼし今後の邦人発展の障害にならないように積極的に支援をしたのである。

▼外務省通商局第三課長の大橋忠一は、北米よりの帰途、南米における移民事情を視察した。ブラジルではサンパウロを始めパラ・アマゾナス両州をも視察しベレン市においては前田光世・仲野英夫などが案内した。視察の結果、同方面には邦人企業の進出を大いに奨励すべきであるとの結論に達し、自ら率先してマラジョー島クラリーニョに二七〇ヘクタール、カスタニヤール郡に五〇ヘクタールの土地を購入した。

大橋はリオに帰着し有吉大使に見聞するところを報告した。
▼有吉大使は大要次の通り本省に打電している。

「最近アマゾン地方を觀察して来訪せる大橋書記官の報告によれば、パラ・アマゾナス両州官民は、日本人による同地方の開発を熱望し、田付大使旅行の際の如きは、財政窮乏せるに関わらず巨額の費用を投じて歓迎し、これと時を同じく到着している福原調査団に対してもあらゆる便宜をあたえ、またこれら一行の当時の行動並びに応答より推して彼等はわが方の企業開始は間違いなく、かつその時期も遠からずとして多大の期待を有するものと認めらざるをもつて、万一にも福原などの計画実現せざる場合には、失望の結果その反動と

して排日の風潮同地方に起こり、将来同地方の企業を困難にならしむるは勿論、他の地方にも影響するにいたる危険少なからず……」

▼崎山比左衛がアンデスを馬で横断しイキトス港からマナウス港に着き、大石小作が宣伝していたマウエスを訪問、その風光明媚に驚き、永年作物としてのグアラナも目で確認し、同地に東京・世田谷にある海外植民学校の分校設立の計画を立てる。

▼ブラジル大統領、ワシントン・ルイス。

▼この年、パリグ航空が設立される。

▲外務省通商局は、福原調査団が提出した報告書と移住地計画案を刊行し、国内の有力者に配布すると共に、新事業会社の設立を提案した。

▲三月に幣原外相の軟弱外交が問題となり政変が起こり、更に普通選挙法による府県会議員選挙、衆議院議員選挙などが行なわれた為に政府の対応も延び延びになってしまった。

▲金融恐慌勃発する。

▲文学全集1冊一円・岩波文庫発刊。

▲出船の港・チャツキリ節。

◆リンドバーグ大西洋無着陸横断飛行に成功する。

◆蒋介石の反共クーデター南京国民政府。

▼時の首相兼外相男爵田中義一は、東西の有力実業家六十余名を外務大臣官邸に招待して首相自ら福原報告書の懇談会を行つた。

その席上、財界長老渋沢栄一子爵により十二名の進行委員が確属された。

続いて進行委員会は二回開かれ協議の結果、当初から関係浅からぬ鐘紡の関係者がその創立の任に当り、各進行委員がこれを賛助することになり、鐘紡側にて發起人を定め新会社を創立することになった。

武藤山治・有馬頼寧・村井保固・野村徳七・平賀敏・橋爪冷三郎・福原八郎・宝田義文の諸氏が發起人となり会社設立案が検討された。

新会社は「南米柘植株式会社」の名称で資本金・一千万円、一株・五十円、株式総数・二十万株、と決定した。

定款第一条には「当社は海外において開拓事業を営むを目的とし、尚これに関連して必要なる附帯商工業を営み、特に日本内地からの委託により土地の売買管理経営をなすものとす。」とあり、主なる目的がパラ―州政府提供の土地を、日本の資本・技術労力をもつて開拓するにあつた。

株式の公開にあたっては、世論の共感を得て応募の状況極めて良好で、一般公募株の応募の多かったのは、何と言つても百万町歩の土地無償獲得で、この土地を売却しても数億円儲かり、株の配当は莫大なものだろうとの予測もあり、且つ

鐘紡が中心となつて設立した会社であると云うことが新会社の信用を高めたものと推測される。

新会社の重役は次の通り選出された。

社 長	福原 八郎
取締役	千葉 三郎
取締役	前山 久吉
取締役	神崎 昌太
取締役	堀 朋近
監査役	八木 幸吉 その他

▼南米柘植株式会社「以下南拓と称す」の設立が出来たので、福原社長は五反田貴己・新井高次・麦田金蔵の三名を伴いベレンに着き、契約調印の手続きを始める。

契約は福原八郎個人か、同人が組織したブラジル法人与州政府との間に締結することに決められていた。

もし外国法人である南拓が、州政府と契約する場合は、南拓の営業許可を予め受けねばならない旨が、州法第八条に規定されており、アマゾン地域に於いてこのような開拓事業を行う場合は、河川の航行権の獲得その他いろいろの点でブラジル国法のもとに、合弁会社を設立して、その会社名義によりこれを行った方が便宜であると考えられた。

そこで合弁会社の設立に着手したが、その手続きに日数を

要するのでとりあえず福原八郎個人名義で契約した。

この契約書は「パラ州モンテ・アレグレ、アカラ、マラバ、コンセイソン・ド・アラグアイアの四郡及びブラガンサ鉄道地帯における官有地を二年間の選択権をもって、日本人福原八郎に下付す」と云うものであった。

福原は、州有地百万ヘクタールをアカラ河流域のみに選定する代わりに、いろいろな作物を予想して、気候の異なる地方を選ぶことが有利であると考え、アカラに六〇万ヘクタール、次にモンテ・アレグレに四〇万ヘクタールとし別に州内の他地方マラバ、コンセイソン・ド・アラグアイア、ブラガンサの三ヶ所に各一万ヘクタールの州有地無償下付を受けることにした。

▲日本に帰国した大石は、日本民族の海外雄飛の必要を主張していた沢柳猛雄（元文部大臣・沢柳政太郎実弟）や元海軍大佐・小川亀重らに相談し賛同を得て、アマゾン興業株式会社を設立した。

入植者一千家族を予定し、入植者募集と株式募集を同時に行い、一株二十五円、二十株以上の出資者には植民地の土地十五ヘクタールを無償で譲渡すると云う独特の方法を発表した。

資本金二十五万円、株式引受人百八十名、引受株数七六八二名、植民地面積二万五千ヘクタール。

取締役 大石小作

取締役 小川亀重

監査役 塚原嘉蔵

監査役 柏田忠一

発起人の大石小作は会社創立の段取りがつくと、創立総会の開催を待たずに社員、三石久・久保田喜久郎・唐木道雄・羽野鶴雄・尾崎貞吉・石田嘉由・増田太郎の七名と共にアマゾン州マウエス郡に向かって出発する。

▼大石一行は、これから入植する人達のために仮宿泊所、診療所、本部事務所、倉庫、マンジョウカ製粉工場などの本部施設を行ねねばならず、また本命のグアラナを急いで植える必要があつた。

当初四万五千本の植えつけ予定であつた。

▲日本に帰国した山西源三郎は各方面に働きかけたが大不況の最中であつたため一向に応諾する者なく、植民地経営の会社組織の目途はまったくつかなかつた。

コンセッションの期限は二年間であり窮した山西は在ブラジルの栗津と相談して代議士の上塚司に、この契約の実行を委譲することにした。栗津からも上塚に書簡を以って依頼しており上塚は快諾しアマゾン開拓の事業に乗り出すことになった。

上塚司は神戸高商を卒業、満鉄株式会社に入社、第十四回衆議院選に熊本県より立候補して初当選した。政友会に所属

し第一五回総選挙で落選したあと農務大臣秘書・商工大臣秘書・大蔵大臣秘書などを務め第一六回選挙で当選し、高橋是清の知遇を得て地方、中央に政治的地盤を確立している時であつた。

山西より話があつたのはこの頃で、上塚は新設の拓務省と交渉し調査団派遣費用として二万五千円の補助金を獲得、すでに会社も設立され先発隊も準備されていた南拓に対して協力を求めた。

第一次調査に向かった栗津金六に対して南拓より医博松岡冬樹・農事部長内藤克俊・通訳星野修らが協力、ベレンで合流し、快速のドイツ船でマナウスに向かった。

内藤・星野らはベレンに到着したばかりであつたが、福原社長の意向もあり積極的に応援した。

各地を調査し、取り合えずパリンチンス中心に三〇万ヘクタールを選定し、併せて期限の二年延長を申請し承諾を得た。

▲野口英世アフリカで死亡。

▲特高警察新設。

▲トーキー映画の輸入。

▲天皇の即位式挙行。

▲日本商工会議所設立。

▲波浮の港。

◆蒋介石・国民政府主席に就任。

◆イタリアでファシスト党の独裁権が確立。

一九二九年（昭和四年）

▼福原は資本金四千コントス全額払込みの「コンパニア・ニッポニカ・デ・プランタソン」と称する伯国会社の手続きを完了し、直ちに州政府と福原八郎間の契約を新設の代行会社に移転した。

▲国内においては第一回移民が募集された。

南拓本社 of 移民係の主任には白井牧之助が任命されていた。当時ブラジル移民は最盛期であり、国内の一部の県には海外協会が存在し募集の便を計っていた。

南拓では植民地の主作物であるカカオ栽培のフィルムを巡回映写し、アマゾン産の米・豆・煙草・各種木材の見本などを展示し希望者の関心を高めていた。

南拓の親会社が鐘紡であることも信頼を高め、入植すれば直ちに二十五町歩の地主になれると云うことも大きな魅力であった。

入植決定者は日本出発にあたり会社との契約を取り交わした。

入植条件として渡航費一人あたり二百円を政府の補助とし、それ以外の旅費は自費、初年度の生計費として最低三百円準備し会社に預託する。

現地に着後の通帳を交付し、残額に対して年五分相当の

利息を付する。

貸付土地には住宅二戸を準備する、収穫物は七・三で配分し土地は希望により売渡す、各自は所得金の一〇％以上を必ず

預託し土地購入資金とする。

指定生産物の加工販売を会社に委託する。

風土病治療費は無料とする。

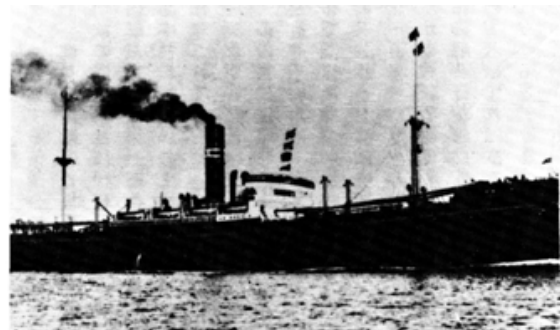
以上の契約を保証人の記名捺印を添えて取り交わした。

第一回南拓移民の四三家族と単独青年九名の百八十九名は大阪商船もんでびでお丸に乗船し故国に別れをつけた、

▼リオに到着した一行は、マニラ丸に乗換え九月十六日にパラ州ベレン港に到着した。

五日間の休息のあと九月二十一日南拓の船に乗りベレン出港、アカラ河を遡航し翌二十二日午前八時半にトメアスー植民地の栈橋に到着、多数の杜員とブラジル人の歓迎を受け、先発隊員の設けた歓迎アーチをくぐりアサイザールの新設された四棟の宿泊所に落ち着いた。

故国日本を出てから実に六十日間の長旅であった。



第一回移住者を運んだまにら丸

各自が入植する土地は契約通り三町歩ずつ伐採焼き払われていたが、住居と井戸は遅れており、入植者は宿泊所より割当てられた耕地に迫って作業をせねばならなかった。そのため最後の家族は二ヶ月近く宿泊所に居る結果となった。

開拓事業の開始にあたり、福原社長は対マリア対策に当時日本における熱帯病の権威者・松岡冬樹医博を招聘しており医博夫妻は福原社長先発と同行してベレンに到着、事業開始時より参画していた。

リオで柿栽培で名をなしていたブラジル農業の体験者の春日農学士、同志社総長を辞し渡米しテキサスにおいて米作に成功した西原の参加、同氏を通して平野植民地でマリア対策の体験者の戸甲義雄医師を招聘した。

西原は笠戸丸の自由移民として渡伯しブラジル農業の体験者である片岡・高橋・星井兄弟などを営農指導者として同行アマゾン入りした。

また南洋の事情に詳しく南伯にあつて農業研究をしていた生島章一を、ペルー下りでアマゾン地区の鉱物資源などを調査していた本郷勇を前田光世の紹介で測量技師として、同じくペルー下りで各地産業事情に詳しい井上良太郎などを社員として採用していった。

▼カスタニャールの南米企業組合では、支配人の仲野がアカラのトメアス植民地に転任したあと、北米から不島六郎が東伯し、マンジョカ粉、焼酎など製造したが相場が安価の為、成績振るわず帰米した。

南拓では南米企業の農場の一部を借用して試験場を開いた。

トメアスより内藤克俊・生島重一が転任しあらゆる熱帯作物を試作し始めた。

生島の著書によると、キナ樹八四三九本、カカオ二五六本、アンジローバ四七七五本、セードロ二四六六本、コーヒー一二一〇本、ラランジャー一五八五本、クプアス八四六本、アバカテ五五六本、グアラナ三六〇本、ココ椰子二五六本、油椰子一四〇本、パラ―栗八五本、胡椒一二五〇本、アブカイヤ五四本、肉桂五二本、プシュリ三〇本、コカ一九本、丁字一五本などを植えて北伯随一の農事試験場の観があつたと云われる。

▼大石はグアラナの栽培から収穫までに三、四年かかるため、会社の運営上その植え付けを急いでいた。

しかし、当時のグアラナの栽培は主にインジョにより行われており、作物のよく出来る土地を選んであちこちに散在してしていた。インジョは集団生活をしておりよく移動していた。その居住跡にはグアラナ苗が多く存在していたのであるが、その位置が誰にでも分かるものではなかった。また苗木に類似した植物があり、その区別は素人目には判別出来ないと云う問題にぶつかっていた。

予定していた四万五千本の苗は簡単には集まらなかった。

▼山田義雄は若くして世界旅行に出るなど 早くから海外雄飛の夢を抱いていた。

柔道界の先輩である前田光世より一〇万ヘクタールの土地払い下げの権利をもつ伯人がおり、協力者を求めている旨の連絡を受けると、同志の村松総吉と二人で渡伯してきた。

伯人カブアレイロは、パラ州政府よりオーレン郡内に土地無償払い下げの権利を与えられていた。

彼はその権利を南拓に譲渡するか、あるいは南拓に共同出資させ、開拓する希望をもっており交渉したが南拓は拒絶した。

そこでその土地利用を前田光世に相談し、前田は日本の山田に連絡したのである。

リオでカブアレイロと合った山田と村松は村松が辞退し、山田のみ契約することとなる。

山田は日本に引き返し会社組織を作る為に奔走するが、協

力者を得ることが出来ずまた、革命勃発の為カブアレイロコンセッションは無効となってしまうた。

▼マウエスで海外植民学校アマゾン分校設立の構想が浮かんだ崎山比佐衛はベレンを経て、南伯の教え子たちを尋ね活動状況を視察して帰国する。

崎山は熱心なクリスチャンで若い時から苦学し、渋沢栄一の知遇を得て財界・政界の知名人六十数名の後援により海外植民学校を創設していた。

当時の若者たちは、苦学して学業を終えても就職の門は狭く、海外に出ていくものが次第に多くなって来ていた。

それも何もなくして身を立てるには米国が良いと考えられていた。

果たしてどうか、崎山は北南米の移住者達の実情視察の必要を痛切に感じした。

そして北米・南米を視察し、講演し、移住者たちに接して、その将来性などをみて回った。

その結果、定住の独立した事業経営者は少なく、日雇労働者が多く移民即出稼ぎの状態であること、日本人は言語障害が多く、偏狭な独善・島国根性的性癖があること、移民教育の必要を痛切に感じした。

南米ではすでに独立農業の兆しが見えてその有望性を知ることが出来た。

ブラジルには三百名近くの卒業生を送り出していたので如

何なる状況下、アマゾン移住が話題になっているが果たしてどうか、これらの実情を知るための旅であった。

日本に帰国した埼玉は卒業生の伊藤松之助をマウエスに派遣し、入植に適当な土地を物色させる。

同校出身の山内登は二年前にサンパウロ州に来ていた。ビリグイで日本人学校の教師を勤めていたが、伊藤の後を追ってベレンに来て、マウエスに到り伊藤に協力、土地の選定・住居建設などを手伝った。

▲南拓社長の福原と同行して来た五反田は州政府との交渉・仮調印など終わると帰国した。

五反田はサンパウロの日本総領事館に書記官として勤務していた経歴があり、ポルトガル語にも堪能であった。

親しく日本移民の実情を見ており、入植地には確たる信念を持つ指導者が必要であることを痛感していた。

五反田は帰国すると鐘紡・南拓本社・拓務省の後援を得て、アマゾンに於ける植民事業の中堅指導者要請を目的とした大阪YMCA海外協会を設立し、アマゾン 開拓青年団を募集した。

大阪朝日・毎日新聞も後援し、全国に宣伝した結果、中学校・農業学校出身者が四十七名応募して来た。

副団長として南拓の発起人である平賀敏の子息・平賀練吉が参加した。

平賀は東京帝大農学部林学科を卒え、一年志願の兵役も終

え、宮林省に勤務中であつた。

しかも南拓の幹部職を希望すれば、それも可能であつたにも選ばず、植民地の将来を担う青年の育成に人生を選んだ。

▼南拓はモンテ・アレグレに四〇万ヘクタールの土地譲渡を受けていた。

トメアスーの第1回の入植が終了して一応のめどがつくと、農地部長新井高次はじめ関弘・阿部留次郎など測量部の職員を派遣しモンテ・アレグレ農場の創設を開始した。

河岸より三〇キロの地点に一一一〇ヘクタールを伐採し本部を設置した。

支配人には仲野秀夫が就任した。

モンテ・アレグレ地区は早くから開かれたところであり、一九世紀末より州の植民地が開設され数回にわたつてスペイン移民を入植させたが、マラリアのために四散し一部が残存していた。

土地肥沃で作物は良く出来、煙草を栽培し棒煙草を作っていた。また綿作もあり、南拓は土地契約のとき綿作と鉱物資源に着目してこの地を着目したのであり、将来は綿花栽培の一大植民地を設けるべく大江沿岸のプライニャ港まで鉄道を敷き港には一万トン級貨物船も横付け出来る港湾建設も計画されていた。

先発隊のメンバーの中に煙草栽培の技師大和田利雄（南拓入社前に日本煙草専売局林野農村勤務）がおり、煙草の試作

を行った。

▼パラ州知事・エウリコ・フレイタス・パーレ。

▼コーヒーの輸出が途絶し大不況になる。

▲「大アマゾン」野甲良治者が万里閣書房より発刊される。

▲浜口雄幸内閣。

▲共産党員大量検挙。

▲ツエツペリン号来日。

▲サントリー・ウイスキー売り出される。

▲東京行進曲・君恋し。

◆ニューヨーク株式市場が大暴落し世界大恐慌が始まる。

◆フレミング・ペニシリンを発見。

◆ムツソリーニがバチカン市国独立の承認。

一九三〇年（昭和五年）

▼ブラジルでは政治・経済が混乱し、中央では大統領に代わり、三頭軍事評議会が統治する。パラ州では知事が八人も次々と変わる状態が起こる。

十月に革命がおこりゼツリオ・バルガスが臨時大統領となる。

従来の土地コンセッション契約は、アマゾン地方を除いて全部無効となる。

▲栗津は第一次調査後帰国する、帰国の船中で神戸高商同窓の辻小太郎と会い、いろいろと意見を交換した。辻は一年半

にわたり南米を觀察しての帰途であつた。

この年に衆議院は解散し、上塚は選挙運動の最中であつたが、栗津の報告に基ずき今後の調査と柘植事業について検討した。辻も同席し第二次調査団漁連の経費を政府に申請した。

選挙の結果、惜しくも落選したが政府に申請中であつた補助金は五万円を受け取ることが出来た。その一ヶ月後に上塚自身が創立者の一人である東京・世田谷にあつた財団法人国士館専門学校内に「南米に発展せんとする国士的人材を養成するを以つて目的とする」(学則第一条)国士館高等柘植学校を設立し、直ちに第一回生五十名の募集を行った。

学校の主要項は次の通りであつた。

一、発展の目的地・南米ブラジル。

二、本校一年卒業生は直ちにブラジルに渡航、アマゾンア州パリンチンスに設立したアマゾンア産業研究所の実業練習所でさらに一年実地訓練を受ける。合計二年間。

三、本校卒業生は確実に渡航出来る。

四、練習所の過程終了者には無償で二十五町歩の土地が譲渡される。但し、開拓資金約三百円の用意が必要である。

五、本校卒業生には特に旅券が下付される。

六、本校卒業生がブラジルに渡航する場合、渡航費は全額補助される。

七、本校生は入学と同時に全員寄宿舎に入る。

八、入学金五円、授業料八十四円、毎月寄宿料二十円、実業練習所授業料百二十円、渡航の際は手続きその他の費用八十円が要る。練習所では農場の収益により学生の生活費を補う。

九、徴兵関係、在学中の徴兵猶予は出来ない。服役後の渡航者は予備隊役は免除、徴兵検査期日前ならば渡航し得る。ブラジル在住中は徴兵猶予する。

十、卒業後の方針、二年過程終了者は無償土地の譲渡により開拓に従事するのが原則である。大衆移民の到来後はその指導者となる。（以上、学校案内より）

上塚は神戸高商の同窓辻小太郎をこの学校の教授兼主事に招聘した。辻は学生時代より海外柘植の夢を抱いており、校内の南米研究会に属し南米に強い関心を持っていた。

神戸高商に柘植科が増設され、その講師の地位が与えられる予定であった。その準備の為に南米各地を観察して回っていたのであった。

辻は黄麻栽培に対し興味を持ち、郷党の先輩小泉製麻会社社長小泉庄助に、アマゾン流域において黄麻栽培が可能であることを話したことがあった。

そのとき小泉はたとえ可能であってもイギリスの業者がダンプینگを行い事業は成功しないと主張した。

ブラジルに旅行中サンパウロ農務局より黄麻種子二キロを分けてもらい、マナウスにある農学校とマウエスにいた山内

登に送り試作を依頼していた。

山内は試作の結果を詳しく辻に報告している。彼等の頭にはインド黄麻と云えば幹丈四メートル近く成長するものと考えていたから、試作は二メートル足らずしか成長せず失敗との報告であつた。

辻は黄麻の夢を捨てなかつた。

視察殊行より帰つて担当する予定であつた神戸高商柘植科は、神戸高商が商大に昇格したため柘植科は設置しないことに変更されていた。

ここで辻は、田崎神戸商大学長よりも勧められ上塚よりも求められ、国士舘高等柘植学校に勤務することになった。

上塚の植民地建設の構想は、未開のアマゾンに従来の営利社会でない新しい共同社会を創造すると云う理想のもとに、最終的には一〇年間に一五万人を入植させるというものであつた。

従来の日本人による海外移民は、ハワイ、北米、ブラジルのサンパウロなどいづれも既成白人社会に出稼ぎ労働者として渡航したものであるが、アマゾン入植は頼るべき耕主も、企業も存在しない所であるから、入植者の生活維持からして莫大な資本が必要である。

そのため、この模範植民地そのものが実験体となつて、一家の収支から植民地全体の経済、衛生、教育問題など植民地に起こり得る一切の事業を踏まえ、確固たる経営実態を把握

した上で、財界に呼びかけ政府の援助のもとに一大拓植会社を設立し、大衆移民を入植させるとしていた。

▼南米企業に北米より西村亀太郎が支配人として渡伯し、その隣接地を数百ヘクタール購入し、西原清東指導のもとに一大米作地を計画したが、成果をあげることが出来なかった。

西原はサンタ・イザベルに移転しランジャなどの果樹園を経営したが、マウエスより移転してきた鈴木信次郎に果樹園を譲り北米の子息のもとに帰った。

西原と同行した片岡治義はトメアス植民地の米作指導をしたあとに南拓試験場の支配人となり、そのままカスタニャールに留まることになる。

西村は米作失敗後、胡椒二千本を植えたが管理を鈴木に託して帰米した。

▼アマゾン興業の一行はマウエスに来ていた山内にグアラナの苗の収集を依頼したり、本部施設の建設に時間がかかり手間どっていた。

沢柳社長も大石夫人らを同伴して作業状況を確認し帰国している。

第一回入植者七家族、単独青年一九名計五十名が現地に到着、仮宿舎に入った。

すでに雨季に入っており伐採したところも焼き払いが済まされておらず、やむ得ず会社直営農場のグアラナの間に米その他の間作を行い、隣接地にマンジョカを植えさせ食糧を自

給させる方針をとった。

アマゾン興業株式会社は資本が少なく入植者も土地代を株式引き受けて支払っているのです、残りの開拓資金も多くは携行していなかった。

会社の資金も欠乏し、大石は再三に亘り東京本部に送金を要請した。

しかし本部では、大石が一向に会計報書を送ってこないのてその経費支払いに疑義を深め、送金しなかった。

困惑しきった大石は電信で会社に辞意を表明し、マウエス対岸の大石個人の土地に転出してしまった。

会社創立の責任者であるこの行為には入植者たちも咄然とした。後任支配人は先発隊員の一人、三石久が任じられたが入植者には大きなショックであった。

沢柳猛雄は第二回入植者十二家族と単独青年二二名計六六名を引率して到着、再三大石を訪れ交渉し、大石個人名義の「コンセツション」契約を沢柳名義に変更する。

沢柳はマナウスから山根武一を招き営農指導を受けたり、南拓より檜村正三を招き医療対策を立てたりして植民地経営を推進していくが、当初より混乱した会社運営は順調にいかず、日本に帰国するもの、或るいはサンパウロ方面に移転して行ったものが多かった。

アマゾン興業の入植者は全部で二十九家族一三六名、单身青年四八名、先発隊十一名、合計一九五名となっている。

（その後、二十家族はアマゾン地域に居住、単独青年は一七名が残り、あとは不明である。大石小作は最後までマウエスに残り、その波乱な生涯を閉じる。）第二回の鈴木信次郎はあとにトメアスに入植し、戦後測量師としてトメアス植民地の地権取得に協力した。

パリンチンスの歯科医・岡田秀臣は東京で開業していたのであるが、「マウエスにしか作れない不老長寿の妙薬グアラナ栽培」「十五ヘクタールの土地は土人が開墾してくれる」「入植数百家族の植民地尊属歯科医になれる」などの素晴らしい話しに乗ったのであるが現実には厳しかった。

しかし、マウエス郡長の要請でマウエス市で開業することになり、のちにパリンチンスに移転することになる。

元来、グアラナほタパジョース河とマデイラ河との中間の地に野生していたもので、マウエス付近でインジオにより栽培されていたものである。

消費もアマゾン中流マツトグロッソ方面で多く飲用されていた。強壯剤、消化剤、解熱剤、動脈硬化防止、下痢止め、頭痛などに効くとされていた。新たに清涼飲料水、滋養性飲料として需要が年々増加していた噂でもあった。

マウエス市の商人が取り扱っていたのであるが、日本人が多数入植してグアラナ栽培を始めるや、商権の侵されることが憂い州政府に嘆願し、彼等の組合が専売の権利を得ることになり、入植者にとって大きな障害となった。

そして、残留者の多くは後日、アマゾン産業に吸収され
ジュート栽培に従事していくことになる。

▼南拓のトメアス植民地では営農計画としてカカオを主作物
とし、胡椒を副とし更に他の永年作物を模索しながら、短期
作物として米・豆・綿花・煙草・シザール・甘庶・マンジョー
カなどを栽培する計画であつた。

カカオは、カメラ方面にすでに栽培されていたので、カメ
タから果実を運び種子をとり入植者に配布した。

入植者たちは、割り当てられた耕地に移ると家の回りを片
付け、配布されたカカオの種子や日本から持参した野菜の種
子を蒔いた。

日本でなんでも無肥料で良く出来ると聞かされて、大いに
期待して米・野菜・カカオなどの成育を見守つた。生活に必
要な食糧などは会社の売店で一切を求めた。

日本出発時予定の生計費を携行することになっており、一
応預托したことになっていたが、なかにはそれさえ納めきれ
ない者が多かつた。

生活資金のない入植者へは、会社が一人いくらと貸与して
くれた。

日本から持参した乾物類などもあり何らの支障もなく作物
の手入れに集中する事が出来た。

しかし生活面で、一同がまず困つたことは熱帯であるから
「布団は厚くなくてよい」と云われて錦を抜いたのを持って

きたので、夜中は寒くて震え上がった。あわててよそから牧草など手に入れ補った。

当時の日本は全国不況の農村恐慌で農家も生活苦に追い込まれていた時代であったが、それでもこの植民地に比べれば生活物資は比較的多種であった。

また食習慣の差もあり、食料品と云っても塩漬肉（シヤルケ）・米・豆・マンジョウカ粉・塩・乾魚など限られたものであり、生活習慣の差からくる不便感があった。

塩漬肉の臭いには仲々馴染めず、いち早く蒔いた野菜類の収穫が来ても糠漬けなどする材料もなく、日本から持ち込んだ乾物類も次第に減ってくる、生魚や生肉なども多くはなかった。

いろいろと問題があるにしても、畑の稲はすくすくと育ち期待と喜びはあった。

稲の稔りよく夢中で収渡したのであるが収穫の喜びは束の間、会社の粃の買い入れ価格が八ミルビとか九ミルであるとなわり大きな衝撃を与えて行った。

今まで会社から買っていた飯米が一俵（六〇キロ）が八〇〜九〇ミルであったから余りの大きな差額にびっくりして南拓事務所に押しかけ抗議をした。

支配人より粃買い入れ価格がけっして不当に安値でなく現在の適正価格であること、売店の高値な米は会社が急に大量に購入したため、仲買人に価格を吊り上げられやむを得ず高

くなくなったことを説明することで、不満ながら引き下がったが会社への不信感を募らせる結果になった。

収穫のあった入植者たちは臼や杵を工夫して飯米を自給することが出来た。

農家にとって年間の食糧が確保出来たと云うことは、大きな安堵感・充実感が与えられ自力による次作の山伐りに挑むことが出来た。

当時、大橋伊太郎一家では「町歩で約百俵の粃がとれ、三〇俵平均の米を得た。

長男の敏男によると「米味も決して悪くない」と父は大いに満足し尊んでいたと回想している。

代表となって会社と交渉にあたった市原津南三の他、数名のものは会社より退去命令が出てカバネマの方に移転した。市原はカバネマで米作などに従事するとともに穀物類の店売もてがけたが、米を一五ミルの相場で転売していたと云うから会社の九〇ミルの価格は不当であった。

ようだ。

しかし不当利益でなかったことも事実で 購入時期や購入方法などに不手際があったもので、このことは会社も認めていたところであった。

その後、米の価格は五〇ミル前後になっていった。

粃の買い入れ価格については、その後多くの人が体験したところであるが、収穫期で売り物が多くなれば価格は下がり

品薄時の販売価は上昇した。

これを利用して収入増を計った人もいたが、収穫が終わると次の山伐りが始まり人夫賃の必要からやむ得ず手離さざるをえないのが実情であった。

供給過剰になると会社の才も不慣れのところがあった。

しかし、毎年販路も拡放されリオ、マナウス方面にも道が開かれ販売に困るようなことはなくなった。

第三、四、五回までの入植者がこの年に入り二回目の米作を行うことが出来た。

第四回入植二〇家族は、既入植者の話を聞いて永住の地にあらずと判断し、全家族が退去して行ったと記されている。

現存の記録（トメアス文協・みどりの大地）に第四回入植者として八家族名しか記載されていない。

▼国士館高等柘植学校の第一回生の入学式を済ませた上塚・栗津の二人はブラジルに来了。

今回の調査団はサンパウロで人選し、調査終了後はそのまま現地に留まり先発隊として、後続入植者の受け入れ態勢を整えると共に、将来現業職員として勤務してもらう予定を立てていた。

栗津はすでにサンパウロに多くの知人があったため、それらに呼びかけて二〇名の人材を選び出すことが出来た。

団長・上塚司、副団長・栗津金六、医師笹田正数、亀井満（上塚関係植民地創設者の一人）、高岡宗一（仏語学者）、増永

栄次郎、増永栄正（大工）、河崎信次、寺田克己、岡田四郎、篠田六郎、三輪勇それに拓務省派遣の稲垣栄策、自費参加の石橋慎吉の人達を第一隊とした。

村井漣夫、小佐野良衝、田中三作、田端長之助、岸田義男、長谷川篤三、佐藤快士、鎌田謙、平山慶三郎の九名を第二隊とし、これらは少し遅れて出発した。

一行はベレンを経てマナウスに着き、州知事に挨拶し知事の好意でゼルツルード号を雇船し、パリンチンスに到着。

下流にあるビラ・バチスタ耕地を購入しここを本部基地と定め、ビラ・アマゾニアと命名した。

本部と決定したビラ・アマゾニアは大江に面して平坦で前面二キロ半、奥行五キロ、二一五〇ヘクタールあり、本部設置に好適であつた。直ちにアマゾニア産業研究所の施設の建設を開始した。

上塚と栗津はマナウスに行き調査結果を州知事に報告、土地選定も申請し、同時に土地譲渡契約書を山西・栗津より上塚司名義に変更した。

引き続き上塚は、パリンチンス郡長や官憲を招き盛大に起工式を行い建設に着手した。

研究所は農事部気象観測所、病院、実業練習所等をたててもらう予定を立てていた。

練習所の四部門を設け、各部門の責任者を定め、栗津金六を所長に任命した。

前記四部門の各責任者はそれぞれの部門に必要な通路・職員宿舎・売店・農事試験場・病院・港湾などの施設建設を開始した。

調査団員はブラジルでの生活体験者であり、専門的な枚術者であつたから本部建設は着々と進行して行つた。

▲浜口首相・東京駅で狙撃される。

▲失業者四〇万人。

▲エンタツ・アチャコ。

▲そば八銭。

▲米、大豊作で安値。

▲生糸暴落、工場休業続出。

▲祇園小唄・曹長の娘。

◆ロンドン軍縮会議。

◆インド全域独立集会。

◆米フーバー大統領が輸入農産物への高関税。

◆小麦が大暴落する。

一九三一年（昭和六年）

▼柔道家の前田光世は日伯親善に功績があつたとして、パラ州政府よりオーレン郡に二万五千ヘクタールの土地無償譲渡のコンセッションを受ける。

前田は日本で挫折していた山田義雄にこの土地を利用するように勧めた。

山田は拓務省より五万円の補助金を受け大嶽一、茂木勇、箕輪操、山本栄二、立岩助伝、鈴木清吾の六人の青年と共に十一家を引き連れて移住して来た。

三町歩ほど開墾し米、マンジョウカ芋、トウモロコシなどを植えたが成績はよくなかった。

一行のうち、鈴木清吾は農業牧師、蓑輪は農家の子弟であつたが、他の者は全く農業経験はなかつた。

木材が豊富にあつたのでその伐り出しを始めた。

人夫百人位を使い乾期に切り出し、雨期入りを待つて搬出した。

しかし資金不足とマラリヤが蔓延し、青年の内、鈴木、箕輪、山本が去り、続いて茂木、大嶽もベレンに出て立岩のみとなつた。

山田はオーレン市で雑貨商を始め窮状打開に努める。

▼国士舘高等柘植学校第一回卒業生のうち 四十七名は一年の課業を終えて、ビラ・アマゾニアにあるアマゾニア産業研究所の実業練習所に入所のために移住して来た。

入所した一回生達は約五〇ヘクタールを伐採し、米、マンジョウカ、カスタニャ・ド・パラ、グアラナ等を植え付けた。

これらの生徒達の家庭は殆どが中流家庭以上の子弟で、鋏も鎌も握ったことがないものばかりであつたが、柔道や剣道で心身を鍛練していた者が多く、原始林の伐採をやつてのけた。一年間の体験でアマゾンの開拓に将来性が無いと見切り

をつける者が多く、半数以上が帰国或るいは南伯に移転して行った。

残留したものは一部が産業研究所の現業員として本部に残り、一部は個人的に入植する土地をワイクラッパ河畔に求めボア・ビスタ移住地と名付け、直ちにグアラナやカスタニヤ等を植え付けて行った。

▼Y M C Aアマゾン開拓青年団は一年間の訓練を受けたのちパラ州モンテ・アレグレ植民地に出発する。

出発する三十五日前に平賀敏が亡くなり 団員全員が葬儀に参列した。

入植地の寝台代用として厚手の布を袋状にして青竹を二本通して担架のようにし、更に四本を柱用に準備した。

全国から集まった、これらの青年たちは アマゾンに行けば大面積の農場経営が出来ると簡単に考えていたと云う。

渡伯直前に結婚した平賀清子夫人は一行中ただ一人の女性であった。

一行はリオ・デ・ジャネイロ丸で出帆し訓練生は四十七名であったが、実際の渡伯は四十名に満たず、ベレンに着いた時に数名の脱落者があり、最終入植者は三十数名であった。入植地には茅葺きの壁のない二十数メートルの小屋があるのみで、井戸には水もなかった。

余りにも激しい現実直面した青年たちは相当のショックであったが、早速板を求め、壁、仕切り壁など住居の設備の

設置にとりかかった。とにかく開拓の第一歩は踏み出された。二ヶ月経った頃になりマラリヤが発生し 死者を出すに至った。

一行の中に三十才すぎの年配者も居り彼等からひそかに不平が囁かれ始め、遂に団長排斥となり不満が表面化してしまった。

三ヶ月して全員協議の結果、解散することになった。

日本で預けた開拓資金(五〇〇円→一〇〇〇円)は精算され各人に返金された。

五反田団長は帰国、大部分は帰国或いは南伯に移転して行った。

残留者は平賀夫妻、近藤秀雄、長谷川保治、上野浩爾、森川春一、成瀬義治、石田勝之助、神徳等であつたが、森川、成瀬、石田、神徳等もベレンに移転し最後は平賀夫妻外三氏となった。

土質は部分的に肥沃土があり、下層には 石灰岩もあり煙草、綿花、トウモロコシ等が良く出来た。

▼千葉三郎がトメアスに蚕種を携行して来て養蚕を試みている。

南拓第二回入植の高田幸之助、八巻七郎、遠藤滝三、菅原総次郎等が会社と相談し野菜販売の希望を述べ、会社も積極的に 援助することになった。

まず野菜組合を設立し、ベレンの販売所は南拓の事務所と

同じ所にした。

組合長・高田幸之助、会計・菅野俊雄、ベレン販売係・村上辰之助、組合出資金一ミル（次年度より二ミルになる、当時日当は二ミルであった）販売手数料十五％、会社は船の運賃を無料として援助した。

初年度は赤字であったが、二年後より黒字となり、販売の村上は言葉の不自由にも係わらず、その努力で実績を上げていった。

キャベツは従来熱帯では巻かないとされ南伯より移入していたが、会社が南伯より、あるいは北米よりコペンハーゲン種、エンクイーン種など取り寄せ試作させ木下又一が結球に成功し、多量に出荷出来るようになった。

トマト、ピーマン、キュウリ、なす、大根が主であった。これらは全部売り切れないこともあり河に捨てたこともあったが、州政府も野菜食を奨励してくれ販売量は増加していった。出荷の精算は二船ごとに行われた。

年間三コント以上の出荷者には組合は奨励金を出した。米作三ヘクタールで一〇〇俵の収穫も販売すると一コントの収入であったから、それに比べると野菜販売は有利であった。

▼州知事・マガリヤンエス・バラッタ。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス。

▼ブラジルは外債の支払を停止する。

▲この年、国士舘高等柘植学校に入学した二回生は七八名と多数であつたが、満州事変が勃発したために学校幹部の中で北進論が台頭し有力となり、アマゾン移民の南進論と対立するようになって来た。

そして満州開拓が日本人の使命であるとの風潮が旺盛になって来た。

アマゾン開拓を本旨とする高等柘植学校とは、その原点において判然とした相違をきたしてしまったのである。

また、世田谷区では農業実習が不可能であり、このことも学習上に大きな欠陥であつたので、農地のある場所に学校を移すことを計画し、各地を物色して小田急沿線稲田登戸に新校舎を建設し日本高等柘植学校と改名した。

▲若槻礼次郎・犬養毅

▲東北大冷害。

▲トーキー映画封切り。

▲パーマネント大流行。

▲満州事変勃発。

▲酒は涙か溜息か。

◆イギリス金本位制から離脱。

◆ヨーロッパの経済恐慌深刻化。

◆フーバー米大統領が恐慌に対しモラトリアム宣言。

◆全世界に信用恐慌が波及。

◆失業・ドイツ四八〇万、イギリス二七〇万、アメリカ八〇

〇万。

一九三二年（昭和七年）

▼一回生一ヶ年の各作物の試作、また荒木牧師のジュート栽培試験も見るべきものなく、アマゾン産業研究所長の栗津金六はアマゾンの開拓希望を失い、遂にアマゾン入植に反対を唱え、その旨上塚に進言したが、上塚は辻のジュート栽培を中心としたアマゾン開拓論を指示していた栗津は上塚に辞職届を出し、また学生に対して南伯移住を勧告し、彼と同行して来た従業員も同調し南伯移転を準備していた。

また研究所の経営も困難となり、日本よりの送金も途絶えがちとなり、栗津は牧場の牛を売却し経費を捻出している状況であつた。

一ヶ年の実業練習所の過程を終えた一回生の半数は帰国あるいは南伯に移転する結果になった。

やがて到着した二回生は練習所の方も職員の退所のため授業が行われず、結局は栗津の悲観論を信用し、上塚、辻のアマゾン開発論に反発し、なかには自暴自棄となりピンガに酔い宿舎を焼討ちするような行為に走る者も出たが、大部分帰国あるいは栗津の後を追って南伯に移住した。

一部の者はマナウス方面に職を探しに出かけたが、言葉もわからず良い職場があるはずがなかった。郡や市役所の掃除人夫として働いた者もいた。

二回生で残留したものは東久一、南政、小林増美、野村宏、山口諭、滝田吉一、加藤清勝の七名となった。

▼海外植民学校の崎山比佐衛は今井修一に学校の後事を託し、南拓第九回入植者とともに一族を連れてマウエスに入植した。アマゾン興業入植者は入植すでに二年を経過していたが、会社首脳の当初からの混乱で意気喪失の状況であった。

崎山一族の入植で意を強くし、あらたにマウエス日本人会を結成し荒廃したグアラナ園を共同で手入れして、その収益で会員相互の扶助にあてることにした。

▼南拓の福原社長はアルタミール郡長よりシングレー川上流フレスコ河流域の水晶、石灰鉛などの調査依頼を受け生島重一を派遣した。

彼の持ち帰った採集鉱物見本を日本に送り分析調査の結果、方鉛鉱が鉛分多く優良である旨の回答を得た。

福原はアマゾン視察旅行中の東北帝大講師田中秀三および農業技師古閣徳弥と共に生島調査員の案内で、自ら同地方の調査旅行に出かけた。

その結果、日本より三菱の鉱山部員二名を招き、現地を詳細に調査させたが余りにも交通不便のために採掘不利との結論になった。

福原は生島調査員をブラガンサ地域にも派遣し、グループ河沿岸ビゼウ地帯をも調査し砂金鉱なども見つけたが、鉄道終点より七〇キロもあり、交通不便のために諦める。

当時、会社は植民地経営で手一杯であり余力なく放棄同然となった。

▼この年、南拓の植木支配人はベレン市駐在の富田氏あてに南洋胡椒苗の輸入手配を依頼している書簡が所在している。

昭和七年八月二十一日

南米柘植株式会社パラ―支店

支配人 植 木 寿

ベレン市駐在 拓務省囑託 青田悟郎殿

胡椒苗輸入二関スル件

（尚、本文は候文で長い手紙になっておりますので省略いたします。）

▼サンパウロで護憲革命が起こる。

▲高橋是清・斎藤実。

▲上海事変。

▲犬養首相暗殺（五・一五事件）。

▲満州国建国宣言。

▲チャップリン来日。

▲影をしたいて・涙の渡り鳥。

◆ドイツでナチス党が第一党になる。

◆アメリカの失業一月に八二〇万が八月に一二〇〇万人とな

る。

一九三三年（昭和八年）

▼南拓一三回移民監督の白井牧と助が南洋種胡椒苗二十本を搬入する。

（尚、元拓務省理事官でベレンに駐在されていた長尾武雄氏より星野修氏宛の私信写しがありますので一部記載いたします）

修さん

長尾老人

ピメンタに関する貴重なる文献、植木氏の書信及び青田耕三氏の報告の写等を初めて知り小生の記憶の正しさを裏付けされた感があり嬉しいことでした。

青田悟郎氏は南洋地方に於ける農林経営の先覚者であり権威者であつたので昭和四年六月拓務省創設に際し迎えられて最高の嘱託として就任、拓務省に配属されていました。

当時最年長者であり有名な頑固者で通っていました阿々。然し風の吹き廻わしか小生とはウマが合い時々老夫婦だけの家に呼ばれて南洋名物のカレーの御馳走になり、色々柘植談義に花を咲かせた懐かしい思い出があります。

従つてピメンタ導入についての件も真相を記憶しているのです。昭和五年春 宮田氏は、当時の文書課長北島氏（後の

次官）と共に拓務省として最初のブラジル調査員として渡伯、帰国してあらためてベレンに赴任されたのでした。

アカラも当時カカオの生育が予想に反して、会社も植民も伸び悩みとなり従って宮田氏は南洋の経験に基き代替永年性としてピメンタ植栽を植木氏に申述べ、植木氏もこれに同調併せて種苗の斡旋方を宮田氏に依頼すると共に南拓本社の平井取締役にも報告されたのでしよう。

（福原さんはシングレー開発問題で帰国中であつたと思います）一方、宮田氏も本省へ種苗斡旋配慮方を申請すると併せて、往時南洋時代の部下で当時同氏と共に拓務省囑託に採用され南洋柘植指導のためシンガポールに駐在していた境理喜太及び照尾全昌の両氏にも拓務省を通して馬來半島で種苗の入手方を指令したのであります。ピメンタの苗などはシンガポール市内などでは絶対に入手出来ず馬來半島の専門農園でなければ手に入らないのです。

同地はボルネオ、ジャバ、印度等と共に世界で知られたピメンタの産地であつたのですから。私は昭和九年二月第一回の訪伯に際しシンガポールで照尾君に会い又同十一年初頭ベレン赴任に際しても同地で同君に会いその人間性及び技術者としての真面目さをよく知っています。

永年在住のため馬來地方の農園には顔が広く且つ信用絶大でありました。そこで昭和八年四月二十七日神戸発のハワイ丸で白井君が訪伯するのに合わせて拓務省から照尾君宛に入

手方準備を指令したのです。航海中の手入れ、それをし易くする荷造り、手入れ方法の詳細は照尾君の手配指示により万全が期せられたのです。

白井君がその指示に従って日々真面目に管理したことは重々賞賛されてよいでしょう。又平井取締役は照尾君等の馬來農園への入手旅費荷造費他の経費として白井君に百円を照尾に交付するよう托したのでもありました。白井君の船中で熱心な手入れ振りは同君と同航した細川悦次郎君から聞いたことがあります。

一方福原さんが大正十五年調査団長としてアマゾンに赴いた折、土民の家の土産ピメンタを見て大いに興味を持ち、カスタニヤールで経営するに当り、これを探り入れ片岡治義、本木七郎、西村亀太郎の各氏に栽培を命じ、又ベレン赴任後もアカラに奨励し、同地在植中であつた土屋一君が真面目に植栽していたことも私は見て知っています。然し福原さんは一本から二、三キロ採れると誤認し、当時のブラジルではピメンタは南洋印度が特産で伯国では出来ぬものと信じこんでいたので折角の改良が結実しなかったのです。幸いに世界大戦により南洋方面からの輸入が止まり土産種のみとなり、これが値上がりしたため、改めてアサイザールの二本が注目され、斎藤加藤の兩人により確認、増植されるに至ったのでしよう。

御教示の關係資料は拓務省から大東亞省に引継がれました

が、昭和二十年三月十日の大空襲で被曝全焼のため何物も残って居りません。

以上の件は私の記憶及び片々たるメモによってお知らせいたした次第。然し未だモーロクしなかったことは幸でありました。（以下省略）

▼但し白井牧之助氏は、この説を否定されており、あくまでご自分の意思で胡椒苗を入手され持ち込まれたと関係者に証言されて居られた。

▼辻小太郎は現地支配人粟津金六の退職で 混乱した現地の收拾と、ジュートの最終試作のためアマゾニア産業研究所長として赴任して来る。途中セイロン島に船が寄港したとき 印度ジュート種子を積込んでくる。

▼高拓第三回生が入植する。辻はアンジラ河口にジュート栽培を主体とする模範植民地を達成し所長・越知栄、副所長・高村正寿を任命する。

三回生は実業練習所の過程を廃し、直接入植させた。一回生も二回生も共に参加することとなった。

また、この時に入植して来た第一回家族移民十一家族（四名）も合流参加することになる。

しかしこのジュート試作は失敗となり研究所はジュート栽培を断念し、アンジラ河とワイクラッパ河に挟まった高台地に永年生作物を育成する農法に変更し、高台地に道路を開き、模範植民地より移転していくことになる。

このとき尾山良太は、自分の耕地に植えたジュートの中より二本のジュートだけが他より成長が早いことに気付き、その種子を採集することに努力する。

一本は河水に流され、残った一本をほとんどつきつきりで育てていくことになる。

尾山は郷里岡山で蘭栽培の経験があつた。

そのような作物の品種について、往々にして変わった品種が混在し、突然変異のように優良種が出現することもあると永年の経験により熟知していた。

彼はこの二本を発見したとき、近所の試作者にも各自の試作地をよく観るように注意したが、一人としても応えるものは無かつた。あるいは実際には存在せずに彼の試作地にのみ出現したのかも知れない。研究所はこの総員が参加した試作を失敗と認め、ジュートを主幹作物とすることを放棄する。

しかし尾山は尚アンジラに留まり試験場の高島義雄技師の忠告に従つて、家の前庭に播種した。

▼南拓一二回から一三回までの人達が入植する。

南拓では植民地全体の教育部主任として千葉県で小学校長職にあつた丸毅氏を招聘していた。

福原社長の子弟教育の方針は伯国教育が主流であつた。植民地の小学校には師範卒の正教員の配置をもとめた。

その結果エージャ・パレット・デ・アルメイダ女史が招聘

されることになり、会社において給料の補充をなし優遇した。

また、日語教育父兄会を組織し、丸教育主任が西尾あい、諏訪夫人を助手として倉庫の一部を教室として、週二回の日語授業を行った。

▼当時、トメアスーから退耕した人達で近郊に留まった者は多くカバネマ方面に集まった。主として米、マンジョウカ、落花生などの生産をし、野菜はほとんど作っていない。

何故当時の退耕者がカパネマ方面に多く集まったのか、その理由はわからない。

会社が退去命令を出した人は出来るだけ南伯か、近郊でも遠方に行かせたと云う噂はあった。

ブラジル人達の話によると、ブラガンサ地区ではカスタニャール以东は作物がよく出来、焼畑のサイクルが短年月で五年位で次作が出来た。

サンタ・イザベル地区では一〇年二〇年の期間が必要であつたと云われていた。

ベレンにはペルー下りの川本清八がウナ地区に住んでおり野菜を作っていた。またペルー下りの玄場松一が市内で野菜販売をやっていた。

▼パラ州知事・マガリヤンエス・バラタ。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス。

▼ブラジル憲法改正、新憲法一二〇条により一万ヘクタール以上の外国人による土地売買は連邦政府の承認を必要とし、百ヘクタール以上の無償譲渡は無効とする。

▲斎藤実。

▲国際連盟脱退。

▲丹那トンネル完成。

▲エノケン。

▲大卒初任給五十圓。

▲東京音頭・島の娘。

◆ヒトラー独裁内閣成立。

◆ルーズベルト米大統領就任。

◆アメリカの金融恐慌。

◆ドイツ国際連盟脱退。

◆ルーズベルトのニューデール政策。



氏衛佐比山崎

一九三四年（昭和九年）

▼マウエスの崎山は当時の生活状況を日本の後事を託して来た今井修一に次のように知らせている。

―二町歩の米、五斗入り九三袋ありました。米作に限らず作れば何でもよく出来ますが、わけでも果物類がよく出来ます。

―一日の労働賃金は二ミル（日貨五十銭位）ですが、日本への手紙一通一ミル要るので一日働いて二通しか出せません。然しこれが却って私どもを落着きのある真の植民者としてくれます。

金、金といって金に走ると植える物も金、作る物も金となりますが、真の植民者即ち真の百姓は、百姓するそのことに妙味があるのであります。

今日の本文を尽くして諸作物に喜ばれる、これ純農の味わい知る処、敢えて他に何を多く求めましょう。

私はマウエスに来て二年間の経験で、ここに来て百姓する者には次のような心持ちが必要であることを知りました。

第一、入植者は徹頭徹尾自給自足のこと。

第二、主食その他必ず自力で余るほど作ること。

第三、日用品は收穫物をもつて交換すること。

第四、收穫物を現金で売った場合は、その幾分もしくは全部を不時の用意に必ず貯蓄すること。

▼高拓四回生五〇名及び夫人合計八二名が入植する。

この頃、尾山は毎日ジュートの苗を手入れしていた。特に夜間のサウーバ蟻を警戒し、毎晩見回り万全の注意を払い育

てあげた。そしてマッチ箱一杯ほどの種子を採集することが出来た。

▼白井氏によつて持ち込まれた胡椒苗は長い航海で非常に弱っていたが、アサイザール試験場に移植されて宮田耕三場長のもとで育てられていった。一八本が枯れ二本が成長しそれから苗木を取り盛んに挿木増植を始めた。

しかし当時は、黒胡椒の市値が安くキロ八ミルから十ミル位であつて、副業にもならぬ状態であつた為、植民地一般の関心は散々たるものであつた。

▼日本に帰国中であつた福原社長は、植民地の基礎造りも終え、次の躍進に備えての資金調達もすませ、第一四回入植者達と同航あふりか丸で帰伯の途についた。

毎朝、甲板に現われ朝の挨拶を交わし皆と南拓の歌を高唱し士気を高めていた。

船がケープタウンを出港した直後、「武藤山治凶弾に斃る」との悲報が入った。

福原はそれきりサントス入港まで一度も部屋から出ず、皆の前に姿をあらわさなかった。

この事件は、武藤山治が相談役であつた時事新報に連載された帝国人絹株式会社の株式取扱に関し、少壮実業家グループの不正を糾弾した記事が原因であつた。

当時、騒がれた帝人事件の発端となり、このため斎藤内閣は総辞職へと発展していく。

▼ブラジル新憲法が公布され、移民二分制 限法が定められた。

各国の移民は過去50年間の入国数の二パーセントのみにすると云うもので、日本移民は二〇年の実績しかなく、二一八七〇名しか許可されないこととなった。

▼ベレンに日本帝国領事館開設・初代領事浜口光雄が赴任。

▼南拓の衛生対策として、熱帯病理学者松岡冬樹医学博士を衛生部主任として、トメアス植民地には中央病院をトメアス波止場近くに建設し、植民地内には第一、第二診療所を設け医師三名、歯科一名、薬剤師一名、看護婦三名、見習看護婦七名を待機させ、病院長としては法律に従いブラジル人医師が従事していた。

そして会社は植民地諸経費の半分も病院や衛生費に使った時代もあった。

それにもかかわらず前年の十月頃より悪性マラリアが猛威をふるい出して来て、死亡者の最高は一日四人も出てくる状態で、常に二十名以上が入院していると云う状態が続いた。

会社はマラリア症の治療費を免除し入植者の健康診断を実行し、マラリア原虫保持の疑いある者を施療した。

そのためアグア・ブランカの橋爪会館を臨時休養所として病床三六、炊事場、浴場を設備し、看護婦、炊事係において毎日医師が往診した。

そして罹病者を強制収容させ食費を無料とし栄養補給療法

を施した。

これは当時の入植者達ほとんどが経済的苦境にあり、栄養失調状態で身体が弱っていた為にマラリアに罹りやすいのを防ぐためであつた。

それとともに、保菌率の多いブラジル人労働者のためにも三、四十名を収容し得るバラック四棟を建設した。また衛生巡視員を戸別訪問させ、防疫、予防の相談相手とした。

▼パラ州知事・マガリヤンエス・バラタ。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス立憲政府が発足。

▲岡田啓介。

▲三菱重工業株式会社設立。

▲ベールブルース来日。

▲映画五十銭・タクシー二十銭。

▲軍縮条約破棄。

▲日産がダットサンの量産を始める。

▲赤城の子守歌・国境の歌。

◆ヒットラーとムッソリーニの会談。

◆ナチスの大粛正。

◆ソ連国際連盟加入・

◆ガンジー引退しネール。

◆米アリゾナ州日本人立退き要求。

◆中国共産党の大西遍始まる。

一九三五年（昭和一〇年）

▼トメアス植民地の開発当初から、会社の方針はカカオを永年作物として主力を傾注し、この他胡椒の試験栽培、繊維植物の研究、マンジョカの製粉事業、砂糖組合の設立などに苦心を続けたが、植民者は生活の安定、生きることには先ず追われるという日常であつた。

日本の本社の重役間で植民地経営への危惧が問題にされてきた。

現地会社よりの報告書は極めて成績不良である。

また根本問題としてブラジル新憲法による土地無償交付が連邦議会の権限となつたこと、移民二分制限法が規定され、後続の入植が多く望めなくなった。これでは拓殖計画の発展は望めない。重役間に現地の調査・改革整理案が台頭しその重任を負つて鐘紡の幹部社員井口茂寿郎と南拓取締役神崎昌太が四月に派遣されてきた。

福原社長、現地幹部と会社の業績、今後の見通しなど、種々検討した結果、井口茂寿郎は整理断行を決意、英断を下した。それは次のごとき処置であつた。

- 一、直営農場の全面閉鎖。
- 二、コロノ制度の解消。
- 三、農事試験場の廃止。
- 四、社員、従業員の整理。

五、モンテ・アレグレ植民地、カスタニヤール試験場の閉鎖。

これが発表されると、全入植者達に衝撃を与え大騒ぎとなった。

四月七日に橋爪会館に集合し、会社側の説明を求め、且つ一方的な会社の発表にその不当を責めた。

直営農場の閉鎖は主作カカオの放棄であり、試験場の廃止は植民地の発展に協力出来ない態度と解釈された。

壇上に立った福原社長は、会社の経営不振と現在の常状を招いたのは自分の責任であり、不徳の致すところであると陳謝したあと、金一封を入植者一同への慰謝金として差出し、引責辞職表明し壇上より降りた。福原はこのあと日本に帰国する。

井口氏の政策は植民地の自治、経費の節減、産業組合強化を三原則として、会社は船舶・病院・学校・運輸などを運営しコンパニア・ニッポニカ自体としては、貿易業に主力を注ぎ、利潤の上がらぬ植民地経営から手を引く形になった。

更に悪性マラリアが猛威を振り、罹病者が後を絶たず希望を失った植民地は脱耕者が増えて行った。

▼加藤友治は閉鎖された試験場に胡椒園をおいけば枯死するからと三十本を譲り受けて栽植すると共にコツコツと挿木増殖をしていた。その後、斎藤円治もそれをやるようになった。

▼トメアスで栽培しベレンで販売していた野菜組合は井口氏の産業組合強化策の路線に基づき、野菜の他に雑穀類の販売、生活必需品購買部も設置することとなり組合を正式にアカラ産業組合と改組した。

▼トメアスからの脱耕者が急増するにつれ、ベレン市と近郊に留まるものが増え次第に多くなってきた。

彼等は米作、マンジョカ作と共に野菜作りを始めた。ベレン市内では植物園付近、ウナ川付近、或るいは近くの島とかなどに何家族かが集まり生産し、市内の者は生産物を持ってベール・オ・ページ近くの朝市で売り始めた。

また自分で売ることが出来ない遠距離の人々のために委託販売を専門に行う人達森川、玄場、高橋、成瀬、加藤などが出て来た。

森川、成瀬はYMCA開拓団員で五反田より、みっちりポルトガル語を仕入れていたが、ベール・オ・ページで各自が野菜の露店売りを始めた人達はポ語が皆目分からずナス、トマトを並べているといろいろの質問が出て来た。

当時ベレン住民の中にはシリア、トルコ系もあり、彼等が替わって説明してくれたりしたので、何とか売ることが出来た。

南海の直営農場閉鎖時に会社の指示に従いカカオ栽培に全力を傾注してきた長谷川貞雄は、会社の無責任な一方的な仕打ちに対して激しく非難した。彼のカカオ園では既に着果し

ているものもあった。

彼は不穩分子として退去を命じられ、無一文となりベレンに出て来た。

当時ベネピーデスで炭焼きをしていた藤井の指導により植物園の裏の方の土地を借用、炭焼きを始め生活の目途を立てることが出来た。

この頃ベレンの人口は二十万と云われ木炭の需要は多かったので、菊池、武田、宇田も一年近く、現在の北伯農事試験場の場所で行っていたし、山甲義雄もオーレンよりベレンに移って来た時、炭焼きを行ったし、小川もエントロカメントで五十嵐、岸、伊藤、阿部、山崎の五戸もオウテイ口島で炭と野菜で生計を立てていた。

木炭にしても野菜にしても創業の一時期を過ぎると比較的气楽に暮らせるようになった。

長谷川の提案で月一回各戸会場持ち回りで任意に集会を持つようになった。

ピンガを傾けながら情報を交換しつつ雑談のうちに同胞の一体感を温め、移民族の中において親近感、相互協力の心を育んだ。この自然發生の集会が後年、日本人会へと発展していくことになる。

▼試験場の閉鎖でカスタニャールには片岡治義、本木七郎の二家族が自作農として残り、残りの人達は皆退去して行った。

南米企業は鈴木信次郎が委託され管理していた。

モンテ・アレグレ農場も閉鎖され、押切他男のみ残り他の職員は引揚げ、植民地病院も閉鎖、戸田善雄医師はアマゾン州 ビラ・アマゾンニアのアマゾンニア産業の病院長として招聘されて行った。

▼トメアスにいた鎌田譲はサンパウロのアリアンサチームの草創時代（一九二六年）同チームの名投手として活躍した人であった。一九三〇年に上塚の求めに応じPL、アマゾンニア産業研究所の先発隊の一員として参加、パリンチンスに半年、モンテ・アレグレに移り、二年後にトメアスに移り南拓に勤務していた。

当時、トメアスにはこれと云った娯楽がなく野球によつて積極性のある気迫を養い、無味乾燥の植民地生活に慰安を与えようと、中堅青年の戸田子郎、佐藤忠雄、沢田毅、沢田哲、関勝四郎、阿部昇等と計り、野球用具の寄付を仰ぎ一式を揃え 野球場は共同で作らげた。

鎌田はスパルタ訓練で鍛え、青年たちはそれに応え積極的に練習し、自ら逞しい開拓意欲を旺盛にした。日曜日の練習、或るいは試合日には観客応援も集まり植民地の大きな慰安ともなった。

▼古関富弥副領事ベレン就任。

▼尾山は三回目の増殖によりジュート新品種の種子二キロの

収穫を得るようになった。

▼高拓五回生一八名が入植してくる。

▼パラ州知事・ホベルト・メンドンサそのあと、グアマ・マルシエルとなる。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス。

▼ゴイヤニヤを造り、ゴヤス州の首都とする。

▲当時日本においては、ようやくアマゾンア産業研究所の存在が明確となったのみで、いまだ有利な農業の確立をみず、研究所も入植者も共に資本を投ずるのみでほとんど利益を生まない状態であつた。

そのため会社を設立しても利益の期待が出来ず、利益なきところには株主が集まつてこないから会社設立の機運も出て来ない状態であつた。

幸いにして政府及び議会はよくこの事情を理解し、昭和十年三月第六十七議会において、アマゾンア産業研究所を土台として創立せる新会社に対し、翌十一年度以降十年間年六分の利益補給が決定された。

これだけでは十分なこととは出来ないと、これまでの事業に後援を惜しまなかった 郷誠之介は、三井合名会社、三菱合名会社、住友合資会社、安田保険会社、東洋拓殖株式会社、五大会社に新会社の設立をはかった。

そこで郷男爵を始め三井の池田成杉、三菱の串田万蔵、住友の小倉正恒、安田の森広藏、東拓の高山長幸などは、それ

それ各社を代表してしばしば会合協議を重ね、九月十七日内閣総理大臣官邸における会合において本事業の経営は当分困難なるも、国家的有意義の事業として、アマゾン産業株式会社の設立が決定された。

この日政府側からは高橋大蔵大臣、児玉拓務大臣、広田外務大臣、高山拓務局長などが出席、民間側から郷男爵、池田、串田、小倉、森、高山、上塚司などが集り協議の結果、アマゾニアの現状に鑑みとりあえず資本金百万円、総株数を二万株とし、参加者の会社で全株引受ける事今後の事業次第で増資を行うことなどを取り決めた。

そのあと工業倶楽部で会社創立発起人会を開きアマゾン産業株式会社の成立をみるに至った。

そのため現地のアマゾン産業研究所の株一切を継承するためのブラジル国法に基づく新会社設立の必要があった。

▲岡田啓介。

▲日本共産党中央委員長壤成。

▲天皇機関説。

▲第一回芥川賞、直木賞。

▲年賀切手。

▲二人は若い・うちの女房には髭がない。

◆中共（毛沢東）宣言。

◆イタリア、エチオピア侵略。

一九三六年（昭和十一年）

▼高拓六回生並びに一般家族入植者五七名と同航した上塚はアマゾンア産業株式会社の伯国会社をパリンチンスに設立する。

資本金四千コントスでコンパニア・インデュスツリアル・アマゾンセ株式会社を創立し、取締役社長上塚司、取締役支配人は辻小太郎となった。

会社は従来の社内整理を行うと共に事業発展の計画を進めたが、その方針は会社内部の人員整理および部課の廃合による経費の節減と、収益増加のために貿易部を新設し、アマゾン産物の輸出と日本品の輸入を行い、なお入植者の生計確立のために組合を強化し、高台地の作物としてはゴム、パラオ栗などの永年性のものを主として、副作として米、マンジョカの栽培を奨励し、また低湿地の作物として尾山良太が見つけたジュートの優良品種の栽培に重点を置いた。

前年に尾山が採取した僅かな種子を会社が播種培養してとれた約三〇キロの種子の三分の一を尾山に返し、三分の一を中内義正に与え、残りを会社の播種用とした。

尾山と中内には毎月一定の給料と土地を無償で与えた。

尾山は家族全部フォルモザ島に移りジュート栽培に専念することとなり、約五町歩に蒔きつけ、中内はビラ・アマゾ

ニアの低湿地に約三町歩の栽培を行い、尾山は繊維約五トン、中内は約三トン半を収穫した。

▼トメアスでは加藤友治と斎藤円治の二人が胡椒の木を約一五〇本に増やしていた。

この年、南拓の最後の入植者一二家族と単独三名が到着した。

悪性マラリアが更に猛威をふるい、退耕者が続出していた。

▼ベレンに集まって来た日本人のよりどころの必要を感じた長谷川貞雄は、当時野菜作りの多かった同胞と図り、ベレン野菜任意組合を設立する。

▼上塚は事業が完了していない為に、コンセッション契約の期間延長を申請し州政府の認可を得て契約は締結された。

しかし新憲法により一万ヘクタール以上の土地譲渡は、一件ごとに連邦上院の認可を必要とした為に、この件は議会で論争を呼び最終的には否決される事になる。

▼パラ州知事・ガマ・マルシエル。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス。

▲広田弘毅。

▲二・二六事件。

▲国会議事堂落成。

▲阿部定事件。

▲木炭自動車。

▲ああ、それなのに・忘れちゃいやよ。

◆スペイン内乱。

◆スターリン憲法制定。

◆ベルリン・オリンピック。

◆日独防共協定。

◆イタリア、エチオピアを植民地化。

一九三七年（昭和十二年）

▼尾山、仲内両名の生産したジュート六〇俵（二、七七〇キロ）は四月にベレンのマルチン・ジョルジ商会に発送され七月に六、一七一キロを送り出し、その高品質が保証された。

日本人によりアマゾンにおけるジュートが世界市場に向けて売り出された最初であった。新品種は発見者の名を冠して「尾山種」と命名され、その生産品は「アマゾン・ジュート」と呼ばれるようになった。

尾山の報告でジュートの栽培収支計算は費やされた総経費の約一〇〇パーセントが利益になることがわかり、それが入植者達を刺激し、高台地の耕地を捨ててジュートを植えるために低湿地に進出するものが急増してきた。

高拓七回生四名入植してくる。この頃はまだ営農目的が立たぬ為に脱耕者が続出していき、高拓生二四八名入植のうち一一一名となっていく。また日本での高拓生募集は中止にな

る。

▼トメアスではアカラ産業組合の強化が逐年実現していき、組合員一同の自力更生の意気盛んとなり、生産物の増産と販売が年々増加していった。

主なる生産物は米、野菜、木材、家畜、綿花、ウルクー、マシジョカ粉などであった。

丸理事長が南伯に転任したので土屋一が理事長になり、専務理事は加藤友治の留任となった。

加藤友治と斎藤円治の二人が育てた胡椒は少量ではあるが、組合によってベレン市場に販売され始めた。

この頃、胡椒の苗木は一〇本二〇本というように植民地内に植える人が増えて行った。

トメアスで生産される米は、きれいで味がよいのでベレン市民にアカラ米として評判がよかった。米作面積千三百町歩となり籾の生産は三万俵を超した。

その為、生産者は自家生産籾を精米するために共同であるいは個人で精米用の水車を建設することになった。

トメアス植民地の米作華やかな時代となる。

▼トメアスやアマゾン流域から脱耕した人達でベレン市に留まった者は、ほとんど無資本でてつとり早く始められ、自分で作ったものを毎日市場に出荷して売れ、小金が容易に人手出来るから急速に野菜作りが増加した。

▼パラ州知事・ガマ・マルシエル。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス。

▼新国家体制を確立、憲法を廃し上下院と州議會を閉鎖、中央政權とし最低賃金法・社会福祉局を設定、小学校での外国語教育を禁止する。

▲林銑十郎、近衛文麿。

▲日華事変。

▲大本營設置。

▲千人針、はがき二銭。

▲軍事インフレ。

▲人生劇場・愛国行進曲。

◆ビルマ、インドより分離。

◆イタリア国際連盟脱退。

◆日独伊防共協定。

一九三八年（昭和十三年）

▼ベレンで野菜作りをする人達が増えて来たために野菜任意組合が組織化され理事長長谷川貞雄、専務理事小川鎌一、会計五味栄となり、主なる組合員は菊池藤吉、笠原伊介、千葉彦洋、石田勝之助、竹下勝二、永利幸平、野原啓太郎、横山好見、御法円龍、上村碓市、政木正人などで、組合加入金二ミル、出資金一ロ一〇ミルで組合資本金五百ミルとした。

そのころベレン市内では、森川春一や玄場松一などがキタ

ンダ（野菜果物店）を開いていた。

またアカラ野菜組合の販売店や青物市場に野菜売板台（バンカ）を持ち野菜を売る者が増え、ベレンでの野菜はほとんどが日本人によって供給されるようになって来た。

▼この年、ジュートの生産量は六〇トンとなる。

リオの有力新聞「ジョルナル・ド・ブラジル」がアマゾン・ジュート栽培に於ける日本人の功績を称える。

続いて「ジョルナル・ド・コメルシオ」「コレイオ・デ・マニャン」などの社説で日本人移住者によってブラジル重要輸入品に近い将来国産品によってとって替り、その影響は国家財政に甚大な影響を与えると絶賛し、この風潮がパラ州を動かし会社の事業は同州までに進展していくことになる。こうして高拓生の大部分はジュート栽培に進出していくことになる。

マウエス、マナウス、モンテ・アレグレに入植した邦人たちにもジュート作りが広がっていくことになる。

▼国営ラジオ放送「オーラ・ド・ブラジル」が開始される。

▼石油審議会が設立される。

▼反乱軍が大統領府を攻撃する。

▼ランピオンとマリアボニータが殺される。

▲近衛文麿。

▲国家総動員法。

▲ヒットラー来日。

▲愛染かつら。

▲上海だより・支那の夜。

◆独、オーストリア併合。

◆フランスでゼネスト。



1939年代のトマスー農村風景

一九三九年（昭和一四年）

▼崎山は海外植民学校のマウエス分校を設立すべく、南伯の校友を訪ね協力を求めるため夫人同伴で歴訪の旅に出た。

各地で教え子を訪ね請われれば講演を行なった。

当時日本は中国大陸進出が盛んで、南伯移民間に動揺があり帰国し、大陸へ再移住しようかと去就に迷う向きも多かった。

それに対し崎山は「時局に鑑み敢えて一言せん」と題し講演して廻った。

崎山は永住の決心を強調し、ここで生まれた子供たちの故郷の重要性を訴えた。

自分たちにとって故郷が大切であるように、生まれた子供たちにとってもブラジルは大切な故郷であることを忘れてはならないと強調した。

▼辻小太郎引率による花嫁呼寄せと一般呼寄せをもって戦前の移住は完全に中断されることになる。

▼モンテ・アレグレの平賀夫妻を訪ねた前田光世は、トメアス植民地の指導者として是非トメアスに転住して戴きたいと再三の要請をし、平賀夫妻はトメアスに移転する。

▼バルガス大統領は、ヨーロッパの戦乱に対して中立を宣言する。

▼新聞、雑誌の検閲が始まる。

▲平沼瑛一郎・阿部信行。

▲国民徴用令公布。

▲双葉山六十九連勝。

▲白米、ネオン、パーマ禁止。

▲父よ、あなたは強かった。

◆第二次世界大戦欧州が始まる。

◆ドイツ、ポーランドに侵入。

◆イギリス・フランスの対独宣戦。

一九四〇年（昭和十五年）

▼南伯に講演旅行をしていた崎山夫妻は五月にマウエスに帰着、マウエスでは彼の旅立ちの直後よりマラリアが発生し猛威を振るっていた。彼も帰宅二ヶ月後より罹病し、分校設立の計画実行は一時中止せざるを得なくなる。

▼バルガス大統領がアマゾナス州を視察の途中、水上機が給油の為パリンチンスに停泊した。上塚と辻はネーベス郡長を同行してランチで訪問、郡長の紹介で新しいジュートを開発した会社の責任者達であると説明、大統領はいろいろと質問し興味を示した。

帰途、再び給油に立寄った際に再び会談し、辻はジュートの格付法公布の懇請をする。

大統領の指示により農林大臣宛の申請書が提出され、その結果格付法が公布されアマゾニア産業株式会社が格付法人として指定される。

▼アマゾニア興業関係者及び崎山関係者一六家族はジュート栽培の為にアマゾニア産業に入社する。

▼パラ州知事・ガマ・マルシエル。

▼パラ州人口約九五万人。

▼オ・エスタード新聞に政府の検閲が入り一九四五年まで続く。

▲米内光政・近衛文麿。

▲隣り組・国民服。

▲ぜいたくは敵だ。

▲ダンスホール閉鎖。

▲湖畔の宿・暁に祈る。

◆イタリアが英・仏に宣戦。

◆ドゴール將軍・自由フランス宣言。

◆日独伊三国同盟成立。

一九四一年（昭和一六年）

▼ベレンには約七〇家族の日本人が居住し約半分が野菜作り残りほとんどが野菜の小売りをする。

▼カスタニヤールでは佐藤信市が養鶏業を確立していた。

佐藤は東京農大出身でアマゾン産産業研究所所員として赴任していたが、その後カスタニヤール農場に転勤し、農場閉鎖後独立しコツコツと養鶏に取り組んでいた。

▼崎山比佐衛はマラリアで倒れ、マウエスで死亡。コンデ・コマ死亡す。

▼ベレン、ナタール、レシーフェにアメリカ軍基地の建設が始まる。

▲近衛文麿・東条英機。

▲真珠湾攻撃・太平洋戦争開始。

▲もんぺ・ゲートル。

▲煙草一人一個売り。

▲官僚主導業界協調体制の確立。

▲そうだその意気。

◆ドイツのソ連侵入。

一九四二年（昭和一七年）

▼ドイツの潜水艦がブラジル沿岸でブラジル商船を轟沈させ、乗客六〇七名が死亡。

▼ブラジルはドイツ・日本・イタリアに対し宣戦布告をする。

▼ミルレー스가クルゼイロに替わる。

▼ベレン帝国領事館閉鎖。

▼ベレンで敵国人（日本人・ドイツ人・イタリア人）の家屋、住宅の焼討ちが始まる。また、これら外国人達は収容所に留置される。

▼ブラジルの対日国交断絶によりトメアスは、そのままパラ州の管轄下に移り州営トメアス植民地となりベレンに収容されていた外国人たちはトメアスに収容されるようになる。

▼南拓、アマゾン産業の財産は没収され 日系企業体の一切の特権、資産などは事実上無に等しいものになってしまった。

▼パラ州知事・ガマ・マルシエル。

▲東条英機。

▲シンガポール占領。

▲産めや増やせや。

▲ミッドウェー沖海戦で敗北。

▲月月火水木金金。

◆アメリカ、イギリス、ソ連、中国の東亜作戦会議。

一九四三年（昭和一八年）

▼辻はアマゾニア産業社員に、それぞれ自営の道を選ぶように指示し、自身はサンタレンに移転しジュート作りを始める。

▼トメアスに軟禁された在植者たちは胡椒の増産に専念し、その本数は五千本近くになっていた。

しかし生産物の販売が州政府に管理された為にベレン市場価格よりキロ当り一五クルゼイロスもの差があり、野菜や米作などの換金の早い作物にも手を広げざるを得なかった。

▼パラ州知事・ミゲル・ベルナンブーコ・フリーリョ。

▼国防上の理由でパラ州よりマカバが分割して連邦直轄州となる。

この他、リオ・ブランコ、グアポレ、ポンタポラン、イグアスーなどが直轄州となる。

▲東条英機。

▲アッツ島の日本軍全滅。

▲ガダルカナル島より日本軍撤退。

▲敵国籍の追放。

▲ジャズ禁止。

▲加藤隼戦闘隊。

◆イタリア降服。

◆モスクワ会談。

◆カイロ宣言。

一九四四年（昭和一九年）

▼モンテ・アレグレの南拓植民地は連邦植民地（コロニア・ナショナル・パラ）として活用されるようになった。

この植民地には外国人は居住できない規定が出来た。

人望のあった押切他男には是非在留して欲しいとの住民の希望があり、当局もこれを認め植民地指導者としてそのまま留まり、単に営農指導のみでなく病氣治療にまで引っ放り出され、積極的に応対し住民の期待に応えた。

当時の郡長カテチ・ピニエイロ（後の下院議長・厚生大臣）は押切の人柄を尊敬し多くの協力を惜しまなかった。

▼アマゾン中流のジュート栽培者たちはブラジル商人に移ったジュート産業の資本下で栽培を続けて行く。

▼トメアスには州警兵が駐在し、各戸の家宅捜査をし、日本文字の書類は殆ど没収されていた。

組合の活動も停止状態となり、仕事としては生産物と生活必需品の受渡及びその精算事務取扱の程度となり、藤橋鋼三が実務を担当、その後鈴木一郎がベレンから引揚げてから藤橋に代わる。

理事長斎藤円治、専務理事鈴木一郎両氏のコンビで戦時中の組合は運営された。

コンパニア・ニッポニカ在勤独身社員は、ボア・ビスタの共同農場「和気の寮」に入り、戸田子郎を中心に戦時中は百姓生活に専念した。

アマゾン上流地方から来た人達は橋爪会館に入り道路直し等をやった。

▼パラ州知事・マガリヤンエス・バラタ。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス。

▼ブラジル軍ヨーロッパ戦線に参加。

▲小磯国昭。

▲神風特攻隊初出撃。

▲サイパン島陥落。

▲東京初空襲。

▲煙草1日六本。

▲同期の桜。

◆シリア独立。

◆連合軍ノルマンディー上陸。

◆連合軍のパリー解放。

一九四五年（昭和二〇年）

▼トメアスの胡椒は年を迫って増植されて 行き、約三万本になる。

（一九四六年から一九四七年 欠）

当時の理事長斎藤円治、専務理事戸田子郎、監事加藤友治は、新しい時代には若い人材が指導するべきと、組合総会において斎藤、加藤両幹部は勇退し、戸田子郎を理事長に推し役員を更新して、産業組合の強化協調を期することとなった。

そして運輸航行を同志会でやり、生産物の統一販売と生活用品の購買仕入配給は産業組合で経営していくことになった。

▼モンテ・アレグレの押切は、この年トメアスに移って行く。

▼パラ州知事・オダビオ・メイラ。

▼大統領・ガスバル・ドウトラ。

▼直轄州・ボンタボラン、イグアスーがなくなる。

▲吉田茂。

▲天皇人間宣言。

▲新円切り替え。

▲日本国新憲法公布。

▲プロ野球復活。

▲W・プライス著「大アマゾン探検紀」が大陸書房より発刊。

▲りんごの歌・東京の花売り娘。

◆国連第一回総会。

◆フィリッピン独立宣言。

一九四七年（昭和三二年）

▼トメアスの胡椒売上げが急増してくる。

アカラ産業組合を公認産業組合に登録しトメアス混合農業組合（通称、トメアス産業組合）と改称、アカラ植民地もトメアス植民地と改称する。

七月の臨時総会でアカラ産組に多年功労のあつた加藤友治、斎藤円治両氏を満場一致で顧問に推薦し、平賀練吉を理事長に選出した。

九月の定期総会で母国戦災救援金として五コントス也を、組合事業資金をさいて日本に贈った。

▼パラ州知事・モーラ・カルバーリヨ。

▼大統領・ガスバル・ドウトラ。

▼ブラジル共産党解党。

▲片山哲。

▲労働基準法・独占禁止法。

▲百万円宝くじ。

▲斜陽族。サツカリン。

▲カストリ雑法。

▲東京ブギウギ。

◆米ソの対立表面化。

◆然し年々政府の機関(発表)Aが介在して 生産物販売は市場価格よりいゆも紙成。ため、大きな障客になっていた。

▼ジュートの生産が六、八八二屯になる。

▼パチ四州知事(昭和二十三年)ピッテンコート、ザカリア・

ア世界の胡椒産地であった南洋諸国が独立し、それまで中国人が統領所有していた胡椒園が荒廃し生産量が激変のどころ各政党誕生(UDN、PTB、PSD、PCB)。へトメアスから国

産胡椒が出荷されるに及びトメアスの名前はブラジル中に知れ渡るようになった。

▲広島、長崎に原爆投下。
この年トメアス組合は約四〇屯の胡椒を出荷し、売上四、

五〇〇コントスの実績をしめすことになる。

▲ビール二円。

▼この頃、北伯農事研究所長にブラジル農政経済学の権威で

▲パンパンガール。
ある山の杉の子。

◆彼は研究所のグアマ河岸に接する低湿地(バルゼア)利用

策を計画降伏。原始林を伐採焼き払い、水溜りを埋めブルトー

◆が整地を宣言。アマ河岸からの低湿地に二百メートル間隔ご

◆国陸境合排水溝を作りあげた。

そしてグアマ河水の満潮には土地に灌漑し、干潮には排水
する丸田を考へ昭和式米作の試作を行った。

▼植民地を、日も早く復興せしめるには戦前のように会社に依存出
来ぬ状態地なので、(対外交渉を極めて)独立自存して、好成績制

会長関勝四郎、委員長戸田子郎、委員佐藤忠雄、高橋勝正、沢田毅、藤橋鋼三、沢田哲、永野敬士、油田亨、沢田照男、永野青春、柴田英夫、日高寅男、村上広などの17名であつた。

まずベレンに出荷する生産物である野菜運搬の州管理の事務取扱いが、円滑を欠くことであり、船便が渋滞すれば植民地の動脈を止めるようなもので自分達の船舶を所有することが急務であつた。

経済的に豊かでない同志会の最初の仕事として、素人のより集まりで無謀とは考えられたがともかく造船を決議した。

永野敬士が棟梁となり、高橋勝正を造船製図係として森林から材料を切り出し、七ヶ月を費やして一八屯の船を建造して第一ウニベルサル号と命名した。

十一月に処女航海の途につくに至り、途中の故障十七回で修理しながらベレン港に到着し、ベレン・トメアス間の運輸は完全に植民地達の手によって確保された。

次に商取引の直接行使権を産業組合に返還させる運動にも着手し、日伯両語に精通する高橋勝正、沢田哲の兩人がこの難渉にあたり州当局に嘆願、この交渉も成功し、同志会の第二の目的であつた販売購買権も我等の手にと難問題も解決することが出来た。

この間、産業組合幹部も同志会に全幅の助力を与えて激励した。

上げた。

それによって「アマゾン河口地帯における低湿地の農業」と題する論文を発表し世論の注意を促した。

▼パラ州知事・モーラ・カルバリーヨ。

▲芦田均・吉田茂。

▲東条ら死刑。

▲帝銀事件・初ナイター。

▲アロハ・リーゼント。

▲C・ワグラー著「アマゾンの町」新世界社より発刊。

▲湯の町エレジー・異国の丘。

◆ガンジー暗殺。

◆ビルマ共和国独立。

◆世界人権宣言。

一九四九年（昭和二十四年）

▼トメアスの農民同志会はその船舶、貨物自動車など水陸の運輸権を産組に移管することにする。

これによって植民地の産業組合中心主義が確立し、機構の統一と人心の和を以て躍進への明るい段階に入る時代となる。

▼パラ州知事・モーラ・カルバリーヨ。

▼大統領・ガスバル・ドウトラ。

▲吉田茂。

▲下山、松川、三鷹事件。

▲湯川博士ノーベル賞。

▲単一為替レート決定、一ドルが三六〇円。

▲長崎の鐘・銀座のカンカン娘。

◆北大西洋条約調印。

◆東ドイツ、西ドイツの成立。

◆国府、台湾に移転。

◆中華人民共和国成立。

一九五〇年（昭和二十五年）

▼この年、大統領の改選にあたり、バルガスは労働党を組織し立候補した。

選挙演説のため全国遷説の途次、サンタレンに立ち寄り教会前広場で、自分が大統領に当選すればジュート産業を保護しジュート製麻工場をサンタレンに建設し ジュート栽培者達を救済すると公約した。

辻小太郎はサンタレンに転住してからジュート作りから商業を営んでいた。

この演説にも立ち会ったが、その時は直接に話をする事は出来なかった。

バルガスは選挙に大勝し、その記者会見の席上でも、このサンタレンに於けるジュート工場建設の公約に触れた発言が紙上に発表されていた。

▼トメアス産業組合の役員会では、サンパウロ出張販売所設

置が起案され、戸田理事のサンパウロ市場視察報告のあと、サンパウロ出張所が実現された。

第一回出荷の黒胡椒はキロ当り一〇〇クルゼイロスで、インド産に比して品質・価格の点でも十分競争出来る見込みがつき、明るい希望がもたらされた。

▼パラ州人口約百一二万人。

▼パラ州知事・パルジール・ポイド。

▼大統領・ガスバル・ドウトラ。

▼対日平和条約調印。

▼テレビ放送（トウツピー）始まる。

▼ワールド・カップ、ブラジルで行う。

▲吉田茂。

▲ミス・日本、山本富士子。

▲金閣寺炎上。

▲そばかけ一五円・千円札。

▲東京海外移住審議会発足。

▲白い花の咲く頃・東京キッド。

◆中ソ友好同盟条約。

◆アメリカでマッカーシー旋風。

◆朝鮮動乱開始。

一九五一年（昭和二六年）

▼二月一日の大統領の就任式にサンタレン労働党支部長エリ

アス・ピントが列席することを知った辻小太郎は、大統領宛に私信を届けてもらうことを依頼した。

辻はその書簡に「私は一九四〇年大統領が水上機の給油のためパリンチンスに立寄られたとき往き帰りの二回に亘りジュートの歴史について説明した日本人であります。……私らのアマゾニア産業株式会社は戦時中に敵性資産としてブラジル政府に接收され、マナウスの商事会社に売却され代金七百コントスはブラジル銀行に凍結された状態になっております。大統領が公約され、計画されているサンタレン製麻会社に全額投資しますから凍結を解除されたい旨……したしめた。エリアス・ピントより大統領が君に会いたい希望である、すぐ来い。の電報が入った。

辻は、その翌々日出発し指定のリオのホテルに着くと、エリアスとサンタレン出身のブラジル銀行マナウス支店長ハイムンド・フィゲラ（後のアマゾニア借用銀行総裁）が待っていた。

「大統領は私達に製麻会社を引き受けてもらいたい希望があり、それについて趣意書と計画書を作成する必要がある。趣意書は作成するがジュートについては何も分からない、計画書を作ってくれ」とのことので三日三晩かかって五〇枚ほどの計画書を作り上げた。

三月三日、揃ってペトロポリスのリオ・ネグロ宮殿に向かい大統領に書類提出すると、「この会社の設立は貴君達で引

受けてもらいましょう」と云われ、辻は設立資金二万五千コ
ントスは必要でありアマゾンの田舎では到底そのような資金
は集まらないと話したところ、大統領は

「自分は元首として出来るだけの便宜と援助を与えるから引
受けてもらいたい」と要請されたために引き受けることにな
った。

これがサンタレン製麻会社の由来である。

その会談のあとで辻は、大統領の日本移民に対するご感想
はいかがですか、と尋ると「私は賛成だ、寒いところでは新
しい移民を入れなくとも自然に発展するが暑い地方ならいく
らでも来てもらいたいと考えている。このことは先日来訪し
た中村代議士にも話したことである」と答えられた。

この返事で大統領がアマゾン地域への日本移民に賛成であ
ること、いくらでも入植させたい意向であることが分かった
辻は、早速日本の上塚司にこのことを連絡し、日本政府代表
として移民問題をブラジル政府と交渉する権限をもって来伯
されるように要請した。

吉田首相も賛意を示したが、国際情勢が政府代表を送れる
状況でなかったために実現できず、辻はアマゾン地区在住の
主だった日本人に話しかけ、上塚を招聘することになる。

東伯した上塚は辻を同行してジュート栽培の日本人を訪ね、
移民導入について打合せを行った。

そのあと二人はリオに行き移民入植許可申請書を提出した。

ジュート生産は年々増加しているが、国内消費を完全に満たすためには、さらに一万五千トンの増産が必要である。

この不足分を増産するために一九五二年より五ヶ年間に五千家族約二万五千人の日本人の入植を許可して頂きたい、その実現のために左の諸条件を整えて下さい。

一、国際連合と打合せて移民の渡航費を負担してもらうよう手配願いたい。

二、「一定の規定のもとにジュート栽培者へ資金の融資を確保して頂きたい。

三、パラー、アマゾナス両州政府と打合せて、ジュート栽培に必要とする土地を移民のために確保して欲しい。

この申請書は農林大臣、移民審議会に廻され、十二月に五千家族の入国が決定した旨、時のパラー州知事ザカリア・アスンソンより辻に通知してきた。

上塚と辻は、直ちに一九五二年度ジュート栽培地に八十家族を入植させる案を立て引受人と打合せて、森林伐採やら住宅の建設などを行うことにした。

一方、国連から日本移民に対する渡航費の支出は出来ないことがわかった。

そこで農林大臣に農産奨励の意味から渡航費を支出してもらうよう交渉し、大臣は賛成したが大蔵大臣が予算がないと否決した。

結局、日本政府に負担してもらうしか外なく、日本政府に

も予算なく相互保証の形式をとった貸付方法をとることに
なった。

今度は移民を運ぶ船がない、大阪商船のサントス丸に特別
三等室があり五十四名しか乗れないので、第一回八十家族四
百人の予定を変更して船室数に合わせることにした。

▼パラ州知事・アルベルト・エンジュハード、アルナウド・
ローポ、ザカリア・アスンソン。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス。

▼最低賃金法発令。

▲吉田茂。

▲外務省欧米課第二課移民班を設置。

▲渡航費貸付制度実施・海外移住中央会発足（海外移住協会
と海外移住促進協議会が併合）。

▲サンフランシスコ条約。

▲マッカーサー罷免。

▲パチンコ大流行。

▲銭湯二一銭・GI刈り。

▲りんご追分・ヤットン節。

◆太平洋安全保障条約。

◆スエズ地帯反英暴動。

一九五二年（昭和二十七年）

▼トメアスの胡椒相場が高騰し植民地は躍進の波に乗り出し

た。

▲日本国内で農林省がアマゾン移住の募集を開始する。現地受入機関に辻商会を指定する。神戸移住幹旋所を再開。

▲海外移住促進議員連盟の結成。

▲移住送り出し県として有名な福島県では、冷害凶作で稲が四分作、梨が六分作と云う状態なので特に対ブラジルの関心が深く、県庁内の開拓課に多数のブラジル移住希望の申込みがあり、開拓課では移住者選出のために次のような試験用紙を作成した。

試験は筆記と口頭試問に分かれ、まず筆記では型通りの本籍、現住所、家長氏名、家族内容に次いで農業経営状況として、

イ・耕作面積。

ロ・自作か小作か。

ハ・収支状況、となり以下、

一・貴方の名前をローマ字で書いて下さい

ニ・ブラジルの首都は何と云いますか。

三・南米最大の河は、何河ですか。

四・ブラジルの言葉は何語ですか。

五・ブラジルの現大統領は何と云う人か。

六・ブラジルの特産物は何と何か。

七・貴方は海外移住者として、どんな人が望ましいと思う

か。

八・南米で稲作をする場合、粃を蒔く方法は。

九・貴方は海外移住後、何年位したら日本へ帰る予定か。

一〇・貴方は渡航後必ずくる望郷の念をどのように処理するか。

一一・ブラジルの気候はどの辺が一番良いと思うか。

一二・神戸からサンパウロまで船で何日位で行けると思つか、航空便では何日か。

また、口頭試問では、

一・貴方の経歴は。

二・応募の動機及び入植希望地。

三・貴方が渡航することに対して一番先きに相談した人は。妻子父母、兄弟は賛成しているか。

四・貴方は幸いに渡航出来たら、子供の教育に対していかに考えているか。

五・渡航の際の家事の整理は誰がやるのか。渡航後連絡する近親者の住所氏名。

六・協調性はあるか。(素直に協調出来るか。感情をすぐ顔に表さないか。

▼ 反抗的でないか。性温順か。)

七・開拓意欲の有無。(意思強固か。積極的か。消極的か。体躯頑健か。開拓経験ありや、どこで。)

八・携行資金及びその他必需資金はどれ程あるか。その捻

出方法は。

九・容姿態度、言語、動作、礼儀、服装。

一〇・発表力。(思っていることを充分述べているか。話に順序があるか。音声明瞭。)

一一・誠実性。(仕事を安心して任せられる人か。仕事を真面目に考える人か。困難にあたりくじけないか。)

一二・農業機械の操作知識。(耕運トラクター。カルチベター。碎上磯。播種機。石油発動機。モーターその他。)

以上の筆記、口頭試験総合得点により適否を決めていたようだ。

▲十二月、戦後集団移住第一回一七家族五四名がジュート栽培の為に出発する。

▲吉田茂。

▲メーデー事件。

▲財閥復活。

▲君の名は・真知子巻き。

▲芸者ワルツ・テネシーワルツ。

◆李承晩ライン宣言。

◆欧州防衛協同条約。

◆アメリカの水爆実験。

▼パラ州知事・ザカリア・アスンソン。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス。

一九五三年（昭和二八年）

▼ベレン領事館再開設。領事・古関富弥。

▼航海中の第一回移住者の到着が、今後アマゾン向け大量移住の試金石となるとブラジル中の日系社会が注目し始め、パウリスタ新聞社の記者が、熱帯地に入る戦後移住者の健康を案じ、マラリアその他熱帯寄生虫学の権威サンパウロ医科大学のサムエル・ペソーア教授を訪れ、アマゾン地帯の衛生状態について教授の意見を聞いた記事が、同紙二月二六日付にあるので紹介する。

サムエル教授は昨年ヨーロッパの国際科学会議に出席後、英国王立協会員で著名な生物学者ジョゼフ・ニーダム博士と共にソ連、満州、支那を経て北朝鮮に入り一時世界の世論を沸かせた米軍による細菌弾の使用有無について、実地踏査に当たった人で東洋に対して深い理解を持った学者である。

また同教授はかつてチエテ移住地を始め邦人集団地がマラリア、黄熱病などに悩まされた際に現地に赴き、その対策に貢献して来た人であるが、同教授は

・・・アマゾン地帯のマラリアは、いわゆる「三日熱」と呼ばれる悪性マラリアで猛烈である。治療は進んで来たが、まず病原を駆除することが大切だ。

しかしDDTやBHCなどの駆虫剤も日を経るに従って、蠅や蚊に抗素が生じ抵抗力が強くなり、DDTのなかで平気

で生きて行く蟬が現れたりするので100%と云うわけに行かない。

アマゾンに於ける衛生上の最も重要な問題は暑熱と栄養であり、年中室内温度が二十七、八度（夜）日中三十度以上と云う暑さが続くことは人体機能の平衡を保つ上にも、心理的な上にも重大な支障を与える、極寒地帯の住民にとって暖をとることが重要な問題であるがごとく、アマゾンのような暑いところでは寒さをとることが必要だ。

冷房装置を施した大きな部屋で男女子供も一定の時間を過ごし「寒さ」を感じると云うことが新移民達にとって必要欠くべからざることだ、アマゾンでは暑さに強いとされたセララー州の移民達も抵抗出来なかった。

家の中で仕事をする人達はまだよいが直射日光のなかで働く者は、時々「寒さ」をとらねば心理的に参ってしまう。

▼三月七日戦後第一回ジュート集団移住者一七家族五四名がベレン港に到着。

▼この年、アマゾン河が氾濫し大洪水が起こる。

▼入植したばかりのジュート移住者から四家族が脱耕する事件が起こり、当時のマスコミを騒がす。

四月十日付けのパウリスタ新聞より抜粋。

「この脱耕事件について毎日新聞高宮敬記者は次のような報道を寄せた。

三月中旬アマゾン州のジュート栽培地に入植したばかりの第一回移民団家族の中から、配耕地より脱出するものが続出している。

アマゾン移民のテスト・ケースとしての第一回アマゾン移民団の事故だけに影響するところ大きいとみられ、現地の出先官憲、邦人間にも少なからず衝撃を与えている。

四月七日までに判明している脱出家族はパリンチンスのKへ入植したNとKの両家族六名とイタコチアラのOへ入植したT及びFの家族八名で、合計一四名がベレンに向かった。

これら四家族がどのような理由で脱出したかは今のところ十分明らかに出来ないが、このうち四月三日ベレンに着いたNとK両名より私とベレン駐在尾崎事務官が聞いたところによると「現地生活に耐えられない」と云うのが最大の理由、NとKの二家族は三月十五日に入植、二八日に脱出したものだが、尾崎事務官に語った脱出までのいきさつは次の通りである。

現地到着の当日引受人のKは「移民と引受人との雇傭条件などを定めた契約の内容について何も知らぬ、そんなものはブラジルでは通らないから無用だ」との意思表示をした。

さらにKは日本移民はあまり歓迎しないこと、今度引受けたのは押しつけられ止むをえなかったと云った。

自分たちはジュート栽培地へ十七日到着十八日から二十五

クルゼイロスの日当で仕事を始めたが、七時から十二時間の水中作業は死ぬほど苦しかった、この日当では生活にも足らなかった、食物の人手が困難で身体が持たないと思った。

Kは配耕地を出ることに反対しなかった。

この脱出者の弁に関し、Kを良く知っているパリンチンスの山崎太郎氏、ベレンの山内登氏は次のように述べている。Kが新移民を特に希望しなかったことはよく知っている、ジュート作業が苦しいと云って入植九日で脱出するのでは話にならない。

この家族の話を聞くと仕事に対する意欲がなく、甘えた気分を持っていたことが考えられる。

こんな家族を送り出されたのでは引受け側が迷惑する。

脱出家族の処置については古関領事が当っているが、ジュート栽培をやらぬ移民は当分勝手に身の振り方を承知させよ、また十分指導せず簡単に手放したKにも責任がある。今後の移民送りだしにつき、家族選定の重要さを認識すべきだ。」四月十六日付パウリスタ新聞で古関領事の談話が発表される。

一応話は聞いたが何を理由づけようとも 日本を出る時、すでにどんな処でどんな仕事をするかは契約して来たもので、そう簡単な行動が許されるものではない。

まだKの報告がなく一方的なことになるが、出た者ばかりでなくKにも責任があろう。あそこには仲介の労をとった高

村もあり、サンタレンには責任者の辻氏もいるのだから一応その人達に交渉があつて後、善後策を講ずべきだった、二週間たらずでろくろく働きもせずに飛び出すと云うのは余りにも責任感がなさすぎる。

大使からの話もあり、再度契約地に帰るよう勧めてみたが、分別盛りの四十男が泣き出すので今度来る移民のこともあり、契約を放棄して来た者に他の仕事や行き場所を世話することなど領事として出来ない。

▼五月六日付パウリスタ新聞に投稿が出る。

「過日のアマゾン移民は戦後初めての移民であるので、ベレン市付近の在留邦人は挙つて「カンポス・サーレス号」を出迎え日本人会は市中見学に案内し、あるいは各自の家に招いたりしたものです。

新移民の服装はチャンとしており、態度もキビキビしていて、この点伯字紙も誉めていました。

この新移民中には私と同県が五家族おり 同県人の誼から市中見学後、彼等の希望で屠殺場見物及び私の野菜園に案内し、故郷の話に花を咲かせたものです。

私は何のもてなしも出来なかったが、披等は非常に喜んで帰っていきました。

ところが一ヶ月後にこの同県人のうち二家族が引き揚げてきました。

彼等ほ他の知合いもないところから私の名前を領事に告げ

たため、ベレンの古関領事は私に出頭を求めて来ました。

古関領事は、この新移民の脱出はあたかも私に責任があるごとく、次のような質問責めを行ったものです。

一、貴殿はどんな話を彼等にしたか。

一、新移民に良い場面だけを見せてはならない。

一、この移民は借金を背負っているから引受人は連帯責任をとっている、第三者がみだりに口をいれては困る。

一、干渉をする場合は領事の許可を得てからにして貰いたい。

一、移民が到着した際、ベレン在住者が新移民をどんなに歓迎するか黙って見ていたが、今後は在留人に警告して口止めするつもりだ。

一、渡航費は日本の内地の人々の血と汗の結晶である税金の一部だ、移民には責任のあることを知っていて貰いたい。

一、ベレン付近の邦人は上流から脱出してくる新移民を手を広げて待っているのだろう。

と云った話で、古関領事は「脱出者がベレンに落着くことは上流の新移民を刺激するから強制送還しようとしたが、脱出家族は死んでも帰らぬと云う、この問題が移民の将来に暗影を投ずることを心配する」と云う話でした。

私はベレンの一在住民として古関領事の態度に反駁する次第です。

服装、態度は良く、確かにインテリであるが、今度の新移

民の中には農民らしい家族は見あたらず、出迎えの我々は口を揃えて「辛抱出来るかなあ」と疑ったものです。

古関領事は私につまらぬ説教をする暇に、このような移民を選定した日本政府に属する一官僚として反省すべきではないでしょうか。

大体、このアマゾンにこれから四千家族もの移民を入れようとの誇大な宣伝を行いながら、日本政府は一体何の準備を行ったかをまず聞きたいのです。

特に現地における古関領事はいかなる準備を行ったか、かつて候補地を探したことも実地調査をしたこともなく、戦前同様の官僚的態度で在留人に臨み、グラントホテルの一室で昼寝の夢をむさぼるにすぎないではありませんか、また新移民は日本国民の血と汗の税金を使っていると云われますが、この頃アマゾン視察と称して続々とやってくる者こそ、日本国民の血と汗を無駄に使う者だと云いたいのです。

彼等はアマゾンを大名旅行するだけであって、何らの調査も行つてはいない、彼等の報告書はどれも正確ではない。ただ泉教授は真剣にアマゾンを調査したし、パウリスタ紙上に発表された斎藤氏の報告書は真相に近いアマゾン事情を紹介していると思います。

外務省のへつぽこ官吏が二日か三日位でアマゾンを調査するのに莫大な金を使うなら、現地で苦勞した邦人を日本に呼びアマゾン事情を語らせる方が気がきいていると私は思いま

す。

日本の外務省はホテルで昼寝をする領事より、自ら水中に入ってジュートを刈るくらいの意気を持った新進気鋭の人で移民と共に苦楽を共に出来る領事を選んで貰いたいものです。」

▼ジュート移民一回だけで中止となる。

▼この年、トメアスでは胡椒の市場相場は最高潮に達し、いわゆる黒ダイヤの黄金時代を現出した。

組合員の手取りは黒胡椒キロ当り一三〇クルゼイロスとなり、往年の貧乏植民地は、一躍経済的に最も恵まれた楽園になる。

組合員数・七八名、胡椒本数・三十三万本、胡椒生産量・六五〇屯。

八月にあめりか丸で戦後第一次トメアス移住者二五家族二一九名が到着した。

▼アルバロ・アドルホ上院議員は、フリスベルト・カマルゴ博士の論文に注目しグアマ河沿岸に水田式米作植民地を計画し水田米作に堪能な日本人移住者を入植させる話をベレン領事館に持ち込んだ。

▼フランスで十五年絵画に精進していた上永井画伯がサンパウロから来てアマゾン各地の画の旅をした。

同じ項、サンパウロから半田和雄画伯がベレンに来ていた。

その時、ヨーロッパから日本に帰途中の福沢一郎画伯がベレンに立ち寄った。

そして彼等三画伯が共同でベレン市国際芸術協会主催のもとに十二月十三日から二十日まで、アセンブレア・パラエンセ・サロンで盛大な画展が開かれ市民から好評を博した。

▼パラ州知事・ザカリア・アスンソン。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス。

▼ペトロプラス設立。

▼SPVEA（アマゾン地域経済振興計画庁）設立。

▲吉田茂。

▲朝鮮戦争休戦。

▲NHKテレビ放送開始。

▲伊藤絹子・ミス・ユニバーサル三位。

▲外務省移民課を設ける。

▲上海帰りのリル・サンドイッチマン。

▲アメリカ・アイゼンハワー大統領。

◆スターリン死亡。マレンコフ首相。

◆ソ連水爆保有声明。

一九五四年（昭和二九年）

▼辻小太郎ベレンでアマゾン経済開発株式会社を設立する。

日本移民の受入機関として経費は日本府の負担とした事業

を目的とする。

社長・辻小太郎、副社長・江村良造、植民地指導・越智栄、高村正寿、小谷裕次、東久一、藤島正徳、谷正一、上森六園大嶽一、山本栄など。

▼トメアスに二、三、四回と入植者が到着する。

この年、組合員の胡椒植付け本数は四十四万本、生産量は800トンにたつしていた。トメアス産業組合の販売網は、完全に国内市場を制するに至った。

増産に伴う個人の事業施設の改善、拡張につれて、組合も対外面で販路の拡張、相場の変動対策、製品の包装、栽培、採集、乾燥などの研究、出荷品の検査・統一などに専念した。

当初、戦前移住者と戦後移住者との関係は良好であったが、戦後移住者の中に特に成功を急ぐもの多く、そのため戦前派と感情的衝突を起こし、退耕していく者も多かった。

▼フォードランジアに六家族二七名が入植する。

▼トレーゼ・デ・セテンプロ植民地に二九家族一八〇名が入植する。

▼ファゼンジア植民地に五家族二九名が入植する。

▼マタピー植民地に二四家族が入植する。

▼トメアス植民地開拓二十五周年祭挙行。

▼パラ州知事・ザカリア・アスンソン。

▼大統領・ゼツリオ・バルガス（自殺）

カフェー・フリーリョ。

▼辻小太郎・松原両氏がブラジル移植民院と調印。

▼田村幸重が日系初の連邦議員に当選。

▼戦後初の日航機「京都号」がサンパウロ空港に着く。

▼評論家・大宅壮一、中野好夫がアマゾンの視察旅行をする。

中野好夫談：トメアスのピメンタ景気については前から聞いていたが、実際に自分の目でみて驚いた、何処の家に行っても冷蔵庫と自家用車は必ずあると云った具合で嘘みたいな話だ、ただそこにも問題はある。

それは新移民と旧移民との間の争剋だ。

成程、トメアスに入った新移民はマナカブールに入った者達からみたら総てにおいて良い条件を与えられている、しかし新旧両移民の経済的な差があまりにも距っているのです、この点何らかの手を打たないと問題化する恐れがあるようだ。グアマ河一体に新移民を入れる計画だと云うのでそこも見えてきた。

ここはベレンからわずか数キロの所だし、地質も悪くないようだ、ただ相当莫大な資本を投じて合理的な農作を實行しないかぎりモノになる見込みはない。

マナカブールはあらゆる点からみて悲観的だ、河にはさまれて島流しにされたような格好なので脱耕すると云うことはないようだ。

アマゾン全体について云えば、マラリアに対する脅威は全くない、この点は正直のところ驚いた程だ。

過去の失敗を生かすうえからいっても今後は科学的な開発計画を立てることが絶対に必要だ。

大宅壮一談：アマゾンと云う所は簡単に結論が出せるところではない。

これはアマゾンに限った話ではないが日本人を単なる肉体労働者として考えるならば、むしろ日本人移民は入れるべきではない。

トメアスーの場合など新旧移民の間に介在する問題は深刻だ、旧移民が新移民を受入れる場合、決してこれを現地民の労働者なみに考えていないだろう、肉体労働をさせればカボクロの半分位しか出来ないことは前から分かっているはずだ。

とすると日本人を呼ぶ理由は別にあるはずだ、だからカボクロ以下の賃金でも構わないから別に「民族手当」とでも云うのを出したらよいのではないか。これは何もすぐに払わなくとも構わない。何年か後に新移民が独立する時に資金を低利で貸すといったことも一例として考えられる。

旧移民には「下士官根性」と云ったものがある、これは新移民に対して自分の歩んで来た道をもう一度歩かせようとする考え方などに現れてくる。この「下士官根性」は特に成功者に強く出ているようだ、これから来る新移民は二十年前、三十年前の日本で生活して来た者とは、いろいろの面で違っている、世界も急速なテンポで変わって来ている、こうゆう

点を認めないで自然発生的な移民を再現させようと思った
ら、当然そこに大きな衝突が起こる、同化問題にしても一部
の者が云うまうにブラジルのカボクロになってそこから出発
すると云った考え方は、逆に臣道連盟的なものを生み出させ
る危険性がある、北パラナの講演旅行ではこの点についても
少し話をしてみるつもりだ。

▲鳩山一郎。

▲日本海外協会連合会設立。各県に海外協会を配置す。

▲ビキニ水爆実験。

▲自衛隊発足。

▲マリリン・モンロー来日。

▲プロレス流行・ヘップバーン刈り。

▲泉靖一・斎藤広志共著「アマゾンの風土と日本人」古今書
院より発刊。

▲お宮さん。

◆周・ネール会談（平和五原則）。

◆東南アジア五ヶ国首相会議。

◆イギリス軍スエズ撤退。

一九五五年（昭和三〇）

▼ベレン領事館に持ち込まれたグアマ植民地の構想は、アマ
ゾン経済開発庁が乗気になり、移植民院と共同管理すること
になり、グアマ河沿岸八千ヘクタールの私有地を買上げ同植

民地の設置が決定された。

▼ベルテラ百家族、フォードランジア一六家族、前年の六家族と合わせて合計一二三家族、七八五名が入植して来た。

このゴム園は、もと米国フォード会社のものであったが、北伯農事研究所の経営下になっていた。

これらの入植者達は、北伯農事研究所長とアマゾン経済開発会社の辻社長との話合いで移植民院の許可のもとに入植させたのであるが、所長は管轄官庁の農務省に計らなかつた。

事後このことを知つた農務省は移植民院に対してゴム園に日本人移住者を雇用することは国内労働者を圧迫するものであると抗議し、一方所長に対しては直ちに日本人を解雇するように通告してきた。

そのため入植して来たばかりの人々はアマゾン各地に分散して再移住する事態に至る。

入植者は左記の地区に分散を始めた。

(再移住先)	(家族数)	(人数)
モンテ・アレグレ	五五	三五八
ベレン近郊	一二	一二七
グアマー	一五	一〇一
リオ・ブランコ	二二	七一
サンタレン近郊	七	四三
アレンケール	五	三六

アカラー

四

二六

マナウス・イベサバ農場

三

二三

合計

一二二

七八五

▼グアマに行く一五家族は、当初アマパの、マサゴン植民地に移されたが、植民施設がないためベレンに戻され、そのあとグアマ植民地のカラバル地区に入植させられる。

▼トメアスに飛行場が出来る。

▼パラ州知事・ザカリア・アスンソン。

▼大統領・カフェー・フリーリョ。

ネレウ・ラーモス。

▼最初の国産自動車の製造が始まる。

▲鳩山一郎。

▲外務省移住局を設置。

▲日本海外移住振興株式会社設立。入植地の取得、造成、分譲を目的とする。

▲太陽の季節・マンボ。

▲トランジスター・ラジオ。

▲月がとっても青いから。

◆ワルシヤワ条約。

▼海外協会連合会アマゾン支部をベレンに設置、寺田純三支部長。

マナウスに駐在事務所を開設する。

アマゾン経済開発会社より移住業務と担当人材の引継ぎが行われる。

▼ベレン領事館が総領事館に昇格、初代総領事・福岡章。

▼パラエンセ産業組合設立。

会長・長谷川貞雄、その他の理事・大橋、河内、五十嵐、伊藤など。

▼トメアス産組、胡椒の輸出許可を申請し認可される。

▼日本冷蔵の第十三海幸丸が、チリからパナマ運河を通りベレン港に入港。

そのあと北部沿岸の漁業調査を試み、マラニオン州からベルナンブーコ州沿海においてマグロの大漁場を発見する。

七月にブラジル政府農務省と海軍省の許可を取得し漁獲を開始、十月までに第一回一四四屯、第二回一五二屯、第三回一四〇屯のマグロをレシーフェ港に水揚げブラジル市民を驚かせた。

▼ブラジル農務省は在伯日本大使とアマゾン水域の漁業調査のため海洋調査船東光丸派遣の取り決めを行った。

東光丸はパラ、マラニオン両州沿岸を調査しベレンに入港、そのあとアマゾン河口とアマパ沿海を調査して帰国する。

▼パラ州知事・カテツテ・ピネイロ。

▼大統領・ネレウ・ラーモス。

ジュセリーノ・クビチェック。

▼外資の導入が始まる。

▼ブラジリア首都建設が始まる。

▼日本企業のサンパウロ進出ブームが起る。

▲石橋甚山。

▲日本国連加入。

▲日ソ国交回復共同宣言。

▲神武景気。

▲深夜喫茶・一億総白痴。

▲外務省移住局発表の移住白書。

ブラジル北部・一〇〇〇名、中部・三〇〇名、南部三〇〇〇名。

ドミニカ・八〇〇名。

パラグアイ・六〇〇名。

ボリビア・六〇〇名。

アルゼンチン・一〇〇名。

コロンビア・二一〇名。

カンボジア・二〇〇〇名。

アメリカ・四八〇名。

▲ここに幸あり・ケセラセラ。

◆スエズ戦争勃発。

◆ソ連ハンガリーに進入・全土を制覇。

一九五七年（昭和三二年）

▼海外移住振興ベレン支部設置、羽根田義雄支部長。

▼グアマ植民地その他の地区への入植が本格的になってくる。

▼ブラジル海軍ソアレス・ドウトラ号が日本の石川島造船で引き渡され、トメアス行きの東京農大卒の坂口、常光、木村の三名を乗船させベレン港に入港。

▼山田義雄が熱心にアマゾン風物を描きベレンで初の個展を開き好評を得る。

▼アマゾン経済開発庁の要請でユネスコから派遣された東大講師地質学者坂本峻雄博士が、アマゾン地域の鉱物資源を調査し、パラ州サンタレンからマナウスに至るアマゾン河底に埋蔵する数千億トンの石膏と岩塩層を発見する。

▼大洋漁業がパラ州政府を訪問、ベレン市に日伯合弁の漁業会社の設立許可を申請し認可される。

▼第一回北伯野球選手権大会がトメアス球場で開催。

▼胡椒栽培者中央会が結成される。

▼パラ州知事・マガリャンエス・バラッタ。

▼大統領・ジュセリーノ・クビチエック。

▼急速な工業化の歪みで農民の都市集中化が起こり、国家財政は赤字となりインフレが始まる。

▲岸信介。

▲なべ底不況。

▲流感大流行。

▲南極観測隊上陸成功。

▲多田文雄著「アマゾンの自然と社会」

東大出版会より発刊。

▲有楽町で会いましょう・カリプソ娘。

◆ソ連スプートニク打ち上げ成功。

◆ガーナ独立。

一九五八年（昭和三十三年）

▼七月に汎アマゾン日伯協会の創立総会がベレン総領事館
会議室で開かれ、六十六名の参加者のもとに設立された。

初代会長・辻小太郎。

第一副会長・長谷川貞雄。

第二副会長・平賀練書。

第一常任・星野修。第二常任・越智栄。

▼サンパウロで日本移民五十年祭が挙行。

三笠宮臨席のもとに移住功労者に勲章授与式が行われた。
アマゾン関係では、

黄綬褒賞・パリンチンスの尾山良太。

藍綬褒普・ベレンの辻小太郎。

藍綬褒営・トメアスの平賀練吉。

▼トメアス産組の組合員一七六名、胡椒の作付本数八二万
本、生産量二三〇〇屯。

- ▼ パラー州知事・マガリャンエス・バラッタ。
- ▼ 大統領・ジュセリーノ・クビチェック。
- ▼ ワールド・カップでブラジル優勝する。
- ▲ 岸信介。
- ▲ 売春禁止法施行。
- ▲ 東京九〇〇万人。
- ▲ ロカビリー・東京タワー。
- ▲ 杉山書良書「裸族ガビオンーアマゾン奥地の原始生活」東京光文社より発刊。
- ▲ 星は何でも知っている。
- ◆ アメリカ人工衛星成功。
- ◆ ソ連フルシチョフ首相。

一九五九年（昭和三四年）

- ▼ 四月十日、パン・アマゾンア会報の創刊号がガリ版刷りで発行される。

- ▼ ベレン・ブラジリア街道の建設が始まる。
- ▼ マガリャンエス・バラッタ将軍死亡。
- ▼ 日本よりの呼寄せ移民が盛んになる。
- ▼ エフゼニオ・サーレス植民地、キナリー植民地などへの入植がはじまる。

- ▼ 移住者を乗せた大阪商船の船がベレン港に寄港するたびに、船内の売店で日本商品の買出しをするベレン在住の日本

人が増え話題になる。

▼汎アマゾニア日伯協会の会館建設資金の一部として、日本政府より二百万円の下附がある。

▼トメアス郡が誕生する。

従来アカラ郡に所属していたトメアス植民地が、アカラ郡より独立しパラ州六十番目の郡として誕生、九月一日にその式典が行われた。

初代郡長・ネイ・ブラジル。

▼アマゾン移住三十周年記念祭が州立平和劇場で開催される。

日本より慶祝使節団一行が参加、団長は千葉三郎自民党代議士。

▼この頃、ベレン市内の日本人関係の役所、事務所、商店など次の通り。

ベレン総領事館・日本海外協会連合会・移住振興信用金融投資会社・ジャミック 移植民有限責任会社・トメアス産業組合・パラ産業組合・ニッポニカ商工株式会社・辻合名会社・山田商会・スーベルメルカード玄場・高島食堂・竹村自転車店・西崎洋服店・鈴木旅館・日高旅館・佐藤旅館・加藤靴店・カーザ東京・高瀬熱帯魚養殖など。

▼トメアス産組所有のウニベルサルⅡ号

ベレン停泊中に機関部より出火し全焼す。

▼ベレン市人口約二〇万人。

▼パラ州人口的首五〇万人。

▼パラ州知事・モーラ・カルバリーヨ。

▼大統領・ジュセリーノ・クビチェック。

▼岸首相訪伯。

▼生島重一著「アマゾン移住三十年史」がサンパウロ新聞社より発行。

▲岸信介。

▲岩戸景気。

▲皇太子御成婚。

▲テレビ二百万台を突破。

▲カミナリ族・ながら族。

▲東京にアマゾン会が誕生、アマゾン関係の四六名が集合し、会長上塚司を推し日伯中央協会の傘下で活躍を開始することにする。

▲田原春次著「大アマゾン・移住と開発」がアマゾン会出版部より発刊。

▲東京でアマゾン移住三十周年祝賀大会が開かれる。

アマゾン会・ラテンアメリカ協会・日伯中央協会・海外移住振興・海外協会連合会共同主催、東京都及び産業経済新聞社後援で産経ホールで行われた。

訪日中のパラ州出身の上院議員ガブエル・エルメスも参加。

▲神戸でアマゾン移住三十周年記念祭が開かれる。

主催・兵庫県海外協会・日伯協会。

協賛・日本海外協会連合会・神戸市・神戸商工会議所。

後援・神戸新聞社・兵庫新聞社。

場所・神戸商工会議所濱堂。

▲黒い花びら・南国土佐をあとにして。

◆キューバ革命。

◆ダライ・ラマがインドに亡命。

◆ソ連が月の裏側写真を発表。

一九六〇年（昭和三五年）

▼胡椒の国際相場が急騰し始める。一時は一週間毎に五〇ドル、一〇〇ドルと高騰し何処まで値上がりするのか、生産者と取扱商社を惑わす時期があった。

これにより、ベレン近郊の野菜生産者達や各地植民地の入植者達に胡椒の植付けブームが起こってくる。

▼ジュートの相場が急騰し始める。

国内生産量が消費量を満たせない状態が起こる。主なる理由はアメリカがキューバ糖の買付けをブラジル糖に切替え、包装は木綿袋が許されず麻袋に指定して来たため。

▼汎アマゾン日伯協会の会館建設が購入済みの土地ノーベ・デ・ジャネイロ街で開始される。

日本政府より建設資金の一部として更に一千二百万円の下附がある。

▼パラー日本人会（会長・長谷川貞雄）は日伯協会に合併することを決議し、所有する映写機二台及びその他の機材、事務用品は日伯協会に移管することになる。

▼トメアスに悪性マラリアが猛威を振るう。

▼第二トメアス植民地建設の為、ネイ・ブラジル郡長より三万ヘクタールの地権証書を受け取る。

▼首都ブラジリアに遷都。

▼ベレン・ブラジリア街通開通。

ベレンからブラジリアまで約二五〇〇キロの陸路をベレン在留各国領事を引率し旅行隊に参加し走破した唯一の日本人である福岡総領事の手記を記載します。

伯国の新首都ブラジリアの建設によって大きい伯国の心臓的中心点が出来上がりつつある。

この心臓部へは、南北東西からの道路網が張られることになっておるが、アマゾン地域との通路の貫通こそは世紀の大事業とせられた。然し夢は現大統領のもとに、アマゾン経済開発長官その下にロドブラスBR14通路建設局等主導者の決心と努力によって達せられた。

開発長官は二月二日ブラジリアに於いて大統領の主宰する開通式にカラバーナを組織して一月二十三日ベレンを出発するプログラムを作って、アマゾン流域の官民有力者二百名に参加招待を出した。

私はアメリカ、コロンビア、ベネズエラの各領事と共にこのカラバーナに参加することにした。

一月二十三日（初第一日目）

午前七時二百名の隊員の他に多数がカテドラルでの旅行完遂の祈りを上げてからプラッサ・ダ・セー前で五十一台のジープ、バス、トラック等に分乗した。

隊員は何れも物々しい出立であつた。私は四十四番目の車、メルセーデスベンツのオニブスに他の領事団員と共に乗ることを言い渡された。

一行は盛大な見送りを受けて東へ東へとブラガンサ街道を走つた。

昼頃サンタマリアで右に折れ南下、サンミゲル・ド・グアマテ河を渡し舟で対岸に着いた。架橋工事中であつた。

そこで最初の昼食が供された。

午後三時頃出発したが空は曇り、森林は次第に深くなり、自動車のスピードは落ちた。

いよいよ密林の間を切り開いた道路に突入した。更に南下を続けいよいよ暗くなった頃に密林内の休憩所一六三キロの地点に到着した。大雨が降り出した。

臨時設備の電灯も雨の密林内では辛うじて隣にいる人を見分けられる程度であつた。シユラスコの夕食を終えたのは十一時頃、小屋によりやくハンモックを吊る場所を見だし、疲労のため着のみ者のまま寝をとることにした。

大密林内の夜は静かどころか、蛙の恐ろしいばかりの鳴き声、フクロ猿の大群の騒音に悩まされた。

はるか遠方からボンボンとインジオの打つ太鼓の音と歌声が密林を通して聞こえてくる。

隣の人の話では歌声は十二キロ余り隔たっておるとのことであつたが、すぐ近くでの様に思われた。この初日の行程三百六キロ。

一月二十四日（第二日目）

パラー、マラニヨン州の密林を南下、リガソンに着く。

ここでこのBR14号国道の牧師Drベルナルド・サイヨンが倒木のため事故死された場所で、氏の霊に対し祈祷式が厳かに行われた。

BR14号道路の別名をベルナルドサイヨン道路とも云ういわれを聞いた。同牧師の墓に立つ十字架は同氏を殺した枯れた大木を削つて造られた由であつた。

この辺の土地の肥沃のこと、三十、五十メートルもある大木が行儀良く林立している様子は新植民を造るなら、この辺かなと思つた程であつた。

旅行隊はなおも行進を続けマラニヨン州のアサイランジャに到着、ここは南北道路開通工事の出合いの地として去年の今頃大統領出席の下に式が挙げられて私も出席した既知の地であつた。

夜リオからはるばる慰労団が一行を慰めるべくショーを催

したが、これを見るところか、近所の小川に安全地帯を見つけて十数人の隊員と共に真っ裸になって水浴をとった。そして夕食には空腹で食べた量も多かったせいか、疲れが出て、早く小屋にハンモックを吊つて寝てしまった。

この日の行程二四〇キロ計五四六キロ。

一月二十五日（第三日目）

午前七時アサイランジャを出発するに当り、ティシエイラ大佐の今日の行程の説明と注意事項を聞いて出発、マラニョン州のインペラトリスに向かった。

この一帯はテーラ・ロツシヤの肥沃地で、いたる所に侵入した略奪農家が点在し、そこへトウモロコシ、マンジョカなどを植えていたが育ちは上々であつた。

旅行隊はトカンチンス河に沿つて南下前進。

この一帯に良質の材木があり、ジャラーナ、アカブー、ピキア、ローロ、アンジェリン、マサランドウーパ等の良材が惜しげもなく通路の両側に伐採され横たわっていた。

坂道の多いのには驚いた。

やつとポルト・フランコ（トカンチンス河のマラニョン側）に夕方着いた。

「ビーバ、カラバーナ」の声に迎えられた。

用意された小屋で夕食が提供せられ、例によつて演説も盛んであつた。

夕食後、十数名一団となつて水量溢れて危険なほどの大河

トカンチンスを渡し船で、対岸ゴヤス州のエストレイトに渡る。

このエストレイトは読んで字の如くトカンチンスの河幅の狭い地点（五〇〇メートル）で、ここは現在架橋大工事中であつた。

架橋大工事は深さ五〇メートルもある河の中央部だけが残っており、工事は両側の岩石を利用して橋梁が築かれておつた。

田舎町のエストレイトのアカンパメントで寝た。

夜、暗い便所へ入ったら壁土に砂金が光っておるのが珍らしかつた。

この日の行程二〇〇キロ、計七四六キロ。

一月二十六日（第四日目）

昨夜中に渡し船で、ポルト・フランコから車がエストレイトに運ばれていた。

早朝、四日目の進行を続けた。

沿線はテーラ・ロッシャで石がなく、道路は悪く、重い車ほど速力が落ち、車輪が泥に入り込む等、やつと一日かかつて、一二〇キロを進んだ。

夕方、アラグアイーナでは町長始め町民数百人の大歓迎を受けた。

特に手製ではあるが、日本国旗を掲げての歓迎に私は感激させられた。

早速日本国旗が掲げられているいわれを町長に尋ねたら、私がカラバーナに参加している放送があつた。しかもまた数日前に日本人三名が開拓先導者として同地に到来したのだ、とて大いにビールで乾杯した。

乾杯のあと、特に民家の一室があてがわれて寝台に休んだ。

本日1日の行程一二〇キロ、計八六六キロ。

一月二十七日（第五日目）

早朝、例によつて旅行隊指揮官の五日目の旅行の説明を受けて午前八時アラグアイーナを出発し、カビハーラを通つて夜になつてグアラーに着いた。

この行程は前日に引き続いて相当の難行であつた。

六屯半もある私達のオニブスの輪は泥中に一メートル位うずまつた時は、全員降りて石がないので倒木を輪だちに敷く作業に協力した。

グアラーはロドブラスの建設による立派なインジオの小屋が大円形に建てられその中央に大きな酋長の家があつた。

然し、このインジオの小屋は総てロドブラス従業員住宅であつて、今晚の旅行隊の夜食と寝床に当てられた。そしてこれは最良の休憩所で旅の疲れを充分休められた。

一日の行程二〇二キロ、走程合計一〇六八キロ。

一月二十八日（第六日目）

グアラーの休憩所でインジオ住家風の円形広場を早朝出発

してパライズやセルカジーニヨなど道は次第によくなり、夜、グルピーに着いた。

今日の走程四三八キロであつたので今迄の走種合計一五〇六キロとなった。

ゴヤス州首都まで九四九キロの地点に達した訳である。

一月二十九日（第七日目）

グルピーを発ち、アルボラーダ、ポランガトウ、アマーロ・レイチ等を通り、夕方ウルアサの町の手前パツサトレスの川辺に着いたところ、橋が四日前に洪水で落ちていたため徹夜作業でドラム缶で渡船が造られた。

ともかくウルアサ町の手前でレージを吊つて一夜を明かした。

現在、同地域に居住している邦人は百七十家族を少々越えている。

今日一日の行程三五〇キロ、合計一八五六キロとなった。

一月三十日（第八日目）

ウルアサで一夜を明かし、早朝一行は車を渡船で渡河後ウルアサ町から昼頃にセーレスに着いた。道も次第によくなつた。セーレス地帯は将来ブラジリアの食料補給資源地の感があるほど土地もよく農産物と牧牛の産の豊かであることが見られた。

かくて夕方ゴイアーニアに着いてホテル・パンデラランテスに久方ぶりに落ち着いた。

この一日の行程はマカダム道路で良く走り四〇二キロを記録し、全走程二二五八キロとなった。

このホテルには旅行隊参加者の家族が多数待ち受けておつたので、領事団の四名は淋しく笑つたことであつた。

ゴイアーニア市は新しい建物と街路も美しく将来ブラジリアを捷えて大都市になる可能性があるよう見受けられた。

ここでゴヤス州知事の歓迎会、レセプションが催しされた。

一月三十一日（第九日目）

ゴイアーニア市では北から我等旅行隊の他に、サンパウロ、或るいはポルト・アレグレ方面からの旅軍隊も到着して同首都はなかなか賑やかであつた。

ゴイヤス州知事アルメイダ氏は、いろいろの歓迎プログラムによつて各地から集まつた旅行隊員を招いて接待してくれた。私に対しては日本人移住者によつてゴイヤス州の農業開拓を大いに期待する旨を語つた。

二月一日（第十日目）

ゴイアーニア市で二晩泊まつて疲れを休め、いよいよ最後のブラジリア行進を正午過ぎ開始した。

かくてアナポリスを通りブラジリアに着いたのは夕方となつた。今日の走程一九七キロで全走程は二四五五キロの長い旅程となり、ここで無事ベレン・ブラジリアの旅行を終了した。小雨降るブラジリアで一夜を貯蓄銀行員住宅で明かし

た。

二月二日（第十一日目）

各地から来たカラバーナ全員四〇〇名余りは昼頃勢揃いして、新教会建物でブラジリア入りを神に感謝する祈祷を終えて次いでトレス・ポデーレス（三階）建物で、伯国大統領主宰の開通式が行われた。

開通式には大統領の声涙溢れる演説が行われたが、特に新首都ブラジリアへの各地からのカラバーナの無事到着を祝し、更にアマゾン地域からの旅行隊の約二五〇〇キロの走破に対し、ベルナルド・サイヨンの通路建設の犠牲を語ってBR14道路は、特にベルナルド・サイヨン道路と命名するものである旨を述べた。

次いでアマゾン経済開発長官は、この道路の建設によってアマゾン地域と伯国南部との政治、経済、文化の交流が一層盛んになるに至ったことは、伯国の宝庫アマゾン地域の開発を促進することとなり、単にアマゾン地域在住の者としてではなく又ブラジル人として、この上もない喜びであることを述べた。

私は経済開発庁長官始め今回の旅行隊で世話になった人々に挨拶を終えて、ベレン・ブラジリア旅行隊員として、二月二日正午過ぎに別れを告げて、同新首都からベレンに飛行機で他の領事団三名と帰ることにした。

更に新首都ブラジリアではベレンに帰る飛行機（レアル

線）待ちのため二夜を新建設なったブラジリア・パレス・ホテルに過ごし新首都建設の模様を見て歩いた。

新首都の建設の膨大な新構想による建築物にニューヨークにある国連建物の設計者として有名なブラジル人設計者ニエーマイア氏の設計の数々を味わうことが出来た。更にこの新首都の建設構想が現大統領の大きい伯国の中心をなすべきものであるとする点が読まれるような気がした。

以上

▼三井物産ベレン支店開設、初代支店長は 岡田徳太郎。

▼松竹映画ベレンに進出してくる。

ベレンで最新設備を誇る映画館「シネ・パラシオ」で日本映画の上映が始まる。

禁断の砂・人間の条件・赤いズボン・パイナップル部隊・銀嶺の王者・霧ある情事・大いなる愛の彼方に・など。

▼作家の三浦、曾野綾子夫妻がベレン訪問。

▼アマゾン・ジュート七〇屯が、辻合名会社より日本に初輸出される。

▼アマゾン地方の胡椒生産が年毎に増収をし、国内需要を満たし毎年外国に輸出するようになったが、ブラジルの有力なる経済誌『VISA O』の八月号に取り上げられ、日本人の努力とアマゾン経済に多大の貢献をなしていることを賞賛している。

▼生島重一着「アマゾン叢書」第一巻「アマゾンの自然、経

済環境と営農法」がサンパウロ新聞社より発刊。

▼ベレン市の最大の祭典「ナザレ大祭」に日本人コロニアのタベとして一晩だけ日本人が総出で協力することが、この年から始まる。

▼パラ州知事・モーラ・カルバリーヨ。

▼大統領・ジュセリーノ・クビチェック。

▲池田勇人。

▲浅沼暗殺。

▲カラーテレビ開始。

▲ダッコチャン。

▲潮来笠・ありがたや節。

◆アメリカ、ケネディー大統領。

◆ソ連がアメリカのU2を撃墜。

一九六一年（昭和三十六年）

▼第二トメアス植民地の造成工事が始まる。

移住振興の第二トメアス事業所が設置され、初代所長に仁科雅夫。

▼ベレン・ブラジリア街道の開通によりベレンを中心とした北伯の経済構造が変化し始めてくる。

従来、南伯よりの必要物資の輸送は総て船舶と空路に依存していたため、物資の大半を占める船舶輸送は、港湾労働者達のシンジケートが物資の搬入を支配しており、彼等の乱発

するストライキによってベレン並びにマナウスその他の上流都市との流通機構が円滑に運ばないために昔からの大商人や政治家達が利権をむさぼっていたが、陸路の出現により勇氣と冒険心に富んだ人々が泥沼の連続と、洪水で時々無くなる各所の橋を覚悟しながら、サンパウロからベレンまで三千キロの各種商品の輸送に挑戦し始めてきた。

その結果、従来ベレンで見たこともなかった立派な野菜や果物が庶民の口に入るようになり、反面これらの野菜（トマト、キャベツ、キュウリ、ピーマンなど）を作っていた日本人達は品質、価格の面で太刀打ち出来なくなり、陸路で運搬すると萎れてしまう葉野菜類の生産か、胡椒などの永年性作物に経営方針を転向せざるを得なくなる。

南からの人々、資本、情報、物資が流れ込み人口は増加し、新しい産業、業種が現れ、日本人農業者のなかから商業に転向する人も出てくる。

自動車、トラック、トラクターなどがブラジル銀行の長期融資で購入出来るようになり、アマゾンにおけるモーターゼーションの胎動期に突入してくる。

▼日本政府より下付されることになっていた日伯会館の建設資金一部一千二百万円の交付が実現しないため、その間に工事費、材料費が高騰していき外務省に提出していた計画書の変更、縮小をせざるを得ない状態に追い込まれて来た。

ベレンより帰朝した相沢理事官、そのあと一時帰国した福

岡総領事にも現地事情を報告してもらうが、外務省は受けず現地からの寄付金を増やしても当初の計画書通りに完成させよ、更に引受書を作成し、日伯協会会長とベレン総領事との間にブラジル語による正式の契約書を公証役場で作成し送付すべしと伝えて来た。

ここで理事会を開き、交付金の辞退を正式に伝えることを満場一致で決議する。

理事会は自分達の力で時間がかかってもよいから完成させていこうと決める。

▼ベレン近郊移住者の近況報告がパラ―産業組合長の長谷川貞雄より発表される。

組合員六五家族・戦後移住者七〇%。

胡椒本数二一万本・六〇〇屯。

野菜・百町歩、果樹・二〇町歩、養鶏・三千羽。

▼ベレン市場における野菜の値段が著しく高すぎると、ベレン市民の声としての抗議がフォーリヤ・ド・ノルチ新聞で取り上げられ、この記事は野菜市場を殆ど独占している日本人業者を対象したものと解釈された。

これが原因となって当局は、野菜の販売値を公定し違反者の摘発を始める。

そのため日本人の野菜生産者達や販売業者達に衝撃をあたえ社会問題化する。

▼ベレン・サンルイス間を結ぶBR22号国道が開通する。

▼トメアスの車両台数百二台と。パラ―交通局より発表、郡としては第一位の台数。

▼毒舌和尚で作家の今東光が「今東光氏中南米を見る」取材のためにベレンを訪問「ブラジル女性は生殖器に手足が付いているように感じる」と感想を述べる。

▼田付大使がアマゾン地域を公式訪問する。

▼ベレンに初めて日本食レストラン「長石」が開店する。

▼外務省よりベレン総領事館へ次のような電報が入った。

「大蔵省は日伯会館建設資金の補助金の繰越しを認め、近くその半額を下付する予定。また乾季中に建設するため一千三百万円の現地コロニアからの寄付金募集を完了すること、尚計画縮小の場合は理由を付し変更申請書を総領事に提出すること」。

結局、最後になって始めから予定していた一千二百万円の補助金は送金されてくることになる。

▼パンアマゾニア会報二十一号に補助金下付に対する寄稿が載る。

「僅か二階建ての会館建設基金獲得が、こんな面倒なものなのか。サンパウロのイタリア会館を見たまえ、市の中心地に堂々とそびえる四十階建てのビル、大和魂もあったものではない。

一年前、三五〇〇万円の補助金を受けながら、今頃土いじりをやっているサンパウロ文協に比べりゃ、アマゾンでは一

銭の補助金もなくベレン市の中心地に広大な土地を獲得し立派に地鎮し終わったのだから威張ったものだ。

「サンパウロの様な文化水準の高いところでさえ、補助金を出したら何もしていない、ましてやアマゾンみたいな野蛮なところへ補助金を出したら、何をしでかすか分からぬ。」

とは一部の日本のお偉かたの考えだそう。

少し頭がどうかしているんじゃないですか？ アマゾンの方が南伯の悪ずれた人間に比べりや人間がうぶだ、認識不足とはこういう場合に使う言葉でしょう。」

▼白井牧之助ベレン、トメアスを坊間す。

▼上塚司ベレン、パリンチンスを訪問す。

▼ジャニオ大統領が突如政権を放棄する。

▼ベレン市に始めてのテレビ局「マラジョアラ」が開局する。

▼田中希代子ピアノ独奏会がSAIのホールで行われ、多くの市民が観賞した。

▼汎アマゾン日伯協会の事務所は辻商会の一部を利用していたが、この年に総領事館の好意により総領事館の別室に移転する。

▼栃木県知事の横川信夫を団長とする同県の南米移住調査団の一行が、トメアスに栃木県の集団移住地を作るための土地を確保するために訪問。

▼兼高かおるが世界一周旅行のテレビ取材に訪問。

▼サンダース・ホーム経営の沢田英喜女史 がベレン、トメ
アスを訪問。

▼州知事・アウレリオ・カルモ。

▼大統領・ジャニオ・クワードロ。

ハニエリ・マジーリ (二四日間)

ジョオン・ゴラール。

▲池田勇人。

▲東京で日伯文化交流を促進するための文化協定が調印され
る。

▲ライシャワー駐日米国大使着任。

▲大鵬・柏戸時代。

▲東洋の魔女。

▲北上夜曲・上を向いて歩こう。

◆アメリカ、キューバと国交断絶。

◆ソ連人間衛星船成功す。

一九六二年 (昭和三七年)

▼アマゾンの日系人一三三六戸、七二〇三人。

▼第二トメアス植民地に第一陣二十五家族が入植する。

▼汎アマゾンア日伯会館が完成する。

総領事館の別室を協会事務所に借用していたのを、会館完
成にともない本館に移転する。

会館内には、地方からベレンに勉学に来ている学生たちが

寄宿する学生寮と、海協連の嘱託医としてサンパウロから着任する今田求医師の診療所が設置されることになる。

▼アマゾン一帯にマラリアが発生し始める。

アメリカ政府の「進歩への同盟計画」援助の一部としてマラリア根絶のために六ヶ月にわたり、四百四十六万ドル相当の薬品、資材の供給を政府は受ける。

▼この頃、アマゾンの日本人社会の大きな楽しみは、毎年各地を巡回して行われる北伯野球選手権大会であった。

一緒に入植した仲間と別れていたのが野球場で再会したり、嫁いで行った娘家族と親交を暖めたり、選手たちと役員たちそして応援団と野球ファンとその家族達が大量に移動するので、親睦と情報の交換が活発に行われる時でもあった。

因みに、この頃活躍した選手達を列記してみると、（サンタ・イザベル）長島、高倉兄弟、北川、緒方、西川、長石、加藤など。

（コッケイロ・タパン・ベレン） 菊田、丹治、浅田、小沼、岩淵、佐伯兄弟、石田、瀬戸兄弟、宗近、村田など。

（マリキッタ） 平川兄弟、高野兄弟、松井兄弟、柴田、鈴木、岡元など。

（ボアビスタ） 柳橋兄弟、兼清、福島、義山、常光、黒木、白川、片所など。

（カンタ） 黒沼、伊藤、藤田、関、宮本、北林など。

（アハイヤ） 白井、大屋、山崎、細川、松田、土屋など。

（アグアブランカ） 小松、江崎、高尾、古元、戸沢、永野、山田、小林、下小園。

（ブレウ・ホークス） 鶴田三兄弟、上杉、木下、佐藤、大根田、石津、酒井など。

（ストエスチ） 葛尾兄弟、穎川、大村、山田、坂上、小山兄弟など。

▼カバネマにセメント工場が完成する。
当初、日産四千俵の生産から開始する。

▼俳句活動が活発化してくる。

トメアスの大河句壇では、丘南、清歩、清春、かほる、三浪、南星、杜志、竜川、牧民などが活躍し、ベレンにはアラ句壇が生まれ、十二、移流児、みさを、冬月、東風、素人、我童、静子、紫泡などの俳人が生まれる。

▼チリーで行われたワールド・カップでブラジル・チームが優勝する。

これで前回の一九五八年にスエーデンで行われた時の優勝で二連勝となる。

▼ブラジル政府の国賓として吉田茂元総理が訪伯する。

▼アクレが州に昇格する。

▼州知事・アウレリオ・カルモ。

▼大統領・ジョオン・ゴラール。

▲池田勇人。

▲東京で日伯中央協会の創立三十周年記念祝賀祭が挙行さ

れ、高松宮妃殿下、三笠宮妃殿下を始め各界名士二百余名出席のもとに盛大に行われた。

▲東京一〇〇〇万人を突破。

▲銭湯一九円。

▲ツイスト・サリドマイ。

▲堀江青年。

▲王将・いつでも夢を。

◆アメリカの人間衛星船成功す。

◆アメリカのキューバ海上封鎖。

一九六三年（昭和三八年）

▼この頃になると、戦前移住者達の子供達が毎年、各大学から卒業し始めるようになり出し、文部省の国費留学生として日本に出発する二世達も出てくるようになる。

▼日本政府よりベレン市の戸甲善雄医師に対し、藍綬褒賞が贈られる。

▼この年、汎アマゾン日伯協会の評議員は三百名となり、次の各地に散在し会館建設基金の寄付金募集に活躍された。

ベレン市、タパナン、コツケイロ、アナニンデウア、ベン
フィーカ、トランピオカ、サントイザベル、モエマ、カスタ
ニヤール、カバネマ、オーレン、グアマ、サンタレン、アレ
ンケール、モンテアレグレ、アマパー、ジュルチー、オリシ
ミナ、オビドス、パリンチンス、マウエス、イタピランガ、イ

タコチアラ、ウルクリツバ、マナウス、ベラビスタ、タイ
アーノ、ロンドニア、アクレ、マラニョン、ピアウイ、マラ
ジョー、アルタミール、アカラ、トメアス。

▼トメアスに中学校が開校する。

▼トメアスにエリザベス・サンダース・ホーム先発隊が到着。

▼トメアス郡長に沢田修が当選する。

▼トメアスに高砂香料がアマゾン香料研究所を建設する。

▼ベレンに福島県人会、宮城県人会などの各県人会が誕生し
始める。

▼ベレン総領事に伊藤卓也氏が赴任されて来る。

▼州知事・アウレリオ・カルモ。

▼大統領・ジョオン・ゴラール。

▲池田勇人。

▼クルゼイロ・ノーポ紙幣が発行される。

▼州知事・ジャルバス・パッサリーニョ。

▼大統領・カステロ・ブランコ。

▲佐藤栄作。

▲朝永ノーベル物理賞。

▲ベトナム平和連盟。

▲高度成長おわり。

▲千葉三郎に勲一等瑞宝賞が下賜される。

▲上塚司に勲二等瑞宝賞が下賜される。

▲外務省移住局が中南米移住局に改組。

▲柔・網走番外地。

◆アメリカがベトナム爆撃開始。

◆インド・パキスタン戦争。

一九六六年（昭和四十一年）

▼トメアスー文化会館の開館式が盛大に行なわれる。

各種祭典のあと、日本より購入した最新式二台の本格的劇場用カーボン・アーク灯（直流点火）映写機による映画会が超満員の観客を動員させた。

当日の上映映画は、日活シネマスコープ「若い人」「夢がいつばい暴れん坊」等。

▼ベレン市三五〇年祭を行う。

▼ベレン製のビール「セルバ」が販売開始。

▼大橋敏男氏兄弟四人に対し、サンタ・イザベル市会は名誉市民証を授与する。

▼先天性心臓疾患で日本で手術することになった、第二トメアスー在住の大島孫鷹（ニオ）が日本外務省、毎日新聞社、慶応医大等の尽力で母親タカさんと高倉博士同行で日本に出発する。

▼ベレン・トメアス間の旅客を自分の小型飛行機「ハイパーシロキー」で運んでいた木下恵パイロットが、トメアス空港で離陸直後エンジン故障で墜落、飛行機は大破し木下パイ

ロットは即死、乗客三名が重傷する。

▼ベレンで日伯婦人会が設立される。

会長に山田（義）夫人、副会長は越知夫人と、江村夫人。

▼移住者渡航費は全額政府支給に決まる。

▼春の叙勲で戸田善雄に勲五等瑞宝章が贈られる。

▼秋の叙勲で尾山良太に勲五等瑞宝章が贈られる。

▼州知事・ジャルバス・パツサリーニヨ。

▼大統領・カステーロ・プランコ。

▲佐藤栄作。

▲全日空が羽田沖で墜落。

▲ビートルズ来日。

▲3C時代・シエー。

▲事業団で北伯雇用農青年制度が始まる。

▲角田房子著「アマゾンの歌・日本人の記録」毎日新聞社より発刊。

▲福岡章に勲三等瑞宝章が贈られる。

▲古関宮弥に勲四等瑞宝章が贈られる。

▲骨まで愛して。

◆中共で文化大革命。

一九六七年（昭和四十二年）

▼日本製のターボプロップ旅客機YS-11が展示飛行の為にマイアミ、カラカス経由でベレン空港に降り立つ。

▼トメアスの俳人・武藤霞城が日本の俳誌「万緑」に連続入選する。

炎天にバナナ得意の湾曲見せ

霞城

外は炎天歌麿の額半裸なり

霞城

太陽に咽喉見せて呑む羽拔鶏

霞城

▼ベレン総領事に福田貴が着任。

▼皇太子ご夫妻がブラジルを訪問、ブラジルにて辻小太郎、平賀練吉、押切他男の三氏が拝謁され、アマゾン事情をご説明された。

▼この頃、ベレン及び近郊の日本人達が楽しみにしていたのが、日伯協会が毎年二回主催する演芸大会であった。

昔、日本でいろいろの隠し芸を持っていた人々が民謡、舞踊、演劇、歌謡曲、楽団演奏などを披露して会場を超満員にして楽しませていた。

▼少年野球大会がこの年から開催され出す。

▼尾山良太がアマゾナス名誉州民権を授与される。

▼マナウスが自由貿易港となる。

▼州知事・アラシージ・ヌーネス。

▼大統領・コスタ・イ・シルバ。

▲佐藤栄作。

▲美濃部都知事。

▲日本の人口一億人となる。

▲フリーセックス。

▲新宿ブルース・ブルーシャトー。

◆第三次中東戦争始まる。

◆中国が初の水爆実験。

一九六八年（昭和四十三年）

▼辻小太郎、戸田善雄、中内義正の三氏に パリンチンス市会より名誉市民権が授与される。

▼モスケーロ街通の林の中で発見された死体牧山の殺人嫌疑で投獄されていた松浦が仲間二人と脱獄、ベレン空港の近くで空軍の兵隊に包囲され、二人の仲間は降伏したが松浦だけはピストルで抵抗し、空軍に射殺される事件が起こり、ベレン市民の話題になる。

▼千葉三郎がベレン、トメアスを訪問。

▼雑誌「VEJA」誌が創刊。

▼州知事・アラシージ・ヌーネス。

▼大統領・コスタ・イ・シルバ。

▲佐藤栄作。

▲川端康成ノーベル賞。

▲明治百年祭。

▲三億円事件。

▲御荘金吾著「ブラジルぶらぶら紀」松沢書店より発刊。

▲夢は夜ひらく。

◆アメリカ・ニクソン大統領。

◆ソ連がチェコに侵入。

一九六九年（昭和四十四年）

▼胡椒の病害（フザリウム菌、胴枯病、立枯病）が蔓延し始める。

その為、トメアスーなどで胡椒栽培をしていた人達がトメアスー以外の土地を求めて移動、転居ブームが始まる。

またベレン近郊で胡椒栽培していた人達も新しい土地を探して遠隔地に胡椒園を作り始める。

日本人植民地における大量移動と拡散の時代に突入していく。

農業から商業への転業なども始まる。

親から子供に経営が移っていく。

▼辻小太郎にベレン市名誉市民賞の授与がある。

▼日本冷蔵がベレン法人として設立。

▼日伯協会が公益団体として認可される。

▼アマゾニア病院の落成式が行われる。

▼アマゾン日本人移住四十周年祭が挙行される。

▼マウエス在住の大石小作に勲五等瑞宝賞が贈られる。

▼ベレン総領事代理・井口良治。

▼すでに二、三年前から日本人の間で訪日 観光旅行が始まり出したが、年を迫って増え出していく。

▼州知事・アラシージ・ヌーネス。

▼大統領・コスタ・イ・シルバ。

▲佐藤栄作。

▲エコノミック・アニマル。

▲ボーリング。

▲やったぜベイビー。

▲港町ブルース・黒猫のタンゴ。

◆アポロ月面着陸。

◆全米各地でベトナム反戦運動。

一九七〇年（昭和四十五年）

▼北伯相撲大会が行われる。相撲ファンが多く、年中行事になって行く。

▼高村正寿と山田義一に勲五等瑞宝章が贈られる。

▼ベレン総領事に谷新太郎が着任。

▼天理教の白木原明広氏が訪伯に際してハワイ農大試験場を訪問し、ハワイのパパイヤ（マモン）種子を入手、胡椒の病客で苦境に立つ日本人のためにと持参する

▼辻小太郎死去。

▼アマゾン横断環路の工事が始まる。

▼サンパウロの大口総領事の拉致事件。

▼ワールド・カップ（メキシコ）でブラジル・チームが優勝する。

▼州知事・アラシージ・ヌーネス。

▼大統領・エミリオ・メジシ。

▲佐藤栄作。

▲日本万国博覧会。

▲よど号のハイジャック事件。

▲三島事件。

▲プロ野球の黒い霧。

▲経験・京都の恋。

◆アラブのナセル急死。後任サダト。

◆北海の大油田を発見。

一九七一年（昭和四十六年）

▼バレーボールのヤシカチームがベレンで日伯親善試合を行う。

▼平賀練吉に第五回吉川英治賞が決まる。

海外では初めての授賞で、エリザベス・サンダース・ホームの沢田美喜女史が表彰状と副賞をトメアスーに持参して授与された。

▼故辻小太郎に勲三等旭日中綬章が遺族に伝達される。

▼日本大使館がリオからブラジリアに移転を開始。

▼江村良造に勲四等旭日章が贈られる。

▼州知事・フェルナンド・ギリヨン。

▼大統領・エミリオ・メジシ。

▲佐藤栄作。

▲沖縄返還。

▲ドルショック・株式市場大暴落。

▲天皇訪欧。

▲私の城下町・また逢う日まで。

◆インド・パキスタン全面戦争。

一九七二年（昭和四十七年）

▼中村大使がパラ州知事を表敬訪問。

▼アマゾン河の大洪水・ジュート栽培者が大被害。

▼アマゾン横断環路（トランス・アマゾニカ）の開通。

▼カラーテレビの放映が始まる。

▼第二トメアスー入植一〇周年記念祭が行なわれる。

▼ブラジル独立一五〇年祭が行われる。

▼汎アマゾニア相撲大会に佐藤総理より寄贈された優勝旗が届く。

▼山田義雄に勲四等旭日賞が授与される。

▼尾山良太死去。

▼州知事フェルナンド・ギリヨンに勲二等旭日皇光賞がブラジリアの日本大使公邸で授与される。

▼州知事・フェルナンド・ギリヨン。

▼大統領・エミリオ・メジシ。

▲田中角栄。

▲横井庄一がグアム島で発見される。

▲札幌冬季オリンピック。

▲浅間山荘事件。

▲東京で日本アマゾニア協会設立。会長に千葉三郎が選出される。

▲世界は二人のため。

◆ニクソンが北京・ソ連訪問。

一九七三年（昭和四十八年）

▼永大産業がベレンに設立される。

▼大洋漁業がベレンに設立される。

▼トメアスー・ベレン間の産業通路が開通する。

▼パラ州移動政府がトメアスー郡に設置される。

▼トメアスー・パラゴミナス間の通路が開通する。

▼移住船の最終便「にっぽん丸」がベレンに寄港、これより移住は航空機になる。

▼平賀練吉に勲三等旭日賞が贈られる。

▼山田義雄死去。

▼衆議院派遣訪伯親善議員団福永団長一行十六名がベレンを訪問する。

▼故信重時春に勲六等单光旭日章が遺族に伝達される。

▼在伯日系人口五十四万人となる。（日本国籍一二万七四〇〇人）

▼コッケイロ球場で第三回アマゾニア地区対抗相撲大会が開催され、カスタニャール、クルサー、グアマ、ビジア、サン

タイザベル、ベネビジス、コツケイロ、ベレンの八地区百人の選手が参加して盛大に行なわれた。

▼高瀬茂一に勲五等瑞宝章が贈られる。

▼宇山大使がベレン知事を表敬訪問。

▼サンパウロで地下鉄の試運転が行われる。

▼三笠宮宜仁殿下来伯。

▼州知事・エミリオ・ギリヨン。

▼大統領・エミリオ・メジシ。

▲田中角栄。

▲第一次オイル・ショック。

▲金大中事件。

▲パンダ来日。

▲江崎ノーベル賞・巨人V9。

▲本田靖春著「サンパウロからアマゾンへ」比祥社より発刊。

▲くちなしの花・青い果実。

◆ベトナム和平協定調印。

◆第四次中東戦争始まる。

◆第一次石油ショック。

一九七四年（昭和四十九年）

▼アマゾン河が大洪水でジュート産業が大被害をうける。

▼大雨による影響で胡椒の病害が蔓延し始める。

▼ベレン・ブラジリア街道の舗装が完成する。

▼カスタニヤールを中心とした地区でハワイ・マモンの栽培ブームが始まる。先鞭をつけたのは大屋昇。

▼ベレンでアマゾン・カントリー・クラブが結成される。

▼ベレン総領事に増沢幸三郎が着任。

▼アマゾン日本移民援護協会はアマゾン日伯援護協会と改称する。

▼海外移住事業団は国際協力事業団に合併される。

▼第二トメアスー移住地にアマゾン熱帯農業綜合試験場が設立される。

▼佐藤信市に勲六等旭日光章が贈られる。

▼市原津南三に勲六等瑞宝章が贈られる。

▼田中首相より日伯協会にサッカー優勝額の寄贈がある。

▼サッカーの名選手ペレーの引退。

▼サンパウロのジョエルマ・ビルが火災で一八八名の死者が出る。

▼州知事・フェルナンド・ギリヨン。

▼大統領・エルネスト・ガイゼル。

▲田中角栄。

▲佐藤栄作ノーベル賞。

▲小野田さん帰国。

▲フォード大統領来日。

▲田中角栄辞任・長島引退。

▲襟裳岬・うそ。

◆ウォーターゲート事件でニクソン辞任。
フォード大統領。

一九七五年（昭和五十年）

▼島川清久、細川悦次郎、遠藤滝蔵、池田忠三、永野豊喜、岩間敬遠の諸氏に勲六等瑞宝章が贈られる。

▼セアーザの青果物中央卸市場が落成する。

▼ミス・コロニア・コンクールがパウリスタ新聞社の後援のもとに行われる。

▼ベレン・トメアス道路でトメアス郡入口に横たわる川をフェリーで渡っていたのが、架橋が完成することにより、自動車による往来時間が短縮され夜間の交通も出来るようになる。

▼パラ州相撲連盟が結成され、第一回相撲大会が行われる。

▼この年、日本やサンパウロからの訪問客が次から次へと、ベレン、トメアス、カスタニャールなどを訪れる。

△福田赳夫副総理一行・ミツエ副総理夫人・宇山在伯日本大使・田中竜夫衆議院議員・中山太郎衆議院議員・森喜朗衆議院議員・伊達邦夫外務省中南米審議官・青木楨三経済企画庁調査局長・安田博内閣審議官・永瀬要石経済企画庁秘書・江口揚外務省中南米一課・奥村裕一経済企画庁・吉村勝美外務省中南米一課・千葉三郎衆議院議員・町村金吾参議院議

員・伯国側接待員ブエノ公使夫妻。

△斎藤広志サンパウロ大学教授。

△半田知雄画家。

△相田洋NHK取材班一行三名。

△法眼普作夫妻国際協力事業団総裁。

△菊池育三朝日新聞記者。

△大石修而日経新聞編集委員一行。

△角田房子作家。

△鈴木医博東北大教授。

△高平公友富山県県会議長一行四名。

△中西健次高砂香料社長一行。

△江上弘日本青年会議所一行十名。

△中村分力県会議員団一行八名。

△千坂武志千葉大教授一行五名。

△中沢源一郎サンパウロ文協会長。

△福田久雄海外移住審議会々長一行二名。

△荒勝巖海外漁業協力財団理事長一行六名。

△矢花敬二NET朝日取材班一行二名。

△朝永巖夫夫妻日本冷蔵社長。

この他、多くの人々が頻繁に来訪された。

▼マナウス自由貿易都市に日本企業が相次いで進出し始める。

▼ガイゼル政府は、国内のプロ・アルコール計画を強力に実

施し始めて行く。

▼州知事・アロイド・シャーベス。

▼大統領・エルネスト・ガイゼル。

▲三木武夫。

▲英女王エリザベス夫妻来日。

▲天皇・皇后訪米。

▲沖縄海洋博。

▲どん底景気。

▲飯山達雄著「アマゾンと裸族」講談社より発刊。

▲シクラメンの香り。

◆第一回サミットをパリで開催。

◆ベトナム戦争終結。

一九七六年（昭和五十一年）

▼日伯合弁パラ州アルミ精錬事業の調印が日本側企業代表
中山一郎とブラジル側代表リオ・ドーセ社長レイスとの間で
行なわれ、共同声明を発表する。

▼州知事・アロイド・シャーベス。

▼大統領・エルネスト・ガイゼル。

▲福田赳夫。

▲グロムイコ外相来日。

▲田中角栄逮捕。

▲酒田大火。

▲向一陽著「奥アマゾン探検記(上下)」中央公論社より発刊。
▲スターリング・トム著、竹内正幸訳「アマゾン」タイムライフブックスより発刊。

▲鈴木一郎著「アマゾンの女たち」インタナル出版部より発刊。

▲御荘金吾著「アマゾンに流れる・日本人苦闘史」家の光より発刊。

▲小林殉子著「中南米さすらい記」アロー出版社より発刊。

▲比の宿から・およげタイヤキ君。

◆天安門事件。

◆毛沢東死去。

◆米、カーター大統領。

◆アメリカ建国二百年祭。

一九七七年（昭和五十二年）

▼越知栄に勲五等瑞宝章が贈られる。

▼アマゾニア病院に国際協力事業団より供与された東芝製テレビ付X線装置一式的一千五百万円が日本郵船の「サツポロ丸」で到着し搬入される。

▼国際協力事業団より移住者子弟の日本への研修生募集が始まる。ベレン総領事に石川賢治着任。

▼笹川良一夫妻二行五名がベレン、トメアスー、マラジョー島を訪れた。

▼アマゾニカ農業組合誕生。カスタニャール地区でメロン、

マモンを主作にしている有志二十四名によつて設立、初代理
事長・佐藤清美。

▼作家・北杜夫が取材のためベレンを訪問。

▼州知事・アロイド・シャーベス。

▼大統領・エルネスト・ガイゼル。

▲福田赳夫。

▲領海二百カイリ法。

▲王選手ホームラン七五六号達成。

▲成田開港反対運動。

▲パラ州の森林資源開発会社ジャリー帝国の主であり、世
界一の金持ちと云われるアメリカ人D・ルドウィックが造船
不況に悩んでいた石川島播磨重工に注文していた「インダス
トリアル・プラットホーム・システム」総額六百億円と云う
大型タンカー五隻分に相当する水上に浮かべるパルプ工場が
進水した。

このシステムは世界でも初めてのユニークな試みで、二つ
のプラットホームの上に建設されており、長さ二三〇メート
ル、幅四五メートル、深さ十五メートルで戦艦大和をちよつ
と小さくした大きさで、アマゾン河の支流ジャリー川まで海
の上を日本から引つ張っていくことになる。

▲「アマゾン開発計画の現状」日本貿易振興会より発刊。

▲「アマゾン地域林業開発協力事業基礎調査報告書」国際協
力事業団より発刊。

▲M・ベッティ・ジェーン著、大貫良夫訳「アマゾンニア・偽りの楽園における人間と文化」社会思想社より発刊。

▲大給近達著「はるかなるシンガーのわが友」学習研究社より発刊。

▲「第三トメアスー植民地調査報告書」国際協力事業団より発刊。

▲橋本偉元著「アマゾネス号の冒険」立風書房より発刊。

▲ハーンドン著・泉靖一訳「アマゾン探検紀」河出書房新社より発刊。

▲角田房子著「約束の大地」新潮社より発刊。

▲津軽海峡冬景色。

◆サダト大統領イスラエル訪問。

◆エジプト・アラブ五ヶ国と断交。

一九七八年（昭和五十二年）

▼パラー老人クラブ発足。初代会長に越知栄が選出される。

▼千葉三郎団長によるマンジオカ・エネルギー開発基礎調査団が来訪する。

▼日本移民七〇周年記念祭が盛大にサンパウロのパカエンブー競技場で行われる。

式典はガイゼル大統領の主宰の下に、日本から皇太子殿下ご夫妻がご臨席され九万人近くの参列者が参加した。

ガイゼル大統領は演説の中で「日系人は現代ブラジル社会

における重要な構成要素の一つである」と評価した。

▼皇太子殿下・妃殿下がベレン、トメアスーを訪問される。

▼カーター米大統領がブラジル訪問。

▼大沼春雄に勲五等旭日章が贈られる。

▼平賀清子に勲五等宝冠章が贈られる。

▼州知事・アロイド・シャーベス。

▼大統領・エルネスト・ガイゼル。

▲大平正芳。

▲日中平和友好条約。

▲成田開港。

▲カラオケ・ブーム。

▲江川巨人入団騒ぎ。

一戸稔著「コシヨウの根腐病防除のために」国際協力事業団より発刊。

▲「ブラジル連邦共和国マンジョカ・アルコール生産計画予備調査報告書」国際協力事業団より発刊。

▲B・ブリアン・田中協子著「最後のアマゾン」集英社より発刊。

▲開高健（文） 高橋昇（写真）「オーパ！」 集英社より発刊。

▲UFO・愛の水中花。

▲この年、日本人のブラジル移住七〇周年を記念して外務省・国際協力事業団共催のもとに、外務省国際会議場に於て

三日間に亘って海外移住の意義を求めた「日本人の海外移住に関するシンポジウム」が行われる。

一九七九年（昭和五十四年）

▼アマゾン日本人移住五〇周年祭が行われる。記念事業として日本船舶振興会（笹川良一会長）より一億円の寄付を得て、アマゾニア病院の別棟が落成する。

また、開拓先没者慰霊碑が建立される。

▼フイゲレード大統領より五〇年祭に対して祝電が入る。

▼マンジョカからアルコールを抽出する目的で合弁会社COPAMASAが設立される。

▼日本から慶祝使節団長として千葉三郎が参加途中メキシコで客死する。

▼カスタニャール市と高知県須崎市との姉妹都市調印。

▼パラ州と千葉県との姉妹州県調印。

▼サンパウロより弓場バレー団がベレン公演に来て盛況を博す。

▼角田房子著「アマゾンの歌」がフジテレビ開局二〇周年記念番組のドキュメンタリー・ドラマとして映画化のため、ロケハン一行がトメアスー入りをする。

（俳優）仲代達矢・田中邦衛・賀原夏子・新井春美・北村和夫・山本学・山本亘・赤塚真人・神崎愛・新克利・河原崎次郎・役所広司・左とん平・香山美子。

(スタッフ)ディレクター・戸田浩器、演出助手・西崎東・酒井彰、演技事務・伊藤嘆、デザイナー・藤森信之、美術進行・山本修身、小道具・相馬徹、メイク・尾首正幸、衣装・菅田典弘、テクニカル・ディレクター・杉山久夫、カメラ・下田誠、映像・大野哲夫、音声・加藤健治・吉田利雄、証明・高浜潤作、スチール・島田和之。

▼前川忠夫香川県知事夫妻一行五名がベレン来訪。

▼宮城県南米使節団一行五八名がベレン来訪。

▼衆議院議員団々長三宅正一の一行九名が ベレン、トメアスーを訪問。

▼水産大学の練習船「耕洋丸」がブラジル政府の要請を受けてアマゾン河口の漁業調査にやってくる。

▼歌手・畠山みどりの公演が行われる。

▼渡辺美智雄農林水産大臣一行がベレン、トメアスーを訪問。

▼サンタ・イザベル地区で、ピメンタ園の跡作としてデNDER椰子の栽培が拡大し始めてくる。

▼コロニアにビデオ・ブームが起ってくる。

▼日航名人会・落語家の柳屋小せん、松鶴家千とせ、三遊亭うた、と漫才の笹一平・八平がベレンに公演に来る。

▼州知事・アラシージ・ヌーネス。

▼大統領・フイゲレード。

▲大平正芳。

▲東京サミット。

▲漫才ブーム・省エネ。

▲「ブラジル国アマゾン地域の土壌粘土鉱物研究に関する技術協力報告書」国際協力事業団より発刊。

▲「ブラジル連邦共和国水産資源陸上調査報告書」国際協力事業団より発刊。

▲大給近達監修「アマゾニア・パンパス世界の民族6」平凡社より発刊。

▲角田房子著「アマゾンの歌・取材の思い出（講演）」日本ブラジル中央協会より発刊。

▲H・マルセル者・小川伸訳「アマゾンのアトランチス」大陸書房より発刊。

▲恋人よ・雨の慕情。

◆英・サッチャー首相。

◆朴大統領暗殺。

◆ソ連アフガニスタンに侵攻。

◆第二次石油ショック。

一九八〇年（昭和五十五年）

▼ベレン総領事に辻羊三が着任。

▼汎アマゾニア日伯協会とアマゾニア日伯援護協会の合併問題が話題になる。

▼「会報。パンアマゾニア」一四一号より邦字タイプが導入さ

れ、活字印刷の会報へと刷新された。長年に亘ってガリ版で作っていた紙面は消えて行くことになる。

▼ローマ法皇ジョアン・パウロ二世がベレン市を訪問、法王が通る沿道は人また人、群集がまるで津波のような観を呈した。

▼作家・醍醐麻沙夫がベレン訪問。

▼この年フィゲレード政権のもとに「大カラジャス計画」が大統領令第一八一三号の発令で正式に発足し始めた。

パラ州にあるカラジャス鉱山を中心に約七八万平方キロの地域を開発するプロジェクトである。

鉱山に埋蔵する鉄鉱石を主体に他の鉱物資源の開発、植林、農業、牧畜、水力発電、鉱物加工、港湾施設、約九百キロ近い鉄道建設などが含まれる総額が約六二〇億ドルにもなるアマゾン開発としては最大のプロジェクトとなり、その資金は日本の企業グループや欧米の銀行グループを始めブラジルの国営会社であるバーレ・ド・リオドーセ社などが参加することになった。

その内容は百八〇億トンの鉄鉱石が埋蔵されていると云われるカラジャス鉱山一帯を被う森林の伐採から始まり、それに必要とされる労働者、職員の住宅、外来者のホテル、子弟の学校、病院、食堂、飛行場、ブルトーザーなどの重機類を搬入するための通路などから、鉄鉱石を露天掘りで掘り出し、それを鉄道で大西洋岸にあるマラニョン州のサンルイス

まで運送する。

一方、サンルイスには運び出された鉄鉱石を積込み、大型の輸送船が横付け出来る港湾施設の建設と、将来鉄鉱石を製錬するために必要とされる木炭生産の為の植林事業から、鉄道敷設地帯に居住するインディオ対策、また鉄道によって農産物や牧畜関係の輸出のために農地、牧場などの造成とそれに関連するあらゆる事業などが含まれていた。牛肉の生産は年間四〇万トン进行予定し、一万ヘクタール程度の牧場を三百ヶ所にわたって造成する計画になっていた。

農業の耕作面積は六八〇万ヘクタールを計画していた。

この巨額のプロジェクトの予算には、ツクルイに建設するダムと水力発電所の建設費の約五六億ドルは含まれておらず、その規模はダムの長さ一九キロ、水没する森林面積推定二千平方キロで、その中には六カ所の町とパラカナン族とガビオン族の居住地も含まれ、最終発電能力は八千メガワットと計画された。

この発電所の目的は、豊富な電力をベレン、サンルイス、カラジャスなどに送電することによりアマゾン一帯の工業地帯を育成していくことにあった。

特にトロンベツタ河に埋蔵するボーキサイト鉱脈を工業化するについては、巨大なアルミニウム製錬所が必要であり、それには大量の電力が不可欠とされていた。

発電所建設工事を担当するエレトロノルテ社は、ツクルイ

発電所の建設の他に同いしトカンチンス河に更に八つのダム建設計画を作成していった。

これら「大カラジャス計画」の具体案を立案していったのは、バーレ・ド・リオドーセ杜の「東部アマゾン―国家輸出計画」が叩き台となっていた。

アマゾン地域の雇用増大、資源および農産物の輸出促進が根底にあった。

▼州知事・アラシージ・ヌーネス。

▼大統領・フイゲレード。

▲鈴木善幸。

▲長島辞任・王引退。

▲百恵・友和結婚。

▲大平首相急死。

▲「ベレン近郊におけるオイル・パームの開発計画」国際協力事業団より発刊。

▲永田巖著「ブラジル国アマゾンの果実」

国際協力事業団より発刊。

▲金木良三（他）著「ブラジル日系農場の成立と発展・東京農大卒業生の農場経営」明文書房より発刊。

▲山根一眞著「アマゾンで日本人はグランチードと呼ばれた―地球最後のフロンテアでの1／2世紀」内田老鶴圃より発刊。

▲田畑弘「アマゾン賛歌」アマゾンの風物を描いた画集を発

刊。

▲奥飛騨慕情、ダンシング・オールナイト。

◆モスクワ・オリンピック（米・日・中・西独不参加）。

◆イラン・イラク戦争。

◆セントヘレンズ大噴火。

◆米・レーガン当選。

一九八一年（昭和五十六年）

▼国際協力事業団現地邦人ジャミック・ジェミスは撤退、精算業務に入る。

▼パリンチンスで高拓生入植五〇周年祭が行われる。

▼この頃よりコロニア各地でカラオケ・ブームが始まってくる。各自が日本からテープを購入して各家庭にカラオケ設備を装置したりし始める。

▼元首相・岸信介来訪。

▼故千葉三郎氏未亡人、礼子夫人が故人のトメアスーにある墓に分骨のために娘さんを同伴して来訪。

▼堂垣内北海道知事夫妻一行十二名がベレン訪問。

▼アマゾン日系人実態調査で千七百世帯で八千人と結果が出る。

▼ロンドニア州誕生。

▼州知事・アラシージ・ヌーネス。

▼大統領・フイゲレード。

▲鈴木善幸。

▲ローマ法王来日。

▲パソコン・ブーム。

▲福井ノーベル化学賞。

▲「マナウス自由港地帯の工業部門への下請け企業の移住進出の可能性」国際協力事業団より発刊。

▲「昭和五十五年度・散在移住着実態調査」国際協力事業団より発刊。

▲大宅壮一著「世界の裏街通に行く・南北アメリカ編・大宅壮一全集第一九巻」蒼洋社より発刊。

▲山田智彦著「女族大陸・南米原色紀行・明日があるさ！」集英社より発刊。

▲北酒場・ルビ一の指輪。

◆サダト大統領暗殺。

一九八二年（昭和五十七年）

▼ベレン総領事に南坊進策が着任。

▼胡椒の相場が底値となり、生産者は農業からの転業、日本への出稼ぎが始まる・汎アマゾンア日伯協会主催の第一回カラオケ大会が開かれる。

▼松平勇雄福島県知事一行十一名がベレン来訪。

▼ツクルイ水力発電所工事が始まる。

▼レーガン大統領のブラジル四十八時間訪問。

▼州知事・アラシージ・ヌーネス。

▼大統領・フイゲレード。

▲中曽根康弘。

▲日航機墜落。

▲三越岡田解任。

▲ホテル・ニュージャパン火災。

▲醍醐麻沙夫著「森の航跡―アマゾン野生紀行」週刊釣りサンデーより発刊。

▲田森良昭著「当世らてん・あめりか事情」PHP研究所より発刊。

▲「コシヨウ栽培のコツ・樹齢延長と生産安定」国際協力事業団より発刊。

▲矢切りの渡し・釜山港に帰れ。

◆フォーランド紛争。

◆国際地球環境会議ナイロビア宣言。

一九八三年（昭和五十八年）

▼この年、日伯合弁のアルブラス工場の工事が着工される。
ベレン市の対岸にあるバルカレーナに日伯合弁による総額二六億ドルと云われる予算でアルミ地金の工場建設が開始されることになる。

日本側の投資会社である日本アマゾン・アルミニウムとブラジル側の投資会社であるバール・ド・リオドーセ社とで、現

地合弁会社のアルブラス（アルミ地金の生産）とアルノルテ（アルミナ生産）の二社が一九七八年に設立されていた。

これは一九七六年にナショナル・プロジェクトとして日本とブラジルの経済協力として協定書に調印されていたものに基づいたものであった。

この二つの工事計画は、パラ州のトロンベッタ河に埋蔵されている約六億トンと云われるボーキサイトを運び出し、バルカレーナのアルノルテで年間八〇万トンのアルミナを生産し、それをアルブラスで年間三二万トンのアルミ地金に加工すると云う構想であった。

いずれにしても、大量の電力を消費する産業であり、ツクルイ発電所から安定した供給と、その電力料金が安価であることが条件とされていた。

アルブラスで生産されるアルミ地金は、日本側の出資金四九%の比率で日本側が引き取ることになった。

その原料となるアルミナは、分担するアルノルテの工場が建設され、操業を開始するまでの間は、米国のアルミ産業であるスリナミにあるアルコア社の工場から輸入することになった。

もともと、トロンベッタのボーキサイトはカナダのアルカン社で開発計画が進められていたのを、開発を断念したためにバーレ・ド・リオドーセ社がこれを引き受けたことから始まったことになる。

この頃、ツクルイのダム建設予定地での作業は急速に進められて行った。

森林伐採を請け負っていたカペミ社が三百万ドルの負債を負って倒産したこと等で、エレトロノルテ社は時間と予算に追われながらの計画を遂行していった。

必要物資はサンパウロやブラジリアからトランス・アマゾンカ（アマゾン横断埴路）の陸路を通じて搬入されたり、雨で陸路が不通になるとベレン港を通じて、トカンチンス河を船でセメントや資材を運びこんだ。

間に合わない物資は飛行機を使って運搬していた。

仕事を求める労働者や移住者たちがブラジル中から集まり、町の人口は急速にふくれて行った。

日本人グループが関係当局からの依頼で現場の労働者に供給する新鮮な野菜作りのために移動していったケースもあった。

四階級に分かれた住宅が建てられ、学校、病院、ホテルが建設され壮大な町作りが始まって行った。

一方、カラジャス鉄道に要する枕木になる原木も大量に伐り出されて行った。

この頃、アマゾン一帯でカラジャス向けの枕木は各地の製材所で生産されていた。

エレトロノルテ社としては、計画が予定通り進行しないと、「大カラジャス計画」をはじめ、ベレン地区のアルミ工場やサ

ンルイスの港湾整備、そしてその周辺産業の工業化計画にすべて支障を来してくるので、多少の障害は覚悟の上で遂行せざるを得なかった。

▼第一回アマゾン少年少女親善使節団の派遣が始まる。

▼永大産業で会社創立一〇周年記念が行なわれる。

▼アルコール自動車の販売が始まる。

▼ブラジルの対外債務八三八億ドルとなる。

▼州知事・ジャードル・パルパリーヨ。

▼大統領・フイゲレード。

▲中曽根康弘。

▲ロッキードで田中角栄有罪。

▲レーガン大統領来日。

▲北川靖夫著「アマゾン地域の自然―気候及び土壌を中心として」農林水産省熱帯農業研究センターより発刊。

▲仁科雅夫著「アマゾンよもやま話（講演）」日本ブラジル中央協会より発刊。

▲松阪実著「アドベンチャーアマゾン」マリン企画より発刊。

▲山田智彦著「魅惑のアマゾン」文芸春秋より発刊。

▲北の螢・涙のリクエスト。

◆大韓航空機がソ連機に撃墜される。

◆アキノ・マニラ空港で暗殺。

▼ブラジル全国に民主化デモが波及してい

▼ベレン総領事に伊藤武好が着任。

▼この頃より農地、市内の空き地に無法侵入して占有するグループが横行し始め、特に市街地に隣接してきた日本人農地にもはじまり、日本人が各所に被害を受け始める。

▼ツクルイ発電所が始動する。

▼州知事・ジャードル・バルバーリョ。

▼大統領・フイゲレード。

▲グリコ森永事件。

▲鈴木一郎著「アマゾンもうひとつのブラジル」晴文杜より
発刊。

▲寺田慎一著「アマゾンの農業開発」農林水産省熱帯農業研究センターより発刊。

▲「ブラジルにおける熱帯果樹並びにアマゾン地域における洗蔬の生産流通状況」国際協力事業団より発刊。

▲「移住派遣農業専門家報告書」国際協力事業団より発刊。

▲橋本膳元著「アマゾン水の変幻」六興出版より発刊。

▲松阪実著「ナマズ捕りに学べ！」情報センター出版局より
発刊。

▲夫婦坂・恋に落ちて。

◆ロスアンゼルス・オリンピックク。

◆レーガン再選。

◆チャレンジャー宇宙初遊泳。

一九八五年（昭和六十年）

▼ベレン総領事代理、高野和夫。

▼パラ―日系商工会議所発足する。

▼日本国際教育協会、国際交流基金共催による日本語能力検定試験が行われた。

▼会報「パンアマゾニア」一六一号に特集記事として「二世からの直言」が掲載され反響を呼ぶ。

「二世の良いところ」

*我々にブラジルの国籍を与えてくれたこと。

*日本の文化と知識を、我々の身近に置いてくれたこと。

*団体行動をすることが上手である事。

*常に新しさを求めながら、古い伝統を守っていること。

*道徳心が非常に強い。

*社交のエチケットを知っている。（だけど、それが気分を害することがある）

*穏健で辛抱強い。

*相手を非常に尊重する。

*笑顔がよくて物語りを話す事が好き。

*働いている会社に対しては、強い責任感を持ち忠実である。

*連帯意識が強い。

*経営者であれ、社員であれ、地域社会への奉仕であつても

責任をもって全力を尽くす。

「二世に反省してもらいたい事」

*日本をここに持ち込まないでもらいたい。

我々はブラジルに住む日本人を親にもつブラジル人である。

*あなた自身の理想に基づいて、その目的と夢を迫って下さい。あなたの子供にあなたの理想を託さないで下さい。

*思ったこと、感じたことをそのまま話して下さい。

*偉そうな態度を保たないで下さい。我々は人間であり不完全であります。

あなたの不完全を知ったからといって、

あなたを愛さなくなるわけではなく、あなたの率直さが更に偉く見えてくるものです。

*日本語をおぼえてほしいなら、それ相応のきびしさをもつて教えて下さい。

私達と話すときは、日本語かブラジル語か区別して必要以外はまぜないで下さい。

*二世が日本語で話しかけた時は、正しい日本語で自然に答えて下さい。それはおぼえるために協力となり、機会を作ってくれているのですから。

*主婦たちも平等の人間であり、旦那さんと同じ権利がある。

*階級はなくてはならない。しかし階級以下の者に対して、非人間的さや、軽蔑を道具として使わないでもらいたい。

*日本・技術的には最先端である。しかし人間的には普通以下である。

*わずかな例外を除いては、パラ―の一世達は四、五十年前の考えで行動する。

*自分自身の子孫をも突き放す程、一世たちは人種差別が強すぎる。

*一世のしゃべる言葉や表情に出すことは彼の内面の感情を表していない。余りに見かけを気にする為に本当の気持ちをぶちこわしている。

*見知らぬ人に対しては、冷たくて疑い深くて、とつつきにくい。

*現在まで、二世に対して一世からの投書による呼びかけはなかった。しかし一世たちは、二世の問題を真剣に考えようと常に言っている。これを我々の言葉でパップフラードと言う。

*多くの場合、自分の意見に責任を持ちたくないのでグループのリーダーになり、自分の意見をグループの意見として利用する。

*所属する組織に忠実すぎる。自分の内面では反対していても、表面では組織の考え方に賛成していく。その為に本音と建前を使い分ける。

*一流の学校にさえやれば教育の問題は解決すると思っている。家庭では子供たちによい指導を怠っている。そして日本語の教育も。

*日本籍を話さない人たちには信用が少なく、除け者扱いにする。

*指導は必要である。しかし我々に出来ることまですべてを解決して、いきずまらせないでくれ。徐々に責任を与えて我々の能力を示す機会を与えてもらいたい。

*一流の学校に通わせ小遣いをくれるのがすべてではない。大事なのは対話である。

幼児期から対話を始めて下さい。そしたら、内容がむずかしくなったときに惑わないでしょう。

* * *

▼この年、カラジャス鉄道が開通する。

カラジャス鉱山からマラニョン州のポンタ・ダ・マデイラ港までの八九〇キロに亘る鉄道が完成する。

鉄道建設だけに投下された資金が一七億ドルで港湾施設に二億ドル、鉱業生産に六億ドルなどで合計四五億ドルのプロジェクトの必要資金は世界銀行との協定で確保されており、そのうち日本は五億ドルを調達する事になっていた。

カラジャス鉱山は米国のUSスチールの技師が一九六九年に発見したもので、鉄鉱石の埋蔵量が百八〇億トンと推定さ

れ、世界最大の埋蔵量となっている。

USスチールは、バーレ・ド・リオドーセ社と組んで鉱山を開発する会社を設立するが、事業の方針で両者は対立を始めていく。

USスチールは投下資本を押さえて露天掘りした鉱石を河川を使って船でベレン港まで運びだし、ベレンから米国の製鉄所に輸出することを主張したが、リオドーセ社は大規模の資金を投下して大西洋岸まで鉄道を敷設して鉱石を輸送し、そこから世界市場を相手に特に日本市場を主張した。

そのためUSスチールはプロジェクトへの関心を失い、所有する株をリオドーセ社に売却してしまうことになる。

その結果、プロジェクトの推進はリオドーセ社のみで始めて行くことになっていく。

こうしてブラジルの国営会社バーレ・ド・リオドーセ社の首脳陣は、世界からの資金ルートを作り出すための根回しを開始していった。

計画されたカラジャスを中心とする開発事業は世界銀行の参加を得て一挙に具体化していくことになった。開発が残す問題を理由に、参加をしぶっていた世界銀行もブラジルの抱える国際収支の悪化を改善していくためには、大量の鉄鉱輸出によつての開発が必要である主張に同意していくことになる。

この年に生産は開始され、生産量は年間三千五百万トンか

ら始まり、五千万トンまで増産する計画がたてられ、日本向けに一千万トンの買い取りが約束された。

鉄鉱石の輸出を続けると共に、その鉱石を製錬するための木炭加工産業の育成にもリオドーセ社は力を入れ始めた。

また、木材やアグロインダストリーの輸出を拡大するための奨励策によって鉄道沿線の森林が伐採され、牧場や農場が原始林の中に現れる風景が増えてきた。

鉄道沿線の各所に人々が集まり部落が出来だすと、先住のインディオたちとの抗争がアチコチで派生してくるような事件も出てきた。

それは、多くは毎日の食べ物の原因となっていた。

部落の人達は、作物を植えてもそれが口に入るまで時間がかかるので、近くの森に入り動物を狩猟することによって飢えを凌ごうとする、たまたま動物が沢山いれば塩漬けで保存できるので捕まるだけ狩ってしまう。

森の中で必要な時に必要なだけ、獲物をとって生活していたインディオにとっては自分たちの死活問題になってくる。

こうして両者の対立が激しくなってくる。

動物たちも段々と少なくなってくる。

森の中で食べられる自然の木の実も仲々いオビドスに巨大なダムを建設してダムの上流にある無数の河の水位を上げて、南の方に流れていく河の支流と合流させることにより、ブラジル内陸を河船でどこにでも運行出来ることで、ダムの

安い電力と併せてブラジルの飛躍的發展が望まれると発表したレポートがあった。

この計画案が発表されると国内で非常に反響を呼び、アメリカの水爆ミサイルを積んだ潜水艦の基地にするのが真の目的ではないかとか、地下資源を持ち出すのが目的ではないのかとか、安い電力をアメリカに持ち出すのは狙いだとか、国内の反応は非常に冷たかった出来事があった。

近年になるとアマゾン地域と同じ緯度にあるアフリカ大陸に、アマゾンに現存する動植物を移動させてからその地下資源を開発するとか、その真偽はともかくアマゾンに関する噂が外部から飛び込んで来ていたことなども、軍部の憂いの一つになっていたのではないかと考えられる。

その為には、国境で隣接する国々との協力で、お互いの国境の測量やらタブーとされているインディオ問題も当然取り上げてくることになり、インディオの居住地は軍事的にも鉱物資源の開発においても非常に障害になってくることになる。

いずれにしても現在では人跡未踏の原始林とは云え、一度道が開かれれば人や車は出入りし、道端に製材所が立並びその周りの森林は切られて製材され輸出されて行き、残された土地はいつの間にか牧場に変貌していくか、その近辺でダイヤモンド、金やらその他の鉱物が発見されれば、たちまちガリンペイロ達の宿場町がアチコチに出現し始めて、軍部のコント

ロールは難しい状態になってくることは、従来のアマゾン開発が見せてくれている。

▼州知事・ジャーデル・バルバーリョ。

▼大統領・タンクレードの急死で、サルネイが就任する。

▲中曽根康弘。

▲日米経済摩擦。

▲三光汽船倒産。

▲化学万博つくば開催・スーパーマリオ。

▲南坊進策著「北伯の近況（講演）」日本ブラジル中央協会より発刊。

▲D・シエルトン著・関西ラテン・アメリカ研究会訳「奇跡の犠牲者たちブラジルの開発とインディオ」現代企画室より発刊。

▲醍醐麻沙夫著「アマゾン・クライマックス」新潮社より発刊。

▲田中光二著「アマゾン源流（最後の冒険大陸に行く）」光文社より発刊。

▲尾崎龍夫著「アマゾン紀」

▲伊沢絃生著「アマゾン動物記」動物社より発刊。

▲ミ・アモーレ。

◆ゴルバチョフ書記長。

◆メキシコ大地震。

◆世界人口四八億。

一九八六年（昭和六十一年）

▼胡椒相場が上昇し始める。

▼強盗が続出する物騒な世相になってくる。

日系人同志の防犯対策が各地で討議され出してくる。

▼マナウス進出の日本企業が、ベレンの日系人材を探し始め出し、引き抜きが始まる。

◆外人登録証の更新が始まる。

▼イコアラシーからオウテイロの橋が完成する。全長三九〇メートル。

▼日本人の間でゲートボールが盛んになってくる。

▼作家・三好徹がベレン来訪。

▼ベレン市にセントウールが完成する。

観客席五四〇の劇場・百人入りの映画館八五〇議席の講堂・軽食堂・図書館・画廊・展示室などの施設。

▼フスカの生産中止となる。

▼クルザード紙幣。

▼州知事・ジャードル・バルバーリョ。

▼大統領・サルネイ。

▲中曽根康弘。

▲東京サミット。

▲チャールズ皇太子ダイアナ妃来日。

▲「ブラジルにおける熱帯果樹並びにアマゾン地域における

蔬菜の生産流通状況」国際協力事業団より発刊。

▲北杜夫著「輝ける碧き空の下で 第二部」新潮社より発刊。

▲FINCHACHA。

◆チャレンジャー空中爆発。

◆マルコス政権崩壊。

◆チェルノブイリ原発事故。

一九八七年（昭和六十二年）

▼JICAの助成により、汎アマゾン日伯協会にベレン日本語学校が開校する。

▼年々急騰してきていた胡椒相場が暴落を始める。

▼日本への出稼ぎブームが始まる。日本から業界代表が頻繁に訪れ、募集と面接など行われる。

▼汎アマゾン日伯協会とアマゾン日伯援護協会との本部施設交換を両協会の総会決議により実施、汎アマゾン日伯協会は現住所に移転する。

▼アマゾン日本人移住六〇周年祭準備委員会が発足する。

▼州知事・エリオ・ゲイロス。

▼大統領・サルネイ。

▲中曾根康弘・竹下登。

▲東芝機械コム違反・国鉄民営化。

▲利根川ノーベル医学生理学賞。

▲山根一眞著「アマゾン入門」文芸春秋より発刊。

▲クストー著・開高健監修・柴田都志子訳「偽りの楽園」光

文社より発刊。

▲木村快著「地球の裏側で出合った日本」同時代社より発刊。

▲松阪実著「これがほんとうのアマゾンだ」PHP研究所より発刊。

▲田森良昭著「ブラジルの旅」昭文社より発刊。

▲命くれない・泣いてみりゃ・・・。

◆エイズ患者が二三一ヶ国で五万一五三五人とW H O Wで発表。

一九八八年（昭和六十三年）

▼汎アマゾニア日伯協会創立三〇年を迎える。

▼小林康一大使夫妻ベレン来訪。

▼礼宮文仁殿下ベレン来訪、盛大な記念式典を平和劇場で行する。

▼サンパウロで移住八〇周年記念式典が行なわれる。

▼アマゾン日本人移住六〇年祭委員会が正式に発足する。

記念事業の一つとして「アマゾン日伯文化交流センター」建設が懸案となる。

▼州知事・エリオ・ゲイロス。

▼大統領・サルネイ。

▲竹下登。

▲リクルート疑惑始まる。

▲アグネス論争

▲人生いろいろ・パラダイス銀河。

◆ソウル・オリンピック。

◆米大統領選挙、ブッシュが大勝。

一九八九年（平成元年）

▼アマゾン日本人移住六〇周年記念行事の一環として日航名人会が六月六日SESI劇場で開演された。

出演者・三笑亭夢楽師匠、三笑亭小田馬師匠、三笑亭夢三西、ニユーマリオネット二名。

▼アマゾン日本人移住六〇年祭典プログラムが開催された。
十一月二十五日より三十日の六日間に亘って、主なる行事は次の通り。

▽六〇年記念ミサ（セー教会）

▽州政府勲章伝達式（州庁）

▽祭典委員会主催歓迎会（ヒルトン・ホテル）

▽物産展・写真展・図書展「日本人について」（州立文化会館）

▽日本映画会（州立文化会館）

▽日本のタベショー「着物・茶・琴・生け花」（セントウール）

▽記念式典・アトラクション（平和劇場）

▽日本民謡使節団民謡ショー（州立文化会館）

▽州知事主催レセプション（州知事公邸）

▽パントマイム・ギリヤーク尼崎（州立文化会館）

▽日本食のタベ・盆踊り大会（州立文化会館）

▽コロニア文化展（州立文化会館）

▽筑紫わかほ歌謡ショー（州立文化会館）

▽トメアスー記念式典（トメアスー）

▽絵画展・日本切手展（州立文化会館）

▽シンポジウム「アマゾンの日系人」（州立文化会館）

▽祭典に日本、リオ、サンパウロから参加された人々は次の通り。（敬称、肩書は省略いたします）上村千一郎・松野幸泰・鈴切康雄・片岡清一・片岡一江・師角憲二郎・寺部かつ大平定雄・大平マスヨ・今村忠雄・川口勲・菅原正文夫妻・崎山盛繁・酒井冷蔵・風間孝晴・釜野井正雄・本田富雄・白石源次郎・高橋時春・高橋あやの・河合良隆・河合秀倫・河合新三郎・吉岡征治・寺部震・田中保人・木村五志・稲垣春海・谷沢喜代太・大木松男・小沢良雄・小沢明子・小菅明・小菅トヨミ・内木秀道・鈴木路子・鈴木淳治・馬淵信宏・黒田勝士・玉浦斗南・ミヨシアキラ・カノマサヒコ・クロケイ・増子宏一・丸山保・中野清・梅沢秀次・竹内十次郎・富田六左衛門・上村阜男・坂田緑郎・浜本義郎・村田実・前田宏・米井薫甫・石崎幸亮・稲本勇一郎・岸上修・入江定之・宮原岩政・林義博・池原泉・泉信喬・小林好明・野田洋介・長谷川隆・宮田昭子・大竹安雄・大竹登美二・巖悦男・栗原均・相川久男・安藤勇・宮内三郎・笹生定夫・加賀谷健・本清秀雄・イトウタケマロ・勝地正・鍵田吉徳・高橋準・国吉隆・国吉和江・タキグチシゲオ・田野辺充男・音域健蔵・菊池宏次・大江敏夫・落合豊司・石井勝一・クリハラヨーコ・平木春男・

辻村衛・国分伸二・奴賀直・ユタカレッドベター・ハロルド
レッドベター・吉田弘正・松浦孝幸・白石晃・草刈恭・馬場
正義・沼田康彦・鎌田源一郎・浅野敬喜夫妻・太田昭夫・オ
ノタカトシ・タカハシヒロシ・ハナヤカズオ・ユキススム・
スガハラヤスオ・西野世界・林照雄・高木義人・上村孝志・
中村忠和・中村初代久保研介・村田信博・入江シズ・黒岩正
成・橋本常久・岡久子・吉永正義・吉永コタロー・タカモロ
セイイチ・タカモトサダコ・シノザキヨイチ・ゼンタカシ
クロズミマモル・マルヤマタカテル・白木原昌子・丸岡恵・
大竹正純・小林君子・ギリヤーク尼崎・藤尾隆造・照井洋三
郎・根岸久江・峰岸好子・野口喜三郎・鹿間正治・熊谷千鶴
子・葛本泰子・竹田傑・竹田直・井本秀幸・上井笑美子・菅
田ひろみ・武久覚・筑紫わかば・港春樹・田中則子・佐藤敏
夫・石井トミ・小池志江・阿部せん・吉田しげ・西岡国雄・
鈴木ヒデ子・篠原素子・正樂井朝子・武田勇・大野よね・桜
井栄・桑原道子・森脇健治・桑名英・山崎美江・小沢キミエ・
高橋清子・森脇慶子・山口重代・武田美智子・石井アズサ・
和智重徳・小林幸子・沼尻資男・柳橋美代子・和智マスエ・
山崎賢二・出田務・橘富士男・上原啓三・救仁郷靖憲・イワ
イタケシ・中沢宏一・大橋鉄雄・相沢・別役道昌・伊藤偵治・
サグチタイゾー・マキタヒロユキ夫妻・シカダアキヨシ・
シカダサナエ・モリヤマテルミツ・ナガシマフミオ・ワタナ
ベワクコ・ドイケンリョウ・ハラサワカズオ・イシズカタイ

リグ・オオツキケンスケ・イワオヒロミツ・イワオトシコ・
キザワヨシアキ・キザワセイカ・ニシカワタダオ・尾身倍一・
尾身タマエ・サイトーヨシオ・サイトーヨシコ・サトー
チユースケ・タカノヨシヒサ・ヤビクモセイ・ヤギウラリ
ユータロー・ヤマザキトキオ・ヤマザキマサミ・ヨコヤマイ
シエ・ヨコヤマトシコ・アベコーイチ。

▼日本への出稼ぎがピークとなる。ベレン総領事館の前に査
証をとる人達の行列が出来るようになる。

▼州知事・エリオ・ゲイロス。

▼大統領・サルネイ。

▲宇野宗裕・海部俊樹。

▲裕仁天皇崩御。

▲平成に改元。

▲消費税導入。

▲森下郁子著「アマゾン川紀行Ⅱ原始の川を診る」日本放送
出版協会より発刊。

▲川の流れのように。

◆中国大動乱。

◆地球環境問題首脳会議（環境サミット）。

◆ベルリンの壁が二十八年ぶりに消滅。

◆ブッシュ・ゴルバチョフ会談、東西冷戦の終結を宣言。

▼日本への出稼ぎが、日本の入国管理の緩和で職種・年齢枠が広がり、更にコロナの空洞化に拍車がかかってくる。

▼元竹下首相の提唱による「ブラジル国日系人との交流を通じたふるさと創生事業でブラジル全国から二百四十九名の日系人が各県人会などから選出され、十二日間に亘って日本政府と各都道府県に招待された。

ベレン地区からの参加は二十二名となり団長・及川定一（宮城県） 藤橋隆也（北海道） 縄田三男（青森県）ニッ森一次（青森県）佐々木八三（秋田県）武田幸一（山形県）斎藤邦弘（福島県）影山照男（福島県）早瀬好夫（栃木県）佐々木敏雄（栃木県） 平形広（群馬県） 菊池紘文（千葉県）五艘万里江（東京都）長島登志子（神奈川県）大橋正雄（静岡県）高石明生（島根県） 本田徹也（熊本県） 矢野正治（香川県） 井上太（高知県） 谷口道知紀（福岡県） 高尾勝美（佐賀県） 田中昭仁（熊本県）

▼州知事・エリオ・ゲイロス。

▼大統領・コロール。

▲海部俊樹。

▲天皇即位の礼。

▲長崎市長銃撃事件。

▲おどるポンポコリン。

◆国連麻薬根絶一〇年計画を宣言。

◆ソ連、初代大統領にゴルバチョフが就任。

◆東西ドイツ統一。

◆イラク軍がクエートに侵入。

一九九一年（平成三年）

▼アマゾン日伯文化交流センターが落成する。

敷地・一一三九平方メートル。

建築面積・四〇〇〇平方メートル。

総工費・二億二千三百四十二万五千円。

建設の趣旨

一、日伯友好観音の架け橋。

二、コロニア統合の象徴。

▼コロール大統領とPCファリアスの大がかりの汚職が発覚し、大統領は国会で弾劾裁判にかけられ辞職する。

▼州知事・ジャードル・バルバリーヨ。

▼大統領・コロール辞職、イタマール就任。

▲宮沢喜一。

▲佐川急便事件。

▲貴ノ花田婚約騒動。

▲西沢利栄・小池洋一著「アマゾン生態と開発」岩波新書より発刊。

▲晴れたらいいね・君がいるだけで。

◆ロスアンゼルス暴動。

（年表 終）

アマゾン日本人移住60周年記念史

1994年9月発行

編纂 アマゾン日本人移住60周年記念史委員会

発行者 会長 林 丈一

発行者 汎アマゾニア日伯協会

A s s o c i a c a o P a n A m a z o n i a
N i p o B r a s i l e i r a

住所 T r a v . 14 d e A b r i l , 1 1 2 8

B e l e m P a r a B r a s i l
c e p 6 6 0 6 0 | 4 6 0

印刷所 トッパン・プレス印刷出版(有)

R u a M u n i z d e S o u z a , 6 5 5
C a m b u c i S a o P a u l o